

社会事業家施乾の「乞食」救済事業の展開と継承

愛知県立大学大学院

現代社会研究科 国際社会コース

橋本 千鶴

社会事業家施乾の「乞食」救済事業の展開と継承

愛知淑徳大学大学院

現代社会研究科 国際社会コース

栃本 千鶴

目次

序章	1
1. 問題の所在	1
2. 研究の現状	4
3. 課題と構成	8
第一章 愛愛寮の創設	13
1. 窮民救助事業機関の沿革	13
2. 施乾の生い立ち	16
3. 愛愛寮の創設	17
4. 社会事業の実践者として	19
(1) 学校教育の影響	20
(2) 日本の社会事業家の影響	22
(3) 家族と収容者の協同作業	33
第二章 愛愛寮の理念と実態	43
1. 授産、自活	43
2. 支援する戦略は「慈善の鉄則」	47
3. 乞食撲滅	50
第三章 乞食の分析と救済	58
1. 乞食とは何か	58
2. 乞食の状態	59
3. 乞食の原因	62
4. 乞食の心理	64
5. 乞食救済策	66
(1) 乞食救済は貧民救済	66
(2) 乞食救済の経費	66
(3) 乞食への救済	67
(4) モルヒネ中毒乞食の救済	67
(5) 乞食の防止について	69
第四章 愛愛寮の経営	76
1. 乞食撲滅論	76
2. 愛愛寮の経営実践	78
(1) 愛愛寮収容者の救護原因	78
(2) 愛愛寮の経営方針	80
(3) 愛愛寮収容者の出身地と救護停止	83
(4) 愛愛寮の経営状況	87
第五章 国民党政権下の愛愛院	103
1. 施照子時代の初期・混乱期	103
2. 愛愛院収容者の救護原因と出身地	109
3. 愛愛院収容者の救護停止	112
4. 愛愛院の経営状況(乞食の施設から高齢者の施設への移行期)	115
(1) 愛愛院の更正状況	116
(2) 愛愛院の生産部の状況	116
(3) 愛愛院の財務状況	117
(4) 財源確保対策	122
5. 愛愛院の入所者の教育	128
第六章 高齢者施設としての愛愛院	134
1. 施照子時代の中・後期で高齢者施設化した時代	134
2. 愛愛院収容者の救護原因と出身地	135
3. 愛愛院の経済状況(高齢者施設化した時期)	139
4. 施照子の大家族支援	140
終章 終章	143

図一覧

図 1：財団法人台北愛愛院管理組織（1946 年）	106
図 2：私立台北愛愛救済院管理組織（1952 年）	108
図 3：愛愛院の収支決算状況	119
図 4：愛愛院の収支決算状況	122

表一覧

表 1：愛愛院の歩み	3
表 2：愛愛寮関係年表（施乾）	50
表 3：愛愛寮収容者の救護原因内訳（人数）	80
表 4：愛愛寮事業開始以来収容者の出身地内訳（人数）	83
表 5：愛愛寮収容人員と台北仁済院収容者（人数）	85
表 6：愛愛寮と台北仁済院の収入経費の比較	85
表 7：愛愛寮収容者の救護停止状況（人数）	86
表 8：愛愛寮の収支決算状況（単位円）	97
表 9：愛愛寮の補助金・寄付金の内訳	98
表 10：愛愛院関係年表（施照子）	103
表 11－1：愛愛院収容者の救護原因内訳（人数）	111
表 11－2：愛愛院収容者の救護原因内訳（人数）	111
表 12：愛愛院収容者の出身地内訳（人数）	112
表 13：年齢別乞食収容者（人数）	112
表 14－1：愛愛院収容者の救護停止状況（人数）	113
表 14－2：愛愛院収容者の救護停止状況（人数）	113
表 15：許可退寮（院）・救護停止者割合（％）	113
表 16：愛愛院の更生者状況（人数）	116
表 17－1：愛愛院入所者の生産部収益状況（単位元）	117
表 17－2：愛愛院入所者の生産部収益状況（単位元）	117
表 18－1：愛愛院の収支決算額状況（単位円、元）	120
表 18－2：愛愛院の収支決算額状況（単位元）	121
表 19：愛愛院入所者の退院原因状況（人数）	128
表 20：愛愛院入所者の学歴状況（人数）	129
表 21：歴年就学児童統計表（人数）	130
表 22：愛愛院入所者の歴年入院統計表（人数）	134
表 23：愛愛院入所者の退院原因状況（人数）	140

序章

1. 問題の所在

1945（昭和 20）年の第二次世界大戦終結まで、日本は台湾、南樺太、関東州と南満州鉄道付属地、朝鮮、南洋群島を領有し、統治した。これらの地域で日本は、植民地統治をし、植民地体制下にある住民を「帝国臣民」として明治国家に統合するために、各植民地で社会事業を展開した。本研究は、今日でも日本との深い交流のある最初の植民地となった台湾に着目し、かつて日本教育を受け、植民地時に日本人として生きてきた人々が、植民地支配という抑圧的な政治状況のもとでどのように社会事業を展開したのか、戦後にそれをどのように継続したのか、事例を通して具体的に究明することを目的とする。

西欧の「先進」工業国では、第一次世界大戦から第二次世界大戦の間に社会事業が成立期を迎えている¹⁾。日本では、1918（大正 7）年 7 月の富山県の米騒動が全国に波及した。この事件は、その 2 年前から生活費が 2 倍に高騰し、更に米の値段が 30% も上昇し、生活難に苦しんだ農民が暴動をおこしたものである。米を生産している農民は、地主に小作料等を支払った後に手元には何も残らず、米を買わなければならないというジレンマがあった。そこで農民の間には、不在地主に対しての怒りが高まり、小作人組合が結成され、対地主争議に発展した。

米騒動をきっかけに、労働者の生活改善を目指した社会保障制度充実への社会事業が発展をした。西欧と共通する社会事業近代化の指標として、①救貧策から防貧策への転換、②専門行政機関の設置および社会事業財政の成立、③社会事業の組織化・計画化、④社会事業の専門家養成や社会事業家の研修及び一般住民への啓蒙、啓発事業を行う社会事業教育の開始が挙げられ、日本では、これらのシステムが 1918（大正 7）年から 1932（昭和 7）年に確立した²⁾。こうした日本の社会事業の近代化の中で、日本の一部となった台湾で、どのように社会事業が展開されたのであろうか。本研究は、その一事例として台湾人である施乾（1899～1944 年）が、いかなる理念で台北愛愛寮（以下「愛愛寮」と記す）という乞食收容の施設を設立し、いかに社会事業を実践したのかについて論じることとする。

帝国日本が台湾で救貧事業を開始したのは、1899（明治 32）年であった。この年、台湾では英照皇太后の大葬の御下賜金で、清朝時代からの福祉施設を併合再編し、台北、澎湖、台南の 3 慈恵院が開設された。その後、慈恵院が新竹、台中、嘉義、高雄に設立され合計 7 施設になった。

一方、一般私設救護事業施設数は、66 施設であった。台北州には台北愛愛寮の他に 3 箇所施設があり、すべてが会員組織であった。まず三芝庄智成慈善会は、1900（明治 33）年慈善事業及び社会強化の目的で創立されたが、一時解散し、1916（大正 5）年に再興した。貧困者 10 数名の救済をし、規模は小さいかった³⁾。二つめの土城庄施安会は、庄内有志にて 1927（昭和 2）年社会奉仕思想の養成と貧困者の救済という目的で創立された⁴⁾。一時的に救済することが必要な貧困者約 40 名に衣食を与えて救済をしていた。三つめの鶯歌庄済生会は、庄内有志にて 1929（昭和 4）年庄内の貧困者を救済する目的で創立された⁵⁾。収入

と支出経費からみて三芝庄智成慈善会より規模が小さい。台北州以外の地域でも救済会、慈済会、窮民救助、普善堂、仁済会、慈善会等の施設名で有志者や篤志家により一時救護や貧民治療が行われていた。その中で愛愛寮と同様に乞食を収容をしていたのは、1929（昭和4）年に創立した台南愛護会だけである⁶⁾。

これに対し前述の慈恵院は、それぞれの所在地の地方長官が院長になり、窮民救助事業を行った⁷⁾。1899（明治32）年台湾総督府は、「窮民救助規則」、「台湾罹災救助基金規則」を公布し、「行旅病人及行旅死亡人扱法」を施行した。そして日本帝国の支配下にある台湾の住民は、「帝国臣民」として国家の救助対象になることを明示した⁸⁾。このように清朝時代からの福祉施設が総督府の救貧施設に再編されていったが、一方的な植民地支配のため各地で抵抗運動が見られた。1923（大正12）年に台湾に民法が施行され、総督府の機関であった慈恵院は公的機関から財団法人となり、その後民間の様々な救護施設も財団法人に組み込まれた。総督府は、同年台湾で初めての方面委員⁹⁾を台北、新竹、高雄の各州に設置し、1925（大正14）年に「街庄窮民救助に関する件」を公布した。1928（昭和3）年には社会事業協会が設立され、社会事業の成立、展開期を迎えた¹⁰⁾。

こうした状況の中、台湾人エリートとして期待された施乾が、総督府を辞職し、乞食救済に一生をささげた事例を取り上げたい。彼は、総督府に勤務した2年目に低所得者（細民）調査を行った。その時に最も下層に属する乞食村の実態を観察した彼は、そこで乞食救済をしなければならないという緊急性を感じた。そのために、乞食の気持ちになることが先決と考えた彼は、乞食村へ仕事の帰りに足を運び、その後乞食村に住み込んだ。しかし彼は、乞食の世話をする程度の方法では乞食救済問題が解決できないと考え、乞食のための「救済事業の総合事業」の創設が緊要であると判断した¹¹⁾。また彼は、独力で1922（大正11）年愛愛寮を設立したが、なぜ彼は自らの全財産を投入してまでも愛愛寮を設立しようと考え、それを実行したのか。彼の強い意志で設立した愛愛寮について本論で検討していく。

植民地時代において社会事業家施乾の施設は、『台湾社会事業要覧』¹²⁾など準総督府刊行物の第4項救護事業の一般私設救護事業施設の一番に取り上げられ、彼は民間の主体的な窮民救助機関の設立者として知られていた。戦後のことであるが、1983（昭和58）年に劉明修が『台湾統治と阿片問題』¹³⁾を出版し、その中に愛愛寮で阿片患者の乞食を使用しての治療実験が行われ、収容者に最善の治療を行っていたことを明らかにした。その後その実験者であった杜聡明が『回憶録』¹⁴⁾で、愛愛寮での阿片治療についての様子を明らかにしている。また愛愛院（愛愛寮を改名。主として施照子時代に呼称する）は、『愛愛寮の物語り』というパンフレットを作成し¹⁵⁾、創立者施乾について詳しく紹介した。こうして彼は、台湾で社会事業家の実践者として知られるようになった。また戒厳令解除後の1990

（平成2）年以降は、台湾での言論は自由となり、台湾化の流れの中で日本統治時代に活躍した施乾がクローズアップされてきた。彼は、彼の妻施照子（旧姓清水）と一緒に、台湾の雑誌、新聞、書物にその業績が紹介された¹⁶⁾。

施乾は、乞食を人間として自立させようとしたこと、総督府の窮民救助政策がその目的にはそってないため自ら愛愛寮を設立したことを自らの著作でふれ、またその設立の経緯は一部の先行研究でも論じられている。

しかし、施乾が実際どのように愛愛寮を経営したのか、そして彼の死後、妻施照子が夫の事業をどのように継承し、運営したかについては従来明らかにされないまま今日に至っている。そこで筆者は、施乾の実践や、彼の妻施照子による経営の実態を明らかにし、それらと彼の理念との関係を考察の対象とする。そこから植民地であった台湾とその後の社会事業の展開の過程の新たな歴史像を示すことができるのではないかと考えるからである。

表1に愛愛院の歩みを簡単に示した。施乾は、台湾が日本の植民地になった年から数えて4年後の1899（明治32）年に出生し、愛愛寮を設立して乞食の救済を行った。彼は日本の敗戦1年前である1944（昭和19）年に死亡している。「本島人」として日本の植民地時代の社会福祉事業に一生をささげた人物である。後述するように彼は、賀川豊彦ら日本の社会福祉活動家と交流をもちつつ、「独立自営ノ精神涵養」¹⁷⁾ という理念を掲げ、愛愛寮を拠点に、福祉事業を開始した。その後、それは拡充され愛愛院と名前を変え、約86年間も継続して今日に至っている。戦後は国民党政権下で乞食や高齢者の施設として発展し、現在では高齢者のための施設となっている。

表1 愛愛院の歩み

年号	西暦	愛愛院と台湾社会関係の出来事
明治28年	1895	日本が台湾を植民地化。
明治32年	1899	施乾出生。
明治43年	1910	清水照子出生。
大正11年	1922	施乾、台北愛愛寮創立（一代目）。
大正12年	1923	施乾、台北愛愛寮事業開始（24歳）。
大正14年	1925	『乞丐の社会生活』、『乞食撲滅論』等出版。
昭和 9年	1934	清水照子と結婚。
昭和19年	1944	施乾脳溢血で死亡（享年46歳）。妻施照子が院長（34歳、二代目）。
民国34年	1945	日本敗戦で台湾解放される。
民国38年	1949	国民党政府が台湾へ入る。戒厳令を発令。私立台北愛愛救済院と改称。
民国52年	1963	養護所（ねたきり者）業務の開始。
民国62年	1973	安老所（虚弱高齢者）業務の開始。
民国65年	1976	台北市私立愛愛院と改称。
民国76年	1987	戒厳令の解除。
民国80年	1991	自費安養中心（有料高齢者ホーム）業務の開始。
民国90年	2001	施照子死亡（享年91歳）。長男施武靖が院長（59歳、三代目）。
民国97年	2008	地下1階、地上6階の新館完成。

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業概況』（1971年）

財団法人台北市私立愛愛院編『財団法人台北市私立愛愛院2004年報』他より作成

施乾とその妻施照子は、近年『台湾100年人物誌1』¹⁸⁾にも取り上げられ、台湾では大いに注目された存在である。台湾での施乾の実践は、日本の統治下で、総督府の経済的援助を必要とし、一方で彼の台湾人としての民族意識における反日精神も少なからず存在し、まさに日本の植民地政策との戦いでもあったと思われる。そのような中で彼は、一番の社

会的弱者である乞食の生活支援を実施した。日本の総督府から中華民国政府へと支配者の交代による台湾社会の変化の中で、愛愛院の歩んできた歴史は、日本による植民地統治以降の弱者である乞食や高齢者に対する民間の社会事業の原点とその後の変遷を知る手がかりになるだろう。

2. 研究の現状

84年以上の歴史をもつ愛愛院についての研究は、台湾と日本での研究に限られており、他の国では見当たらない。Webcat Plus では、「施乾」のキーワードで該当する著作が4件あった。金子保『生涯発達心理研究—淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心に—（淑徳大学社会学部研究叢書 15）』²¹⁾、『私設社会事業概要』²²⁾、吉田荘人『人物で見る台湾百年史』²³⁾、『台湾百年人物誌 1』²⁴⁾ であり、そのいずれの研究も、戦前の植民地時代に施乾が民間の窮民救助機関として乞食救済の社会事業を実施した事実に関する研究と戦後の施照子の事業の実際と彼女の人物紹介に限られている。医中誌、CINAHL、MEDLINE、MAGAZINEPLUS、CiNii において「施乾」「施照子」「愛愛寮（院）」のキーワード検索で該当した論文は2件であり、宮本義信『『台北市私立愛愛院』の思想と実践—施乾、施照子が遺したもの—』¹⁹⁾と筆者「戦後台湾の高齢者福祉と『台北市私立愛愛院』」²⁰⁾のみであった。

こうした研究やその他の刊行物を分けると、戦前・戦中については、植民地時代の窮民救助機関としての愛愛寮については、日本統治時代に出版された井出季和太『台湾治績志』（1937年）²⁵⁾、杵淵義房『台湾社会事業史（上）』（1940年）²⁶⁾の中で民間の主体的な窮民救助機関として紹介されている。

戦後の「愛愛院研究」は、1. 福祉施設としての愛愛院研究と2. 施乾・施照子に関する人物論、人物研究に大別される。

1. について台湾人による研究では、2000（平成12）年に、孫彰良「私的救護施設愛愛寮からみる植民地下の窮民救助」（『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）2001年、所収）²⁷⁾は、「愛愛寮」を植民地下の窮民救助福祉事業という視点から創立者施乾の実績と設立経緯について分析している。当時の「愛愛寮」が、台北随一の台北救済院である台北仁済院（台北市の慈恵院、1923年に財団）²⁸⁾に比べて、資金が少ないにもかかわらず、台北仁済院より多くの収容者をかかえていたことで、行政機関の単なる補完ではなく、その代替機能を果たしていたとするが、その分析は植民地時代に限られている。また孫彰良は施乾の実績について、入寮者に衣食住を提供し、自立支援を図ったとしてその概要を提示しているが、これも民間の窮民救助事業の大枠の中で述べており、入所者の特性、例えば年齢・疾病等置かれている状況が異なる収容者に対してどのような支援をしたのかといった点、すなわち収容者のニーズとしての健康問題の視点から検討したものではない。創立当初の愛愛寮は、窮民救済が第一義的な目的であったが、後述するようにその収容者の年齢や健康状況は、その後の愛愛寮の運営方法に深い関わりがあると考えられる。

日本人による研究では、大友昌子「台湾窮民の生活と社会事業—台湾における1920年代～1930年代『社会調査』からの一考察—」（『台湾の近代と日本』2003年）²⁹⁾は、1920

年代から 1930 年代の台湾における社会事業と台北市における窮民の分布・生活状況について詳しく述べつつ台湾人の代表的な社会事業家としての施乾についてふれ、施乾の著作『乞食社会の生活(附) 乞食救済策』(以下「附」以下を省略す)³⁰⁾を引用し、それは植民地政策のなかの社会事業への批判によるものであることを指摘する。つまり、植民地政策は、「欧米の模倣」であり、また「本島特殊の事情」の社会事業でないことを施乾が認識していたとしている。しかし、実際に施乾が台湾人として経営した愛愛寮がいかに植民地政策の社会事業の方針と違うのかについて、具体的な記載は見あたらない。また大友昌子「日本統治下における社会事業政策の展開」(『植民地社会事業関係資料集・台湾編』2001 年、所収)³¹⁾は、一般私設救護事業では、愛愛寮をはじめ、1920(大正 9)年から 1933(昭和 8)年の間に 60 を超える事業、団体が設立され、多くは本島人によるものであり、一事業の救済人数は少ないとしている。少なくとも愛愛寮の事業内容やその規模等についての詳細は明らかにされていない。更に大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』(2007 年)は、植民地の中から台湾と朝鮮を比較して社会事業形成の展開について研究している。2つの地域を比較研究したことは、日本統治以前の地域の福祉文化的基盤の相違と日本が統治した時期が異なることによる分析検証としての意義があるという。その結果台湾の社会事業の実態は、日本の統治以前は福祉的基盤が日本より高かったが、植民地終了時点では、日本より低い水準にとどまったのは、日本の植民地社会事業政策による抑圧的な力が働いたとする³²⁾。大友の研究は、2つの地域の植民地社会事業の詳細なデータをもとに比較分析され、その貢献度は大きい。しかし大友も指摘しているが、分析の対象が社会事業の政策、制度、システムに偏っているものであり、本論文のような植民地時代の社会事業家施乾のような人物の実証ができていないという限界がある。大友は、施乾が、新たなタイプの個人による窮民救助事業家であるとする。施乾の事業は、「社会防衛的」機能をもつことを自覚し、調査に基づいた「科学的社会事業」を実施していることや、日本人清水照子を妻とし、日本的経営を取り入れた様子からそれがうかがわれるとしているが、施乾の具体的な実践活動についての記述はなく、その「科学的社会事業」の根拠も明らかでない。

2. についての研究では人物の顕彰的なものが多い。まず台湾人による研究であるが、中国語で書かれたものとして、前述した戒嚴令解除後の 1990 年代以降のものしか存在しない。1994 年には、施乾著作集ともいうべき『孤苦人群録』(1994 年)³³⁾が刊行された。同書には施乾の著作物のすべてが収録されている。それは王昶雄が編集し、刊行したのは台北県立文化センターであり、植民地時代からの文学、散文、詩文、評論、詩、小説等の再構築を目的に県の文筆家 14 人の作品集 16 冊のうちの 1 冊であった。その本の中に「乞丐撲滅論(乞食撲滅論)」、「乞丐社会的生活(乞食社会の生活)」、「乞丐撲滅協会(乞食撲滅協会)」等の評論が収められている。また 3 編の解説論文があり、1994 年王昶雄の「施與照佛的施照子(施照子が仏愛の情で施す)」、1994 年李瑞の「一個不浪漫的愛的故事」(1 個のロマンティックでない愛の物語)、1994 年問樵の「施乾乃其事業」がある。編者の王昶雄は「編輯導言」(編集導言)の中で、施乾を東方のシュバイツァーといい、彼の行動は人道主

義精神を基調としており、博愛精神により愛愛救済院の経営をしたという。また彼は「施與照佛的施照子」の中で、妻施照子は始終「愛」の精神があったという。更に李瑞は「一個不浪漫的愛的故事」で、施照子は日本女性として温和で忍耐があったとしている。問樵は、「施乾乃其事業」という短い論文において、施乾は、総督府在職中に西田天香、賀川豊彦の所説に心酔し、乞食救済機関を設立した慈善事業家であるとしている。そして彼らは、施乾及び施照子について、「愛」のある精神的な実践者であったと評価をするものの、実際愛愛院をどのように経営し、また西田天香、賀川豊彦の思想的影響をどのように受けたのかについては明らかにしていない。

台湾国史館副館長である林金田による『施乾伝』(1996年)³⁴⁾は、施乾について新たに作成した詳細な年譜をもとに、彼に関する一次資料を駆使して書かれた施乾に関する中国語による詳細な伝記である。詳しい記述や、各種資料の引用もあり施乾の生涯について明らかにしている。そこでは日本の西田天香、賀川豊彦は施乾と同時代の人道主義者であり、施乾は彼らに影響を受けたとしている。しかしそれは西田天香についての単なる言及でしかなく、施乾がどの点でどのような影響を西田から受けたのかは上記の研究同様明らかにされていない。他方彼の長女施明月、次女施美代、長男施武靖へのインタビューも実施され、家庭人として施乾の一面が明らかにされている。施乾の子供への躾は厳格であり、収容者と同じような衣食住をさせたと述べている。しかしその頃の収容者と家族の具体的な交流や生活状況が見えない。林金田は、また1996(平成8)年45年間秘書であった朱流江や1931(昭和6)年から1937(昭和12)年愛愛寮で仕事をした李鼎昌へもインタビューを実施しているが、施乾の慈善事業家としての人物像を賞賛しつつ概説にとどまっている。

李健鴻「恩待福利体制與不平等」(恩待福利体制と不平等)(李健鴻『慈善與宰制』(慈善と統括支配)第3章(1996年))³⁵⁾は、日本統治開始以来社会秩序が混乱し、乞食問題が深刻であり、「恩賜金」の補助を受けた民間の乞食収容所として愛愛寮は特に有名であったとしている。しかしこの論文では、台湾人であり、民族的な差別を受けながら、施乾は恩賜金をなぜ受けたのか、彼の理念と実践活動とのかかわりについて明らかにしていない。

王昭文「拯救乞丐的社会改革者—施乾」(乞食救済の社会改革者—施乾)(『20世紀台湾歴史與人物—第6屆中華民國史專題論文集—』2002年、所収)³⁶⁾は、施乾の生い立ちから愛愛寮設立の経緯、社会改革者として乞食撲滅を目指し実践したことを具体的に記述している。しかし、それは愛愛寮と台北仁濟院との比較においての収容人数と決算の分析によっている。実際にどのような乞食が収容され、どのような処遇を受けていたのかが重要と思われるが、それに関して全く論及されていない。

次に日本人による研究では、金子保が、「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」(1999年)³⁷⁾の中で愛愛寮の創設の経緯を「愛愛寮の物語り」のパンフレットをもとに詳しく述べ、その中で施乾の尊敬した人物として賀川豊彦と西田天香を挙げている。しかし施乾が彼らから具体的にどのような影響を受け、愛愛寮の経営にいたったのかについては、全く実証的分析がなされず想像による記述に留まっている。また金子保は、施乾の著書『乞食社会の生

活』、『乞食撲滅論＝社会問題の根本問題＝』（以下副題は省略する）³⁸⁾の内容を紹介し、施乾の人道主義が、乞食撲滅の決意に至ったとする。しかし、その頃の愛愛寮がどのような状況の中で創設されたのか、また経営困難な状態にある愛愛寮を存続させるために、施乾はどれほど苦戦していたかについての具体的言及が少なく、その内容も限られている。またモルヒネ中毒治療の権威者である医師杜聰明は、愛愛寮入所者の治療に協力をしたとしているが、単に協力をしたのではなく、その頃のモルヒネ中毒患者の治療実験のために愛愛寮の施設を借りていたことが別の研究³⁹⁾で明らかになっている。モルヒネ中毒患者の治療実験については、その頃の台湾でのモルヒネ中毒患者の実態を知ることが不可欠になると思われるが、金子保は、この点を踏まえていない。また妻施照子の時代となり、施乾が始めた事業が継承されるが、第二次世界大戦直後の経済的困難の時代と、日本の植民地時代から中華民国政府時代へと時代が大きく変化する社会的混乱の中で、はたして施照子は、「台湾のマザーテレサ」⁴⁰⁾精神だけで愛愛院の継続・運営ができたのか。何が妻施照子をして入所者の独立自営を図る使命を貫徹させたのかが不明瞭である。また同時に彼女による経営の実態について、具体的な記述もないし、分析もなされていない。

宮本義信『『台北市私立愛愛院』の思想と実践―施乾、施照子が遺したもの―』（2005年）⁴¹⁾は、キリスト教精神の視点から施乾とその妻施照子の考え方について述べている。宮本義信は施乾の社会改革者としてのヒューマニズムに基づく実践や、施照子の「人間大愛」実践者としての思想は、小竹徳吉・キヨ（敬虔なキリスト者）の影響を学生時代それぞれ別の時期に受けていたからだとしている。しかし、施乾はキリスト教徒ではなかった。また施乾と施照子が植民地統治や中華民国国民政府⁴²⁾の政権下で愛愛寮を継続するには、単なるキリスト教精神だけでは不可能であったと思われる。施乾は、設立直後から愛愛寮の資金不足で経営がなりたたず、資金調達のため苦勞をしている。施乾は、重症者の多い乞食をどのように収容したのか、また施照子は、施乾の死後、戦後の混乱期の誰もが貧しい中で多数の乞食を抱えてどのような経営をおこなったのか。こうした点については、全く述べられていない。

更に宮本義信は、愛愛寮が継続発展した理由のひとつとして、施家の人々の土着性を挙げている。その根拠として、一つは、愛愛寮のある台北市万華区の地域特性として、血縁的・地域的社会関係が累積され、固定的で安定した庶民生活が保持されていることを挙げている。確かに日本統治時代に台湾では住み分けがあり、井出季和太『台湾治績志』（1937年）は、1896（明治29）年末台北人口で内地人が城内に多く、その周囲の台北市万華区に本島人が多かったとする統計を掲載している⁴³⁾。大友昌子もその点について、台湾人の低所得労働者層は階層移動が少なく、同じ地域に住み続ける傾向があり、その地域での緊密な人間関係をつくりだしていたと推測している⁴⁴⁾。現在の愛愛院の院長施武靖もその地域で生まれ、地域に根付いた土着住民であることで、愛愛院の継続が可能であるとする。

もう一つの根拠として宮本は、施照子が戦前日本人居住地域にあった日本人教会日本基督教団台北幸町教会ではなく、地元万華区の台湾基督長老教会に通っていたことが愛愛院

の発展の理由であるとする。そこで愛愛院の孤児の野外日曜学校の開催を要請し、1940 年代後半から約 20 年間の長期にわたりその日曜学校が継続し、地域との交流が図られたと述べている。しかし、施乾が地域で資金集めをしても、会員の協力が得られず、愛愛寮倒産の危機で苦労した事実や、次女施美代の「地域の人とは家の中のことを話したくない」⁴⁵⁾という発言からして、物理的に住み慣れていても、表層的交流であり、地域の交流で愛愛院の存続を根拠とすることについては、全面的に支持することはできない。またこの点について、林金田は、1993（昭和 5）年頃の取材を調査したが、戦後から居住している人々が殆どおらず、困ったとしていることから⁴⁶⁾、愛愛院は同じ場所に現在も存続しているが、土着住民が住み続けていることにならず、宮本義信の言う「土着性」⁴⁷⁾にも疑問が残る。

このように既存の研究は、1990 年代以降のものであり、とりわけ台湾人の研究は戒嚴令解除後の歴史の再構築の中で施乾とその妻施照子を顕彰するものに限られている。2000（平成 12）年前後から日本人研究者による研究が始まった。戦前の植民地時代における施乾による愛愛寮の設立とその運営及び乞食救済の実態や施照子の人物の研究も見られ、今日に至っている。

しかし、台湾人によるものであれ、日本人によるものであれ、およそ既存の研究からは 86 年の歴史のある愛愛院が、当時の不備不完全な社会事業施設の補足として、乞食を救済するための施設であったことが見えてこない。筆者は、施乾がなぜ単なる窮民救助ではなく、乞食撲滅を一生の仕事として困難な課題に立ち向かったのか、その過程でどのような実践活動をし、その結果はどうであったか、また同じく妻施照子は、その事業をどのように継続展開したのか、すなわちその時どきの諸課題をどのように乗り越えたのか、その当時の歴史背景を考えながら明らかにしていきたい。

施乾が愛愛寮を創設する以前に、在台日本人である稲垣藤兵衛がセツルメント運動として 1916（大正 5）年「人類の家」を設立した。稲垣藤兵衛は、台北市で細民の生活改善や不良少年の発生防止をはかるための隣保事業として主体的な活動を行っていたが、これは、従来の窮民救助の事業ではなく、単なる細民地域全体への教化性のある事業であった。人類の家は、愛愛寮のように最下層の市中を徘徊する乞食を救済の対象としたのではなく、現在は存在しない。

筆者は、愛愛院について、植民地時代の施乾による乞食救済の主体的な取り組みの姿勢が何であったか、またその取り組みへの日本の社会事業家の影響について究明する。更にそれが努力と葛藤の中で継続され、高齢者や弱者の救済事業へと発展していったことに注目する。表 1 で示したように、台湾の高齢者福祉施設の元祖ともいべきこの愛愛院の歴史を最下層の落伍者である乞食の救済という観点から検証し、愛愛院の理念が乞食救済から高齢者福祉へと継承され、変容した意義を明らかにする。

3. 課題と構成

本論文は、日本の植民地下の台湾において、施乾が愛愛寮を設立し、困難な財政事情を克服して、いかに乞食の救済事業を展開したか、また妻施照子は、戦後の時代の変容する

中で、施乾の事業を継承し、救済事業をいかに実践していったかを明らかにすることを課題とする。

戦前については、施乾が西田天香や賀川豊彦からどのような影響を受けたか、愛愛寮の入所者の特性がどのような状況であったかを簡単に整理しつつ、社会事業家施乾の誕生について明らかにしていく。施乾が実際どのように愛愛寮を経営したのか、その後施照子がそれをどのように継承運営したかについて明らかにする。そのため愛愛院に残された資料を基に施乾の実践状況や、施照子による愛愛院の経営実態を明らかにし、施設経営の実態と彼の理念との関係を考察の対象とする。そこから植民地であった台湾における社会事業の展開とその限界についても知る事ができるであろう。

課題解明のために、主に施乾の著作物、愛愛院に残されている資料やデータを分析した。現在愛愛院には、日本統治時代と初期の国民党政権時代に作成された年次報告書、董事会記録、経理記録等ガリ版刷りの各種の書類が、整理されないまま雑然と綴られた書類綴り（A4 サイズ厚さ約 25 cm、以下「愛愛院書類綴」と記す）に保存されている。1950（昭和 25）年頃洪水のため、保存していた書類の大半を喪失し、現在の綴りはその時の被害を免れたものであるとのことである。この「愛愛院書類綴」は、戦前と戦後のものがあり、戦後の部分については研究分析されてこなかった重要な新種の愛愛院の経営実態を知ることのできる一次資料である。

本論文はこの資料を中心に、愛愛院が作成した各種のパンフレット、創設者施乾の著作物、近年愛愛院が刊行している年次報告書をはじめとする各種の印刷物等を分析する。なお、先の「愛愛院書類綴」中の日本統治時代分のかかなりの部分が、施乾の著作物と共に翻刻され、永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』（全 51 巻、近現代資料刊行会、2000～2001 年）に収められている。本論文執筆にあたり、永岡正己によるこの資料集を原本と対照するとともに、この資料集に収められていない日本統治時代の書類と、初期国民党政権下における上記書類をできる限り判読し、資料として使用した。

これらの資料のごく一部は研究に利用されたことはあるが、これを全面的に研究資料として使用されるのは、本論文が初めてである。その分析は数量的分析と内容に関する質的な分析を行った。他に施乾の家族、入所者、職員にインタビューをし、また施乾の生まれた淡水、彼の通った小学校へも赴き、歴史背景を資料と照合しつつ確認した。台湾での施乾・施照子についての研究者にも会い、彼等の行った聞き取り調査の内容や収集した資料等について確認をしたり、疑問点を正したりした。

後で述べるように施乾は、悲惨な生活をしている乞食に「独立自営の精神を養う」ために授産を手段として、人間的な生活ができるような実践活動を行い、乞食撲滅を図った。

施乾の救済した乞食は、飢餓、病気、不安など多様な心理学への視点の受容を抱えている。彼らを救済するために、乞食のストレス要因の軽減をどのように図ろうとしたのか、施乾や施照子の実践活動を分析する中でそれらを検討したい。

この論文の構成は以下のとおりである。本論文のテーマは、施乾がどのように愛愛寮を

経営したのか、また妻施照子がその事業をどのように継承し、運営したかについて明らかにすることである。

第一章の施乾の愛愛寮の創設では、彼が日本統治時代になぜそれを創設しなければならなかったのかについて原因を追究する。第二章の愛愛寮の理念と実態では、施乾が乞食に「独立自営の精神を涵養する」という理念をどのように実践したのかについて述べる。第三章の乞食の分析と救済では、施乾が乞食救済にあたり、まずしっかりと乞食のアセスメントを実施したことについて検討する。第四章の愛愛寮の経営では、施乾が実際に乞食をどのように更正させたのかについて明確にする。第五章、第六章では、施乾の遺志を継いだ妻施照子が、国民党政権下で、愛愛寮をどのように引き継ぎ、愛愛院の経営を実践したかについての検討を加える。1960（昭和 35）年を境に照子時代を区分し、その変化について考察したい。

引用論文資料は日本語と中国語で書かれたものを使用した。愛愛院についての論文は、愛愛院、国立国会図書館（日本）、国家図書館（台湾）、台湾文献館、淡水県立図書館、淡水国民小学校での現地調査及び医中誌、CINAHL、MEDLINE、MAGAZINEPLUS、CiNii の検索システムで行った。愛愛院関係の資料や資料集は、施乾の著作の一部以外は中国語で書かれていたものを使用した。中国語は（日本語に翻訳した）で示した。資料中には今日では差別用語と思われるものも散見されるが、原文のまま使用した。引用文中、原文が漢字旧字体である場合は新字体を使用した。また中国語の固有名詞や地名、本のタイトルについては、現在新体字に変わっているものは、新体字をそのまま使用した。但しかな遣いは原文のままとした。原文の宛字はそのままとし、「ママ」を付し、適宜通例の用法を（引用者注）で補った。中国語の読みは、ピンインに従った。読解困難な漢字はふりがなを付した。漢数字は原則としてアラビア数字に統一した。本稿では、「資料」で統一し、歴史資料も含めている。

注

- 1) 大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』ミネルヴァ書房、2007年1頁
- 2) 同上、3頁
- 3) 台湾総督府文教局社会課編・刊『台湾社会事業要覧』1931年、63頁
- 4) 同上、64頁
- 5) 同上、64～65頁
- 6) 同上、92～93頁
- 7) 前掲『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』188頁
- 8) 大友昌子「日本統治下台湾における社会事業政策の展開」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001年、所収）12頁

- 9) 1917 年に日本で方面委員制度が確立し、その方面事業の普及と活動が台湾に波及した。
- 10) 永岡正己「日本統治下台湾社会事業史研究の意義と課題」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊(解説)近現代資料刊行会、2001 年、所収)
- 11) 施乾「初めて助成金を載いて」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 2 号、1928 年、所収) 106 頁
- 12) 前掲『台湾社会事業要覧』1931 年、62 頁。井出季和太『台湾治績志』(1937 年原刊、1997 年南天書局有限公司復刻) 986 頁に愛愛寮の記載がある。
- 13) 劉明修『台湾統治と阿片問題』(近代日本研究双書) 山川出版社、1983 年
- 14) 杜聰明『回憶錄』(上卷) 台北市龍出版社、1989 年、49 頁
- 15) 財団法人台北市私立愛愛院編『愛愛寮の物語り』(愛愛院のパンフレット) 1983 年 10 月(愛愛院書類綴所収)
- 16) 蔡明雲編『台湾百年人物誌 1』財団法人公共電視文化事業基金会、玉山社、2005 年には「人間大愛施乾與清水照子」(人間愛のある施乾と清水照子)の記述があり、施乾と清水照子が紹介されている。
林金田『施乾伝』台湾省文献委員会、1996 年。施乾は、「社会人道主義的奉行者」(社会的な人道主義で奉仕した者)で「東方的史懷哲」(東方のシュバイツァー)と賞賛されている。
- 17) 施乾『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約 1929 年 6 月 1 日現在』1929 年 9 月。「業務概況」の 1923 (大正 12) 年沿革「収容者ニ授産ノ方法ヲ講ジ以テ独立自営ノ精神涵養ヲ努メツツアリ」とある。
- 18) 前掲『台湾百年人物誌 1』
- 19) 宮本義信「『台北市私立愛愛院』の思想と実践—施乾、施照子が遺したもの—」(日本キリスト教社会福祉学会編『キリスト教社会福祉学研究』38 号、2005 年、所収) 42～49 頁
- 20) 枡本千鶴「戦後台湾の高齢者福祉と『台北市私立愛愛院』」(法政論叢第 44 巻第 1 号、2007 年)
- 21) 金子保『生涯発達心理研究—淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心に—(淑徳大学社会学部研究叢書 15)』学文社、2002 年
- 22) 近現代資料刊行会企画編『私設社会事業概要』2001 年
- 23) 吉田莊人『人物でみる台湾百年史』東方書店、1993 年
- 24) 前掲『台湾百年人物誌 1』
- 25) 前掲『台湾治績志』
- 26) 杵淵義房『台湾社会事業史(上)』(1940 年刊行)(永岡『植民地社会事業関係資料集 台湾編 9』近現代資料刊行会、2000 年、所収)

台北仁濟院は、日本統治前の多くの窮民救助機関を再編統合し、児玉総督が 1899 年に慈恵院として設立された公的機関であった。養濟院、同善堂、育嬰堂を合併し、1899

年県立台北仁済院となる。1901年台北県廃止になり、台北仁済院と改称された。

- 27) 孫彰良「私設救護施設愛愛療からみる植民地下の窮民救助」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊(解説)近現代資料刊行会、2001年、所収)243～276頁
- 28) 前掲『台湾社会事業史(上)』251頁
- 29) 大友昌子「台湾窮民の生活と社会事業—台湾における1920年代～1930年代『社会調査』からの一考察—」(中京大学社会科学研究所台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』中京大学社会科学研究所刊、2003年、所収)153～184頁
- 30) 施乾『乞食社会の生活(附)乞食救済策』愛愛寮刊、1925年
- 31) 前掲「日本統治下台湾における社会事業政策の展開」84頁
- 32) 前掲『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』
- 33) 施乾・李天贈訳『孤苦人群録』台北県立文化中心、1994年
- 34) 林金田『施乾伝』台湾省文献委員会、1996年
- 35) 李健鴻「恩待福利体制與不平等」(李健鴻『慈善與宰制』台北県立文化中心、1996年)
- 36) 王昭文「承救乞丐的社会改革者—施乾」(『20世紀台湾歴史與人物—第6屆中華民國史專題論文集—』国史館印行、2002年、所収)
- 37) 金子保「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」(淑徳大学院編・刊『淑徳大学院紀要』第6号、1999年、所収)
- 38) 施乾『乞食撲滅論=社会問題の根本問題=』1925年
- 39) 前掲『台湾統治と阿片問題』197頁
- 40) 国際通信「台湾のマザー・テレサ」1995年1月5日
- 41) 前掲「『台北市私立愛愛院』の思想と実践—施乾、施照子が遺したもの—」42～49頁
- 42) 松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会、2006年、19頁
「中華民國国民政府」とは、1925年に成立し、28年に国際的に承認された南京政府をいう。1948年に総統が選出され、「中華民國政府」となった。
- 43) 前掲『台湾治績志』19頁

地域	内地人	本島人
台北城内	2,779	1,036
艋舺(万華)	966	18,745
大稻埕	511	22,673

- 44) 前掲「台湾窮民の生活と社会事業—台湾における1920年代～1930年代『社会調査』からの一考察—」167頁
- 45) 2004年9月21日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。筆者が地域の虚弱高齢者への住民アンケート依頼について話したときの返答である。
- 46) 2008年8月19日、台湾省文献館副館長室における林金田訪問インタビュー。
- 47) その土地に長く住みついている民が地域で協力的である特徴。

第一章 愛愛寮の創設

1. 窮民救助事業機関の沿革

日本では、昭和の初め、貧乏な暮らしをしている人を表現する際、極貧者、赤貧者、清貧者、貧民、細民、窮民、小民、下民等の用語を通俗的に使用していた。しかし学術的に貧民に関する研究は、第一次世界大戦以降、文明諸国において、それぞれ発表されたが、定説はなかった。その理由は、国、人種、気候、社会的地位、健康状態等で貧にも違いがみられるからである。一方、中国では、古くから窮民を貧民と区別していた。窮民は、貧民の最下級である極貧者のうち特に鰥（老いて妻なきもの）、寡（老いて夫なきもの）、孤（みなしご）、独（老いて子のない者）の4種に分類され、それぞれ救護の対称となった¹⁾。

日本統治前の清朝時代の台湾において、窮民救助の機関は、院内救助機関と院外救助機関の二つに大別される。院内救助機関は窮民を施設内に収容して救護するもので、これには養濟院、普濟堂、濟善堂、棲流所、留養局、孤老院、丐院の7種類があった。院外救助機関は窮民をその家庭内において救護するもので、これには辦事公業及び祭祀公業の2種類があり、更に各地方庁において恤救行政が加えられた。

これらの事業のほとんどは中国内地から継続されたものであったが、そのうち祭祀公業だけは台湾で独自に発達してきた²⁾。かつて中国では、紀元前500年前から儒教の教えにより、窮民救助事業があった。その後道教と仏教も融合し、各時代を通じて国家の理想として広く人々に浸透した。明時代（14世紀）には、官立の養濟院が各州県に設立され、その後普濟堂、濟善堂、棲流所、留養局、孤老院、丐院の施設が設立された。明代末期から清朝時代を通じて民間の慈善、公益事業を目的とする機関「善堂」が普及した。この「善堂」は、捨て子の養育をする育嬰堂、救貧を行う普濟堂、寡婦の救済を行う清節堂などがあり、都市部の豪紳層、紳商らに運営された。1684（貞享1）年に4箇所（所）の養濟院と1箇所（所）の普濟堂があり、各県庁により運営されていた³⁾。これらが、日本統治前まで中枢的な救助機関として機能していたが、日本統治と同時に運営経費が断絶した。しかし、日本統治当初は台湾住民の生活の中に、清朝時代の伝統的な窮民救助事業が残っており、地域の豪紳、紳商が各地域の窮民救済事業のリーダー的役割を担っていた。台湾社会事業協会（1928年創設）の中心人物であった杵淵義房は、その著書『台湾社会事業史』（1940年刊）で、窮民救助の9種類の機関（院内救助機関7種類と院外救助機関の2種類）について次のように詳細に説明している⁴⁾。

まず第1種類の養濟院は、夫や妻をなくして孤独及び廢疾に陥った頼るところのない窮民を収容する機関であった。中国では、宋の時代に初めて養濟院が設置された。その後の養濟院の規定で、この窮民に対し、所在の官吏は、収容するか、又は一人につき米糧は毎月3升、1年で綿綿（木綿）一匹⁵⁾を与える旨が記載された。もし官吏がこの規定を守らなければ、罰則があった。台湾においても1684（貞享1）年以降から1881（明治14）年までの197年間に7府県庁の首都に各1院が設立され、台南には、2院が設立されていた。その1個は養濟院といい、他を台湾寮（乞食寮）といった。

第2種類の普濟堂は、中国で、主として老廢者を收容する機関であつたが、台湾ではその他に癩病患者、盲人、夫や妻をなくした孤独等の窮民を收容した。普濟堂は、實質的に養濟院と大差がなく、台南と澎湖の2箇所しかなかった。

台南の普濟堂は、1747（延享4）年に巡台御史（清朝は、御史2名を台湾に派遣して巡回させる）六十七と范咸の2名が、自活できず餓死する流民をみて、深く同情をし、流民救護のために設立した。その收容定員は50名であつた。

澎湖の普濟堂は、1826（文政9）年に澎湖島の海防通判将補が窮民を救護するために自ら率先して馬公街に設立した。同地域の要救助者は粗悪ながらも持家があつたため、台南のような院内救助ではなく、院外救助を行った。救助定員は30名であつた。各救助者に毎月大の月には錢300文、小の月には290文を支給した。定員以上に救助を要する者が出現したときは、記録を残し、欠員補充で埋めた。また、救助を受けた者の台帳を2冊作成し、1冊は官へ提出し、残りをこの堂に備え付け、普濟堂の財産管理に使用した。

これらの普濟堂は富者による救助機関であり、海防通判将補は澎湖の普濟堂の組織に関して、保息制度（保護する）の6項目（滋養、養老、振窮、恤貧、寛疾、安富）の一つに安富（富者の保護）の文献を残している⁶⁾。

第3種類の濟善堂も普濟堂と同じく鳳山街の富者二人が発起人となり、有志の義捐金を募って1873（明治6）年に設立した。その目的は、同地方の行旅病人や窮民の救済にあつた。本堂は、私設であり、地方有力者の協同出費で運営されたが、日本統治時に一時休止に追い込まれた。

第4種類の棲流所は、中国では別名留養局とも称し、老廢者で自活できない流丐（地域を移動して生活する乞食）や行旅病人の收容施設とし1653（承応2）年に初めて設立された。台湾では、流落孤独の移住者が多く、移住者の死亡数より妾を作る者の方が多かったため、清朝はこれら浮浪者を監視するために1819（文政2）年に棲流所を馬公街に創設した。妾の防止政策が特に必要な所として、施乾の活動の原点になった新竹の棲流所（鴨母寮）があつた。後述するが、施乾は、この地の乞食社会の実態を述べ、乞食状態の撲滅を図らなければ乞食当人の生活改善につながらないことを悟り、その目標に向かって全力投球をするのである。

その後各地に設置され棲流所の名称のあるものが4箇所、別名としての第5種類の留養局が2箇所、第6種類の孤老院が1箇所あつた⁷⁾。

第7種類の丐院（乞食寮）は、乞食を收容する私設の機関で、全島各地に多数設置された。台湾では乞食を收容する機関には、従来より公設と私設の施設があつた。公設のものには、前述の棲流所や留養局を始め、養濟院、普濟堂があつた。これらの施設は乞食收容が主目的でなかった。乞食收容が主目的だった公設は、台南の養濟院の1箇所と新竹の棲流所の2箇所だけであつた。しかし私設のものは、それを丐院といい、全島各地に多数設置されていた。なぜ公設が少なく、私設の丐院が多かったかについては、中国からの移住者の大部分が貧困で独身である出稼ぎ人や、中国で生活ができなくなった人が多く、以前か

ら私的機関である丐院が発達してきたからであった。丐院に入れなかったものは、公的機関の棲流所、養濟院、普濟堂に収容されるか、又は放置された⁹⁾。

清朝は乞食を厳しく取り締ったが、台湾では法的な規制がなく、各地に分散している丐頭が彼らを取りまとめ、それぞれ思うままに取り仕切っていたにすぎない⁹⁾。当時台北城外艋舺（現在の龍山、雙園二区）に2箇所の丐院があり、その一つを下寮といい、他を頂寮といい、各1名の丐頭がいた。官は彼らに官定の印章を与え、乞食を取り締まらせた。杵淵義房は、丐院の組織は丐頭の営利組織と見るのを至当としている。乞食が丐院に入るには、先ず丐頭に一定の入寮金を納め、入寮後は丐頭が乞食を養育し、乞食が死亡したときはこれを埋葬することになっているからである¹⁰⁾。これについての乞食にとっての弊害は施乾の乞食の分析に関する第三章で後述したい。

台湾においては、古くから第8種類の辦事公業、第9種類の祭祀公業、他に育才公業が行われてきた。公業は、祭祀の費用を供する外に、寄付金や交際費の支出、又は子孫や一族の「研学」を奨励するための遺留分以外の財産費用をいう¹¹⁾。中国の法令には公業という文字はなく、祭田、祀産、祀業等の文字がこれにあたり、それは通俗呼称であった。辦事公業は富豪の家のみに設置でき、一家や一族の交際費又は信教、慈善、公共事業に対しての寄付金を支出する目的で設立された財産である。台湾ではこの辦事公業が古くから多数設立され、窮民救助の実績は大きいとされる¹²⁾。祭祀公業は、祭祀の費用にあてるための財産であったが、更に余裕のあるものは、祭祀の他、子女の結婚、孫への財産、祖父母の扶養料等の費用を前述の辦事公業の費用にあてた。この祭祀公業の辦事公業費用に充当されたものが、窮民救助の費用としても役立てられたようだ。このような公業の辦事公業や祭祀公業の他、富豪が細民に対し、年末や年始、又は一家の吉凶（慶弔）等に際し、金品を施す慈善事業が全島に広がり、それが台湾社会の慣習となっていた¹³⁾。

このように台湾の窮民救助の機関は前述した9種類もあり、歴史があり台湾人の生活に浸透していた。窮民は官（政府）や地域の富裕層から、物質の援助を受け、生活を維持しつつ19世紀末に至った。1875（明治8）年以前は、1府（台湾）4県（彰化、嘉義、台湾、鳳山）、2庁（淡水、澎湖）に区分されており、淡水、澎湖を除く西部にある4県の恤救費が予算化されていた。この頃は、淡水（17,943戸、257,733名）、澎湖（西部）や東部には人口が少なく、また予算も少なかったが、社会的救済が必要な者もいなかったようだ¹⁴⁾。

ところで日本による「台湾出兵」以降、清朝政府は日本を警戒し、台湾を福建省から分離して台湾省とし、台北城を造営して新たな省都とした。清朝政府は、台湾省の設置に伴い、1875（明治8）年に行政機構の再編成を実施し、台北府、淡水県、基隆庁、新竹県等北部にそれぞれ出先機関を増設した。台湾は2府、8県、4庁に分かれ統治されることになった。1886（明治19）年、台北に清賦総局が設置され、台湾の中央統治機構が確立されたことにより、台湾の人口は増加しそれに伴い窮民も増加していったと思われる。

ところが日本の統治の開始によって、既存の窮民救助機関が廃止された。すなわち新たに設置された台湾総督府は台湾を日本の統治下にするために、慈恵院を設立し、清朝時代

の窮民救助機関を根こそぎ廃止した。

新しく設立された慈恵院は、1920（大正 9）年の地方制度改革以前までにはわずか 5 個しかなかった。台湾での社会事業は、不具、廃疾、病傷、幼弱等の私的保護事業及び罹災救助、行旅病人救護、窮民救助等の公的事业をそれらの慈恵院が行うという状況であった。他に私立の感化院 1、盲聾学校 2、育児院 1、その他の救貧的施設が若干あるに過ぎなかった。

しかし、1921（大正 10）年 8 月、総督府は時代の推移、社会状態の変化に対応するために新設改善を奨励した。その結果、社会事業は、救貧事業の他に方面委員制度、各種経済保護事業、職業紹介事業、妊娠婦保護事業、社会教化事業等において、36 種類 572 施設が設置された。

このように外観は整備されていったが、その内容については、不備な点があり、将来の改善が求められた。その中に乞食の問題がある。彼等は行き場をなくし、街を徘徊するようになったのである。前章でも述べたが、1923（大正 12）年、施乾は愛愛寮を設立して街で徘徊する乞食を收容し、乞食撲滅事業を開始した。5 年後に救貧事業を含めた社会事業を個人的篤志的事业ではなく、社会人全体の協同事業を促進するために、総督府主催の第 1 回全島社会事業大会が開催された（1928 年 10 月）。この大会には、第 12 代川村竹治総督が出席し、河原田稼吉総務長官は代理出席であった。

総督府は、この大会の席で、現在の社会事業の理想は、第一に単なる救済事業や慈善事業ではなく、社会組織の欠陥から生じた社会的病弊を社会連帯で各員が協力して根本的に治療し、防止することを目的とすること、第二にその方法は科学的根拠に基づくものでなければならないとした。更に総督府は、社会事業は、社会事業家のみの手で完成されるものではなく、一般社会成員の理解と援助が必要であることを強調した¹⁶⁾。総督府は、このような社会事業の理想を実践に移すことができたのだろうか。総督府がこうした社会事業を実践する中で、乞食の救済が放置されてしまったのである。

2. 施乾の生い立ち

施乾は、1899（明治 32）年に台北県の淡水で生まれた。父親は施論といい、家業は建物・施設を造る「营造業」であり、当時の一般家庭と比してより裕福であった¹⁶⁾。施乾の台北工業学校の書類には、保証人である父親の職業は巡查補となっていた¹⁷⁾。彼には妹が 1 名いたが夭逝しており、一人っ子であった¹⁸⁾。母親の実家は葉氏で、母親は良妻賢母であったことが知られている。1906（明治 39）年、7 歳で滬尾公学校に入学し、1912（明治 45）年に卒業、第 10 回卒業生であった。滬尾公学校は淡水公学校の前身であり、同期生に実業家として名の知られる張園がいた¹⁹⁾。杜聡明の『回憶録』にも、施乾を「與張園公学校同期生（明治 45 年卒業）、台北工業学校卒業、在艋下崁創設愛愛寮收容乞食従事強化可称台湾社会事業之開拓者」（明治 45 年卒業の張園と小学校が同級生である。台北工業学校卒業後、万華に愛愛寮を創設し、乞食の收容を強化した。彼は社会事業の開拓者といえる）²⁰⁾と紹介している。

同校の3年先輩に杜聰明（第7回卒業生）、後輩に李登輝（第33回卒業生）がいる。『淡水国小一百年誌』には、「台湾第一位民選総統李登輝」（台湾最初の民選総統李登輝）、「台湾第一位博士杜聰明」（台湾最初の博士杜聰明）、「台湾第一位慈善家施乾」（台湾最初の慈善家施乾）、「第一位台湾人気象測候所所長周明德」（台湾最初の気象測候所所長周明德）とある。このように4名のうちに施乾が紹介されている²¹⁾。現在淡水公民小学校（過去に滬尾公学校、淡水公学校、淡水国小と名前を変えた）の正門左には施乾、右には杜聰明の塑像が台北県政府により建てられ、ともに功績のあった人物として顕彰されている。

施乾の銘文には、以下のことが書かれている。

施乾 1899～1944 施乾淡水人、僅46年の生命中、以其悲憫之心許下の弘願、為孤苦人群奉獻一生、留下一個慈善的結晶（愛愛院）。元配謝惜、繼室清水照子均為戮力同心的賢内助、施氏功德將永垂不朽。1995年11月（台北県政府為鄉里人傑塑像・張子龍謹製）²²⁾。

施乾は、1899（明治32）～1944（昭和19）年の淡水人であり、46歳の若さで一生を終えた。その間、悲しみ哀れむ心の理解が普及するように、孤独で苦勞している人々に一生を捧げ、その慈善の結晶として「愛愛院」を残したのである。謝惜は最初の妻で、清水照子は後妻であったが、二人とも施乾の事業に一心同体となって内助の功を尽くした。施乾は後世に残る立派な事業を残した。1995（平成7）年11月（台北県政府郷里の為偉大事業をなした人の塑像・張子龍謹製）

このように、施乾は、台湾が日本に割譲された1895（明治28）年から4年後に生まれ、第二次世界大戦終了の前年に死去した。彼は正に50年にわたった日本統治時代を生きた台湾人であったといえる。

施乾は1906（明治39）年に公学校へ入学したが、1900（明治33）年代初頭の台湾での公学校就学率は5%以下であった²³⁾。日本人のそれが90%以上の入学率であったことを考えると、台湾と日本では大きな教育機会の格差が存在していた²⁴⁾。公学校卒業後、考進台北工業学校（現在の国立台北技術学院）の機械科に進学し、途中で家業のことを考えて土木建築科に転科した。当時の台北工業学校は日本人子弟のための教育機関であり、台湾人である施乾が入学できたのは非常に秀才であったからである。彼はこの学校の卒業成績の平均点が約80点であり、上位5番で1917（大正6）年に卒業した²⁵⁾。その後台湾総督府の工業講習所の訓練を受け、1919（大正8）年20歳の若さで台湾総督府商工課「技手」（技師）となった。当時台湾人で総督府に勤めることができたのは極く少数で、将来のエリートコースが約束されていた。しかし、2年余りで施乾は台湾総督府を辞めて救済事業に着手した。なぜこの職を投げ捨ててまで救済事業に乗り出したのか。

3. 愛愛寮の創設

台湾総督府に就職して1年が過ぎた時、総督府商工課は台北全市の「細民（乞丐）調査」を実施した。乞丐（きっかい）とは乞食のことであり、細民の多くが乞丐であった。施乾もまた、その調査に加わった。彼の担当は艋舺地区で、万華一帯のスラム地域の住民の生活状況調査を行った。そこで施乾は、三代乞食をしてそこから抜けられない乞食の存在に心を痛めた。

施乾は、細民調査の帰りに同僚へ「大発慈悲之心、創弁救済機関」（慈悲の心が沸き起こり、乞食の救済機関を創らなければならない）²⁶⁾、と言い、愛愛寮設立の決意を固めたのである。

そして施乾は、まず父親に救済機関設立を相談をしたが反対された。彼は、叔父施煥を通じ、父親を説得した。施乾の父は彼の決心が固いを知り、父親も彼に協力することになった。施乾は総督府を辞め、全力で乞食救済事業に乗り出した。淡水の全財産を処分し、台北市艋舺区緑町（現在の万華区域龍山寺近くの大埋街）に一千坪の土地を購入した。更に資金不足のため叔父に義捐金の提供の依頼や、木材業を営んでいる親族施坤山（施乾の台北工業学校保証人）から材木の提供を受けることにより、1923（大正12）年8月ついに「愛愛寮」の事業を開始できた。施坤山は施乾と同じ滬尾公学校出身であり、杜聡明の回想録にも彼は「起初任為巡查補、有志在淡水苦心經營材木商、逐漸發達成為台灣巨富的施合發公司、可稱一位偉大的實業家。」（最初の職業は巡查補であったが、淡水で苦勞して材木商を經營した。その後次第に發展し、台灣では巨大な富を蓄えた施合發会社に成長した。彼は一人の偉大な実業家であると言われるようになった。）²⁷⁾とあり、裕福であった。

愛愛寮を開始時、施乾は24歳の若さであった。木造建ての平屋で、職員2名を雇用し、寝食を提供し、無料で乞食を20名余り収容した。収容の目的は、乞食の生活改善であった。

台灣では、日本統治時代前、前述したように栖流所、留養局、丐院が各地に設置され、乞食の救助機関として重要な役割を果たしていたが、日本統治時代になり、総督府はそれらを廃止し、各地に窮民救助機関である慈恵院として再統合した。台北市内にも乞食収容所が、大稻埕鴨寮街（現在の南京西路一部）、艋舺龍山寺街、学海書院辺街（現在の広州街）の3箇所にあったが、それらがなくなり、台北仁濟院（台北市の慈恵院）になった²⁸⁾。日本統治開始以来、警察による乞食の取り締まりが厳しくなり、日本統治以前より乞食の数の減少が見られた。しかし施乾は、「經濟組織の發達した所には、經濟緊迫によつて生じた乞食に溢れてゐる。そして文明国である程乞食が多く…中略…（中略：引用者注）。ひとり、台灣ばかりでなく、世界の隅から隅まで乞食に悩まされてゐることが思い遣られる。二十世紀の科学文明が（例え副産物だとは云へ）こんなものをより多く産出し、世紀人がより多く脅威されるやうに運命づけられたのか？」²⁹⁾と言う。このように施乾によれば、乞食は次々と発生し多くなっていくものとしており、特に大都會においては、多数の乞食が徘徊していた。

1928（昭和3）年には、総督府主催の第1回全島社会事業大会が2日間行われ、地方長官から推薦された代表者91名が参加し、その中に愛愛寮代表者施乾もいた。台北市では、他

の施設代表者として馬偕医院長、林本源博愛医院長が参加した。この大会の議事の一つには、モルヒネ中毒患者が乞食、犯罪等の原因となり、社会犯罪防止の強制治療を要することが挙げられていたが、乞食についての具体的な記載は見当たらない³⁰⁾。

一方日本本土では、どうであったか。当時日本では約6万人の乞食がいると推定され、人口比では四国に最も多く乞食がいた。しかし一市に多く集まっているのは東京であった。1913（大正2）年警視庁で乞食少年250名を検挙した。その後も東京の各署で頻繁に乞食の検挙をしていたが、浅草、本所、深川には1,000名以上の乞食が徘徊しているといった状態であった³¹⁾。これに対し、長谷川良信（1890～1966年）は、1916（大正5）年3月に東京府慈善協会第2部主査及び方面委員として東京西巢鴨のスラム街の生活調査を実施した。その後彼は、1918（大正7）年10月、28歳でそこに単身移住した。翌年9月その貧民街2百軒長屋に、私立マハヤナ学園を建て、その年に『社会事業とは何ぞや』を刊行し、貧民者の子の教育に尽力した³²⁾。長谷川良信は、1922（大正11）年、内務省嘱託及び浄土宗海外留学生として70名余りのうちの一人として欧米に社会事業視察のために派遣された。

方面委員とは後でふれるように、小川滋次郎がこの制度を提唱し、地域における貧民救済の担い手としての活動を求められた。方面委員の制度は1946（昭和21）年には民生委員に切り替えられ、現在に及んでいる。なお長谷川良信は戦後1953（昭和28）年63歳のとき、老托鉢僧としてブラジルに8か月の期間渡り、帰国後南浄土宗別院日伯寺を建てた³³⁾。その後長谷川良信は、1965（昭和40）年淑徳大学を創立する。

このように長谷川良信の経歴は多彩であった。これに対し施乾は、乞食救済一筋であった。彼は、乞食をでききるだけ收容し、乞食を経済的に自立できるよう更正させ、そのことが社会の治安回復にも役立つとして台北市に台北愛愛寮を設立した。その後乞食の收容を目的とする台南愛護会が台南市にもできた（1929年7月）³⁴⁾。その当時、台湾社会事業協会は、会議を開催し、参加した社会事業家84名に新設の社会事業について希望を聞いた。乞食收容所の新設を希望する者はそのうち3名いた³⁵⁾。また台北州において社会事業協会主催で山室軍平が「社会事業と宗教」の講演の中で乞食になった少年の事例をあげ、出席者の社会事業家を感動させた。この少年の母親は、酒と博打に溺れた父親に愛想をつかして離婚していた。その後2年間少年は、父親と放浪生活をしてしたが、9歳時に父親にも捨てられた。そして少年は、乞食の婆さんに助けられ、乞食になった。その少年は、乞食にならなければ、死んだかもしれないという事例であった³⁶⁾。これらの点から6年前に愛愛寮事業開始した施乾は乞食救済の先駆者であり、その当時においても社会問題として乞食救済が重要であったことになる。

4. 社会事業の実践者として

施乾が艋舺一帯のスラム地域（現在の万華区にある龍山、雙園地域）の住民の生活状況調査の後、なぜ1年でエリートコースの職を辞して乞食救済のために愛愛寮の建設をしようとしたのか。愛愛院から提供を受けた愛愛院作成のパンフレット「愛愛寮の物語り」（1983年10月刊行）には、「なぜ職を辞し、乞食部落に住みついたか」について次のようにある。

「自分が日頃尊敬していた賀川豊彦先生、西田天香先生の人類救済の道を実地にやり出しました」³⁷⁾と。施乾が乞食の救済事業に乗り出すについて賀川豊彦と西田天香が果たした役割は大きいようである。

また施乾は、1929（昭和4）年に『愛愛寮概況』を発行し、その中で1923（大正12）年の開始から6年経過した愛愛寮について、彼の考え、業務状況、現状、収支決算、愛愛寮の規約、将来の計画、乞食撲滅の全島計画について統計資料を入れて詳細に述べている³⁸⁾。

施乾は、その「感謝の辞」で、「大正12年の秋^{不肖}わたくしが総督府商工課に在職中感ずる処あり、万華下埃庄の一角に在る乞食部落に身を投じ、彼ら非人の仲間入りをしてこのかた、一日の如くもはやここに6周年を迎へんとしてゐます」³⁹⁾と述べている。

彼は、総督府在任中の1920（大正9）年に艋舺一帯で社会調査をしたことで、乞食社会の実態を知り、「感ずる処」があつて、乞食部落に身を投じ、彼らと一緒に生活を始めた⁴⁰⁾。そこで施乾は、乞食の生活が非人間的な生活で悲惨なことを身をもって感じ、人間的な生活改善のためには、乞食を乞食部落からまず引き離すことが先決であると考え、自ら愛愛寮の建設をし、そこに彼等を収容するしかなかったのであろう。

（1）学校教育の影響

前述のとおり施乾は、1906（明治39）年に滬尾公学校に入学し、1912（大正元）年に卒業をした。この頃の植民地における台湾人子弟が学ぶ公学校教育でどのように教えられていたのか、それが施乾の実践者としての闘志に結びつくものであったのではないか。

まず施乾が教育を受けた公学校についての教育状況をみたい。

1890（明治23）年「教育勅語」が明治天皇の名で国民道德の根源となる国民教育の基本理念として明示された。これは天皇制教育の徹底強化に向け、国の祝祭日に朗読が義務づけられたが、1948（昭和23）年に失効となった。植民地台湾の公学校で、施乾もしっかりと教育勅語を朗読していたに違いない。この教育勅語には、「博愛」という用語が取り入れられたが、この博愛はキリスト教世界に起源があり、フランス革命の標語の一つにもなった⁴¹⁾。つまり、「博愛」は平等性と国際性を含む理念であるが、教育勅語に取り入れられ、「博愛」と呼ばれる「皇道主義」と結びついた天皇中心の国家至上主義体制の理念となった⁴²⁾。植民地である台湾も、教育面でその教育勅語の理念を通して統治されたのである。

施乾は、1912（大正元）年に滬尾公学校卒業をしている。彼の卒業より2年後になるが、1914（大正3）年から1943（昭和18）年の公学校修身の教科書について大友昌子が以下のように整理していることから彼の受けたそれを推測できよう。1914（大正3）年編纂の公学校の修身第1期教科書には「慈善」と「博愛」が取り上げられている。その教科書の3学年において「博愛」は「瓜生イハ子（本名瓜生岩）が親のない子、貧しい子を集めて育てた。」、5学年の「慈善」は「伊能忠敬が財を積み、資本を貸し、金や米を施し、飢饉の際米の施与を行った。」、6学年の「博愛」には「瓜生岩子が親のない子、貧しい子を育てたこと、（以下中略）。赤十字社、済生会、感化院、孤児院、慈善病院などの博愛事業が盛んになったこと。博愛は近いところから遠いところへと及ぼすことが大事。教育勅語の『博愛

衆ニ及ホシ』に言及」⁴³⁾とある。その後1929(昭和4)年編纂の「博愛」や1930(昭和5)年編纂の第2期教科書「慈善」については、3学年の「はくあい」で「瓜生岩子が親のない子、貧しい子を集めて育てた、その他に東京養育院(現在の東京都養育院)の世話をした。」、5学年の「慈善」には「石井十次の岡山孤児院」が挙げられた。」⁴⁴⁾とある。こうした公学校修身の教科書により台湾の児童は、倫理、道德教育を受けたことになる。

瓜生岩子や石井十次は日本の教科書にも取り上げられている。瓜生岩子(1829～1897年)は、女性社会事業家であり、孤児・戦死者遺族、窮民の救護に勤め、済生会病院の創始者であった。また石井十次(1865～1914年)は、キリスト教社会事業家であり、慈善事業や孤児教育に関心を持ち、1903(明治36)年に岡山孤児院を開設した。瓜生岩子に関する教科書の記述の中心課題は、「人のために尽くす」であり、石井十次のそれは、「情け深い」であった。台湾の児童向けの修身の教科書は、このように瓜生岩子や石井十次の人物をモデルとした滅私奉公型の「博愛」や孤児救済の「慈善」のテーマを児童に分かりやすいストーリーに構成し伝えていたことが明らかにされている⁴⁵⁾。しかし、1914(大正3)年編纂の公学校修身第1期教科書に使用されている「慈善」と「博愛」の用語と理念は、社会事業思想や理念とほぼ同様であったが、その後、1920(大正9)年代の社会事業は、個別的な視点での「慈善」から、社会的視点が重視された「社会事業」への転換がなされていた。ところが教科書には「慈善」と「博愛」の用語はそのまま残され、「社会事業」の用語への転換がされなかった⁴⁶⁾。

施乾は「教育勅語」の教育を受け、1917(大正6)年には台北工業学校を卒業し、1919(大正8)年には総督府に就職していた。彼は、細民調査という職務遂行を通して、第三章の5で後述するように乞食の問題を深刻に受け止め、乞食撲滅を目指した愛愛寮を設立したのである。

淡水公学校に関連した施乾が受けた学校関連の思想については、清水安三や同地の宣教師の影響も指摘できる。淡水公学校の先輩杜聡明の記憶によると、日本人の牧師清水安三(1891～1988年)が台湾視察時愛愛寮を訪問し、愛愛寮の話聞き、それに感動してその話を日本に広めたという⁴⁷⁾。清水安三は、宣教師であり、1920年に北京朝陽門外のスラムに学校(崇貞学園)を開設し、その後1946(昭和21)年に桜美林学園を創立した人物として知られている。その清水安三の姉婿である小竹徳吉(1876～1913年)が淡水公学校の校長をしていた⁴⁸⁾。そこで杜聡明や施乾は教育を受けた。小竹徳吉はキリスト教信者であり、施乾が台湾最初の民間の福祉施設「愛愛寮」を設立したのは、小竹徳吉の指導的影響があったのではないかとみられている⁴⁹⁾。また1872年に淡水では、カナダ・キリスト教長老教会最初の海外宣教師ジョージ・L・マッカイ⁵⁰⁾(George Leslie Macay)が台湾で医療と教育活動にあたった。マッカイは1901(明治34)年に台湾で永眠したが、小竹徳吉もマッカイを尊敬し、先駆者精神を子供たちの教育に導入していたことは容易に推測される。しかし、施乾の残した著作物から、淡水公学校で施乾が影響を受けた人物を見つけ出すことはできない。また彼が無宗教であったことは、次女施美代のインタビューで明らかになっ

ている⁵¹⁾。施乾は、宗教的な影響を受けていないとはいいい切れないが、受けたとしても小さかったとはいえるのではないか。

(2) 日本の社会事業家の影響

先にも述べたように、後年施乾は、日本の社会事業家、特に彼の尊敬していた賀川豊彦、西田天香の影響を受けたと言っている。ここで日本の社会事業家で施乾に決定的な影響を与えた人物であると思われる賀川豊彦（1888～1960 年）について、施乾との関係も含めてみていきたい。

賀川豊彦が、神戸のスラムに身を投じた 1909（明治 42）年から現在 100 年を迎えようとしている。賀川豊彦は、明治、大正、昭和にかけて、世界を舞台にした平和な社会を実現するためにその全生涯をささげた人物である。賀川豊彦は、労働運動、農民運動、協同組合運動、普選運動、平和運動、幼児教育、社会福祉活動などを実施し、賀川豊彦が関わった社会改良運動は広範囲に及んでいる。名家で出生するも、幼少時に両親と死別した賀川豊彦は、父親の実家で養育されたが、賀川家が破産した。その後悲しみと絶望の人生を歩んだが、17 歳で長老教会宣教師に救われ、指導を受けた。結核に罹患したにもかかわらず、1909（明治 42）年神戸の貧困地域である神戸葺合新川へ単身移住し、キリスト教の信仰に基づく貧民救済事業を 14 年間実施した。賀川豊彦の思想と実践の原点は、社会の最底辺に追いやられた人々とのこの 14 年に及ぶ生活であった。その神戸での実践や研究の成果を『貧民心理の研究』（1915 年出版）、『精神運動と社会運動』（1919 年出版）、更に『死線を越えて』にまとめた。特に 1920（大正 9）年に刊行された『死線を越えて』は、ベストセラーになった。その後もセツルメント論を中心とした社会キリスト教倫理とヒューマニズムに立った多くの論考を残した。

さて賀川豊彦が台湾に渡ったのは 1922（大正 11）年のことで、その年に設立された愛愛寮の近くで、台北で最も古い艋舺の長老教会を訪問していたようである⁵²⁾。その時に施乾が賀川豊彦とどのような接点があったのかは明らかではないが、貧困地域へ単身移住した同じ社会事業者として賀川豊彦が近くに来ていることを知り、施乾が艋舺の長老教会へ行き、賀川豊彦の話を聞いたことは十分に推測できる。賀川豊彦は 1922（大正 11）年 1 月から個人誌『雲の柱』を毎月 1 回発刊しているが、その 4 号（1922 年 4 月）に「台湾紀行」が掲載されている。これによると、賀川豊彦は、1922（大正 11）年の 3 月 3 日の朝、台北県の新竹から桃園、淡水を訪問したこと、賀川豊彦の一行に巡査部長が加わり、彼を警護していたことが書かれている。また賀川豊彦は、淡水の美しさに感動し、その翌日に「蕃人部落」で『死線を越えて』の愛読者がいることを喜んだ。彼は、夕方台北に向かったとしているが、その訪問の時の艋舺の長老教会に関する記載はない⁵³⁾。賀川豊彦は、1922（大正 11）年 4 月に日本農民組合を発足させたが、それは台湾伝道旅行から帰った約 1 か月後のことである。なお彼は台湾で 50 回の講演をした⁵⁴⁾。賀川豊彦は台湾で講演をすることは許されていたが、「社会問題」について語ることは禁じられていた⁵⁵⁾。

賀川豊彦の思想は、人々が貧者救済のための自己犠牲を払うべきであるということが根

本理念になっている。彼は、米国や台湾等の国や地域を長期間訪問して、兄弟愛、平和、正義、協同組合運動などを世界に訴えたのである。賀川豊彦は、アメリカ滞在中に日本人労働者の支援をした経験から、日本でその経験を生かし、労働運動の指導者になった。彼は、米国のキリスト教信者らの人道主義を批判し、豊かなアメリカにおいて富の公平な分配がなされていないことを問題とした。そして1880年代、英国のロッチデールで生まれた協同組合運動に触発され、日本に生活協同組合を組織した。彼は、1930年代に著書や講演をとおして、アメリカのパークレー生協指導者に影響を与えた⁵⁶⁾。1920年代、賀川豊彦は、労働運動、農民運動、政治運動において、自らの信念の実現のために戦ったが、彼は、政府に挑戦するのではなく、批判を和らげながら、彼と不一致な意見の人々とも争わず、「愛」と「協同」という信念で全者救済に向けた自己犠牲の必要性を世界に訴えた⁵⁷⁾。

施乾は、愛愛寮設立前、賀川豊彦と同じように乞食社会で生活をし、乞食の心理について研究している。施乾の著作『乞食社会の生活』（1925年刊、全179頁）に賀川豊彦の『貧民心理の研究』の一節が次のように引用されている。「古詩人井ロンが道に行き暮れて或る富豪の家に一碗一宿を乞うた、処が富者は却って大に井ロンの嘗つて盗賊した事をせめたので、井ロンは『衣食足ればまた道德も聞かう』と答えたさうである」⁵⁸⁾。井ロンは衣食が充たされた後、初めて盗賊したことへの戒めを聞くことができると考えていた。この部分は、賀川豊彦の『貧民心理の研究』第11章「貧困と犯罪の関係の研究」第1節の244ページからの引用であり、ここの「井ロン」とはヴァイロンのことである⁵⁹⁾。

賀川豊彦は、この物語から『衣食足つて礼節を知る』などと言う古賢の言葉などはもう古い（過去の考えである：引用者注）。どうしたって貧民には貧民の弱みがある」⁶⁰⁾という。彼は、貧民がまず衣食を充たしてから道德を考えるという悠長な考えは過去のものであり、現時点では、その衣食を充たすために、仕事がなく食に困り現行犯逮捕された貧民の立場に立つ。彼は衣食という生理的欲求を充たされない「貧民の弱み」になる環境に注目をする。

一方施乾は、これに対し特に何も述べておらず、「実際物質に飢へてゐるものに対し、説教するだけではもの足りない。パンなくして人は生き得るものではない。しかしパンのみを以て生けるものではない。パンありて後、聖霊を求める。衣食足りて礼節を知るのである」と、衣食住の提供に注目する⁶¹⁾。古賢の言葉をそのまま解釈しているにすぎない。このように実践者としての施乾は、乞食救済のために、まず飢えているものにはパンが必要であると考えたのである。

そして施乾は、社会事業の農業運営についての賀川豊彦の思想との関連も学んでいる。賀川豊彦は1922（大正11）年日本農民組合を正式に発足させた。更に賀川豊彦は1933（昭和8）年に『農村社会事業』を刊行し、それは『農村更生叢書』の1冊として収められている。彼は、農村問題を互助と友愛の精神に基づいて打開しようとし、協同組合運動や農民福音学校にも関わった。「協同組合組織による農村運動のほか村を救うべき道のないことを考えている。この協同組合は押し広めて社会事業にも適用することが出来る。社会事業は

今や慈善事業の領域から脱して、協同組合の基礎をもたなければならないことになっている。」⁶²⁾と賀川豊彦は自らの経験を踏まえ、農村社会事業について論じた。賀川豊彦は、農村社会事業が救貧社会事業としてだけでなく、社会事業として協同組合を押し進めると主張したのである⁶³⁾。

施乾は、これまで賀川豊彦の考え方に影響を受けながら、愛愛寮の経営責任者を彼一人にするのではなく、協同組合のような誰もが参加できる組織にしようとした。彼は、1932（昭和7）年6月に愛愛寮統制経営案に、愛愛寮の組織を財団法人にするとともに、「官長」を管理人とし、台北州内の全域で委員をつのり、その実行委員による協議機関にすることを考えた。そして彼自身は囑託になろうとした⁶⁴⁾。更に賀川豊彦が農村社会事業を進めたように、施乾は、社会事業の生産事業を主に農業にすべきであると訴えている⁶⁵⁾。その理由として農業労働は、手工業に比べて技術的でなく、単純であり、平面的であるために、老幼強弱賢愚を問わず多数の者がこれに従事できるとしている。しかし都会では耕作地がないため、郊外に適当な官有地の払い下げ又は低価格の借地を受けて収容者を新しい施設に移動させ、現在の寮舎は純然たる施療病院として使用することを考えた。それにより施乾は、愛愛寮が台北市の貧弱な施療機関を補うことにならねばと考え、愛愛寮統制経営案を申請したが、それは実現されなかった。この点については、第四章で詳しく述べたい。

このように施乾は、賀川豊彦と同じく農業による授産事業を重視し、愛愛寮を財団組織にしようとしたのである。1920年代の日本では飢饉米不足により米騒動が起き、それ以来台湾米を輸入し、1930年代の台湾からの輸入品の35.6%が米であった⁶⁶⁾。また加工食料品（主に砂糖）は、台湾からの輸入が48.4%であった⁶⁷⁾。台湾の経済活動が農作物中心であったことから、施乾が農業を防貧的社会事業としたのも当然といえる。

つぎに施乾に影響を与えた人物として西田天香（1872～1968年）がいる。西田天香は、自らを捨て「死ぬ」こと、そして神仏への感謝と奉仕の精神で無償の労働を行い、逆に生かされていると信じ、一燈園での実践活動に身を投じた人物であり、国内外の宗教学者や哲学者から評価されている。西田天香の宗教的素養は仏教が基礎であったが、それだけでなく、彼はキリスト教や『論語』『老子』などの漢籍、二宮尊徳をはじめとする日本思想にも通じていた⁶⁸⁾。

西田天香は、1906（明治39）年一燈園生活を開始し、そこに無名の6名の女性が集まり、彼女らと一緒に活動した⁶⁹⁾。1921（大正10）年に『懺悔の生活』を出版し、西田天香の名が台湾でも広く知れ渡った。西田天香は、後述するように、同書を通じて施乾に愛愛寮の設立を決心させた人物である。

西田天香は、滋賀県長浜市の紙問屋の跡継ぎとして生まれた。北海道開拓政策の一環として「近江農村」設立の計画があり、当時の明治政府は、20歳の西田天香に白羽の矢をたてた⁷⁰⁾。北海道開拓事業は苦難であったが、日清戦争の勃発で麻が売れ、西田天香の係った北海道開拓は大成功だった。しかし、戦争終了後、麻は売れなくなり、自力による事業継続は困難となった。こうした状況の中で、西田天香は、自ら体罰を行い、汚れた血液を

搾り出し、それによって心身を清め元気を取り戻すために血書で懺悔をした。その後懷疑と求道の生活の中で、1905（明治 38）年滋賀県の長浜で断食修業中に乳児の泣き声を聞き、人生の理想は無心であると悟った。そこで京都の山科に一燈園を開設し、托鉢と奉仕と懺悔の生活に入った。その精神は現在も小、中、高一貫制の寮生活による、日本で一番小さな学校として受け継がれている。

さて西田天香は 4 回⁷¹⁾ 台湾を訪問しているが、最初愛愛寮を訪問したのは、1924（大正 13）年 4 月である。当時のことを後年施乾は、「大正 13 年 2 月、自分がかつて京都一燈園に生活すべく初度内地に渡ったことがあった」⁷²⁾ と述べていることから西田天香が愛愛寮を訪れる前に、施乾は一燈園を訪れたことがわかる。更に施乾は、「当時の自分としては唯心的イデオロギーが余りにも濃厚であり、尚且つ人間として一人生観、社会観、思想問題に対して頗る幼稚であった為め、今に顧みればなにものをも得ずして帰って来たことを口惜しくもあり、恥ずかしくもおもふのである。」⁷³⁾ と述べている。ここで施乾が、一燈園に何日滞在し、どのような修業を行ったかは、施乾の著作物や一燈園の資料からは不明である。その後、彼は、日本の新聞や雑誌を読み、社会の状況を知ろうと努力したが、孤島である台湾にいてはわからない点があることを悲しんでいた⁷⁴⁾。

さて、施乾と西田天香の接点がどの位あったのか。最新の西田天香の伝記である宮田昌明著『西田天香』によると、西田天香は 1924（大正 13）年に初めて台湾の托鉢崇拜者松本安蔵と平戸喜代治から招かれ、「台湾に 45 日居て北基隆、南屏東迄重要な処々⁷⁵⁾（は：引用者注）悉く行き、70 回の講演を求められて 6 月 5 日帰京」⁷⁶⁾ と彼のメモである『天華香洞録』に記述されている。1935（昭和 10）年 4 月再度天香は彼らの招待を受け、それぞれに応じた。それは西田天香にとって、12 年前の初回訪問から 2 度目の愛愛寮訪問であった⁷⁶⁾。また彼が 1924（大正 13）年に台湾で施乾と会ったとき、施乾は、台湾総督府殖産局工商課技手の職を捨て、乞食救済に身を投げるという決断は、天香の『懺悔の生活』を読んだ結果であると西田天香に話した⁷⁷⁾。それを西田天香は気にかけており、1935 年の愛愛寮訪問になったようだ。その日のことについて西田天香は、1935（昭和 10）年 4 月 24 日の日記を残している⁷⁸⁾。それによるとこの日は、天香が 1904（明治 37）年に長浜の愛染堂に参籠して 30 年記念の日であり、その後愛愛寮訪問について次のように述べている。「午前中のうちを（に：引用者注）愛愛寮にゆく。施乾氏の経営せる乞食収容所なり。12 年前、懺悔の生活を読みて 70 円の給料を棒にふり、乞食のむれに入りたる人。当時訪問した家は只小さき小屋なりしが、今は立派になっている。京都より清水半衛氏の娘、此人の事業を見込み、前妻の死なれしあとにゆきたるとの事。その人にもあえり。施乾氏不在。台北信用組合にて講演する。」

内地に戻った天香は、1935（昭和 10）年 7 月に「台湾再遊」と題する随筆⁷⁹⁾の中で、12 年ぶりに台湾を訪問したと現在の台湾に一燈園のような生活が必要なことを述べている。それによると天香らは、4 月 25 日に基隆に上陸、40 日間台湾に滞在し、台湾の主要な部分を巡講し、150 回の講話をした。西田は「台湾再遊」に台湾の様子や、西田天香の講

話の希望者が多いことを詳細に記載している。上は総督府で役人の要求に応じ、下は高等科の小学生までに聞いてもらっている。話す内容は平凡で華々しくはないが、「行詰り」台湾の聴衆は、一燈園の実例を聞き、講義後の天香に親しみを持ったようだ。天香は自画自賛しつつ、台湾での今回の活動を総括する⁸⁰⁾。

彼はまた台中で見た「台湾日日新聞」で掲載された、地方長官会議における後藤文夫内務大臣の発言を取り上げている。後藤は、「行脚政治をやるように」と訓示し、その時に、水戸黄門光圀の『桃源事情』と恩田木工（1717～1762 年）の『木工政談』を配布した。この『木工政談』は、一名「日暮硯」のことで、まさに一燈園の生活そのものであり、後藤内務大臣がこれに着眼したのは偉いが、30 年前の政府は、その一燈園の生活を実行した西田天香を要監視人物リストに挙げていたから滑稽であると天香はいう。なお西田天香が講演をしている間、随行の托鉢者が便所の掃除を続け、西田天香の妻も率先して素足になって「托鉢の修行」を行っている。

更に西田天香は、「13 年前の種がエライ芽」が出た話を書くとして、『愛愛寮』（乞食收容所）の「主人（施乾）」について紹介し、一燈園の会誌『光誌』163 号（1935 年 7 月）に以下のように記している。

12 年前来たときに、私（西田天香：引用者注）の『懺悔の生活』を暗んじて居る程読み込んで、遂に前途ある役人生活を捨てて路頭に立つたのである。本島人（台湾産れ）で当時 24 歳、早くも相当の地位何不自由しない人であつたのに、俸給を捨て、筒袖一枚に身を固めて、小屋 1 棟に立て籠もり、頼るべなき乞食の幾人を引き受け養つたものである。当時上下とも『馬鹿だ』と冷笑と罵倒を浴びせかけていた。

私は自分の著書から産まれただけに責任を感じ、其の前途を心配して帰ったものである。現に何年か前に宮内省より 3,000 金を賜り、今は財団法人となって随分大ぜい收容している。金を他に頼むさうば（相場：引用者注）でない。若しこの仕事が倒れるなら、台北の市が困るのである。それは大ぜいの乞食さんがウヨウヨと市中をもらひに廻るからである。此人に補助するのではない。此人にやってもらはねば、市民が助からぬ事になる。乞食も救われ民も助かり、両方への布施である。是だけの仕事を此位の金でやるには、サラリー的生活者のできぬことである。俸給と前途の名誉を捨てた『懺悔の生活』の態度でのみできるのである。此人は施乾と云う人で、今は第二、三の仕事にかかっている。

此人は 3 人の拾い子をした。さうして矢張り本島人の妻君が我子の様に世話したものである。処が 2 年前病死されたが、3 人の拾い子の母、此施乾さんの後妻となる人が、本島人のうちでもなかつたのである。処が昨春其後添へとなり 3 人の子の母となつた女性が出来たが、それが又不思議な因縁で、我等の京都のしかも相当な素封家であつた家の娘さんであつたのだから愉快である。施乾さんは 35、（、：引用者加筆）6、新しく来て呉れたは勿論初婚の処女で 24 歳、私は乞食の收容場である愛愛寮の事務室で、

甲斐甲斐がしく本島人の服を着こなして、此事業の手伝いを嬉しそうにしている新夫人を見て、台内融和の大傑作と感激し、是が一燈園の生活から産まれたのだと思う時、こみ上げる嬉しさを覚えたものである。⁸¹⁾

このように天香は、施乾が彼の『懺悔の生活』を読んで、12 年前から乞食を収容をし、乞食や市民が助かっているとし、施乾の新夫人が彼と同じ京都の出身地であったことで更に施乾に親近感を感じ、以上のことが一燈園の生活から産まれたとして施乾の事業を賞賛する。

そして天香は、施乾の仕事を、「首をきれば台北市が困るとはおもしろい強さではないか。全部の一燈園生活は基脈である。一燈園に、不景氣のないのも行詰まりの来ないのも其道理である。活きたいのではなくて、他より生きてもらひたいと頼まれて活着ているのであるが、それが台湾の此仕事にも、あざやかにあらはれてあるからおもしろい。」⁸²⁾ という。西田天香は、「台内融和」の題目で沢山の予算を使っている総督府を「事実として本格的のものに何がある」と批判する一方で、「そこになると此施乾君の家庭は、全く一点紅（一輪の紅の花のようにすぐれた事業をしている：引用者注）である。」とし、それが一燈園生活から「産れた」として自負している⁸³⁾。

1935（昭和 10）年の西田天香の訪問時の状況について、1 年前の 1934（昭和 9）年に施乾と結婚した元院長施照子によれば、西田天香の一行が愛愛寮を訪れるや、西田天香が先頭にたち、愛愛寮の入寮者のトイレ掃除を丁寧に行なったが、外出から帰宅した施乾はそれを聞き、深く感銘を受けたという⁸⁴⁾。他にも西田天香の影響について、戦前の台北在住の民俗学者古閑文夫は、「愛々寮の生活」という随筆で次のようにふれている。「愛々寮の設立者施乾氏は台北工業学校を卒へられた方で、京都の一燈園の西田天香師に師事せられた。慈愛深い性質に加へてかうした修養は、台湾の社会救済事業に一生を捧げる決意と、勇気を氏に与へた。」⁸⁵⁾

施乾は、慈愛深い性質に加え、西田天香に師事し、修養することで次のように述べている。1925（大正 14）年『乞食撲滅論』の「おことわり」で「わたくしは利己が徹底したら利他となり、利他が徹底してゆくと利己となることを知ってゐる。わたくしは真実の自愛がつねに他愛になり、真実の他愛がつねに自愛になることを知ってゐる。で、わたくしはつねに自我を拡大し、自我を善くしたい、そしてわたくしの^{ウケ}眷族（親族）は勿論、わたくしの島の人々、わたくしの国の人々、延いては全人類を自我の領域に入れてしまいたい」⁸⁶⁾と述べている。

1924（大正 13）年、愛愛寮事業開始の翌年以来、西田天香からみれば、施乾は西田天香から学ぼうとしていたと考えられる。また西田天香はそれに応えようとしたと思われる。施乾は、日頃から自分の家族にも乞食と同じような衣服や食事をさせ、乞食が幸せになれば、家族も幸せになると家族に言っていたし、自ら「拾い子」をするなどの実践をした⁸⁷⁾。このように施乾は、利己利他、利他利己の道理を取り入れた「自他一体」の西田天香の思

想をもとに、愛愛寮の経営を目指していたのである。

施乾以外にも西田天香の思想により貧民救済を主張している者がいた。前述した 1928 (昭和 3) 年の第 1 回全島社会事業大会の議事に、内地人である高雄州のある方面委員は、天香の一燈園の例を挙げ、「貧民と言っても、宗教心を涵養し、精神救済をやらねばなりません」と力説した⁸⁸⁾。その大会で、同じく内地人である台南州のある方面委員は、天香についてはふれられないものの、天香が貧民救済のため実践していた市外の大掃除や糞便汲み取り等が鹿児島や名古屋でなされていることを紹介した⁸⁹⁾。

更に施乾が影響を受けた人物として河上肇 (1879～1946 年) がいる。河上肇は東京帝国大学法科大学政治科出身の経済学者であり、マルクス主義経済学の先駆者として知られている。号は閉戸閑人である。彼は東京帝国大学在学中、利己心の否定、絶対的非利己主義の実現ということを生涯の実践目標とした。また足尾銅山鉍毒事件の鉍毒地救済演説会を聞き、即座に着ていた衣類を寄付した。1905 (明治 38) 年 12 月に伊藤証信の「無我宛」に入ったが、まもなく失望し、1906 (明治 39) 年 2 月に無我宛を退去した。その後マルクス主義に向かって進み、日本におけるマルクス主義経済学受容の道標にもなった。1932 (昭和 7) 年 9 月に彼は正式に共産党に入党し、1933 (昭和 8) 年 8 月に治安維持法違反として懲役 5 年の判決を受け、1938 (昭和 12) 年 6 月、刑期を満了した。

河上肇は、1917 (大正 6) 年に『貧乏物語』⁹⁰⁾ を出版した。彼は、明治・大正・昭和を生きて、戦後彼の思想を『自叙伝 (1～5)』⁹¹⁾に残している。河上は、「自画像」『自叙伝 (1)』における自画像について「むらと変化の多い私の生涯を一貫せる本質的なもの」の項目に「他人の描いてくれたこれらの画像には、満足すべきものが^{すくな}鮮い」ため「一生を閉じる前に、一つ自分の気に入るような自画像を描いておこう」と思い立ったと言っている⁹²⁾。そして河上肇は、自分は、「むらの多い人間」であり、「玉石混淆^{ぎよくせきこんこう}の肌合」なのであろうという。その上で、彼は、「玉石混淆」といったところで、「生きた人間なのだからその玉と石とは、ただばらばら」になっているわけではなく、「それは必ず何らかの或る精神的なものによって融合統一」されなければならないとする。これを一つの中心に向かって統一せしめている「本質的なものは何か」と河上は、自問し、「いささかの自画自賛^{ろう}の陋を免れない」が、自らそれを「真実を求める柔軟な心」であると答えている⁹³⁾。河上肇は、この点についてもっと委しく (なりゆきにまかせて：引用者注) 言うなら、として次のような説明を加えている。

「いやしくも自分の眼前に真理だとして現われ来^またものは、それが如何ようのものであろうともさらに躊躇することなく、いつでも直ちにこれを受け入れ、そしてこれを受け入れた以上、飽くまでこれに喰い下がり、合点のゆくまで次から次へと掘り下げながら、依然としてそれが真理であると思われる限りにおいては、敢て身命を顧慮せず、毀誉褒貶^{きよほうへん}を無視し、出来得るかぎり謙虚な心をもって、無条件的にかつ絶対的に徹底的に、どこまでもただ一途にそれに服従し追隨してゆき、遂には、とても無想だもしなかったような、危険な、無謀な、あるいは不得手な境地に身を進めなければならなくなっても、逃

避せず尻込みせず、無上命令に応召する気持ちで、いのちがけの飛躍をなすことを敢えて辞しないが、しかし、こうした心持で夢中になって進んでゆくうちに、最初真理であると思って取り組んだ相手がそうでなかったことを見極めるに至るや否や、その瞬間、一切の行掛りに拘泥することなく、断乎として直ちにこれを振り棄てる。これが私の人格の本質である。⁹⁴⁾」

以上から、河上肇は、「真理」を追究する強い信念の持ち主であることが分かる。彼は、他人に影響され支配され引きずられる場合があったのは、「私が相手に真理性を認めている限り」のことであったという⁹⁵⁾。河上は学生時代、バイブルの「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ」（絶対的非利己主義）という教訓に強く捉えられていたが、文字どおりこれを実行に移すと、「私はこの世に生きていけなくなる」と思い、「実行に移すことを躊躇」していた。しかし、河上は、この絶対的非利己主義が、彼にとって「真理」だと思い、彼の現実の生活を改めなければならないという心中の要求があり、そこへ、絶対的非利己主義の唱道者である伊藤証信（真宗大学研究科に在学中）の「無我の愛」に共鳴して「無我苑」実践に入った⁹⁶⁾。ところが伊藤証信の無我説は、「強姦でも強盗でも、その他人間一切の行動は、一として無我愛の活動」でないものはないというもので、河上肇の絶対的非利己主義の真理とは相容れなかった。そこで河上は、伊藤証信から離れることになったが、最初伊藤証信に宛てて出した手紙は、「真理（道）に対して私如何に低く頭を垂れていたかの証拠」となるという。そのように頭を垂れて真理に向かう場合、河上は、実に恐ろしく「柔軟な心」を抱くという⁹⁷⁾。その数日後、伊藤証信を訪問し、彼に言われるまま、河上は、翌日、在職中の東京大学の農科大学、学習院、専修学校、台湾協会専門学校等の学校に残らず辞表を出している⁹⁸⁾。このように河上肇は、絶対的非利己主義が真理だと認めた以上は、「私は飽くまで徹にその道に進もうとした」という⁹⁹⁾。河上肇は、このように真理（道）を追求し続け、最後の仕上げとして自分で納得できる「自画像」を描き残した。

河上肇は、『貧乏物語』で「英米独仏その他の諸邦、国は著しく高めるも、民ははなはだ貧し。げに驚くべきはこれら文明国における多数人の貧乏である」¹⁰⁰⁾と述べ、貧困を資本主義における社会的問題として捉えた。河上は、この著書で、貧乏の概念として、(1) 金持ちに対していうところの貧乏人（経済上の不平等）、(2) 救助を受ける依頼の必要な貧乏人（経済上の依頼）、(3) 貧乏線以下の貧乏人（経済上の不足）の3種に分けた。その上で彼は、西欧諸国にいるたくさんの貧乏人を(3)の範疇に入れ、それを『貧乏物語』の主題にしている¹⁰¹⁾。

ところで本章の文頭で述べたように中国では貧民の最下層を窮民として扱った。この最下層の窮民は、河上肇の貧乏線以下の貧乏人を更に細分化したもので、その下層に入る対象者である。英国の貧民研究の権威であるシーボーム・ローンツリーは貧民を第一的貧と第二的貧とに分け、その間に「貧乏線」をひいた。また同国のチャールス・ブースは貧民を非常な貧民と貧民に2分類していた。このような英国の2分類と同じように、台湾の方面委員制度においても貧民を2等級に区分している¹⁰²⁾。明時代の林希元は経済生活上の6

等級表として極富、次富、稀富、稀貧、次貧、極貧に分け、それぞれの境に極富線、次富線、稀富線・稀貧線（貧乏線）、次貧線、極貧線を入れている¹⁰³⁾。台湾社会事業協会理事である杵淵義房は、この 6 等級表に依ると、貧を対象とするところの社会事業や社会政策の理想がはっきりと頭の中に整理できると述べている¹⁰⁴⁾。施乾が対象とした乞食は序章でふれたように最下層であり、一般的に極貧に分類された。前述したように愛愛寮での収容目的は乞食の生活改善であり、施乾は、乞食を救済することで、彼等を漸次上級表へと引き上げることを目的とした。

施乾は、『乞食社会の生活』の「乞食生活の一般」の章の「衣食住」という項目で、乞食について「無欲といったら托鉢僧より徹底しているものがある」¹⁰⁵⁾という。更に施乾は、乞食に宗教的意味を加えたら、神そのものであり、仏そのものであるとした。彼は、乞食のように何も諦め、名誉を捨て、希望や競争がなく平和であれば、天国へ行ける乞食も多いと考えた¹⁰⁶⁾。そこで施乾は、『乞食社会の生活』の中に、河上肇の『貧乏物語』のうち「面白い」という理由で以下の文を引用した。

貧乏が不仕合だといふ事は、殆ど説明の必要もあるまいと考えらるるが、不思議にも古来学者の間には、貧乏人も金持ちも其幸福には、左したる相違の無いものであると云ふ説が行はれて居る。大多數の諸君の知らるる如く、アダム・スミスは近世経済学の開祖とも称さるべき人であるが、氏が今より 150 余年前（1759 年）に公にした「道德感情論」を見ると、代（氏：引用者注）は次の如く述べている。

「……肉体と精神の平和と云ふ点に於いては、種々の階級の人々が殆ど同じ平準に在るもので、例へば大道の側で暖曝（日向ぼっこ：引用者注）を為しつつある乞食の有つて居る安心は、諸の王様の欲して猶得る能はざる所である。」

只今嵯峨に居らるる間宮英宗師は禅僧中稀に見る能弁の人であるが、其講話集の中には次の如き話が載せてある。前に掲げたるアダム・スミスの一句の注脚とも看作すべきものゆゑ之を其のまま左に借用する。

「昔五条の大橋の下に親子暮らしの乞食が住んで居ました。もとは相応地位もあり財産もあつた立派な身分の者でありましたが、親爺が放蕩無頼に身を持ち崩した為め、とうとう乞食とまで成り果て、今に住むに家もなく五条の橋の下で貰ひ集めた飯の残や大根の尻のぼ（しっぽ：引用者注）を食べて親子の者が暮らして居たのであります。ところ（ろ：引用者注）がちょうど或る年の暮れ大晦日の事、其橋の上を大小さして一人の立派な御侍が通りかかつた。すると其処へ又向ふの方から一人の番頭風の男がやつて参りまして、出逢ふがしらに「いやこれは旦那よい所でお目にかかりました」と云ふと、其御侍は何がよい所であらうか飛んだ所で出会はしたものだと思ひの内では思い乍らも致方がない。忽ち橋の欄干に両手を衝いて「番頭殿実以て（もって：引用者注）申訳がない、今日といふ今日こそはと思つて居ただけけれども、つい意外失敗から算当が狂つて甚だ済まぬけれども、もう一箇月計り是非待つてほしい」と云ふの

を番頭は五月蠅いとばかりに「いや其御言訳は度々承はつて御座る。いつもいつも勝手な御弁解も早や今年で 5 年にも相成ります、今日というふ今日は是非御勘定を願はなければ、そもそも手前の店が立ち行きませぬ」と威丈高になつて迫りますと「いやお前の云ふ所は全く無理ではないが、然し武士ともあるものが此通り両手を突いて平にあやまつて居るではないか、済まぬ訳だが今暫く是非猶予して貰ひたい」と頻りに詫び入る。これを橋の下で聞いて居た乞食の倅が、さてさて御侍だなんて平生大道狭しと威張つて居くさる癖に商人風情の者に両手をついで迄あやまるとは何とした情ない話であらう。いくら偉さうに威張っていた所で債鬼に責められてはあんな辛い思ひもせなければならぬとすればつまらない。それを思ふと我々の境界は実に結構なものだ、借金取りかやつて来るでもなければ、泥棒のつける心配もない、風が吹かうが雨が降らうが屋根が漏る心配も壁がこわれる心配もない。飢ゑては一碗の麦飯に舌鼓をうち、渴して一杯の泥水にも甘露の思ひを為す、

所謂

一鉢千家飯	孤身送幾秋
冬温路傍草	夏涼橋下流
非色又非空	無楽復無憂
若人間此六	明月浮水中

で思へば自分等程呑気な結構なものは世間にないと独言を云ふて妙に達観して居ると、倅の側で半ば居眠りをして居た親乞食が倅が此様に申しますのを聞いて、むつくりと起き直り「これ倅そんな果報な安楽の身に一体お前は誰れにして貰ふたのか親様の御恩を忘れてはならんぞ」と云ふ御話が御座ります

「はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざり、ぢつと手を見る」といふ連中が、此講話を聞いて果して自分等ほど果報な者は世にいないと思ふに至るであらうか、どうか。縦ひ彼等自身さう思ふにしても、我々は果して彼等を目して世に果報な人々とすべきかどうか。其が私の問題とするところである¹⁰⁷⁾。

このように施乾は、『乞食社会の生活』の 65 から 68 頁にかけて、河上の『貧乏物語』岩波文庫版 43 から 47 頁までの部分を一字一句違えず 4 頁にわたって引用している。では施乾が河上肇の『貧乏物語』を「面白い」と言つて引用した理由は何か。子乞食は、威張っている侍が商人ふぜいの者に両手をついてまであやまるのを見て情けないと思つた。それに比べ自分たちの生活は債鬼に責めらることもなく、世間で一番果報者であると子乞食は、達観した。それを聞いた親乞食が自分の放蕩無頼で子供に乞食をさせていることを恥じぬばかりか、子乞食に「親様の御恩を忘れてはならんぞ」と開きなおっている。間宮英宗師はこのように達観している乞食を人間の生き様として認めている。しかし河上肇は貧乏人がこの乞食親子のように果報者と達観していていいものかと問題を投げている¹⁰⁸⁾。施乾も河上肇の考えに共鳴しており、親乞食が自分の責任で子供を乞食の境遇にし、そのことを

子供にわびるのではなく、「親様の御恩」と開き直ったことが彼には「面白い」と思えたのであろう。そして施乾は、最後まで上述のように『貧乏物語』の乞食親子の会話をそのまま引用したのは、河上肇と同じようにその乞食の考え方を問題にし、このまま放置しておいては親乞食が子乞食をつくり、世代間でその繰り返しになり乞食が少なくなならないという危機感を抱いたからこそと思われる。

上に見たように、河上肇は貧乏を運命であると達観的に捉えている間宮英宗師の乞食論に反発しており、施乾は河上肇の考えに同意している。河上肇の研究は「貧乏は社会の大病である」として、「貧乏退治の根本策を論ずるをもって主題となすもの」であった¹⁰⁹⁾。貧乏をどのように解決しようとしたのかについて、河上肇は次のように3方策を挙げている。第一は「世の富者」が「奢侈ぜいたくを廃止」すること、第二は「なんらかの方法」をもって、「社会一般人の所得を等差なからしむ」こと、第三は、「各種の生産事業を私人の金もうけ仕事に一任しておく」のではなく、「たとえば軍備または教育のごとく、国家自らこれを担当する」こととした経済組織の改造論であり¹¹⁰⁾、施乾の乞食撲滅論に影響を与えたのであろう。

施乾は、『乞食撲滅論』の中で「有形無実な思想善導を標榜する、滅法な悪魔の宗教を種子とする、骨董的寺廟の建設をのみ無条件で賛成し、巨万の財布を寄付するのみ、世間のことと心得てゐる頑迷固陋な思想、イヤ無思慮から目醒め、そしてより真面目により真剣に社会事業を取り扱ふやうに至つたならば、現時の資本主義経済組織は別段これを破壊するの要なく、社会共産主義の如き、所謂危険思想も成長するに至らないであらう。」¹¹¹⁾という。そうであるのに「社会の為国家の為、真理にして公正なる真面目な、真摯な熱情を有つところの輩やから（なかま：引用者注）を目して危険思想奉順者と憶測し、彼等の言詞、彼等の行為を無条件で直ちに、過激言論危険行為として結論しようとするのである」¹¹²⁾と施乾は、世間が過激とみる社会運動家の弁護をしている。ここで施乾は、有識者が乞食撲滅を図るため、無意味な巨額の寄付を止め、その資金を社会事業に回せば、資本主義経済組織を破壊する必要はないとした。そのことも十分に考えないで、社会の為に熱情をもってただ資本主義経済組織の破壊を主張している人々を危険呼ばわりし、何もしない台湾の市民に対し施乾は、批判をしたのであろう。しかし、施乾は、世間が危険とみる社会運動家と自分が違う点について次のように述べている。

個より人道主義と社会主義との理想とし、目的とするところは、何れも社会の欠陥、疾病を治療救済して、光明に輝く合理的、ある可き社会を建設せんとするにあつて、理想目的に於いては相互の間に、毅然たる一定の境界線を設けること不可能であるが、斯業に従事するものは自ら所信がなければならぬ。しかしわたしが如何に、人道主義を謳歌するものの如く見ゆるにしても、かの粗暴なる或は破廉恥なる、空論的人道主義を振り廻はすものと、無造作に混用されては困るのである。¹¹³⁾

ここで施乾が言う「輩」には、河上肇も入るであろう。個における社会の欠陥を治療救済するために、施乾は人道主義、社会主義を理想とした。施乾は、これらの主義に明確な境界線はなく、その主義に基づいた事業の実施者には所信が必要だという。施乾は、社会運動家の「輩」が社会改革を主張することについて同意をしている。しかしその「輩」と明らかに違う点について、施乾の考えは、「輩」のように過激でもなく、「空論」的な理想ではないという。施乾は、乞食撲滅という社会問題を真剣に考え、その問題解決のために実践していることを主張したかったのであろう。施乾が「空論」であるとする事について河上肇は、乞食も、「さてわれわれが今、当面の問題をば単に机上の空論として取り扱うつもりならば、われわれは理論上以上の 3 策に対してほぼ同一の価値を下しうる」とし、しかしながら、この 3 策を採用するには、「おのずから別に周密なる思慮を加うるを要する」と述べている¹¹⁴⁾。このように河上肇は施乾の乞食撲滅論に大きな影響を与えたが、施乾はそれを実践するには、河上乞食の「空論」から学ぶわけにはいかなかった。その「空論」を施乾は「粗暴なる或は破廉恥なる」と断じている¹¹⁵⁾。

(3) 家族と収容者の協同作業

施乾は日本の社会事業家から理想を学んできたが、それを現実に実践に移すには、資金と人が必要になる。資金については後述するが、ここでは人について述べておきたい。施乾が理想を実践に移す初期時点から家族と収容者の協同作業がなければ、彼は社会事業の実践家になり得ないため、日本の社会事業家の影響と並べて彼をとりまく人についてここで述べる。

施乾は恵まれた環境で育った秀才であった。両親は施乾の愛愛寮建設に最初は反対したが、後に愛愛寮へ転居し、同食同寝で施乾に協力をした。親戚も愛愛寮建設の木材提供を行い、協力支援をした。総督府に勤めたときの同僚謝惜（1899 年生）が施乾と一緒にボランティアとして乞食救済に同行し、その後、妻となった。愛愛寮の経営を全面的に援助し、設立後 10 年ほどで過労のため死亡した（1933 年、35 歳）。そのとき長女施明月は 8 歳（1925 年生）、次女施美代は 4 歳（1929 年生）の幼少だった。施乾はその後 1934（昭和 9）年清水照子という日本人を妻とし、自らの良き協力者にした。施照子との間に三女施敏娜（1935 年生）、四女施香（1938 年生）、五女施愛卿（1941 年生）、長男施武靖（1942 年生）が生まれ、子供は 6 名になった¹¹⁶⁾。子供については、愛愛寮の入寮者と同じように育てた。次女施美代によると、学校で「くさい」といわれいじめられたが、施乾に泣きついて、彼は厳しい目で彼女をにらんだという。彼女は、施乾を親と思えず、辛かったと回想している¹¹⁷⁾。このように、家族も入所者も寝食を共にして、一緒に協力し、分かち合った一つの大きな固まりのような一大家族経営であった。

なぜこのように家族を巻き込んで愛愛寮の経営維持発展ができたのであろうか。この高い凝集性をもつ家庭について以下分析していく。家族関係とは主に、後妻となった施照子とその子供たちとの関係である。まず施照子が施乾との出会いについての状況を述べたい。

施照子は、旧姓清水といい、1910（明治 43）年に京都市五条の松原通りで紙問屋を営む

商家の4人姉妹の長女として出生した¹¹⁸⁾。京都市第二高女の1期生として卒業。京都に留学していた施乾のいところを通じて、彼女は彼の事業を知り共鳴し、先妻を失くした彼と1934（昭和9）年に京都の下鴨神社で神前結婚式を挙げたが、家族は皆この結婚に反対し、誰も神戸港へ見送りに行かなかった¹¹⁹⁾。彼女は、結婚した翌月台湾の愛愛寮に着くと、精神病者が裸で踊ったり、しらみや南京虫が出て毎日大騒ぎをするようなひどい環境に驚いたにもかかわらず、1934（昭和9）年8月愛愛寮職員となり、夫の事業に日夜協力し、励んだ¹²⁰⁾。しかし経営困難で京都から持参した着物や指輪が全部米になった¹²¹⁾。初めは言葉が通じず、風俗習慣も違い、彼女は大いにとまどった。更に施乾の母との関係も良くなかったが、後に彼の母の看病をし、その関係が修復された¹²²⁾。

そのような結婚当初の施照子の葛藤については、その頃幼少であり、現在愛愛院の「生き字引」と称される次女施美代が「母は偉かった。父は愛愛院を作るだけで死んでしまい、苦労したのは母だった。」と筆者に述べた¹²³⁾。また彼女は、『台湾百年人物誌 1』の中で義母施照子が台湾へ来て、日本で想像していた愛愛寮との落差について次のように述べている。

媽媽知道愛愛寮收容乞丐，不過他以為大家都有制服穿，又有野球隊，所以笨笨的跟來，後來才發現這裡家不像家，菜像牛吃的草，大家衣服都破破的，這人穿了又那人穿。¹²⁴⁾

母は愛愛寮を乞食の收容所だと知っていた。しかしみんなが制服をきて、野球チームもある立派なところだと思っていたが、来てみるとそうでないことがわかった。そこはボロ家で、牛が草を食べ、みんながボロ着を着ていた。

媽媽剛開始也很不習慣，只默默的跟在爸爸後面做事，難過的時候就跑到外面看火車，和附近台糖的日本職員聊天，想念她在鐵路旁的日本老家，哭到甘願才回家。而爸爸面對媽媽的不適應，只跟她說「請妳多忍耐」。¹²⁵⁾

母は最初から台湾の習慣に馴染めなかった。ただ黙々と父の後で仕事をしていた。生活が難しいときに、外に車が見えると走って行き、また近所の台湾製糖の日本職員に故郷の生家を想い、家に帰りたいと泣きながら話した。そして父と母の関係がうまくいかず、ただ父は、母に「我慢して欲しい」と言うだけだった。

施乾は、愛愛寮継続のために、施照子に対してこのような忍耐を求めなければならなかったのである。施乾は、「つねに自我を拡大し、自我を善くしたい」と言い、それが「真実の他愛」になるというが、施照子は我慢を強いられたことになる。

施乾が1929（昭和4）年に1棟しかなかった愛愛寮を2棟に増築したときは、彼も収容者も一緒になって汗を流し、建物が完成したときは一同が喜んだという¹²⁶⁾。また施乾の衣

服は常に先輩や友達から送られてきた古着であり、明日の米の心配をしなければならないくらい経費の苦労があったが、それでも愛愛寮の住民は、まるで一大家族のように、施家の人に病人が出れば収容者たちが心配し、収容者が困れば施家の人が手伝った¹²⁷⁾。次女施美代は、父親に質素な生活への不満を訴えると、彼は大きな目で彼女を見詰めたという¹²⁸⁾。彼女は、『台湾百年人物誌 1』の中で小学校の頃の生活状況について次のように述べている。

我跟姊姊從國小就要做事，要幫院民弄飯、剃頭拉、洗身軀，忙的要死，幾乎沒跟父母在一起吃過飯，小時後都不知道什麼是臭、髒，還是乾淨，爸爸也會拿我們的衣服給院民穿，我們都不敢反對，所以小時後我也懷疑為什麼在這裡出生？我們同學都好好有錢，便當都有滷蛋，我們都帶豆豉、味噌。小時後很苦。¹²⁹⁾

私と姉は小学生の頃から手伝いをよくした。ご飯を作ったり、散髪、体を洗ってあげる等非常に忙しかった。そのために両親と一緒に食事をしたことがない。小さい頃は何が臭く、汚なく、またきれいなのか良く分らなかった。父は私たちの服を寮民に渡したが、私たちは、「イヤ」と言えなかった。私たちはどこから生まれたのかと思っていた。私たちの同級生はお金もちで、弁当には卵が入っていた。でも私たちには、もやしと味噌である。小さいときは非常に苦しかった。

次女施美代の話からしても親族は収容者と同じ生活をしていたことがわかる。施乾の乞食救済に対する強固な精神は、子供たちを押さえつけているようであるが、一方的な親からの命令ではなく、親族も収容者も同じような人間としての生活ができなければならない、という暗黙の了解があったと思われる¹³⁰⁾。このような寝食を共にした一大家族の生活は、施照子にも引き継がれていくのだが、施乾は、彼の尊敬した西田天香の一燈園経営の実践を模範にしていた。前述のように一燈園は全国から来た 20 名以上の人々の集団生活で、一燈園の当番の承諾があれば仲間になれた¹³¹⁾。その生活は、早朝に起き、掃除、読経、静座、照鑑すなわち仏の確認などをすませ、依頼者の家へ托鉢に行くことであった¹³²⁾。愛愛院の事業は、西田天香が実施した奉仕と、懺悔の生活を学んだ施乾の強い信念、彼自身への厳しさをもって行われた一大家族経営であったのである。

このように愛愛寮の創設は、日本統治前の台湾の窮民救助の考えと、植民地時代における日本の社会事業家の影響を受けながら、施乾によって実践された。その頃長谷川良信（1890～1966 年）¹³³⁾ が日本本土の貧民街の状況を把握し、何とかして貧民者の救済をしなければならないと考え、私立マハヤナ学園を 1919（大正 8）年に設立した。長谷川良信は日本で最初の社会事業家と称されているが、この長谷川良信より 3 年後に施乾は、台湾で愛愛寮を設立し、そのとき彼は長谷川良信が私立マハヤナ学園を設立した年齢より 6 歳若かった。このように長谷川良信以外の賀川豊彦、西田天香、河上肇との接点は施乾の著作にも書かれており、内地の影響が大きい。施乾は植民地である台湾で彼らから大いに学び、

乞食撲滅の実践活動を生涯かけて行った。そこには、金子保の言うようにこの実践活動は周囲の人を巻き込んだ戦いであり、施乾の家族を含め、施乾以外の者には迷惑なこともあった¹³⁴⁾。しかし施乾の強い信念と必死の努力によって、乞食救済事業は継続された。

注

- 1) 杵淵義房「貧民窮民の意義と貧乏の原因」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』創刊号、1928年、所収) 56 頁
- 2) 杵淵義房『台湾社会事業史(上)』(1940年刊行)(永岡『植民地社会事業関係資料集 台湾編9』近現代資料刊行会、2000年、所収) 55 頁。恤救行政とは、国家または公共機関が公費で、頼る人のない窮民を救助することである。前述の機関で清朝時代の官民の協力により窮民救助に関する社会事業機関が設立し、官においてそれらの機関が助成の任務を行ったが、不十分であった。そのため各県においては、毎年一定の恤救費を予算に計上し、窮民に対して衣料費と食事費を支給した。
- 3) 大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』ミネルヴァ書房、2007年、33 頁
- 4) 前掲『台湾社会事業史(上)』88 頁
- 5) 布の長さの単位。一匹は布のふた織りで四丈(約9.4メートル)。昔の布は二丈(約4.7メートル)でひと織りであった。
- 6) 前掲『台湾社会事業史(上)』99 頁
- 7) 同上、100 頁
- 8) 同上、107 頁
- 9) 同上、108 頁
- 10) 同上、109 頁
- 11) 同上、109 頁
- 12) 同上、110 頁
- 13) 同上、111 頁
- 14) 同上、113 頁
- 15) 河原田稼吉「社会事業家諸君に望む」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』創刊号、1928年、所収) 29～30 頁
1928(昭和3)年10月20日、第1回全島社会事業大会で豊田総務長官代理の挨拶内容の一部である。
- 16) 王昭文「拯救乞丐的社会改革者—施乾」(『20世紀台湾歴史與人物—第6屆中華民國史專題論文集—』国史館印行、2002年、所収) 2 頁
- 17) 林金田『施乾伝』台湾省文献委員会、1996年、78 頁
- 18) 前掲「拯救乞丐的社会改革者—施乾」3 頁
- 19) 金子保「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」(淑徳大学院編・刊『淑徳大学院紀要』

第6号、1999年、所収) 85頁

20) 杜聰明『回憶錄』(上卷) 台北市龍出版社、1989年、47頁

21) 淡水国小編『淡水国小一百年誌』1996年5月26日発行

22) 淡水公民小学校は(住所: 台北県淡水鎮中山路160号)の地図(『大台北縣市郷鎮地図集』24頁)



23) 任燿廷「植民地台湾の経済発展と教育」(国立政治大学国際関係研究センター刊『問題と研究』第37巻3号、2008年、所収) 129頁

24) 同上、132頁

25) 前掲『施乾伝』78~80頁

26) 問樵「目錄 施乾乃其事業」(施乾・李天贈訳『孤苦人群録』台北県立文化中心、1994年、所収)

27) 前掲『回憶錄』P4。

28) 前掲『施乾伝』16頁

29) 施乾『乞食社会の生活(附) 乞食救済策』愛愛寮刊、1925年1月、3~4頁

30) 台湾社会事業協会編「大会議事」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』創刊号、1928年、所収) 85頁

馬偕医院：明治5年設立、ジー・グシウ・テイラー院長(キリスト教団体)、私立、癩診療。1943年に総督府に接收されて博愛会本部病院となった。ジー・グシウ・テイラー院長は1940年に国外退去となった。戦後台湾基督長老教会の事業として組織され、現在病院となっている。

林本源博愛医院：明治42年11月設立、後藤薫院長(台湾人)、私立、一般救療。

31) 賀川豊彦(賀川豊彦全集刊行会編『貧民心理の研究』賀川豊彦全集第8巻、キリスト新聞社、1962年、所収) 199~200頁

- 32) 前掲「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」86 頁
- 33) 金子保『生涯発達心理研究—淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心に—(淑徳大学社会学部研究叢書 15)』学文社、2002 年、68 頁
- 34) 前掲『台湾社会事業史(上)』262 頁
- 35) 台湾社会事業協会編「社会事業家の声」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 9 号、1929 年、所収) 88～91 頁
- 乞食に関する発言者 台北州の部：施乾(愛愛寮の如き施設)、蔡彬准(乞食撲滅に対する積極的援助)
- 新竹州の部：羅百祿(乞食収容所)
- 36) 台湾社会事業協会編「山室軍平氏講演会及懇親会」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 9 号、1929 年、所収) 122～123 頁
- 愛愛寮からは施乾と蔡彬准(理事)が出席した。山室氏は汗をかきながら涙目で熱弁をし、聴衆は誰もが感激したと講演会の情景の記載が会報にある。
- 山室軍平(1872～1940 年)：宗教家。日本救世軍の創設者。出身地は岡山県であり、1895(明治 28)年に救世軍に入り、キリスト教社会事業に貢献する。山室軍平は、救世軍の伝道のために台湾を訪れ、その折に、台湾社会事業協会に頼まれて講演をした。
- 山室軍平は、少年の事例のように、帰る家がなく、食事にありつけなければ乞食になり、更にすりの親分に拾われて犯罪をおかすことも当然であると考えた。発育不良や疾病、失業や犯罪は、もとをたどれば貧乏が原因であるという。また、社会事業家は、智あり、働きあり、愛の心を持った人(Head Hand Heart)であって欲しいこと、一身を犠牲にしてこれに当たらなければならない(Not money but yourselves)ことを話した。
- 37) 財団法人台北私立愛愛院編『愛愛寮の物語り』(愛愛院のパンフレット)(愛愛院書類綴所収)1983 年 10 月
- 38) 1923 年に愛愛寮が設立されたという文献が多いが、1922 年に建物は立ち、1923 年に事業が開始された。
- 39) 施乾「感謝の辞」『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』1929 年 6 月 1 日現在、1929 年、2 頁
- 40) 同上
- 41) 前掲『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』217 頁
- 42) 同上
- 43) 同上、214 頁
- 44) 同上、215 頁
- 45) 同上、216 頁
- 46) 同上、217 頁
- 47) 前掲『回憶録』122 頁
- 48) 同上、35 頁
- 49) 宮本義信「『台北市私立愛愛院』の思想と実践」(日本キリスト教社会福祉学会編『キ

リスト教社会福祉学研究』38号、2005年、所収)43頁

50) George Leslie Macay (ジョージ・L・マッケイ) は、中国名馬偕 (マカイ) でマツカイと呼ばれている。以後ジョージ・L・マツカイとする。

51) 2008年8月25日愛愛院における次女美代へのインタビューより。

「父親は無宗教であったが、宗教行事の供え物 (団子や菓子等) は買い、収容者に食べさせてい」たと語った。

52) 前掲「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」88頁

53) 賀川豊彦「台湾紀行」(『雲の柱』4号、1922年、賀川豊彦記念松沢資料館所蔵) 17～18頁

54) ロバート・シルジェン『賀川豊彦』新教出版社、2007年、152頁

55) 同上、153頁

56) 前掲『賀川豊彦』203頁

57) 同上、364頁

58) 前掲『乞食社会の生活』52頁

59) 前掲『貧民心理の研究』244頁

60) 同上

61) 前掲『乞食社会の生活』52頁

62) 菊池正治他編著『日本社会福祉の歴史付・資料』ミネルヴァ書房、2003年、115頁

63) 同上

64) 台北愛愛寮編『台北愛愛寮統制経営案 (草案)』1932年6月、29頁

65) 同上、31頁

66) 前掲「植民地台湾の経済発展と教育」P112

台湾は植民地であったが、内地産との分別のために「輸入」を使用した。

67) 同上

68) 宮田昌明「はしがき」『西田天香』ミネルヴァ書房、2007年、ii頁

69) 明治、大正、昭和にかけて上層とはいえない人々との行動の中で、天香の精神が作り上げられ、それは、彼の28年分の日記と『天華香洞録』、一燈園が1919 (大正8) 年に創刊した『光』という雑誌に収められている。

彼の書物には、『光』『懺悔の生活』がある。

70) 相大二郎『いのちって何』PHP研究所、2008年、142頁

71) 前掲『西田天香』332～334頁

72) 施乾「妄想妄談」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第14号、1930年、所収) 72頁

73) 同上

74) 同上

75) 西田天香『天華香洞録』第6巻、2004年、321頁

- 76) 前掲『西田天香』227～228 頁
- 77) 同上 228 頁
- 78) 西田天香『西田天香日記昭和 10 年 4 月 29 日』一燈園資料館「香倉院」所蔵資料
- 79) 西田天香「台湾再遊」(『光誌』163 号、1935 年 7 月、一燈園資料館「香倉院」所蔵資料)
- 80) 前掲『天華香洞録』321 頁
- 81) 前掲「台湾再遊」8～9 頁
- 82) 同上 9 頁
- 83) 同上
- 84) 前掲「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」88 頁
- 85) 古閑文夫「愛愛寮の生活—台北市緑町所在」(『民族台湾』第 4 卷 11 号、1944 年、所収) 36 頁
- 86) 施乾「おことわり」『乞食撲滅論＝社会問題の根本問題＝』1925 年、1 頁
ページが一貫していない。
- 87) 2004 年 9 月 21 日、愛愛寮における次女美代へのインタビューより。
- 88) 前掲「大会議事」111 頁
- 89) 同上
- 90) 河上肇『貧乏物語』岩波文庫、1947 年
- 91) 河上肇『自叙伝 (1～4)』岩波文庫、1996 年
河上肇『自叙伝 (5)』岩波文庫、1997 年
- 92) 前掲『自叙伝 (1)』95 頁
- 93) 同上、104 頁
- 94) 同上、104～105 頁
- 95) 同上、106 頁
- 96) 同上、107 頁
- 97) 同上、108 頁
- 98) 同上、110 頁
- 99) 同上、113 頁
- 100) 前掲『貧乏物語』13～14 頁
- 101) 同上、16 頁
- 102) 前掲「貧民窮民の意義と貧乏の原因」45 頁
- 103) 同上
- 104) 同上、46 頁
- 105) 前掲『乞食社会の生活』64 頁
- 106) 同上
- 107) 前掲『乞食社会の生活』65～68 頁

- 108) 前掲『貧乏物語』47 頁
- 109) 同上、109 頁
- 110) 同上、110 頁
- 111) 前掲『乞食撲滅論』5 頁
- 112) 同上、6 頁
- 113) 同上、6～7 頁
- 114) 前掲『貧乏物語』111 頁
- 115) 前掲『乞食撲滅論』7 頁
- 116) 前掲『施乾伝』76～77 頁
- 117) 2004 年 9 月 21 日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。
次女美代と姉は乞食の子供と同じボロ着を着て、同じ学校へ通った。年上は年下の
子どもの勉強をみて助け合ったと言う。
- 118) 三宅教子「台北散歩—乞食を收容した愛愛寮」(『自由中国之声』5 月号、1993 年、所
収) 6 頁
- 119) 永山英樹「万華・愛愛院と『仁の人』施乾先生」(許國雄編『台湾と日本・交流秘話』
第 2 刷、1997 年、所収) 41 頁
- 120) 小久保晴行「台湾の土となる元日本女性 愛愛院にささげる博愛の半生」(同著『生
きている台湾—知られざる自由中国—』20 世紀社、1979 年) 96～97 頁
- 121) 同上
- 122) 同上、97～98 頁
- 123) 2005 年 3 月 20 日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。
- 124) 徐蘊康「人間大愛施乾與清水照子」『台湾百年人物誌 1』財団法人公共電視文化事業基
金会、玉山社、2005 年、85～86 頁
- 125) 同上、P86 頁
- 126) 前掲「台湾の土となる元日本女性 愛愛院にささげる博愛の半生」95 頁
- 127) 同上
- 128) 前掲、2005 年 3 月 20 日、次女施美代へのインタビューより。
ボロ着を着て学校へ行くと仲間から「くさい」と言われ、父に訴えても、決して収
容者よりいいものは着せなかったという。
- 129) 前掲「人間大愛施乾與清水照子」『台湾百年人物誌 1』84～85 頁
「,」「,」「。」はママである。
- 130) 前掲、2004 年 9 月 21 日、次女美代へのインタビューより。
施乾は次女に目を据えてにらみ、何も言い返せなかったという。
- 131) 西田天香『懺悔の生活』春秋社、1995 年、154 頁
- 132) 同上 99 頁
- 133) 吉田久一『日本の社会福祉思想』勁草書房、1994 年、149 頁

吉田は「長谷川良信は生江孝之、矢吹慶輝、田子一民らより一世代若かったが、誰よりも早く 1919 年『社会事業とは何ぞや』を上梓した。」「隣保事業マハヤナ学園を主催した長谷川が、セツルメントを隣保事業と訳したのは日本で最も早い。」と記述している。

134) 前掲「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」89 頁

第二章 台北愛愛寮の理念と実態

施乾が乞食救済のために愛愛寮を創設した経緯、また施乾が、日本の社会事業家、特に賀川豊彦、西田天香の影響を受けたことは、第一章で述べた。施乾は、賀川豊彦と同じように愛愛寮設立前に乞食社会で生活をし、乞食の心理について研究をした。施乾の著作『乞食社会の生活』に賀川豊彦の『貧民心理の研究』の一節を引用し、古賢の言葉を解釈していた。そこで実践者としての施乾は、乞食救済のために、まず飢えているものにはパンが必要であると考えた。

次に施乾は、西田天香の影響を受け、天香の『懺悔の生活』を読んだ結果、台湾総督府の職を捨て、乞食救済に身を投じた。1921年7月に刊行されたその本を読み、1924年2月に京都の一燈園で生活しようと内地を訪れている。施乾は、その当時の状況を、「自分としては唯心的イデオロギーが余りにも濃厚であり」、その上に「人間として幼稚であったため」、「なにものをも得ずして帰って来たことを口惜しくもあり」と述べていた。西田天香は、初回1924年4月頃愛愛寮を訪ね、その後1935年4月末に再度愛愛寮へ「托鉢の修行」に行った。その時に天香は、「13年前の種がエライ芽」が出たとして「自他一体」の天香思想を基に、施乾が愛愛寮の経営をし、成長していることを喜んだ。

更に施乾は、河上肇の『貧乏物語』を引用し、河上と同様に貧困を資本主義社会における社会的問題として捉えた。河上の研究は「貧乏は社会の大病である」として、「貧乏退治の根本策を論ずるをもって主題となすもの」、であった。河上は、貧乏をどのように解決しようとしたのか三つの方策をあげた。第一は「世の富者」が「奢侈ぜいたくを廃止」すること、第二は「社会一般人の所得を等差なからしむ」こと、第三は、各種の生産事業を私人の利益のために一任するのではなく、「たとえば軍備または教育のごとく、国家自らこれを担当する」こととした経済組織の改造論であり、施乾の乞食撲滅論に大きな影響を与えたと思われる。施乾は、『乞食撲滅論』の中で「骨董的寺廟の建設をのみ無条件で賛成し、巨万の財布を寄付するのみ、世間のことと心得てゐる」無思慮から目醒め、そしてより真剣に「社会事業を取り扱ふ」ようになったならば資本主義経済組織の破壊にならないと述べ、乞食撲滅を社会事業として取り組もうとした。

このように愛愛寮の創設は、日本統治前の台湾の窮民救助の考えと、植民地時代における日本の社会事業家の影響を受けた施乾によるものだった。それでは、施乾がどのような理念を持ち、どのような実態の中で愛愛寮を経営したのかについて本章で述べる。

1. 授産、自活

施乾は、乞食に「独立自営ノ精神」¹⁾を涵養することを理念とした。乞食が人間的な生活ができるようどのように社会に適応させたのか。まず、衣食住を与えるため、愛愛寮に収容した。そこで収容者のうち病気の者には、直ちに治療をした。更に施乾は、次章で述べるように乞食の心理を分析した。それは、前章で述べた第1回全島社会事業大会で総督府が社会事業の理想とした科学的根拠に基づく実践計画に先駆けた5年前の実践であった。

施乾は、乞食を「同胞」²⁾と呼び、「世の志士仁人よ！」と乞食救済の主体を人々の慈愛であ

る「仁」を持つ人に求めている。「仁人」のもつ徳目の「仁」とは、広辞苑（第 5 版）には「いつくしみ。思いやり。特に孔子が提唱した道德観念。礼にもとづく自己抑制と他者への思いやり。忠と恕の両面をもつ。以来儒家の道德思想の中心に据えられている。封建時代には、上下の秩序を支える人間の自然的本性とされたが、近代、特に中国では、万人の平等を実現する相互的な倫理とみなされるようになった。」とある。

施乾は、とにかく当時の社会というものが彼の想像以上に「冷淡無慈悲」なものであるというものの、広い世の中にはまた彼の想像以上の「同情深き仁人」に会うことができるという⁹⁾。そしてその時こそ、彼の働きに対する歓喜の情が限りなく湧き出て、彼の「道」に邁進しようとする決心ができ、100 倍の勇気がでるという¹⁰⁾。施乾のいう「仁」とは、人々に対して他人に平等の思いやりを持って接することであるといえよう。施乾にとって、乞食は皆と同じ平等な人間であった。

更に施乾は、これまで乞食と接している台北市民、知識人や政権担当者が自分達と乞食とが本質的に平等であると認識するのではなく、自立のための支援をしないで、乞食に対し一時的な対応をしているのではないだろうかと考えた。杵淵が指摘する「刹那的個人的慈善事業」¹¹⁾ではなく、施乾は、彼の理念である「独立自営ノ精神」を涵養するために授産による自立支援を目指した。「刹那的個人的慈善事業」とは、第一章でも述べたが、清朝時代以来の台湾社会における、富者の細民に対する、年末や年始、又は一家の吉凶禍福に際しての金品の施しをいう。

そこで施乾のいう「独立自営ノ精神涵養」、つまり自立への支援がどのようなものであったかを彼の乞食撲滅の実践から分析したい。

愛愛寮の目的は、その規約第 2 条に明記されている。そこには「本寮ハ人間生活ヲ基調トスル社会生活ノ実現ヲ理想トス」と記載されている。乞食は人間としての生活ができず、社会的に平等な存在ではない。これは施乾が求める仁の思想に反する。そこで乞食を愛愛寮に收容し、社会生活ができるようにして、自立させることが愛愛寮の目的であると施乾はいう¹²⁾。しかし乞食を廃業させる以上に乞食を防止することが重要であると施乾は考える。施乾は、『乞食撲滅論』の「乞食撲滅論の乞食防止に就て」の項の中で、「乞食は防止すべくして救済すべきでない」と次のように述べる。

勿論防止とて救済の 1 種ではあるが、自由放任に乞食たらしめた後、これを救済するとは自から余程趣を異にしている。

乞食になった当初は非常に救済し易い。1 箇年以上も乞食したらすっかり乞食の妙味に酔はされ、未練が残つてなかなか廃められない。しかし更に進んで 5 年以上も乞食すれば、再び逆転して当初の心理に返り、なんとかできるなら廃めたい。それは乞食の苦しさ、詰らなさから目さめたからである。しかるにその時に至れば既に社会の事情から環境の支配から、到底廃められるものでない。それで生涯乞食を以てぶつとうさなくちやならないのだ。

即ち、乞食たらんとする者が正に乞食に陥らんとする時—それは噫無情そのままである。かく惨めになつてから始めて救済するとは—これを救済善導すべきである。⁷⁾

この「防止すべくして救済すべきでない」ということは、乞食が欲しがる金品をただ与えるような救済でなく、乞食になった当初から乞食の早期離脱策をとる必要があるという意味であるが、これこそ、施乾のいう自立への支援であるといえよう。その実践方法として、「救済善導」をすべきであるとしている。つまり乞食になった直後から、彼らを救済して早く独立自営の精神を養うよう導くべきであるという。しかし、今日の世の中では、それを怠ったため、反動的に一部の「跋扈跳梁」(悪人などが勝手気ままにふるまうこと、乞食頭がそのようにふるまった：引用者注)を見なければならぬし、見ても見知らぬふりをしなければならぬ。救済善導によって、丐頭(乞食頭)への損失はより少なくして、乞食撲滅の目的が達成できることを説得しているのである。

更に施乾は、現状の政策を次のように厳しく批判している。

世の識者が常に、不都合者が救済機関(官定の印章のある丐頭：引用者注)がある故にそれを(乞食取り締まり：引用者注)依頼し、寧ろ救済機関はそれ等の自尊心を殺すものであるといふ。(中略)若し真実にさやうな事実ありとせば、それはかくの如き無責任な言詞を弄する輩の罪である。彼等の掌中にある社会事業を彼等の玩具と心得て玩んでゐるが所以であらう。⁸⁾

これは、前述したように、丐頭間で地域獲得の争いを防止するために、台北府淡水県の地方長官が、地元の商店経営者の推薦した丐頭に官定の印章を与え、その管轄区域の丐院に取り締まりをさせていたことへの反論である。このように表では官定の印章制度を作り、それが与えられた丐頭に乞食の取り締まりをさせながら、裏では、それらの丐頭が乞食の自尊心を殺しているといった世の識者といわれている言動は、丐頭に対して無責任な言動であり、罪であると彼は世の識者である輩を批判している。

その上で、真の「乞食防止」の救済善導とは何かを次のように述べている。

わたくしは更に飢える上に病み、病む上に飢えてゐる人々に就て考察したい。それ等の悲惨な人々がこの世の中にドツサリ居る。しかもそれ等の多くは働けるものである。しかしかれ等は飢える上に病み、病む上に飢えてゐるから遂に働けなくなる。徒食している。イヤ飢えてゐるから病んでゐるから死を待つてゐる。運命を氣づかつてゐる。(中略)⁹⁾

働けるのにもかかわらず、飢える上に病み、病む上に飢えているから働けなくなるとの因果関係論で乞食は悲惨な状況から逃れる出口がない。施乾は、このような無為にして死

を待っている乞食がいることは社会的に莫大な損失であり、人道上の問題としなくても、経済上の一大問題になっていることを訴えている¹⁰⁾。つまり施乾の救済善導は、乞食に授産をし、経済的効果を実証することになろう。

更に各種社会事業の施設が完備しても、なお最下層の落伍者が存在する現状への批判を行っている。

わたくしは知つてゐる。薬は安価なものだ。…中略…（中略：引用者注）しかるにかやうな安物が何故に大勢な人々がそれをつかへないのか？学者の研究が^{しばしば}屢々世人に報告してゐる。しかるに彼等飢えてゐる上に病み、病んでゐる上に飢えてゐる人々には何んの役にも立たない。

台北病院がいくら多大な経費を費して世界的に誇るべく整備し、世界的学者を以て揃^{アツ}つても、彼等は飢える上に病み、病む上に飢えてゐる人々には全く無関心だ。

赤十字病院がいくら慈善事業であろうが、施寮患者には日に幾多とかの制限がある限り、飢える上に病み、病む上に飢えてゐる人々は相変らず病み、相変らず飢えてゐる。¹¹⁾

いくら良い薬があつても、乞食への補助がないと、それほど高くない薬も買えないこと、りっぱな研究機関への投資があつても、乞食救済の費用への分配がなく、その研究は乞食救済につながらないこと、慈善事業も予算の枠内での救済であり、その枠外にある乞食救済は実現できないと施乾は主張しているのである。更に彼は乞食の実態について述べる。

真に飢える上に病み、病む上に飢えてゐる人々は仁済院の有るのを知らない。知つても何処にあるのやら解らない。解つてもどうすれば良いのやら一向存じない。存じてもそれは人員に定員があるから……嗚！彼等飢える上に病み、病む上に飢えてゐる人々は相変らず病まなければならぬ。飢えなければならぬ。¹²⁾

施乾は、窮地に立っている乞食に対して働きかけ、彼らを積極的に收容する愛愛寮こそ仁済院であると考えていた。この仁済院の「仁」という言葉を施乾はしばしば使用している。例えば1929（昭和4）年の『愛愛寮概況』の「感謝の辞」に、「同情深き慈悲深き仁人に逢着することがあります。」¹³⁾や、またその概況の「宣言」には「仁人君子各位」とある¹⁴⁾。このように施乾が「仁」という言葉を多様することは、清朝時代の窮民救助事業を成り立たせていた社会的バックボーンの儒教理想の「国民道徳」¹⁵⁾としての仁からの思想ではないだろうか。施乾は、そのような「仁」のある気持ちを、1929（昭和4）年、総督府の社会課長からの指示で、社会事業協会嘱託職員柴山武矩が愛愛寮を訪問したときに話した。彼は、「現世社会の末端を彷徨する人々の中で、自分は乞食に或る同情を持つ」「漂浪として食を他に乞ひに出るまでの心理の過程に涙ぐましき純真性を認める」と訪問者の柴山に述べた¹⁶⁾。

次章で述べるように、施乾は、乞食の行動心理を分析した結果、乞食が「仁済院」である愛愛寮へ救いを求めることを知らなかったり、たとえ知っていても愛愛寮まで辿りつけないでいるとみている。そこで街に出て、最下層の乞食を強制的に愛愛寮へ連れて来ることを施乾はあえてしたのである。「父も母も乞食収容の枠があるとリヤカーで乞食を探しに行った」¹⁷⁾と次女施美代は語っている。このように施乾は、施設を定員一杯とし、乞食を常に施設に補充し、たとえ僅かとはいえ着実な乞食の撲滅を図った。

他方このような施乾の行為に対し、乞食自身はそのことについてどう考えていたのか。当時の乞食自身の記録は見当たらない。しかし蒋介石・経国父子の戒厳令時代に、乞食をしていた人物の自伝『乞食の子』がある。それによると乞食の「立場」をある程度推測できる。戦後、総督府は警官に彼等を厳重に取り締まらせていた。その彼は、もし警官につかまったら重度の障害をもつ両親をはじめ幼い兄弟たちの面倒が見られなくなるので、機敏に店の柱の陰に隠れたという¹⁸⁾。こうしたその日の食事にはありつけないような家族のいる乞食は、愛愛寮へ連れてこられることを大いに抵抗したと思われるが、その乞食を強制的に愛愛寮へ連れてくることは、大変困難な作業であったといえよう。具体的にどのようなして施乾は、「仁」のある自立支援をはかったのかその実態を以下に述べたい。

2. 支援する戦略は「慈善の鉄則」

施乾は、乞食が生活するための金品を他人にもらうのではなく、乞食自身が自らの力で働き、自分で生活するという自覚が持てるように彼等を支援することが重要であると考えた。それは前述した「独立自営ノ精神涵養」という彼の理念に基づくものであり、これまで行われてきた乞食救済は、人々への思いやりである仁を理想とする救済になっていないと批判した。それでは、誰にも救済されなかった最下層の「落伍者」を具体的にどのようなに救済しようというのであろうか。施乾は「慈善の鉄則」として次のように述べている。

第一、切実に救済を必要とするや否かを^{つまびやかに}「審」かにして、それに誤りなきを期すること、第二、金銭を以て救済するより生活必需品を以て与へ、(何れも生活最低限度)生活資料を与えるより自活の途を与へ、殊更に病者には医療を与ふるべきである。¹⁹⁾

施乾の言う慈善の鉄則は、個々の乞食を救済する必要があるかどうか適切に調査し、更生して自活できるような道筋を与えることであった。資本主義社会の下「社会病の産物」とされた乞食に対し、今日まで「慈善喜捨」ではなく「偽善奇捨」してきたから乞食が消滅しなかったと施乾は批判した。そして彼は乞食撲滅を人道的な使命とした上で、慈善精神からこのように乞食へ金銭を与えるだけの奇捨をやめて、「慈善の鉄則」に従うべきであるとする。

それは、乞食に「生活資料（食料や衣料：引用者注）を与えるより自活の途を与え」、また独立自営を可能にする手段を与えることであった。なぜならば、乞食は病者、不具者、老衰者のような生活無能力者に限らず、筋肉逞しい男でも勝手気ままに生活し、乞食をす

る。そのような元気な乞食は、生活必需品を乞うだけでは、もはや満足していないこと、それだけでなく、社会が偽善と奇捨により彼等に金品や生活物資を与えている結果、役人以上の高収入を得ている者もあり、動物的本能で身勝手な生活を送っていることを、施乾は社会問題として捉えたからである²⁰⁾。

そして内地では当時警察犯処罰令があつたが、台湾では乞食を取り締まる規定がなく、今のように乞食を放任していれば、恐喝、詐欺、窃盗、売淫のような破廉恥な行為の蔓延を避けられないとしている²¹⁾。このような事態を防止するために、施乾は、乞食を自由放任の状態におくのではなく、「慈善の鉄則」に基づき彼等を自立させ更生させようとしたのである²²⁾。

施乾によれば、乞食は、物質的落伍者と精神喪失者とに大別されている²³⁾。そしてその割合は、疾病 40%、精神喪失者 30%、不具（手足不具、盲等）及び老衰 30%であつた。台北市の乞食でモルヒネ中毒者 20 名（他の地方にも少数いるが、台北市特有の乞食）以外の 100 名の乞食の内訳は、精神喪失者が約 30 名、病者が約 40 名、手足不具、盲、老衰、小児等が約 30 名であつた。病者の半分は、約 1 か月の治療、残りの病者は、約 2 か月の治療で全治し、重病の一部を除きほとんどについて治療できれば労働が可能と判断しつつ、次のように述べている。

尚精神喪失者は、殆ど労働が可能であつて、指導を待つに依つて初めて手足が動くのである。其の他の不具者にしても労働半可能者が半数位あつて、譬え盲にしても老人にしてもそれ相当な仕事があるから真に働けないものとしては極めて僅かである。これ等を完全に収容、治療、救済を施した後の状態は、即ち労働可能者 50 名、半可能者 25 名、不能者 25 名と予定すれば誤まりがない。²⁴⁾

そのため、生活資料を供給してやらなければならないのは、全体の 25%であり、半可能者は半分の生活支援をし、労働可能者は生活支援しなくても完全に自活できるようになると施乾は確信した²⁵⁾。次に施乾がこの手法により乞食をどのように更生していったかをみる。まず乞食のモルヒネ中毒による禁断症状について次のように述べている。

一番ややこしいのはモヒ（モルヒネ：引用者注）中毒乞食であるが、乞食撲滅もこれが最緊要である。彼等は日に平均 2 円以上²⁶⁾も注射してゐるが、しかしモヒの実際分量は僅かで 40 銭も値しない。ですから禁断に就いては決して難事でない。わたくしが経験したことのある事実ですから証明できる。決して難なく禁断できる。先づ彼等の身体を清潔にし、注射跡の傷を治療し、少しく滋養物を与へたら、それでもはや禁断の実が半分果される。それから注射の分量を漸減し、1 箇月を以て断禁することができる。これ等も半数以上は働けるもので働けないものは極僅かである。²⁷⁾

施乾は、当時使用されていたモルヒネの乞食の身体含有量が少ないことを、経験から観察分析した上で、禁断症状の緩和のために、身体の清潔、注射跡からの感染症の予防、それに徐々に栄養物の補給を実施し、その後注射薬を使用している。後に杜聡明が、愛愛寮での実験結果を 1929（昭和 4）年 8 月にまとめ、漸禁政策の有効性について指摘し、総督府に建議書を提出した。1930（昭和 5）年には杜聡明のこうした提言に基づき公的収容施設が運営されることになる。繰り返すと、施乾は 1923（大正 12）年愛愛寮開始以来モルヒネ中毒者をどのように収容するか苦戦してきた。それについては彼の著作『乞食社会の生活』『乞食撲滅論』に述べており、彼こそモルヒネ中毒者の治療の先駆者であったといえよう²⁸⁾。その後杜聡明は、モルヒネ中毒者の施乾の実践経験を受けてその研究業績をあげた。当時の愛愛寮でのモルヒネ中毒者状況について、1929（昭和 4）年 4 月から専売局の囑託となった張紹濂は、杜聡明の指導の下に中央研究所に於いて研究を行い、1930（昭和 5）年台湾総督府台北更正院の創立まで「愛愛寮に於いて 50 例のモルヒネ中毒者の実験治療学的研究を行いました」という²⁹⁾。更に張紹濂は、続けて以下の内容を述べている。当初愛愛寮では、モルヒネ中毒者は 10 数名おり、その中に乞食が数名いた。最高度の中毒者の事例であるが、呉氏は、1929 年 2 月上旬に台湾に来て最小致死量の 25 倍のモルヒネ注射をしていたが、全財産を失い 3 月上旬に除去治療を覚悟して愛愛寮に入寮した。その後 44 日間で完全に除隠（中毒：引用者注）治療し、その他の疾患も完全に治り、呉氏は、喜んで退寮した。その後除去治療を希望するものが続々愛愛寮に入寮した。50 名の患者は呉氏以外はモルヒネの 6 倍の毒性のあるヘロイン中毒であったが、当時愛愛寮においては殆どモルヒネ中毒患者を撲滅した。治療日数は、各自の体質、健康状態、忍耐力、合併症によって違うが、最も患者に苦痛のない方法では、平均 26.5 日で除去治療ができた。同時にモルヒネ中毒患者は、局所の化膿が治癒し、栄養状態が改善し体重増加がみられた。張紹濂は、除隠治療した後更に 12 週間経過観察し、異常がないことを確認後退寮を命じた。張紹濂は治療の経験からモルヒネ中毒者が注射のお金がなくなると、もともと人格者であっても平気で乞食になったり、或いは窃盗をしたりするようになるという。更に彼は、モルヒネを除隠する身体的変化の矯正を行うことは容易であるが、精神的変化を矯正することは困難であるため、退寮後も長期に渡って家族、友人等周囲の人々が細心の注意を払って監視してもらうことが重要であると指摘する。³⁰⁾

施乾は、乞食の収容方法については、「強制的手段」を用いず、乞食が「自発的意向」を有するものより収容することが、最善の方法であるという。そして徐々に乞食を収容し、最後は、乞食全員を収容する「漸進的手段」をとるべきであるという。最後に従わない残りの少数の乞食から、入所する意思を得られないときに、強制収容することもある。その際入所の優先順位があり、モルヒネ中毒乞食は最初に収容すべきであると施乾はいう。

世間では、一時に乞食を収容すれば合理的ではないかと思われるが、施乾はそうではないという。その理由は、一時に 100 名も愛愛寮に入って来たら、経費もかかるし、乞食の数が多く、支援力の低下で多くの乞食を自活させえない。しかし、漸進的手段で乞食を収

容すれば、個々の乞食に対し、きめ細かな支援ができ、6 か月間で台北市内の乞食を全部收容できると施乾は考えた。このように施乾は、乞食自身の自発的意向を尊重した上で、支援優先順位を決定し、急がず、着実に乞食撲滅に向けてその事業を展開したのである。

また授産の問題についても施乾の経験から工夫が行なわれた³¹⁾。彼は、授産の仕事はなんといっても「家内的工業」が良く、商売は彼の経験によって不適切な職業であるという。なぜなら彼は、賭博好きの乞食が多く、商売をさせたら、一銭も残らず負けてしまうが、家内的工業は、家の中の仕事であり、十分な監督指導ができるから安全であるとの理由を挙げている。仕事の種類については、乞食自身の身体状況や知能レベルを考慮し決定すべきであり、個人に適切な配慮が必要であると施乾は考えた。收容された乞食の身体状況を考え、肉体労働は不向きとし、施乾は、台湾笠、草履（三角藺^{りん}の）、籐細工の3種が最も適当な仕事とした³²⁾。更に施乾は、個々の乞食の状態により、收容者に対し、授産のための仕事を割りふった。種類を区分しその人に合った個別的で効果的な自立支援の方法を考えた。

台湾笠は不具者（障害者）や老衰者にもできる仕事が多く、利巧な者には籐細工をさせ、その他普通の者には、草履製造が良いとし、更に筋肉逞しい男には農作物をさせ自作自給出来るようにした。また花類を植えて愛愛寮の近くの龍山寺の参観者に売り、経費の一部になるように工夫したのである³³⁾。

このように施乾は、科学的根拠に基づく慈善の鉄則による実践で「独立自営ノ精神」を涵養するという理念を実現しようとしたのである。

3. 乞食撲滅

施乾は、前述で述べているが、乞食に「独立自営ノ精神」を涵養するという理念の達成目標は乞食撲滅であった。施乾がなぜ乞食撲滅への闘志を抱いたのか。表 2 は施乾の愛愛寮関係と台湾の政治・行政・社会を年表にしたものである。

表2 愛愛寮関係年表(施乾)			
愛愛寮	年号	西暦	台湾の政治・行政・社会
施乾出生。	明治32年	1899	台湾の政治・行政・社会
			帝国日本が台湾で救貧事業を開始。
			台湾總督府は「台湾窮民救助規則」、「台湾罹災救助基金規則」を公布し、
			「行旅病人及び行旅死亡人取扱法」を施行。台北仁濟院設立。
			存仁院設立(民間、1923年に財団法人になる)。
			「台湾慈善院規則」。
			救護事業(貧困者生活状態調査、細民調査(總督府、州、市))。
施乾總督府商工課に就職(20歳)。	明治37年	1904	
細民調査に従事。	大正7年	1918	
	大正8年	1919	
	大正9年	1920	方面委員を台北、新竹、台南、高雄の各州に設置。
	大正10年	1921	景山公設立(民間)。
	大正12年	1923	
施乾台北愛愛寮事業開始(24歳)。			
愛愛寮で入所患者の実験治療が行われていた。			
出版『乞丐の社会生活』、『乞食撲滅論』。	大正14年	1925	
『乞食とは何ぞや』。愛愛寮経営困難。			
乞食撲滅協会設立。			
昭和天皇即位大典に参加。宮内庁より「御下賜金」。	大正15年	1926	
出版『愛愛寮概況』。社会に「愛愛寮の声明書」を公示。	昭和3年	1928	
3千円特別補助御下賜金。	昭和4年	1929	台南愛護会設立。
愛愛寮を個人事業から財団法人に変更。妻謝惜が急逝。	昭和5年	1930	
京都在住の日本女子清水照子と結婚。	昭和6年	1933	
南飛行場建設。練町区長及び青年団長。	昭和8年	1934	
施乾脳溢血で死亡(享年46歳)。施照子が院長(34歳)となる。	昭和9年	1934	
	昭和18年	1943	
	昭和19年	1944	

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945年～1951年)より作成

施乾は、日本が台湾の植民地で救貧事業を開始した 1899（明治 32）年に出生し、その後

1919（大正 8）年に 20 歳で総督府に就職した。総督府ではその前年から救護事業として貧困者生活実態調査を始め、彼は就職した翌年にその調査に加わり、乞食社会の実態にショックを受けたのである³⁴⁾。

総督府は、この調査に基づき、地域住民の窮民救済のために民間の方面委員制度の設置（1923 年）や救護機関である慈恵院を財団法人（1923 年）にし、救護救助事業の充実を図ろうとした。施乾も総督府の窮民救助事業と並んで愛愛寮を設立し救護救助事業を開始した。彼は、事業開始 3 年後、乞食を撲滅させる目的のため、1926（大正 15）年乞食撲滅協会を設立した。総督府が行政の責任として乞食撲滅の方針をたて、公的な対処が望まれるところであるが、それがなされず、自称社会批評者と称する施乾³⁵⁾が指導者として実践の先頭に立ったのである。すなわち施乾は乞食撲滅協会を設立し、自ら会長に就任したのである。その宣言の中で次のように述べている。

然らば乞食は何故に発生したかといふと、ソレは勿論生活問題がソノ中心原因であると言へませう。がしかし、なんといつても国民保健に対する不十分な施設にソノ根本原因を発見せねばならないと思ひます。

顧みるに全島は勿論、台湾の首都と称せられてゐる大台北市に於ける、市民保健の施設がどういふ状態にありませう！？誠に心細いものではありませんか？

蓋し人間社会で病気から被る損失ほど莫大なものがありませぬ。ソレを最も露骨に、最も明白に証明しているのはこれ実に乞食であります。

併しながら国民保健の施設がかように不十分の為め、貧乏人は厭ながら命の欲しさにどうしても乞食をせねばならなくなります。それを人々が一特に慈善家が—可憐だと思つてもお金ならいくらか喜捨するが、彼らに医薬を与へ、彼らに真実の生命を吹込むということに至つては、全く等閑に附せられてゐるやうであります。³⁶⁾

ここで国民保健とは、市民の健康を守るためのシステムと思われるが、それが不十分なために、貧乏人は生命の危険を感じて乞食をしているのであると施乾はいう。そしてその乞食に「慈善家」が金品を与えるなどその場かぎりの対応をしてきたために、乞食がなくなるとしている。更に現行の救貧制度を非合理的な制度として厳しく批判している。

勿論それも往昔であつたのなら救貧の一方法として賞揚せられたであらうが、しかし進歩し、複雑化した一凡ての社会組織社会制度が変遷して来た現代社会では一特に都会に於いては、既にかやうな姑息的にして非文明的、非人道的、非合理的なるその場逃れの貴族的救貧制度では到底時勢に適應する筈もなく、加ふるにかやうな乞食に対する慈善は、既に変態道德に属するものとして瀕斥せねばならなくなつて来ました

³⁷⁾。

1926（大正 15）年の救貧制度とは、富者がその場を逃れるために乞食に金品を与えるものであった。それを施乾は、「貴族的救貧制度」として厳しく批判している。

更にその年乞食撲滅協会設立の要旨に、乞丐（乞食）の存在を認めないとして次のように述べている。

吾々は寧ろ乞食を「あるべからざるもの」と確信し、社会に乞食の「存在すべきことを認めませぬ」ものであります。これを政治上又は法律上の見地から見ても同様であります。特に社会政策は犯罪及び乞食の撲滅を極致と致して居りますのにも拘らず、今日尚乞食の横行闊歩を人々が正視してゐるとは、此れ実に文明国の一大奇怪事であり、恥辱でなくて何でありませう。…中略…（中略：引用者注）吾々は乞食撲滅切実に断行するに依つて、社会問題の最後の段階が解決され、そしてそれによつて治安維持が一層確保され、風紀衛生が一層改善されて参ります。その結果乞食が善くされ、吾々も善くされ得ると信じてゐます。言換ればより健全な国家、より真実な社会を造り出すものであります。是れが即ち人道であり、人類の与へられた一大使命であると確信しています。³⁸⁾

このように施乾には、乞食の撲滅がなされると社会が良くなるという信念があった。そして当時の文明社会において、そうすることが人道であり、人間としての使命であると彼は考えた。彼は清朝時代の窮民救助事業の理想の影響を強く受けていると思われる。既に述べたように清朝時代の窮民救助事業の理想は、「乞丐が善くされ、吾々も善くされ得る」という、儒教の仁と義という理念であり、更には前述の日本の思想家の影響を彼は受けた。そして彼は、清朝時代の理想の考え方を踏襲し、文明国としての社会のあり方を考えた。施乾にとってみれば文明国では乞食がいてはいけなかった。したがって彼は、乞食の撲滅をしなければならなかった。

ところで儒教的仁政・仁愛思想について、吉田久一が『日本の社会福祉思想』³⁹⁾で次のように説明している。明治維新（1868 年）により、江戸時代における仁政主体である封建領主の慈善が拡大し、それが天皇制に継承された。イギリスでは、1834（天保 5）年、功利主義や自由放任思想による改正救貧法が成立していた。この自由放任思想は、仁政・仁愛思想と異質の慈善・救済思想であった。しかし日本では、規則は本質的に仁政思想であったが、救護法（1929 年）の成立後は、啓蒙思想家による仁政批判、儒教的仁愛を重視するもの、伝統思想からの変容を求める思想家が出現した。このように近世的仁政・仁愛思想と、近代的慈善・救済思想の対比がみられた。近代では、私的な「慈善」と公的な「救済制度」の分離が特徴で相補関係にあった⁴⁰⁾。ヨーロッパ啓蒙思想は慈善を変革し、人間の理性である「博愛」に転化させ、キリスト教にあっては、純粋なキリスト教的愛に結合した。

台湾でも慈善の言葉は瀕に使用されたが、施乾が指摘するようにその言葉は、個人倫理

としても国策としても偽善になることがあった。それでも施乾は、乞食の救済において彼自身の慈善を追及する一方で総督府に公的な救済制度を求めた実践家であった。

第一章で述べたように台湾で日本統治が開始された直後、施乾は台湾に生まれ、生育したが、彼は清朝時代からの伝統を吸収しつつ、より文明国にふさわしい窮民救助事業を実現しようとしたのである。

これに対し、未だ内地では、まだ封建的な救貧法である恤救政策をとっていた。台湾では、内地の「恤救規則」に対応する公費救助の政策として「台湾窮民救助規則」を公布した。

これは、台湾を日本の統治下に置き、その住民は「帝国臣民」として国家の救助の対象にするということを論理的に示す必要があり、総督府は内地より低い水準の援助を実施しようとした⁴¹⁾。しかし、台湾には、清朝時代からの救助実績があり、これを縮小することができなかった。たとえば内地の「恤救規則」では高齢者の年齢は70歳以上であるが、「台湾窮民救助規則」のそれは、60歳以上とし、結局内地より高い水準の救助内容を保持することになった⁴²⁾。更に総督府によって急速に整備された社会事業行政には、内地人と本省人との差別性があり、本省人を政策対象とはしたが、政策主体としなかったため、自立的な台湾社会の社会事業の展開を妨げることもなった⁴³⁾。

こうした状況の中で、施乾は自立的な愛愛寮を設立しようとした。しかし彼の事業はじり貧の状況にあった。そこで彼は、広く世間に愛愛寮の事業の周知をはかった。彼は、1925（大正14）年に『乞食撲滅論』を刊行し、乞食撲滅の実践のための経費の援助を期待した。1923（大正12）年に施乾が24歳の若さで愛愛寮事業を開始して2年が経過した時点で、「今やわたくしは正に倒れんとしてゐる。瀕死のドン底に陥つてゐる。…中略…（中略：引用者注）人生は享樂そのものでない。懣^{おう}脳^{のう}苦^く楚^そ（悩みもだえる苦痛：引用者注）の化身だ。で、わたくしはもつとなやまなくちゃならない。わたくしは飽くまでこうした熱情を以て勇往邁進したい。」⁴⁴⁾とし、真実の自愛がつねに他愛になり、また真実の他愛がつねに自愛になるという西田天香の「自他一体」の信念で、愛愛寮を経営した。

西田天香は前述したように、例えば便所掃除で無心に他者に奉仕し、托鉢修行を行い、一燈園を始めた。彼は、トルストイの「生きようとするには死ね」という考えに感動し、「心、身、生活」を貫いてひとかたまりにし、それを捨てたところから生かされているという理念のもとに一燈園生活を始めた。当時台湾には、「行詰まり解消の為」一燈園生活が必要であると西田天香はいう⁴⁵⁾。そして彼は、施乾の事業が「一燈園生活から産まれた」ことに感激した⁴⁶⁾。ちなみに施乾は、西田天香の教えを守り、彼の考えに同感し、「わたくしはもつとなやまなくちゃならない」と自我を捨て無心になることであると自戒しながら愛愛寮を経営した。愛愛寮経営が経済的に苦境に陥っていたことについては、第四章で述べる。

施乾には、「正当な主張を正当な方法で要求するのが利己であり、利他でもあり、そして善事でもあり、道徳でもある」⁴⁷⁾とする信念があった。すなわち乞食撲滅が人間として正当な主張であり、それを実施するための資金確保を本の出版という正当な方法で要求することであった。彼のこのような信念がどこで培われたのかは、様々な説がある。宮本義信は、

小学校時代教育におけるキリスト教精神によるものとしている。施乾が淡水公学校在学中（1906～1912 年）の校長はキリスト教者である小竹徳吉であった（1907～1910 年）。しかし、施乾の著作物には小竹校長についての記載はなく、施乾はキリスト教信者ではなかった⁴⁸⁾。

施乾は、自分の信念を謙譲の道徳であると信じたくないという。彼の信念は、この理念に基づく実践を隣人や台湾の人だけでなく、全人類を視野に入れた、普遍的なものにするための概念であるという⁴⁹⁾。つまり、台湾人だけでなく、宇宙全体の領域ということになり、施乾の視野は、その頃の植民地政策に反対し、台湾人のために行った民族運動よりも広く、その思考は高い次元に立っていた。

施乾の「正当な主張」は、貧民が、その中でも乞食がすべて温かく救助されることであり、これは人道であり、人類へ与えられた大使命であるとしている。そのような気持ちになったことについては、「正しく目覚めたところの個人意識と社会意識」とに依ってであり、彼は個人を、社会によく活かしていかなければならないという。施乾は、個人としての自己反省と社会人としての社会批判者の一人として、資本主義経済社会下での社会病として発生した乞食を撲滅したいと考えたと思われる。施乾が 20 歳の若さで総督府に就職し、翌年の細民調査で乞食社会を見た時、彼は社会の矛盾を感じ、更に同じ人間でありながら悲惨な生活をしている乞食をなんとか救えないかと奮いたった。このような気持ちは、キリスト教精神がなくても起こりうるが、宮本義信のいうように施乾が今まで受けた教育、すなわちキリスト教的教育も要因の一つではあろう。

しかしそれより重大な思想的要因は、すでに述べたように日本統治前の清朝時代からの儒教的仁愛思想ではないか。この思想は、統一国家の救済思想とボランティアによる慈善思想を統合していた。しかし、近代化により、慈善や救済は、主体的な自己改革より、「外形的」近代化による政府の建て前論に引きずられていった。特に日本統治下の台湾では、総督府の政策は台湾人にとって内地人優遇の政策であり、自立した社会生活ができない台湾人の乞食が増えた。施乾は、乞食に「独立自営ノ精神を涵養」するために、自らの自己改革による慈善を実践した。すなわち彼は、乞食撲滅のために乞食を愛愛寮に収容し、彼自身の反省を繰り返しながらその経営の苦境を乗り切ろうとした。しかしかつての統一国家の救済思想は台湾社会になく、彼の力だけではたちうちできなかった。更に西田天香の言う内面的修行も試みた。彼は、西田天香と同じように無心に乞食に奉仕しただけでなく、声明書で愛愛寮経営の財源確保のため台北市民の有力者に協力を求めたり、仁愛思想により、隣人の助け合いができていた日本統治前に機能していた保甲制度で愛愛寮を経営していくことも企画した。更に総督府主催の第 1 回全島社会事業大会（1928 年 10 月）の記念行事の一つとして、大会参加者の満場一致で社会事業協会が創設された。この大会の参加者は、地方長官の推薦による各地の代表者であり、公私を問わず、宗教家、市民、教育家、実業家等職業が異なるものであった。創設された社会事業協会は、当時の台湾の社会的要求により政府が設立し、社会事業協会員も多くは方面委員で構成された。その大会に参加

した施乾は新設された社会事業協会と愛愛寮等の社会事業団体の関係について質問をしている。社会事業協会理事になった杵淵義房は、「連絡統一を計るのです」と回答した。施乾は、日本統治前に機能していた仁愛思想による保甲制度の活用により愛愛寮の経営を考えていたため、方面委員が中心となって構成されている社会事業協会と連携協力して愛愛寮を運営するものと考えなかったのである⁵⁰⁾。

施乾の理念の達成目標は、万人の幸せを願って、科学的根拠に基づき乞食が撲滅できるという結果を出すことであった。

注

- 1) 施乾『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』1929年6月1日現在、1929年、9頁
- 2) 同上、30頁
- 3) 同上、2～3頁
- 4) 同上、3頁
- 5) 杵淵義房『台湾社会事業史(上)』(1940年刊行)(永岡『植民地社会事業関係資料集 台湾編9』近現代資料刊行会、2000年、所収)111頁
- 6) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』37頁

施乾の自立支援の考えはオレム(Orem, D.E.)の支援体制である看護システムに共通性が見出せるといえよう。オレムは、看護理論家の一人であり、1971年にオレム理論を発表した。オレムは、生命と健康を維持するためのセルフケア行動に対する個人の要求に焦点をおく。英米においてもアセスメントの考えが出たのは1950(昭和25)年以降のことであり、施乾の考えがいかに先駆的な社会政策の考えをしていたかがわかる。彼は、一人一人の乞食の状況を把握し、それら乞食の各人には何が不足しているか明らかにした上で、それに対し個々への救済支援を考えるという、合理的な支援方法を実施した。

- 7) 施乾『乞食撲滅論=社会問題の根本問題=』1925年、33～34頁
- 8) 同上、35～36頁
- 9) 同上、40頁
- 10) 同上、43頁
- 11) 同上、40～41頁
- 12) 同上、42頁
- 13) 前掲「感謝の辞」『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』2～3頁
- 14) 前掲「宣言」『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』4～5頁
- 15) 前掲『台湾社会事業史(上)』63頁
- 16) 柴山武矩「社会的私設歴訪記(台北市)」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第6号、1929年、所収)P54

柴山武矩は、台湾社会事業協会の嘱託職員であり、『社会事業の友』の編集者であった。

楊医師も施乾と一緒に案内をした。

17) 2004 年 9 月 21 日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。

18) 頼東進著・納村公子訳『乞食の子』小学館、2001 年、84～85 頁

19) 前掲『乞食撲滅論』12～13 頁

20) 同上、14 頁

21) 同上、4～15 頁

施乾は、台湾では、違警例による即決処分の規定があるも、未だかつて該当をみた例しがないと述べている。

22) 施乾「初めて助成金を載（戴：引用者注）いて」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 2 号、1928 年、所収）106 頁

「愛愛寮の如きは平面的慈善事業にあらざるは勿論、社会衛生、風紀、道德、犯罪上、及び社会公安の見地より考えると、松山の盛徳学院よりも台東の浮浪者収容所の部類に属することを正当とする」と述べている。

23) 同上

「不備不完全な今日の社会事業施設を補足し、而してその最も恐るべき最下層の落伍者をその瀬戸際まで押し詰められた問題を解決する」との記述がある。愛愛寮は、1928 年 11 月 10 日恩賜財団明治大正両救済会より助成金 200 円を受ける。

24) 同上、P24 頁

統計の年月日は不明。『乞食撲滅論』出版が 1925 年であり、その頃に実施されたとされる。

25) 問樵「目録 施乾乃其事業」（施乾・李天贈訳『孤苦人群録』台北県立文化中心、1994 年、所収）

26) 吉田久一『日本の貧困』勁草書房、1995 年、139 頁

1921（大正 10）年 11 月に行われた内務省社会局「細民生計状態調査」において標準細民とは、5 円以下の家賃に居住するものや一世帯の収入額 50 円以内のもの等をいう。当時の平均は一世帯の収入額 80 円である。細民にとって 1 日に 2 円以上のモルヒネ注射の負担は大きい。

27) 前掲『乞食撲滅論』25 頁

28) 金井一薫『ナイチンゲール看護論・入門』（現代社白鳳選書 14）現代社、2006 年、224 頁

施乾は、最初の看護理論家であるナイチンゲールの科学的な看護実践をしたといえよう。ナイチンゲールは、1854 年のクリミア戦争地で傷病兵の看護にあたり、巨大な兵舎病院における死亡率を、42.7%から半年後に 2.2%までに引き下げた。その時彼女は、コレラの蔓延によって運びこまれた兵士のために生活環境の改善に全力をあげ、死亡率の低下という成果を出した。彼女は、病院中を徹底的に清潔にし、汚物の除去、十分な換気を行い、兵士には、温かい飲み物とベッドを用意し、身体の清潔等の環境を

つくり、二次感染を防止したことで兵士の生命を救ったのである。ナイチンゲールは、現在も看護教育の原点として取り上げられ、環境の重視により患者の生命力（基礎代謝エネルギー）をできるだけ少なくして、患者自身の自然の回復過程を促すという彼女の理論は現在も生きている。まさに、施乾は、モルヒネ中毒者にナイチンゲールと同様な看護治療を実施し、その成果があったことは容易に推論できる。

このような段階に基づく合理的対処ができたため、重症なモルヒネ中毒者の治療回復が可能になり、次々と重症な乞食の収容を可能にしていっていった。

- 29) 張紹濂「愛々寮に於けるモルヒネ中毒者の治療撲滅」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第15号、1929年、所収）84頁
- 30) 同上、83～86頁
- 31) 前掲『乞食撲滅論』27～28頁
- 32) 同上、28頁 藺とは、いぐさのことである。
- 33) 同上
- 34) 前掲「目録 施乾乃其事業」
- 35) 愛愛寮編「宣言」『乞丐撲滅協会 宣言、要旨、規約』大正15年11月、2頁
- 36) 同上、1～2頁
- 37) 同上、3頁
- 38) 同上、「要旨」『乞丐撲滅協会 宣言、要旨、規約』5～6頁
- 39) 同上
- 40) 吉田久一『日本の社会福祉思想』勁草書房、89頁
- 41) 大友昌子「日本統治下台湾における社会事業政策の展開」（永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001年、所収）46頁
- 42) 同上
- 43) 同上
- 44) 前掲「おことわり」『乞食撲滅論』1頁
- 45) 西田天香『光誌』163号、1935年、5頁
- 46) 同上 9頁
- 47) 前掲「おことわり」2頁
- 48) 宮本義信「『台北市私立愛愛院』の思想と実践」（日本キリスト教社会福祉学会編『キリスト教社会福祉学研究』38号、2005年、所収）43頁
- 49) 前掲「おことわり」2頁
- 50) 台湾社会事業協会編「第1回全島社会事業大会」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第2号、1928年、所収）99頁

第三章 乞食の分析と救済

施乾は、なぜ貧民ではなく乞食を問題にしたのか。施乾は、「乞食の問題と貧民の問題とは、自から趣を異にし」とし、貧民とは、漠然とした広い意味で世界的な問題であるが、乞食は、局限した狭い意味で地方的な問題であるという¹⁾。そこで、「若し貧民の問題を解決するにあらざれば、乞食問題は到底解決し能はざるもののように考えるものがあるかも知ら^マぬが、それは誤まりも甚だしきものと思う」²⁾と施乾は、乞食問題と貧民の問題を区別している。その理由を彼は、「乞食の大多数は窮民の内より選択せられた処の最も悲惨な瀕死的のものであるが故に、国家社会が安寧秩序を維持する上に於て、当然救済を要すべきものである」³⁾と述べている。だから施乾は乞食救済に全力を出した。その途上で彼は、『乞食とは何ぞや』、『乞食社会の生活』、『乞食撲滅論』の三つの書を日本語で著した⁴⁾。彼はまた台北市民に声明書を出して、乞食救済のための寄付金の提供を依頼している。彼の著作から、その乞食救済の実態を明らかにしたい。

1. 乞食とは何か。

施乾は、『乞食社会の生活』の目次の次に「乞食の問題」と題する一文を掲げ、まず乞食とは何かを述べている。乞食とは、「身中無一物の無産者が、有産者から食を乞う者」と知られているが、「元来、世人は『乞食』と言えば、誰ひとりとして相手にしてくれる者なく、人間はづれの者として、賤侮輕蔑（賤しく侮^{あなど}り輕べつ：引用者注）する事を茶飯事のやうに心得てゐるのが多い。その境遇の悲惨な事は、実に言語に絶へざるものがある」という⁵⁾。特にモルヒネ中毒の乞食は、「強盜以上に恐ろしいもので、アノ腐乱した両脚、（、：引用者加筆）アノ紛々たる臭気、アノ傲慢な態度と云ったら、こちらが却って降伏する」⁶⁾と感情を述べる。つまりお願いだから近寄らないでと願い、「彼らの強請が^{ねだる}尽^{ことごと}くに従うべく余儀なくされている」（乞食がものをもらうまで引き下がらない：引用者注）⁷⁾という状況である。世界各国到るところに乞食はいるが、文明国であるほど乞食が多く、彼らは「紳士のような贅沢三昧な生活」⁸⁾をしている者も多々いる。乞食が社会に及ぼす悪影響と、その膨大な社会的損失を考えると無視することができない。しかし、今台湾において乞食を收容する施設はなく、調査研究もされていない。そこで『乞食社会の生活』で乞食の現状、心理状態、生活状態を明らかにし、乞食問題の対処を考えようというのである。

河上肇は貧乏人を3通りに分け、第一の意味の貧乏人は金持ちに対しての貧乏人、第二の貧乏人は被救恤^{じきゅう}者であり、第三の貧乏人は、経済上特定の意味を有する貧乏人とする。河上肇は、第二の貧乏人は西洋諸国で古くから問題になっているが、「私が問題とするところではない」としているが、彼は、第2の貧乏人で公的援助の必要なものとして、1891年イングランド（ウェールズを含む）では、約18名につき1名（約5.6%）、65歳以上の老人に対しては約3名に1名（約33.3%）であったとして問題になっていることを認めている。そして河上は、西洋諸国にたくさんいる第三の貧乏人を問題にした。その第三の貧乏人は、貧民の調査などをする場合に、肉体の維持のための必要な物を持たない者を意味すると河上はいう⁹⁾。その点から施乾は、河上のいう第三の貧乏人層の中で最も低く、悲惨な

人々を乞食としている。

賀川豊彦は、「一個の人間として辛うじてその身体を保持して行けるものを『基本的貧民』」とした上で、貧民を2種類に分類した。第1種の貧民は「経済的貧民」であり、第2種の貧民は「社会的貧民」とした。そして賀川豊彦の研究対象は「社会的貧民」であった。

「社会的都市貧民には、太陽も、自然も、草も木もなく、人為的不安に満たされて云えざる苦痛に沈んで居る」と賀川豊彦は言い、経済的貧民より惨めな社会的貧民を彼は研究した。賀川豊彦の言う貧民も貧民窟に住んでいる貧民であり、施乾の言う「人間はづれの者」の乞食とは違う。

このように施乾は、河上肇や賀川豊彦が取り上げた貧民救済のうち、その中の一部である最も悲惨な瀕死的な「乞食救済を根本」にしなければ、「社会事業の進展、発達」は嘘であり、真精神を没脚したもの¹⁰⁾ であるとした。そこで施乾は、河上肇や賀川豊彦の貧民研究対象を限定し、台湾において未だ調査されていない¹¹⁾ 乞食について研究し、かつその救済を実践したのである。

2. 乞食の状態

施乾の「乞食の分布状況」¹²⁾ によると、台湾においては、台北市に乞食が最も多く、常時100名から120名集まっていた。10名以上乞食が集まっているところは、市街地では基隆、新竹、台中、豊原、鹿港、嘉義、台南、高雄であった。それ以外の都市では概ね、1名から2名程度であり、乞食のいない都市もあった。日本統治下の台湾では、台北市に乞食が集中していたのである。1924(大正13)年現在で人口20万の台北市での乞食数は、日本に比べて多いとはいえないとする¹³⁾。当時台湾の総人口は380万で、乞食は1,000名(0.02%)、これに対して日本は、総人口が8,000万で乞食が6万名(0.075%)と推定され、出現率において、日本の方が台湾より約3倍以上多かった。台湾に乞食が少ない理由として、地理的に孤島であるため、他の国から乞食が入りにくく、死亡により減少する。また台湾は、自然に恵まれており、台湾人は良く働く民族であるから、もともと乞食になる者が少ないと施乾は言う¹⁴⁾。

乞食は流浪して一定の地に長く留まらず、「天下を遊ぶ」ものが多い。夏季の南部は暑く、彼らは北部へ移動し、冬季は暖かい南部へ戻る現象がある。台湾では祭典が多く、祭りは「乞食には持って来いの好物」であり、特に台北の大稻埕と万華には多数集まってくる。1924(大正13)年11月の大稻埕には、地方からの乞食が祭りのないときより100名増えた。祭典により、乞食は「より以上豊かな生活が保たれる訳」であるとしている。

『乞食社会の生活』によれば、若き官吏であった施乾は乞食部落に入ったばかりの1921(大正10)年に、一度だけ乞食の統計をとっている。その後、施乾は、「時を経つに従って彼等の心理、生活を理解してくると同時に、それが嫌になってきた」という。また「彼等の実際を未だ知らない時分の統計に大なる誤謬」が発見され、「彼等に向つて勝手なことを聞くのが、罪惡のやうに感ずる」ので最近はやがて統計をとらないし、その暇もないと施乾は述べている¹⁵⁾。

施乾が一度だけとった統計は以下のとおりである。その乞食 100 名について便宜上とった 1921（大正 10）年の統計である¹⁶⁾。

施乾の調査対象数 100 名で乞食の年齢は、「5 歳以下 4、10 歳同^{ママ}3、20 歳同^{ママ}15、30 歳同^{ママ}24、40 歳同^{ママ}18、50 歳同^{ママ}20、60 歳同^{ママ}13、70 歳同^{ママ}2、70 歳以上 1」¹⁷⁾ で 30 歳以下 24 名と一番多く、70 歳以上は一人と少ない。乞食の期間は、「1 年未満 9、1 年以上 26、3 年同^{ママ}19、5 年同^{ママ}25、10 年同^{ママ}12、20 年同^{ママ}7、30 年同^{ママ}2」¹⁸⁾ で 5 年以上が 46 名となり約半数を占め、乞食の期間が長い。乞食になる前の職業は、「労役 40、農業 11、不良少年 4、無職 4、職人 3、鉱夫 2、船夫 2、売淫 2、芸人 1、画工 1、強盗 1」¹⁹⁾ で様々な職業であったが、その中でも労役や農業をしていた者が半数を占め多い。また乞食の親族は、「貴親族（頼れる親族がいる）を有する者 61、卑親族（親族はいるが頼れない）を有する者 28、全く無きもの 8、不明 3」²⁰⁾ であり、戸籍については、「有 63、無 29、不明 8」²¹⁾ であった。乞食は流浪して、一度家を出た後、二度と帰らないものが多く、行方不明になり、数年後に除籍された者が多い。

一方東京日本橋署が 1910（明治 43）年 8 月 12 日から 16 日までの 5 日間に検束した乞食 220 名（男性 156 名、女性 64 名）の統計調査²²⁾によると、乞食の年齢は、70 歳以上は 23 名で全数の約 10%を占め、台湾（施乾の調査）の 1 名（1%）より高齢である。乞食の期間は、老年よりのもの 53 名、中年よりのもの 51 名、幼年よりのもの 21 名、臨時 1 名とあり、老年からの乞食が約 24%（53 人）を占めている。乞食になる前の職業は、農業が 44 名（20%）、無職が 53 名であり、台湾の農業 11 名（11%）より農業従事者の割合が多い。親族は、尊親族ある者 29 名、卑親族ある者 13 名、全く無きもの 84 名、不詳 94 名であり、台湾の貴親族あるもの 61 名（61%）に比べて尊親族ある者が 29 名（13%）と少ない。施乾と東京日本橋署の調査から、東京の方が高齢で、親族がいらないために乞食をしている割合が多いといえる。

次に台湾の乞食社会の制度はどうか。伝統的な親分「乞食頭」がいて、その権力は次第に弱くなってきたが、施乾が統計をとる 2、30 年前は相当な権力があつたという。この乞食頭は乞食ではなく、相当の勢力と資産があり、1879 年以降に官から証書をもらっていた。乞食頭は、「乞食の中から相当頭脳が秀で、手腕の有るもの」から選抜され、諸種の乞食社会の事業をまかせたという。この乞食を「二頭」といい、更に補佐役の「三頭」を置くこともあつた。乞食社会には種々の事業があり、その一つに、一般社会の冠婚葬祭時に、二頭が乞食頭の令を受け、乞食の群を引率して現場に至り、当然、因習として寄付や食料を要求した。二つめに、旧暦の毎月 1、2、15、16 の 4 日を施乾は「乞食デー」²³⁾ というが、民家特に商店に「乞食が総動員」を行う日で、その日乞食は、公然と物貰いができる権利があつた。三つめに乞食は、自らの社会に「李府仙祖」（八仙人の一人で李托拐^{りたくかい}）という祭神を有し、その祭典を実施した²⁴⁾。

乞食の宗教について、施乾は、「真剣味」があり、「深刻味」があると言う。旧暦の 4 月 11 日は李府仙祖の誕生日にあたるが、愛愛寮のある万華ではその祭日ははさんだ 3 日間、平安を祈願する町からの参拝客が多く、3,000 人を下らなかったようだ。祭礼の 10、11 日

は、人形芝居を行い、12 日は乞食の得意な芸、乞食歌を歌い、町の歌手も加わって、乞食は「意気揚々」としていたという。施乾自身は、幼年の頃故郷の乞食寮へ、この祭り芝居を幾年も見に行ったことを記憶していたようだ。この祭りで狭い愛愛寮が毎日盛況であり、施乾は、乞食状態の一端を世間の人々に見せたという。そこで人々は、この乞食社会の状態を一般社会と異なった特殊な社会であると感じ、面白がって覗いて帰った。また参拝客は、平安のために種々の祈りをし、特に自分達の乳幼児を乞食の義子にして、乞食の食べ物を「仙祖のもの」として購入して帰ったことを、施乾は、「滑稽至極」なことであったという²⁵⁾。乞食は、「仙祖の飯」（即ち乞食の途）に依って幸に死路を免れ、生命が保たれ、重病に陥り絶望の淵に立たされているものが、仙祖の飯に依って乞食生活に^{よみがえ}蘇ったと信じている。そのことを施乾は、「アー何たる皮肉ぞ！」と 20 世紀文明にこのような現象があることを感嘆している。そして施乾は、「仙祖の飯が神秘的である」といい、乞食の説を信じ、共鳴したいという。その理由は、乞食の宗教に、何等根拠がなくとも、凡てに現実的な乞食が、宗教を産み、また彼らが幸せであることを挙げた²⁶⁾。

更に、施乾は、乞食の宗教について「徹底的人類愛の発露」から、このような仙祖崇拜を創造したのではないかという。その乞食の宗教に比べて、有識者が「共存共栄」「相互扶助」の原理を解き、基督教では人類愛、佛教では慈悲を布教しても、社会は浄化されないし、また乞食は非人であるが、その非人こそ、真の宗教を発見し体得していると、施乾は言う。²⁷⁾

1925（大正 14）年頃すでに存在はしていなかった乞食頭の制度が、一部は昔の伝統と因習として残され、施乾は、幼少の頃見た乞食寮の祭り芝居が愛愛寮でも受け継がれて行われていることや、根拠のない仙祖崇拜している乞食の宗教を、他の宗教より乞食を幸せにしていると考えたのである。以上のように施乾は、乞食の状態を観察し、乞食の方が世間の人々より、宗教心があり、人生観を有していると述べている。

しかし河上肇は、第一章で施乾によって引用された五条河原の乞食の話から、「大燈国師のような偉い人ならばこそ、乞食のまねをしてもよいけれども」とした上で、孟子の「恒産なくんば因って恒心なしで」という言葉を持ち出し、凡夫であれば、「心も魂も墮落」するという²⁸⁾。また、河上肇は、もしわれわれ凡夫がへたに悟って、しいて大燈国師のまねをし、乞食になったら「国はたちまちに滅びてしまうであろう」と考える²⁹⁾。河上肇によれば乞食は、自分の「心身の健全なる発達を維持するに必要な物質」を自ら得ようとしないので国家の利益にならないといい、経済的な視点から一般国民より劣った存在としている³⁰⁾。

また賀川豊彦は、乞食を大別して「宗教的乞食」、「経済的乞食」、「先天的乞食」の 3 種とする。そのうち「先天的乞食」には、「遺伝的乞食」と「精神的に又生理的に乞食になる他生存なし得ない人々」とがいる。実際に「宗教的乞食」や「経済的乞食」に分類されていてもその中には、「先天的乞食」が多く占めていると賀川豊彦は言う³¹⁾。更に賀川豊彦は、「既に乞食が遺伝的悪血性のものだとすればその心理が通常心理と違って居るは云

うまでもない」とし、乞食は「人形であり」、「寄生虫的」ものであるとする。そして賀川豊彦は、乞食を「一種の精神病」だと考える³²⁾。賀川豊彦は、乞食を心理的な病人とし、河上肇と同じように乞食を見下げた視点で捉えており、施乾のように乞食を自らと同等としてみていないことが特筆される。

3. 乞食の原因

先にも述べたように賀川豊彦は、『貧民心理の研究』の中で、東京日本橋署の乞食調査について分析を加え、乞食について詳細に論じていた。これに対し施乾は、その賀川豊彦の研究を踏襲し、彼自身が台湾で調査した詳細なデータをもとに実践活動をした。

施乾は、今日の社会で、貧民発生の原因についてはかなり明らかにされているが、人が乞食となる原因については、殆ど「何等便りがない」という³³⁾。内地においてもこの方面の研究、調査について「乏しいこと勿論である」が、台湾に於いては「全く零である」と言い、良き参考書を望んだが見つからなかったと施乾は述べている³⁴⁾。しかし、施乾が自らの著作物の中に賀川豊彦の引用したその部分をみると、特に賀川豊彦の『貧民心理の研究』は彼にとって最も良き参考書ではなかったか。

まず施乾は、台湾の実情を書くことにした。乞食となる原因は貧困によることが多いが、それだけでは乞食にならないとする。その貧困が、「窮じた上に窮じて」又は「尚も病魔の襲はる身」となったものが、乞食になると施乾はいう。そしてそれが乞食の半数以上を占めているとする³⁵⁾。「賀川豊彦先生の研究によると、貧民が年に平均3日の病気で、トントントン調子を以てドン底に沈んでゆくのださうな」として、施乾も「私も病魔程、貧民を脅かすものがないと思っている」とそれに同意している。施乾は、その日暮しで困っている細民が一度病気に襲われたら、それが「人間として最後」であろうと考えた³⁶⁾。この研究で賀川は、『乞食3日したら止められぬ』と昔からよく云うが、止めて居るものも沢山ある」として、彼の住んでいる貧民窟に元乞食だった高利貸が少なくとも5軒あるとしている³⁷⁾。このように賀川は、「乞食3日したら止められぬ」のではなく、止められると知っている。これに対し施乾は、「之の言葉は非常に乞食を軽蔑している」とし、その言葉を一旦は否定する³⁸⁾。しかし続けて彼は、「乞食で餓死した例が余りない」として、乞食が寧ろ楽な生活ができることを認め、『乞食を3日したら止められぬ』のも当然すぎるほど当然なことではなからうか」と乞食が止めることができない過程を肯定している³⁹⁾。すなわち施乾は乞食を3日したら止められないとし、一方賀川豊彦は、乞食を止めることが可能であると明言している。なお施乾は、賀川豊彦が乞食を3日したら止められないと言っているかのごとく引用している。前述したように賀川が例にとりあげた元乞食だった高利貸がいたことから、これは施乾の誤解である。

さて施乾がとった乞食100名についての統計データのうちモルヒネ中毒者1名を除くと、「乞食となりし原因」は、病氣21、盲20、手足不具12、放蕩怠惰(?) (疑い：引用者注) 9、親が乞食8、精神異常6、扶養なき為5、眼病4、負傷4、迷信2、犯罪2、子の不幸2、梅毒2、家族5名を養う為1 (不具に癲癩の者)、肺病1、癩病1とある⁴⁰⁾。このデータの時

期は不明であるが、施乾は、「乞食部落へ入ったばかり」のデータであり、その後乞食の生活や心理を理解するうちに「大きな誤謬」があったと述べている⁴¹⁾。しかしこのような台湾における乞食に関するデータの収集は、施乾が指摘するように、彼が最初に試みたものである。

第二章で前述した社会事業協会嘱託職員柴山武矩が1929(昭和4)年に愛愛寮を訪問し、施乾と面接した記事によると、「施乾君は、社会事業家特有の、熱情家である。話がはづんでくると、『しかしですね』を連発する。同君は、乞食の生活および心理状態を研究するつもりで、現在の愛愛寮を建っている」とある⁴²⁾。施乾は、研究のつもりで、まず乞食の実態を統計データで示そうとした。確かに、当時、貧民についての河上や賀川の研究はあるが、乞食についてのそれは殆ど見当たらない。施乾は、1928(昭和3)年助成金授与後の感謝の記事に「現今社会の愛愛寮に対する観念が多様である」として、「民衆の多く(勿論本島人)はまるで愛愛寮を以つて乞食請負(マツ)と心得、或は総督府の経営と考え、又は富家の道楽と合点する。兎角何れにしろ何人と雖も、社会に乞食を存在させざるに対して共鳴せざるはなく、賛成せざるはなく、感謝せざるはなし」と述べている⁴³⁾。このように乞食への理解がない社会認識の中で、彼は乞食の研究をすることで、乞食の救済を考えた。

しかし彼はこの統計データの限界も感じており、それを補うために「実際方面」(乞食部落での現地調査)⁴⁴⁾からの調査をし、乞食になる原因を究明している。その調査により、乞食の原因として「生活難」、「疾病」、「性格的」、「不具」、「放蕩怠惰」、「不時の災」、「犯罪」、「モルヒネ中毒」、「親の遺業」を彼は挙げている⁴⁵⁾。生活難が原因の場合、「貧すれば鈍する」ように、辛い生活が続くと「独立意思」を失い、怠け者が多くなり、自暴自棄に陥りがちになるという。施乾は、乞食になるのは、「独立意思の欠乏」と「多少の変質である」とみている。同じような窮民であっても、「却つて余りに窮乏していないものが乞食になる」という。台湾人は「強忍の民族」であり、当然乞食になるものでありながら乞食にならないものが多く、どここの国よりも乞食の割合が少ないとみている⁴⁶⁾。そこで乞食になるのは「意志薄弱と怠惰」だけでなく、「狂人ほどではないが、いわゆる変質者」のものが少なくないとしている。

たとえば、「家がまずしくそれを世話することができない」から、フラリと家を出て戻ってこなくなり、そのまま乞食になる。また「家族と不和のため」乞食になった者や、「白痴、低脳又は癲癇等」により、「家を追い出されて乞食と一緒に生活」しているものが少なくないとみている⁴⁷⁾。

乞食の統計でも明らかに多いのが盲である。台湾は「盲人国」とあるといわれているが、「乞食社会までそれを証明」しているという。盲人は貧乏人ばかりでなく、「生活に困難でない家庭が、盲の児を厄介視」し、「人道を外して無垢な可憐児を乞食に渡され(し：引用者注)たもの」が多い。その盲人を乞食は利用し、不具者を武器に乞食させる、「廃物利用の一法」であろうという⁴⁸⁾。このような実地調査の結果、乞食になる原因は、「単に一原因」

によるのではなく、「数個の原因が重さね重さね」になっている場合や、乞食の原因に「多大な同情に値する事情」が潜んでいることを知らねばならないという⁴⁹⁾。

こうして施乾は乞食となる原因を二大別することができるという。即ち、「少年時代から不良性のため、乞食になつたものと、生活中何らかの事情により、乞食をせざるを得ずに至つたもの」である。施乾は、このように乞食の原因が分かればそれぞれの乞食への救済に向けての対応ができると考えたと思われる。更に施乾は、「農村より発生する乞食」を最近の一つの「新現象」として捉えていた。「今日まで農村では、盲の如きもの」でも乞食に余りならなかったが、「近時に至り漸々と乞食が増えて来た」と施乾は社会現象として捉えた。以上のように施乾は、統計や実地調査により乞食の原因を究明し、乞食には多大な同情に値する事情があるとみた⁵⁰⁾。

これに対し賀川豊彦は、前述した東京日本橋署の乞食調査において対象とされた 220 名について、「乞食となりし原因」を挙げている。その原因は、不詳 75、怠惰放蕩 54、家計困難 28、疾病 25、老衰 8、盲目 7、両足不具 5、夫又は両親の病 6、事業失敗 2、子の怠惰 2、親の遺業、夫及び子の死亡 2、精神異状 2、失職 1、発育不完全 1 とある⁵¹⁾。施乾の統計と東京の調査を比較すると、施乾が言うように、台湾では、「盲」が 20 名 (20%) であり、東京の盲目 7 名 (3%) より多いことが分かる。また東京で一番多い原因は「怠惰放蕩」54 名 (24.5%) であるが、台湾では「疾病」21 名 (21.0%) が最も多く、「怠惰放蕩等」9 名 (9.0%) は少ない。これは、施乾が台湾の乞食は、「意志薄弱と怠惰」だけではないと先に述べたことと一致する。賀川豊彦は、この東京の調査結果を見て、乞食になった原因は、多くは自己の招いたものでなく、「家計の困難」、「盲目」、「老衰」によるものが多いという。然し「怠惰放蕩と云うのが全数の 2 割 5 分」占めているが、「此怠惰と云うものもよく研究すれば余程同情が出来るものである」と賀川は認める。しかし賀川豊彦は、怠惰でも「乞食などになり得る者は一種の精神病患者だと思えない」と明確に述べる。「たとえ個性に病気がないにしても社会病理から見れば明らかに病的であることは事実である」とし、賀川は、乞食を「全然人格として扱いたくない。乞食は病人である。人格の統一の無いものである」と言い、施乾のような乞食に対する同情を否定している⁵²⁾。

4. 乞食の心理

乞食になるものの心理は、「乞食の原因」でも施乾は述べていた。ここでは、更に乞食になってからの心理について分析をする。まず「乞食当初の心理」に焦点をあてている。施乾が乞食社会に入り、乞食の告白を傾聴し、「一掬の涙を禁ずることができない」こともあった。そして彼はつくづく「社会の無情」を痛感させられている⁵³⁾。

乞食を職業としたときに遭遇する最も困難なものは、「人間の皮を剥ぐいて、乞食の面を覆ふこと容易でない」ことであると乞食は施乾に話したという。乞食になれば誰でも、他人の家の門口にたつて、「頭家」（旦那さま）と第一声を発するのが「到底できる談ではない」と彼らは言うのである。そこで、施乾は第一章 4 で前述したように賀川豊彦の『貧乏心理の研究』の古賢の言葉を引用し、次のように述べている。実際物質に飢えているもの

に対し、説教するだけではもの足りなく、まず、人間が生きていくためには、三食が最優先になるということであろう。そしてその後、人間としての生活ができるように説教も必要になる、としている。

三食を得るために乞食を「1か月位」続けると「生活難と精神衰退の為め意思が漸々弱められ、グングンと極端に導かれる」ことになり、本能的な生き方をするようになると施乾は言う。その生き方は、「泥棒をするやうな大胆さを持たない。窃盗するには勇氣はなし。自殺には未練がある。」というように本能的に「生命」を維持できれば、「それが彼の凡てである」と施乾は言い切る。もうこうなった以上、「人間社会に入つて人間らしく立つ欲望は更でない」状態になり、「自分の唯一の光榮は死だ!」、「来世の幸福の^{すべ}(を：引用者注)祈願するのだ!」という短絡的な思考に、施乾は溜息をつき、これが「乞食の徹底的の人生観であり、超現世的生命観である」と施乾は乞食の全体像を捉える。その上で施乾は、乞食が「捨鉢的の考え」から、より一層乞食生活に引きづられ、「沈むがまゝに沈ませる」状態にあることについて、「彼等が何故、斯くまで己をして墮落せしめなければならないのか?」と疑問を投げかける。その答えは何か、「他事とせずして考えたら」その答えを出せるであろうと彼はいう⁵⁴⁾。

前述したように「乞食を3日すれば止められぬ」という言葉は、「お前はもう駄目だ」とレッテルをはるような乞食を軽蔑した言葉だと施乾は「想う」のである。然し、「乞食にも我々が持ったような魂を潜蔵しているから」それを喚起すれば、乞食を止められないことはない⁵⁵⁾と施乾は確信する。その根拠は、既に施乾が、乞食を止めさせて「世間に出したもののだけでも3名あった」という実績であった。更に施乾は、「経済がもう少し許されたら、幾らでも廃業させてやる心算であるが」と、自らの経済力不足を悔やんだ。

乞食をやめさせることはできるが、しかし乞食は「濡れた者は水を恐れない」弱みがあり、そのまま乞食生活を続けてしまうと施乾はいう。ここで1名の月給取り（常勤勤務者：引用者注）を例えに挙げている。大きな希望を持って月給取りになったが、その勤務に満足できず、他の職業選択をしようと考えても、適当な選択肢がなく、援助者がいないことで、生活保障のある現在の勤務を1日1日と我慢し続け、遂には一生涯その月給取りで終わってしまう結果になるという。「況や乞食！世の見捨て者！哀れにもドン底の底で諦めた非人！に於いておや」と、月給取りでも援助者がいなければ、職業選択の余地がないのと同様、乞食はなおさら社会で独立した生活はできず、乞食生活から脱出ができないと施乾は考えた⁵⁶⁾。そして施乾自身は、安易な月給取りや自立の努力をしない乞食とは違い、乞食撲滅の大事業という大望を実現するために、台湾総督府を辞めた野心家であるといえる。

かつて乞食にも、「充ち満ちた希望」に輝いた人生があったはずだと施乾は考えた。乞食のかつての輝いたその人生を取り戻すために、施乾は愛愛寮を経営し、彼等を収容して乞食の撲滅を図ろうとした⁵⁷⁾。しかし乞食自身は、「乞食を3日すれば止められぬ」という施乾のいわゆる「乞食職」に固着してしまうという。そして都会の乞食は、「苦々しくない」

⁵⁸⁾の生活を求めて放縦し、「甘味しいものでも食つて、賭博でも打つて、異性でも抱いて、

モルヒネを出来るだけ沢山注射する」という極楽な生活を送るという。田舎乞食も軒下でポカンとしていて、呑気だった者が、都会へ出てくると直ちに都会乞食に感染され、乞食心理が一変するという。施乾は、「嗚呼！」と以上のような現実に対したため息をつきながら、「危険思想の所有者」より都会の乞食が「一層危険なもの」とであると断じ⁵⁹⁾、「この点に就いて吾人は殊更に相当な考慮を払はねばならぬのである」と、単純でおとなしい田舎乞食に都会乞食が求める極楽な生活を感染させない工夫の必要性を強調する⁶⁰⁾。

施乾はこのような乞食救済の決意をなぜしなければならなかったのであろうか。それは、「冷淡な社会が平気で、彼等を見殺し知らんが仏の態度」を執ってきたために⁶¹⁾、「自暴自棄」の乞食を続けさせているという施乾の社会批判がその根底にあったためといえよう。「これは誰の罪なるぞ！」という自らの問いに対する施乾の答えは、「社会は乞食を製造した」であった。そこで乞食をなくすには、「社会人は彼等を愛し、彼等を救わねばならぬ」⁶²⁾。それ故、施乾は社会人すなわち社会の一員として愛愛寮を設立し、社会人の先駆者として乞食救済に乗り出した。

それに対し賀川豊彦は、乞食になった原因が個人によるものだけでない指摘しているものの、乞食が「遺伝的悪血性のものだ」とすればその心理が「通常心理と違っているは」言うまでもなく、放蕩のために乞食になるのも「悪血が意志薄弱な所に乗じて破れ出た」という。更に怠惰と言うのも「多くはアルコール中毒」と彼はいう⁶³⁾。このように、賀川豊彦はあくまでも乞食自身の「独立意志の欠如」を挙げており、一方施乾は乞食への「社会の無情」を全面的に指摘し、両者に相違がみられる⁶⁴⁾。

5. 乞食救済策

施乾は、乞食救済を実際どのように開始したらいいのかを、『乞食社会の生活』の付録の中と『乞食撲滅論』で述べている。前者は1925（大正14）年1月、後者は同年12月、ともに愛愛寮から発行されている。両者ともA5版の小冊子であるが、前者50銭、後者35銭でそれぞれ販売された。資金確保のために出版したようだ。施乾は「自由がきいたのなら、こんなものを出さないで社会の知らぬ内」⁶⁵⁾に突進して乞食救済をやったというが、これらの本により乞食の実態が広く社会に知られ、それに対する施乾の実践の一端が明らかになったのである。両冊子とも日本文であり、台湾省文献委員会に保存されている。施乾が愛愛寮を設立した3年後の26歳の時の著作であり、乞食社会の実態を自分で正確に調査し、あくまでも乞食側の立場に立ちつつ経済、社会、政治を包括的に把握して、その救済策について論及している。

（1） 乞食救済は貧民救済

施乾の分析によると、台湾の乞食は半数以上純無産か生活できない群であり、放蕩怠惰で乞食になったものは極めて少ない⁶⁶⁾。その乞食になるのは、窮民の内でも「最も悲惨な瀕死的のもの」で、国家社会の安寧秩序維持のために、当然救済を要すべきものであると彼は言う⁶⁷⁾。社会にこのような不備があるからこそ社会政策の必要があろう。その社会政策中の救済事業が真の社会事業に進展できるのは、ドン底の乞食救済より出発するのでな

ければならないと施乾はいう⁶⁸⁾。また当時の貧民救済は施乾にとって「姑息的な、胡魔化し」的なものであった。それは、根元に水をやらず、葉に水をやっているようなもので、乞食救済には進展しないと彼は考えるのである⁶⁹⁾。

根本的な乞食救済のために、まず乞食救済の施設が必要である。「植民地特に然り」で、植民地台湾には、在台日本人と台湾人の「住み分け」などの差別があり、両者の貧富の差が拡大し、失業者が増え乞食が多くなった。そこで乞食を更に増大させないために、乞食収容の施設が必要である。財政上資金不足と言われるかもしれないが、その施設建設の費用負担は長期的にみられる損失と比較すると少ないと施乾はいう。乞食から蒙る損失を思えば、まず他のどの施設より乞食救済の施設が必要となる。にもかかわらず、政府は乞食救済策をとらず、乞食に金品を与え、その場から乞食が消えれば良いという市民の考えを黙認していたと施乾は述べている。序章で述べたが、日本では 1918 (大正 7) 年に米騒動がおきた。その頃農業恐慌は深刻であった。この中で農村の貧民研究が盛んに行われた。それは乞食の研究ではなく、貧民労働者の研究であった。その点から考えると、施乾は、乞食救済を考えた先駆者であり、その歴史的な重要性は、これ以上に高く評価されるべきであるといえよう。

また施乾は、社会が乞食に進んで干渉する必要があるという。隣人が乞食で困っていたら、乞食のことを憐れみ、彼らを救済機関に世話し、または彼らが性格的に社会を乱すなら尚更干渉する必要がある。当時みられる「社会の冷淡と放任」と「不干渉主義」の態度を棄てること、「方面委員」のもっと意義ある活動が必要になるという⁷⁰⁾。かつて清朝時代には、第一章で述べたように、公設の 9 種類の窮民救助の機関があり、富者が窮民を助けるという儒教の倫理が社会にあった。更に乞食寮として民間の丐院が多くあり、貧困者はそれを利用し、一部のものが街に放置されているのにすぎなかった。日本統治時代になるとこれらの施設が廃止され、私的窮民救助事業を行う機関は、慈恵院、栖流所、公業及びその他の私設機関の 4 種類になった。収容されるところが少なくなった乞食は、街で徘徊し、治安を乱すことになった。そこで警察が乞食の取り締まりを行ったが、充分ではなく、都会では乞食数が増加した。

このような中でドン底になる前に乞食を救うには、社会が知らないふりをせず、乞食に進んで干渉するか愛愛寮のような乞食を未然に防ぐ施設での収容しかないと施乾は主張する。「この有るまじき社会の汚辱！非人！」である乞食を社会から絶滅させたい・・・それが施乾の「燃え尽くす白熱」であった⁷¹⁾。

(2) 乞食救済の経費

乞食の中、最も恐ろしいのはモルヒネ中毒の乞食であるといわれた。台北市中には当時その乞食が 15 名いた (基隆にも十数名)。そのモルヒネを 1 名 1 日に 2 円分注射しなければならず、15 名では 30 円、1 か月で 900 円となる。他の乞食は台北市中 100 名いた。1 名月に 8 円物乞いをするが、祭典を含めば少なくとも 10 円の利益がある。100 名いるからその利益は月に 1,000 円となる。そのため台北市民の乞食への出費経費は、モルヒネ中毒の

乞食の注射費用の900円と食事代や他の乞食に与える1,000円を加えたら1か月2,000円、1年で24,000円になる。それもこの多額な金額が乞食を活かすために使われずに、モルヒネにより彼らの「肉を千切り」にして死亡させているのは大問題であるという。そこで、それだけの金銭をモルヒネ注射に使用するなら、乞食を1箇所を集め、一緒に働かせ、モルヒネ治療をすることにより一層効果的な乞食救済ができるという⁷²⁾。

このように施乾は経済的側面からも愛愛寮を設立する価値があると断言しているのである。

(3) 乞食への救済

施乾は、かつて当時の乞食を如何に処置すべきかをある人から意見を聞いている。それは、「一時に乞食を狩り集め、監獄の如き収容し、労働に耐へ得るものは強制的に授産させ、病者はこれを医療し、不具者其他はこれに相当な救済を施せば」、これで乞食から逃れると言ったという。仮に強制的な手段が行われていたら、今日まで乞食に悩まされることなく、そのことは、市民全体の希望であると言う。しかし、施乾はこれを「夢想」だと判断する。施乾は、一気に乞食を収容するのではなく、あせらずに、「この種の乞食から彼の種の乞食へと、次々と漸進的に救済してゆく」⁷³⁾ ようにしなければ、良い結果は出ないと確信した。そこで施乾は、若し「3年の猶予」を与えてもらえば、この間に、台北市内の乞食を「奇麗に仕立て、尚進んで乞食となるのを防止」⁷⁴⁾ し、乞食問題の解決をしたいと考えた。

既成乞食の救済方針について施乾は、「働ける身なれば授産をさせ、健康を欠け（い：引用者注）ているものには治療を加え、働ける身としてやらねばならぬ。」⁷⁵⁾ という。なお全然労働に耐えない老衰者其他はこれを救養する外なしとし、愛愛寮での方針でも収容者に授産と救養があることを明らかにしている。更に先述した統計調査でも家庭問題のある乞食が多いので、収容された乞食を調査し、扶養者があるものは何回か家との調整を図り、乞食を家へ送り帰り、家と「和合」を優先させること、それがうまくいかなければ、愛愛寮での授産や救養を行うという⁷⁶⁾。

(4) モルヒネ中毒乞食の救済

「最も恐ろしく、且つ可憐なのはこのモヒ中毒の乞食である。故に乞食を救済する上に於いて、最先に手を下すべき」⁷⁷⁾ であると施乾はいう。しかし施乾は、乞食の心理を把握しており、「唯一の途」があることを知る。それは、乞食の最も恐ろしいのは、「病魔（モルヒネ中毒：引用者注）に襲われたとき」である。そこで施乾は、「病気の時それを考えてごらんなさい。乞食はするものではない」⁷⁸⁾ と施乾は乞食にこの一句で戒め、彼等を改悛^{かいしん}させることを試みた。これが施乾の発見した無形最上の政策であり、問題を解決する甚大の力があつたという。乞食は生命の危険を感じながらも、依存性が強いモルヒネに負けてしまい、注射しないでいることが難しく、漸減する外なしという。まず治療としては、「数日置きに極少量注射」をし、次にその傷口をなおす。その後授産を施し、労働の習慣をつける。そのことが乞食の善導であり、施乾が乞食に対してしなければならないことであると考えている。その乞食が一人前としての見込みがつくまで愛愛寮に収容して世話をしなけ

ればならない。回復見込みの立たない間は終生世話せねばならぬと施乾は考えており、モルヒネ中毒にかかった乞食の身になって、最後まで救済をするための、方策のルールを引いているといえよう⁷⁹⁾。

(5) 乞食の防止について

既に述べた乞食の原因の分析を基に、いかに乞食にさせないかについて、施乾は絶対的に予防的措置が必要であるという。この救済事業は、姑息的な対応ではすまされず、社会政策の大分類の一つで困難な仕事であり、「卓上の論説」と違って、「実地の作業」でなければならないとする⁸⁰⁾。しかし今日救済事業がうまくいかないのは、役人の机上の空論と現場無視の態度が主な原因であると彼はみている。役人は椅子にもたれて書類を進行させているに過ぎず、どうしてそれで社会の実情が分かるのか。彼等は、貧民の心理生活及びそれに至る境遇を知ろうともしないから分かりようがない。社会の欠陥によって貧民を発生し、乞食も製造した。この乞食を救うため、救貧事業が必要となり、これに防貧事業も生じた。

以上のように施乾は既存の社会事業の限界や実態を批判した。施乾は、乞食の実態を知るために、乞食と共に生活をして対策を明らかにしようとする実践主義者であった。かつて彼は、役所勤務の経験もあり役所の仕事を知っているだけに、役所へのいらだちをより強く感じていたのではないだろうか。

ちなみに当時の台北の方面委員は、要保護所帯の住民に日本人が多いと日本人の委員を多く配置し、住民に台湾人が多い場合には台湾人の委員を多く配置していた。例えば北区の淡水河に面した大稻埕には本島人が多く居住していたために、台湾人の委員が多く、中区の城内地域は内地人が多いから、日本人の委員が多かった⁸¹⁾。方面委員制度は、当時台湾人を政策実施の主体としてその参加を認めた数少ない制度であった⁸²⁾。しかし、日本人の委員は台湾人の要保護所帯を取り扱ったが、台湾人の委員は日本人の要保護所帯を取り扱うことはなかった。したがって日本人と台湾人の要保護所帯との間に自ずと差別が生じ、方面委員活動の実態としては低所得者や貧困者の窮民救助が充分に行われていなかったのである⁸³⁾。

この方面委員制度について、施乾がどのように考えたかについては、彼が「某誌」から引用した「方面委員制度の概要」という記事に注目する必要がある⁸⁴⁾。その記事は、『乞食社会の生活』という施乾の著作の一部でもあり、彼は30頁にわたって引用している。長文であるが、施乾の方面委員制度への期待を明らかにするものであり、あえてその部分全文をまとめて巻末に収めた（巻末資料参照）⁸⁵⁾。

その引用文の某誌であるが、現時点では特定ができない。但し引用部分の末尾に「本島に於いては」とあることからそれは台湾の雑誌に間違いはないだろう。施乾がこの長文を引用したことからすれば、1923（大正12）年に台湾でも実施された方面委員制度を大いに評価し、関心をもっていただと思われる。しかしそれが十分に機能していないことを、方面委員制度設立2年後の1925（大正14）年に自著『乞食社会の生活』で彼は指摘している。

すなわち方面委員制度が日本で機能しているように「方面委員制の真精神」が理解され、「実地の作業」を行われたら、「乞食となるものゝ半数以上は救われ」と彼は考えた。しかし彼は、当時の方面委員制度では、乞食発生の防止ができず、それは「卓上の論説」のみの偽物であり、「金看板」であると厳しく批判した⁸⁶⁾。

しかし施乾は、方面委員制度がいかに機能すると考えていたのだろうか。台湾人である某誌の筆者は、本島に於いては従来より保甲制度が機能していたことを重視していた。そしてその筆者は後に日本から入って来た方面委員が将来活動するには、従来からの保甲制度と密接の連絡を保つ必要があることは当然であると述べた。しかし施乾は、1925（大正14）年著作『乞食社会の生活』で施乾が方面委員制度を批判し、その3年後ではあるが、前章で既に述べたように、総督府主催の第1回全島社会事業大会（1928年10月）に於いて、施乾はこの社会事業協会（協会会員に方面委員が多い）と社会事業団体の関係について質問をし、確認をしている。施乾は、某誌の筆者のように方面委員が保甲制度と密接な連絡を保つことで乞食救済ができると考えなかったいえる。

台湾の方面委員制度は、1920（大正9）年代に日本から移入されたが、台湾には清朝時代から保甲制度があった。この制度は地域における警察機能をもっており、州県下の下級行政機関である各自治機関に設けられた。自治機関単位内で10戸に1牌頭、10牌に1甲長、10甲に1保正を置き、居住者の生死、賭博等の取り締まりの役割があった。この制度には、行政と司法警察の役割があり、その担い手は、地域の郷紳層や紳商であった。日本統治前はこのような地域の郷紳層や紳商が、地域社会の窮民救済や地域住民の生活向上のために官民と一緒に公共事業に取り組んでいた。ところが総督府は、1898（明治31）年に警察補助機関としてこの保甲制度を活用した。この制度は行政末端組織として、また隣保共同体として機能した。保甲制度は、台湾植民地における台湾人のみに適用され、1945（昭和20）年に廃止されるまで植民地支配の末端組織として機能した。1921（大正12）年に方面委員制度が設置され、地域住民と社会事業を結び付ける役割があった。その後1933年総督府総務長官の通達により、方面委員規定の標準化が図られたのである。

しかし施乾は、既にこの2年間の乞食の実態から、某誌の筆者のように日本から入って来た方面委員と従来からの保甲制度と密接の連携はもはや不可能であると察知していたのではないだろうか。そしてその頃台湾では、東京にいた台湾留学生である林献堂らを中心として、台湾総督府の専制に反対する自治運動が起こっていた⁸⁷⁾。施乾は、その自治活動に所属はしないものの、方面委員制度に期待するのではなく、かつての伝統的な保甲制度に注目していた。一方台湾総督府は1928（昭和3）年9月20日に社会事業協会を設立し、その社会事業の行政補助機関の方面委員制度の強化を図った。社会事業協会設立前の同年3月28日に台湾全島第1回方面委員大会（3日間）は開催された。つまり施乾は、台湾総督府の方面委員制度強化の方針に反する考えであった。

その後1932（昭和7）年愛愛寮の経営難に悩んでいた施乾は、某誌の筆者のように保甲と方面委員の連携を考えるのではなく、第四章で後述するが保甲団体にするための統制経

営案を台北州庁へ提出したのである。その年は台湾の方面委員制度の 10 周年記念であり、第 5 回台湾全島方面委員大会が開催され、出席者が 300 名余りの盛大な大会が行われていた⁸⁸⁾。台湾の方面委員の職務に関する規定は、前述したように日本とほぼ同じであった。しかし、1931 (昭和 6) 年の「台南州方面委員規定」及び「台南州方面委員執務心得並取扱事項要目」の相談指導の項目に「他人ヲ扇動シテ」及び「本人ノ思想行動ニ注意シ」とあり、方面委員は、植民地住民の抗日思想の防犯の役目も担っていた⁸⁹⁾。まさに施乾は、方面委員制度に反する考えがあった故に、台湾総督府の注意人物であったと思われる。

長々と 30 頁にもわたって施乾が「某紙」を引用したのは、方面委員制度の理想としての意義は認めているからである。しかし施乾は現実の方面委員は、乞食の救済を真剣に考えてはいないと認識し、結局は、台湾人による保甲制度の組織により愛愛寮を経営しようとしたのである。しかし愛愛寮は 1933 (昭和 8 年) 10 月財団法人の許可を受け、方面委員であった金子光太郎代表者となった⁹⁰⁾。更に 1936 (昭和 11) 年の愛愛寮の役員である理事、監事は殆ど方面委員であった⁹¹⁾。その方面委員の中でも専務理事である近藤満夫と蔡彬准は台湾社会事業協会創設 (1928 年 10 月) 当時から台湾社会事業協会役員であった⁹²⁾。1929 (昭和 4) 年に総督府主催で開催されたテーマ「社会事業の諸問題」座談会 (6 名) に近藤満夫と蔡彬准が参加している。その座談会で近藤満夫と蔡彬准は愛愛寮や乞食の問題についての発言はなく、失業問題や方面委員制度に関する内容であった。他の出席者からも愛愛寮や乞食の問題の発言はなかった。座談会で総督府社会課長の葛岡敏は、当地で護国十善会が宿泊事業を実施しているが、時々変な者を市役所に廻してくるという。このような病人や浮浪者を取り扱うのは事業家のやらねばならない事であり、それを市役所に廻してよこしてどうするとか、むしろ市役所から事業家に廻すのが筋だと葛岡は述べている。更に葛岡は、浮浪者なら藤生さん⁹³⁾が宗教家だから進んで引き受けるのは当然であり、病人なら経済的補助できる資金のある社会事業協会がなんとかするのは当然だと考えていた⁹⁴⁾。総督府は、施乾の乞食救済事業も彼の富と道楽で始めた事業であるからしっかりやってもらい、病人の治療の補助金だけ出せば良いと考えていたのではないかと推測される。総督府は、浮浪者が自己責任で浮浪者になったと考え、施乾がそれを社会的責任であると考えていることから総督府と施乾の浮浪者への見方には大きな違いがみられるのである。

注

- 1) 施乾『乞食社会の生活(附) 乞食救済策』愛愛寮刊、1925 年 1 月、127 頁
- 2) 同上、128 頁
- 3) 同上
- 4) 王昭文「拯救乞丐的社会改革者—施乾」『20 世紀台湾歴史與人物—第 6 屆中華民國史專題論文集—』国史館印行、2002 年、7 頁。そのうち『乞食とは何ぞや』は現在入手困難である。
- 5) 前掲『乞食社会の生活』1 頁

- 6) 同上、1～2 頁
- 7) 同上、2 頁
- 8) 同上、3 頁
- 9) 河上肇『貧乏物語』岩波文庫、1947 年、16～17 頁
- 10) 前掲『乞食社会の生活』129 頁
- 11) 同上、27 頁
- 12) 同上、7 頁
- 13) 同上、8 頁
- 14) 同上、9 頁
- 15) 同上、46 頁
- 16) 同上、47～49 頁
- 17) 前掲『乞食社会の生活』48 頁 70 歳以下 2、70 歳以上 1 とあり、70 歳が何人になるか不明。
- 18) 同上
- 19) 同上、47 頁
- 20) 同上、49 頁
- 21) 同上
- 22) 賀川豊彦（賀川豊彦全集刊行会編『貧民心理の研究』賀川豊彦全集第 8 巻、キリスト新聞社、1962 年、所収）201 頁
- 23) 前掲『貧乏物語』199 頁
一昨年（年）の読売新聞の記事から、中国の乞食を紹介し、「又春秋 2 回『乞食デー』と云うようなものが挙行され」とある。
- 24) 前掲『乞食社会の生活』20 頁 「托拐（たくかい）」は曲がった杖を頼りにするの意味で杖付きの乞食のような仙人のこと。
- 25) 同上
- 26) 同上、18 頁
- 27) 同上、19 頁
- 28) 前掲『貧乏物語』47 頁
- 29) 同上、49 頁
- 30) 同上、50 頁
- 31) 前掲『貧民心理の研究』200～201 頁
- 32) 同上、203 頁
- 33) 前掲『乞食社会の生活』27 頁
- 34) 同上
- 35) 同上
- 36) 同上、31 頁

この「賀川豊彦先生の研究」は、賀川の著書『貧民心理の研究』の 207 ページ以下に収められている。

37) 前掲『貧民心理の研究』203 頁

38) 前掲『乞食社会の生活』55 頁

39) 同上、57 頁

台湾社会事業協会編「内地便り『3 日やつたら止められぬ乞食 収入は 1 円 50 銭から 5 円』」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 8 号、1929 年、所収）110 頁
台湾社会事業協会編「乞食の収入」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 9 号、1929 年、所収）79 頁

乞食の状況について以下の内容が記載されている。市の社会局の調査では、乞食の調査をすると 1 日最高 5 円、最低 1 円 50 銭位、浅草観世音堂付近では不具者は 1 時間 1 円内外の収入がある。同時に乞食を取り締まるために 30 分毎に警官が巡回して彼等を追い払うので、1 時間の内で乞食をなす時間は 30 分位に過ぎない。1 日に、不具でない者は 15 銭、児童を引き連れているものは、1 円から 3 円を稼いでいたようだ。

40) 同上、47 頁

41) 同上、46 頁

施乾は、統計を取った後、愛愛寮で乞食と接していると、乞食の心理や生活が理解できた。そこで彼は、「乞食部落へ入ったばかり」のデータに、「大きな誤謬」を発見した。その誤謬内容については、不明である。彼は、乞食たちに「勝手なことを聞くのが、罪惡のやうに感ずる」という。乞食の単純集計だけでは、乞食の自立に向けた生活改善にならないと考えたのであろう。

42) 柴山武矩「社会的私設歴訪記（台北市）」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 6 号、1929 年、所収）54 頁

43) 施乾「初めて助成金を載（戴：引用者注）いて」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 2 号、1928 年、所収）105 頁

44) 同上、28 頁

45) 同上、28～42 頁

46) 同上、30 頁

47) 同上、36 頁

48) 同上、37 頁

49) 同上、43 頁

50) 同上

51) 前掲『貧民心理の研究』201 頁

52) 同上

53) 前掲『乞食社会の生活』52 頁

54) 同上、54 頁

- 55) 同上、56 頁
- 56) 同上、55 頁
- 57) 同上、56 頁
- 58) 同上、58 頁
- 59) 同上、59 頁
- 60) 同上
- 61) 同上、123 頁
- 62) 同上、124 頁
- 63) 前掲『貧民心理の研究』203 頁
- 64) 同上
- 65) 施乾「愛愛寮より」『乞食撲滅論＝社会問題の根本問題＝』1925 年 12 月、1 頁
- 66) 前掲『乞食社会の生活』128 頁
- 67) 同上
- 68) 同上、129 頁
- 69) 同上
- 70) 同上、132 頁
- 71) 同上
- 72) 同上、133～134 頁
- 73) 同上、136 頁
- 74) 同上、137 頁
- 75) 同上
- 76) 同上、138 頁
- 77) 同上、139 頁
- 78) 同上、140 頁
- 79) 同上、141 頁
- 80) 同上、142 頁
- 81) 大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』ミネルヴァ書房、2007 年、374 頁
- 82) 大友昌子「日本統治下台湾における社会事業政策の展開」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊(解説)近現代資料刊行会、2001 年、所収)83 頁
- 83) 前掲『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』374～375 頁
- 84) 前掲『乞食社会の生活』147 頁

方面委員制度が小河滋次郎(大阪府社会課)の提唱により、1920(大正 9)年大阪で採用実地され好成績を挙げていることを「某誌」の筆者は知ったようだ。小河滋次郎(1863～1925 年)は、監獄学の草分けであり、外遊 4 回あり、法学博士である。その

後『救恤十訓』を著作し社会事業に指針を与えた。大阪府嘱託となり、1917（大正 6）年方面委員制度を提唱し、専門社会事業との間の連携に民間の協力者が必要であると考えた人物である。この方面委員制度は、現在の民生委員制度の原型になっている。

85) 前掲『乞食社会の生活』147～177 頁

86) 同上、P146.

「乞食防止」は、「今日の緊急問題」であり、たとえ社会人が真剣に考えなくても、「国家」は乞食の存在を認めるべきではないと施乾は痛感したのである。施乾は社会が乞食救済を真剣に考えることを期待しているが、今日のように救済事業が振るわない状況においては、固より総督府の社会政策原理をもって最善の対策をとる他はないと考えたのである。

87) 沈潔「植民地台湾における方面委員制度の展開及びその特質」（永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001 年、所収、）113 頁

88) 同上、114 頁

89) 同上、119 頁

90) 井出季和太『台湾治績志』昭和 12 年発行、青史社復刻版、1997 年、986 頁

91) 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1936 年、1～2 頁

92) 台湾社会事業協会編「台湾社会事業協会役員」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』創刊号、1928 年、所収）

93) 台湾社会事業協会編「社会事業功労者の略歴所感」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 2 号、1928 年、所収）85 頁に以下の記載がある。

藤生祐俊：1913（大正 2）年護国十善会を台北市に創設し、無料宿泊、職業紹介、授産、精神教化事業に尽力し、社会事業功労賞を受ける。

94) 台湾社会事業協会編「社会事業の諸問題—『座談会』—」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 4 号、1929 年、所収）65～66 頁

第四章 愛愛寮の経営

1. 乞食撲滅論

施乾は、1925(大正 14)年 1 月と 12 月に『乞食社会の生活』¹⁾『乞食撲滅論』²⁾をそれぞれ刊行し、広く社会に乞食の実態を周知させ、乞食撲滅の実践のための経費の援助を訴えた。1923(大正 12)年に施乾が 24 歳の若さで愛愛寮の事業を開始して 2 年が経過した時点である。彼は『乞食撲滅論』の冒頭に 4 頁にわたって「おことわり」と称するアピール文を挿入し、愛愛寮の使命について述べている。

今やわたくしは正に倒れんとしてゐる。瀕死のどん底に陥つてゐる。しかしながらわたくしは倒れたくはない。匙^匙を投げ出したくはない。イヤわたくしはより強く生きてゆきたい。わたくしはよりよく自我を成長せしめ、よりよく自我を完成せしめたい。

或る友人がわたくしに告げて云ふ—社会は怒涛逆巻く海の如く、人生は波上に映れる月影の如し……と。さうだ。而して人生は享樂そのものでない。懊惱苦楚の化身(心身をわずらわし悩ませる一切の妄念と苦しみのために生まれ変わった人間：引用者注)だ。

で、わたくしはもつともつと悩まなくちゃならない。わたくしはもつともつと苦しまなくちゃならない。わたくしは飽くまでかうした熱情を以て勇往邁進したい。

△(記号) …中略…(中略：引用者注)

わたくしは謙讓あながち道德であるを信じたくない。わたくしは正当な主張を正当な方法で要求するのが利己であり利他でもあり、そして善事でもあり、道德でもある、と信ずる。今わたくしは、わたくしの自信を満天下の君子に訴へたい。

しかしわたくしは、無学の徒である。わたくしは、ただ、凡てを自我の領域^{すべて}に入れたいために、正当な主張を正当な方法で要求するものに過ぎない。

△

満天下の君子！

吾人の主張が正当であると思はれ、吾人の方法が正当であると思はれた時、それが容認せられた時、その時こそ世人を善くし、またわたくしを善くしてくれることになる。

並に於いて恐れ多くも陛下の御一親同仁(ご一族同様の思いやり：引用者注)が益々現らはせられ、役人の恩恵が感謝せられ、富豪の慈善が感謝せられ、人間の倫理が確立せられるであらう。

ああ斯くして貧民は、乞食は凡べて温かく救助せられる事になるであらう。しかり、是れが人道であらう。然り、是れが人類の与へられた大使命であると信ずる。

大正 14 年冬

新築の寮舎に於いて

施 乾³⁾

以上、要するに彼は、経済状況の厳しい中、愛愛寮の経営を何とか維持しようとした。そこまで施乾が苦境に立ち向かおうとしたのはなぜか。施乾は、乞食を救済することで、自分一人だけの利益を計ることだけでなく、自分を犠牲にして乞食に利益を与えることになるという。彼は、自分の利益を「利己」、乞食を含む社会全体の利益を「利他」とし、それらが相互に関係をもつという強い信念があったからである。「利己」と「利他」は、「自愛」と「他愛」に置き換えることもでき、乞食の救済は、人類の誰にも与えられた大使命であると彼はいう。この正当な主張に対して施乾は、正当な方法として市民に『乞食撲滅論』の購入を求めたのである。

さらに『乞食撲滅論』の発刊前に付け加えたと思われる「宣言」⁴⁾を、施乾は、この本の最初2ページにわたって入れている。その「宣言」で彼は以下のように述べている。

吾人は社会に乞食の存在すべきことを認めませぬ。それは『ある可からざるもの』であると確信してゐるからであります。ソコで吾人は、社会から乞食を撲滅せねばなりませぬ。それに関する意見をここに明かします。

世の志士仁人よ！^{ねがわ}希くは本文御高覧の上、尚誠実なるご批判あらんことを！
ここに乞食撲滅を満天下に宣し、御同感の江湖人士に御援助を期して止みませぬ。

1925年12月1日

台北・万華・緑町

愛愛寮

施 乾⁵⁾

このように施乾は、この「宣言」で『乞食撲滅論』発刊の主旨を明確にしている。乞食は「ある可からざるもの」であり、そのための乞食撲滅の必要性について彼は本文で述べている。

そこで施乾は、「乞食は防止すべくして救済すべきでない」⁶⁾という。その理由については以下のように要約できる。乞食は文明社会の怪物である。それは、社会一般の問題であり、人類の一般の問題であるにもかかわらず、「人々の乞食に対する1銭2銭てふ喜捨」であるとする。若し、「かくの如き慈善（偽善）喜捨（奇捨）が行われなかつたなら、今日の世の中に乞食の存在する筈なしと信じて疑はない。」⁷⁾と施乾はいう。世の中に於いて常に行われている「単なる浅薄なる慈善心の発露」に依るか「全く打算的報恩を貧らんための一的手段」としての喜捨は、慈善ではない。「慈善てふ羊頭を掲げ門前払ひてふ狗肉を販^{あきな}てゐる」ようなものだという⁸⁾。つまり、「乞食は防止すべくして救済すべきでない」は、「利己」と「利他」との関係において、「自愛」と同じく乞食を心から「他愛」し、乞食の防止のための喜捨をすべきであると施乾はいうのであろう。

そこで施乾にとって、慈善とは何か。既に第二章で述べたように彼は慈善には鉄則があるという。しかし実際は前述のような奇捨が行われ、現在の「乞食問題が如何に、社会的

に戦慄せざるべからざる」⁹⁾かを社会の問題を自己の問題としても考えられる、より真面目な、より厳粛な、より真剣なそんな人々のみを前にして施乾は述べたいと主張している。

河上肇は、貧民調査をする場合は、貧乏の基準を大いに引き下げて、自ら肉体維持しかできない者を貧乏人と言っている。賀川豊彦は、貧民の定義において「一個の人間として辛うじてその身体を保持して行けるものを『基本的貧民』」として位置づけている¹⁰⁾。施乾は、河上肇のいう「生存に必要な物」を「生活最低限度の生活資料」¹¹⁾として与えるだけでなく、乞食に「自活の途」を与えようとした。施乾は、一時的な物質的供与ではなく、自他よりなる他者を自己の向上に結びつけて、自らの問題として乞食の社会参加に向かった実践的な活動をしようとしたのである。

こうした河上肇や賀川豊彦の考える最低の貧民の中で更に困窮し、乞食するより生きていけない者を、施乾は乞食救済の対象とした。このようなどん底の生活をしている乞食を撲滅するには、彼等の生活を保障する必要がある。総督府も実施できないことについて、施乾は、民間にあつて彼がどのような乞食救済に乗り出したのかを次に見ていきたい。

2. 愛愛寮の経営実践

1931(昭和6)年度『社会事業要覧』は愛愛寮を次のように紹介している。「設立者施乾、乞丐(乞食)生活の改善(病気の者には治療をし、仕事ができるようにすること:引用者注)を企画し大正12年8月15日台北愛愛寮を設立す、収容の乞丐に対し授産の方法に依り労働心を涵養し、或は医療に依り疾病を治療する等乞丐の救済及び生活改善に努めつつあり、昭和3年2月会員組織となし本事業の徹底を期せり。昭和4年度に於て恩賜財団明治救済会より4,200円、財団法人台湾婦人慈善会より1,000円、恩賜財団慶福会より1,000円計6,200円の補助を得て癩患者隔離病室、授産所、精神病室、隔離室を新築せり、昭和4年2月11日記元節に当り金500円づつの御下賜金を拝受せり。」「資産22,930円、昭和4年度決算支出28,441.97円」「昭和4年度事業成績本年度収容人員341人、延べ人員57,447人で医療延べ人員12,00人、本年度末現在収容人員113人(男64人、女40人、幼児9人)内精神病室収容者11人、癩患者隔離室4人」¹²⁾。更に第三章で既に述べたが1937(昭和12年)発行の『台湾治績志』には「昭和8年10月財団法人の許可を受け、金子光太郎代表者とな」り、「昭和9年度の事業成績は収容人員303人、延べ人員56,999人で医療実人員263人」¹³⁾とある。昭和11年度の財団法人台北愛愛寮事業概要には、金子光太郎が代表者理事、施乾が専務理事になっている¹⁴⁾。金子光太郎は当時の方面委員であり弁護士であった¹⁵⁾。他に昭和11年度愛愛寮役員の3名も方面委員であった¹⁶⁾。それではまず愛愛寮の被収容者の実情について見てみよう。

(1) 愛愛寮収容者の救護原因

1936(昭和11)年の愛愛寮事業概要の事業目的によると、愛愛寮の収容対象は、①乞食、②疾病(不具精神異常者等を除いたもの)、不具(身体に障害があるもの)、廢疾者(不治の疾病者)、③老衰又は幼弱者、④精神異常者であり、生活ができない者を救護し或いは自活の手段を与えるとしている¹⁷⁾。

これに対して総督府の設立した慈恵院の収容施設の対象については、「台湾慈恵院規則」の第3条に、「各院は設立区域内に居住する帝国臣民中独身にて左に掲げる各号の一に該当し自活する由なく且他に扶助を受けるの途なき窮民を救養す。1 不具 2 廢疾 3 傷病 4 老衰 5 幼弱 6 寡婦にして貞節なる者」としている¹⁸⁾。慈恵院と比較すると愛愛寮は、「台湾慈恵院規則」以上に範囲枠を広げ、乞食、精神異常者、独身者以外もその対象者とし、救護だけでなく自活の方法を与えることを明記していた¹⁹⁾。

表3は愛愛寮の収容者内訳状況であるが、公的な施設として慈恵院の他に1930(昭和5)年には阿片中毒者のための台北更正院、1934(昭和9)年には精神病患者のための養神院が設立されたにもかかわらず、これらの施設で受け入れ困難な阿片中毒者や精神病患者を愛愛寮が収容していたことが分る。1935(昭和10)年、1936(昭和11)年、1942(昭和17)年、1944(昭和19)年において総収容者は、各340名、293名、352名、244名であり、台北市で徘徊している乞食約100名より²⁰⁾多い収容である。救護原因の内訳をみると、多いのは、貧困、疾病、モルヒネ中毒、精神病患者である。貧困と疾病を合わせるとどの年度も約35%以上を占めて多い。施乾のいうように一番困難なモルヒネ中毒者も1935(昭和10)年は5%であったが、1942(昭和17)年、1944(昭和19)年には16%以上に増えている。

台北市には、精神病の特殊医療救護機関として、官立の養神院以外に私立の台北仁済院(1899年)²¹⁾、台北愛愛寮(1923年)、養浩堂(1929年)が設立されていた²⁰⁾。精神病患者は1935(昭和10)年、1936(昭和11)年には総督府から委託された患者がそれぞれ53名、43名収容されていた。台北仁済院における委託精神病患者数は、1923(大正12)年から1926(大正15)年の間に17名²²⁾、1929年に35名²³⁾とあり、時期が少し後になるが、愛愛寮は台北仁済院以上に精神病患者の委託を受けていたといえる。台湾には、1934(昭和9)年まで、精神病患者の公的な収容施設(養神院)はなかったが、その設立後も愛愛寮は、1936(昭和11)年までは、精神病患者の委託を受けて精神病患者の収容をしていた。精神病患者委託事業が廃止されると、愛愛寮は、公的な機関で収容しきれない要監視精神病患者と非監視精神病患者の委託収容を受けていた1942(昭和17)年以前の時期と同程度の多数の精神病患者を収容していたのである。1936(昭和11)年²⁴⁾、1937(昭和12)年の事業概要²⁵⁾によると、普通患者と精神病患者の実人員治療状況は、1935(昭和10)年度にそれぞれ161名と142名、1936(昭和11)年度にはそれぞれ143名と64名であった。

そこで収容者のうち普通患者と精神病患者の1935(昭和10)年の治療状況の割合をみると、普通患者は全収容者340名から精神患者105名(精神病患者52名と委託精神病患者53名の総数)を除外した235名であり、普通患者1人が年平均0.7回の治療を受けたことになる。一方精神病収容者総数は105名であり、精神患者1人が年平均1.4回治療を受けたことになる。

同じように1936(昭和11)年で見ると普通患者(普通患者は全収容者293名から精神患者72人を除外した221名)は、普通患者1人が年平均0.7回の治療を受けたことになり、精神病収容者(精神病患者29人と委託精神病患者43名の合計72名)は精神患者1人が年平均

0.9 回となる。このように 1935（昭和 10）年、1936（昭和 11）年の普通患者と精神病患者の治療状況の割合は精神病収容者の方が多く、より介護力を必要としていたと思われる。後で述べるように、愛愛寮で精神患者の収容をどのようにするかが、施乾の大きな問題であった。

表3 愛愛寮収容者の救護原因内訳(人数)

救護原因	1935(昭和10)年度 (男/女)	%	1936(昭和11)年度 (男/女)	%	1942(昭和17)年度 (男/女)	%	1944(昭和19)年 度(男/女)	%
貧困	44(29/15)	12.9%	47(36/11)	16.0%	49(36/13)	13.9%	31(21/10)	13.9%
疾病	68(58/10)	20.0%	59(49/10)	20.1%	110(97/13)	31.3%	74(63/11)	31.3%
老衰	15(9/6)	4.4%	9(5/4)	3.1%	12(7/5)	3.4%	19(14/5)	3.4%
不具	8(5/3)	2.4%	7(4/3)	2.4%	9(7/2)	2.6%	6(6/0)	2.6%
盲	20(10/10)	5.9%	19(7/12)	6.5%	17(8/9)	4.8%	9(2/7)	4.8%
モルヒネ中毒者	17(15/2)	5.0%	31(27/4)	10.6%	57(51/6)	16.2%	14(9/5)	16.2%
阿片病中毒者	3(1/2)	0.9%	2(1/1)	0.7%	3(0/3)	0.9%	3(0/3)	0.9%
噎	2(1/1)	0.6%	2(1/1)	0.7%	4(3/1)	1.1%	3(2/1)	1.1%
児童	18(7/11)	5.3%	26(13/13)	8.9%	27(17/10)	7.7%	23(9/14)	7.7%
精神病患者	52(36/16)	15.3%	29(23/6)	9.9%	—	—	—	—
委託精神病患者	53(27/26)	15.6%	43(25/18)	14.7%	—	—	—	—
委託普通患者	40(38/2)	11.8%	19(18/1)	6.5%	—	—	—	—
要監置精神病患者	—	—	—	—	45(30/15)	12.8%	54(30/24)	12.8%
非監置精神病患者	—	—	—	—	19(11/8)	5.4%	8(3/5)	5.4%
合計	340(236/104)	100.0%	293(209/84)	100.0%	352(268/84)	100.0%	244(159/85)	100.0%

出典：財団法人台北愛愛寮編『事業概要』(1936年、P8～9) (1937年、P8～9)
私立台北愛愛救済院編『事業概況集-民国34年起』(1945～1951年)より作成
注)「—」はデータなし。

(2) 愛愛寮の経営方針

表 3 の収容者を抱えて、施乾は 1929（昭和 4）年『愛愛寮概況』の「将来ノ計画（授産場精神病室及隔離室新築理由書）」で授産場精神病者室と隔離室の新築が急務であると次のように述べている。

将来計画書スベキ問題多クアレドモ目前ノ急務トシテ今年度中ニ於テ是非実現スベキ施設ハ、授産場精神病者室、隔離室ノ増築ナリ社会事業トシテ特ニ愛愛寮トシテハ授産問題ヲ最モ徹底的ニ取扱フベキモ何ヨリモ先立チテ相当ナル資金ヲ必要トスルハ言ヲ俟タザル処然レドモ現在ノ如ク資金欠乏シ加フルニ適当ナル授産場ノ設ナク不完全ナル一時的施設ヲ以テシテハ授産ノ徹底ハ言フベクシテ期スベキニアラズコレ乃チ当面ノ第一重大問題ナリ。

次ハ精神病患者問題ナリ在来本寮ニ於テ簡単ナル精神病患者室アリ特別ナル場合ニ於テ必要ニ応ジコレヲ収容セシモ台北市内ニ於テハ精神病患者収容所トシテハ台北仁済院ノ外最近斯界ノ大家中村譲氏ノ経営ニ係ル雙連養浩堂医院ノニツアルモ台北仁済院ハ常ニ収容者満員ノ状態ニアリ養浩堂医院ニハ狂暴性患者収容ノ設備ナキヲ以テ市中ニ於テハ処置ニ困却セル者多ク偶々本寮ニ処置ヲ依頼スル者アリ事情ヲ酌ミ同情ノ余リ余儀ナク収容セシニ其数日ヲ追フテ益々増加シ就中治癒セシ者少カラズ現ニ依頼者続出シ収容者尚約 10 名ヲ算ス惟フニ精神病ハ現代社会ノ文明病トモ称スベク殊ニ人口 20 余万ヲ擁スル我台北市トシテ治安上コレガ収容ノ完全ヲ期スベキハ緊急問題ノ一ニシテ尚且ツ国家として特ニ考慮スベキ問題ト言フベシ是レ精神病患者室建設ヲ以テ本寮ノ第二重大問題ト為ス所以ナリ。

更ニ並ニ第三ノ問題トシテハ伝染病患者隔離室ヲ建設スベキコトナリ現在收容人数ノ割ニ收容所狭隘ニシテ收容者中ニハ癩患者一名及結核患者約八名ヲ有スルモ伝染病患者隔離室ノ設備ナク衛生上甚ダ危険ニシテ看過スベカラザル問題ナリ而シテ下層社会ニハ此種ノ患者相当ニ多ク之ガ收容ヲ拒ムニ於テハ彼等ハ市内ヲ徘徊シテ^{あまね}普ク病毒ヲ散布シ其ノ結果寒心ニ堪エズ之ヲ以テ本寮ニ完全ナル隔離室ヲ設備スベキコトハ刻下ノ急務ナリト思考ス。本寮開設後ノ実況ニ鑑ミルニ所謂自由放任自由競争ノ社会ニ於テ必然的ニ発生スル各種ノ落伍者救済上我ガ愛愛寮ハ重要ナル役目ヲ勤メ居ル次第ニシテ吾人ハ潔ヨクソノ職責ヲ果サント欲スルモカカル問題ハ国家並社会モ相当責ヲ負フベキモノニシテ無関心ニ傍觀スベキモノニアラズト信ズ。

^{ねがわ}希クハ官府並社会各方面ノ援助ノ下ニ本計画書ヲ遂行シテ不幸ナル同胞ヲ救済スルト共ニ社会ノ病患ヲ一掃セムコトヲ切願シテ已マザル次第ナリ²⁶⁾。

以上のように愛愛寮には、狂暴性のある精神病患者が増加し收容ができなくなってきたこと及び伝染病患者を狭い場所で收容しており衛生上危険であるという緊急問題があった。そこで施乾は授産場、精神病患者室及び隔離室の建設の必要性をこの計画書で訴えたのである。

台北仁濟院はかつての慈恵院であり、半官半民である。そしてそれは收容者枠が決められており、それを超えては收容できなかった。また雙連養浩堂医院は、設備が整っていないため、重症の精神病患者を收容できないでいた。これに対し愛愛寮は、処遇に困る精神病患者や授産の必要な精神病患者をともに全員收容しようとした。

このことについて施乾は、「社会事業なるものは与へられた処の経費により其の可能の範囲で働きを為せば足りるが、しかし愛愛寮のみは経費の問題はさて擱き、事業の対象物たる乞食を一人残らず收容せねばならぬのである」と述べている²⁷⁾が、この点について次女施美代は、「父親は街にでて乞食を集め、父親自身乞食より悪い服を着、家族にも乞食と同じ衣服を与え、同じ食事をさせた」と、当時收容者と貧しい生活をしていたことを話した²⁸⁾。

このように施乾は、貧しい生活をしていても一人残らず乞食を收容することが、乞食の撲滅であり、それが愛愛寮の「第一義的使命」であると考えた²⁹⁾。更に彼は、愛愛寮が他の「一般的社会事業」のように予算の枠内で行う中途半端な事業と違い、「社会より乞食を撲滅する」という「特殊的使命」を示すものであり、施設の完備の必要性があると言う³⁰⁾。

表3で示すようにモルヒネ中毒者と阿片中毒者合わせると、1935（昭和10）年から1944（昭和19）年の間で、多いとき1942（昭和17）年の60名、少ないとき1944（昭和19）年の17名を愛愛寮は收容している。

杜聰明は、1929（昭和4）年8月に「台湾に於ける阿片病治療病院設置に対する建議書」を総督府に提出したが、実はこの建議書は愛愛寮での実験結果であった³¹⁾。総督府は、杜聰明の建議書を受け入れ、1930（昭和5）年に「阿片病矯正手続」を公布し³²⁾、定員425名と定め、台北を除く台湾各地の総督府立病院に矯正科を設け收容した。台北の場合は、台北

地区の矯正所として「台北更正院」を設け、杜聡明をその施設の院長にした。台北更正院の収容定員は 150 名であり、そこで収容できない患者は愛愛寮以外の施設では収容できなかった³³⁾。

ところで後年更生院の院長に就任した杜聡明は施乾と同郷であり、次のように回想している。

歐美留学回台後、計画要研究阿片及モルヒネ問題、得堀内校長的周旋、任為専売局囑託、開始調査研究慢性モルヒネ中毒者之治療方法。首先要利用愛愛寮的中毒者、当時愛愛寮収容者モルヒネ中毒者以外、有栄養不良及疾病、唯有江抱大姉一人、担任薬局及治療工作、筆者往愛愛寮拜托施乾君、利用他的モルヒネ中毒者来研究治療方法、他表示很歡迎³⁴⁾

歐米留学後、阿片およびモルヒネの中毒問題の研究は緊急課題であるとし、堀内学校長の斡旋で、台湾総督府専売局の囑託となり、慢性モルヒネ中毒者の治療方法について調査研究を始めた。ただちに愛愛寮の慢性モルヒネ中毒者の治療にあたった。当時愛愛寮収容者には、慢性モルヒネ中毒者以外、栄養不良や疾病者が含まれ、ただ一人の看護師が対応していた。私は、愛愛寮へ行き、施乾にモルヒネ中毒者の治療研究を依頼したところ、施乾は非常に喜んだ。

杜聡明によれば、その当時、世界では国際阿片会議で阿片吸食禁止が決定され、近日中にジュネーブの国際連盟から派遣された係員は、台湾の調査をすることになっていた。杜が「台湾総督府不知道如何处理此問題乎」（台湾総督府は、この問題をどう処理してよいのか知らなかった）と指摘したように台湾総督府としても、今まで特許により阿片吸食をさせており、その対処に困ったようだ。1929（昭和4）年3月12日に開始した杜聡明の愛愛寮での研究により、台湾総督府専売局で専売している阿片のタバコは「含有5%のモルヒネ、其阿片病者吸引時、唯共11.2%モルヒネ」（モルヒネは5%の含有量であり、それを阿片病者が吸引しても全体のモルヒネ量はただ11.2%）であり、肺への吸収量が少なく治療しやすいことがわかった³⁵⁾。

それより以前、愛愛寮は開設当初からモルヒネ中毒者や阿片中毒者を収容しており、公的な台北更正院開設への土台を作ったといえる。モルヒネ中毒者の乞食について、施乾は、「強盜以上に怖る（ろ：引用者注）しいもので、アノ腐乱した両脚アノ紛々たる臭気、アノ傲慢な態度と云つたら、こちらが却つて降伏する……というような傾向があり、彼等の強請が^{ことごとく}に従ふべく余儀なくされてゐる。」³⁶⁾と現状を述べている。そして市民は、モルヒネ中毒者の乞食を飯の蠅のように考えているが、この「実際問題」すなわちモルヒネ患者の治療をしなければいつまでもモルヒネ中毒者が減っていかないと施乾は、市民の非合理的な態度を批判しながら、治療の必要性を考えていた³⁷⁾。

杜聡明は、従来の漸禁政策の措置では阿片中毒者への治療がなされてこなかったことを指摘しているが³⁸⁾、施乾は、それ以前から、「外科治療」すなわち「乞食を憐れみ、之に施す」のではなく、「内科治療」すなわち「乞食心理を改めさせる」ことで阿片中毒者を救わなければならないと主張していた。これは杜聡明の慢性モルヒネ中毒の禁断症状の内科学的解明という治療と一致していた。

施乾は、モルヒネ中毒者の乞食が一番困難であるとして、杜聡明の治療を積極的に受け入れ、モルヒネ中毒禁断の難題にとり組んだことが窺える³⁹⁾。その当時のスタッフの一人は台北帝大医学部で勤務経験のあった伍中行であり、長く愛愛寮で看護師をしていた⁴⁰⁾。その看護師による専門性のある看護は、モルヒネ中毒者へ効果的な回復への寄与があったと思われる。

こうして愛愛寮はモルヒネ中毒者の乞食撲滅に先駆的な役割を果たしていた。

(3) 愛愛寮収容者の出身地と救護停止

表4 愛愛寮事業開始以来収容者の出身地内訳（人数）

年代別	本省人	%	旅台外省人	%	日籍人	%	合計	%	延べ人員
1924(大正13)	16	66.7%	8	33.3%	0	0.0%	24	100.0%	24
1925(大正14)	27	75.0%	9	25.0%	0	0.0%	36	100.0%	60
1926(大正15)	56	70.9%	23	29.1%	0	0.0%	79	100.0%	139
1927(昭和2)	121	84.0%	20	13.9%	3	2.1%	144	100.0%	283
1928(昭和3)	288	89.4%	29	9.0%	5	1.6%	322	100.0%	605
1929(昭和4)	303	88.9%	31	9.1%	7	2.1%	341	100.0%	946
1930(昭和5)	202	81.8%	33	13.4%	12	4.9%	247	100.0%	1,193
1931(昭和6)	311	84.7%	37	10.1%	19	5.2%	367	100.0%	1,560
1932(昭和7)	278	81.5%	42	12.3%	21	6.2%	341	100.0%	1,901
1933(昭和8)	291	82.7%	37	10.5%	24	6.8%	352	100.0%	2,253
1934(昭和9)	257	84.8%	30	9.9%	16	5.3%	303	100.0%	2,556
1935(昭和10)	261	76.8%	48	14.1%	31	9.1%	340	100.0%	2,896
1936(昭和11)	227	77.5%	36	12.3%	30	10.2%	293	100.0%	3,189
1937(昭和12)	213	78.6%	23	8.5%	35	12.9%	271	100.0%	3,460
1938(昭和13)	247	86.1%	30	10.5%	10	3.5%	287	100.0%	3,747
1939(昭和14)	251	89.6%	10	3.6%	19	6.8%	280	100.0%	4,027
1940(昭和15)	344	87.5%	32	8.1%	17	4.3%	393	100.0%	4,420
1941(昭和16)	264	79.0%	47	14.1%	23	6.9%	334	100.0%	4,754
1942(昭和17)	290	82.4%	39	11.1%	23	6.5%	352	100.0%	5,106
1943(昭和18)	234	85.7%	21	7.7%	18	6.6%	273	100.0%	5,379
1944(昭和19)	211	86.5%	16	6.6%	17	7.0%	244	100.0%	5,623
1945(昭和20)	187	78.9%	33	13.9%	17	7.2%	237	100.0%	5,860
1946(民国35)	306	83.2%	32	8.7%	30	8.2%	368	100.0%	6,228
1947(民国36)	285	80.5%	58	16.4%	11	3.1%	354	100.0%	6,582
合計	5,470	83.1%	724	11.0%	388	5.9%	6,582	100.0%	72,791

出典：財団法人台北愛愛寮編『事業概要』、(1936年、P8～9)、(1937年、P8～9)

私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)より作成

次に表4は、1924（大正13）年から1947（昭和22）年までの愛愛寮の収容者出身地の歴年変化を示した。1945年以前の出身地名は、本省人を本島人、旅台外省人（外から台湾にきた外省人）を中華人、日籍人を内地人として種族分類をしていた。表4のこのデータの収容者数は、1924（大正13）年24名が1926（大正15）年には79名となり、1927（昭和2）年は144名と増加した。更に1928（昭和3）年には322名と大幅に増え、事業は軌道に乗ったといえる。1929（昭和4）年度版『愛愛寮概況』にはそのことについて以下のように記載されている。

本年度ハ昭和 2 年度ノ事業ヲ引続キ経営セシモノナレド特ニ本年度ニ於ケル収容者ハ一般疾病者又ハ貧困者多ク即チ実人員 322 名中前年度ヨリ引続キ収容セル者 104 名ヲ控除セル 218 名中 144 名ハ疾病者ニシテ尚収容総延人数 54,920 人中病氣治療人員 12,540 名ニ達セリ⁴¹⁾

これから、1928（昭和 3）年度の 322 名には、前年度からの収容者が 104 名（32.3%）がいたこと、その年に新規で入所した 218 名のうち、144 名（66.1%）が病人であった。なお「収容総延べ人数 54,920 人中病氣治療人員 12,540 名に達せり」とある延べ人員の総数については、表 4 の愛愛寮事業開始以来の収容者の延べ人数と違っている。一気に延べ人数が増えていることから、収容された乞食の出入りが多かったと思われたが、次女施美代によると、愛愛寮収容者は原則とし、一度退出後に再収容することはなかった。ここでいう収容総延人数の数について明らかでない。愛愛寮概況の記載では、総延べ人数のうち 12,540 名（22.8%）が病氣治療の必要な収容者であり、愛愛寮は単に収容しただけでなく、そのうち重症患者の入寮者には集中的に医療を行った。また表 4 の出身地内訳をみると、当初から 1947（昭和 22）年までの 23 年間を通して、約 8 割が本省人の収容であったことが明らかである。

表 5 に愛愛寮収容人数及び台北仁済院収容者人数比較、表 6 に愛愛寮と台北仁済院経費規模比較をそれぞれ示した⁴²⁾。愛愛寮は、台北仁済院より数倍の収容者をかかえていながら、総費は数分の 1 という少ない経費で経営されていたことが分かる⁴³⁾。表 5 の経費収入項目から、愛愛寮は台北仁済院と比較して一定収入である補助金より寄付金額が多く、収入は不安定であった。また寄付金のもとでも、国家による補助金制度よりも篤志に支えられていた。台北仁済院は、常に 37 名収容する設備であった⁴⁴⁾ ことから、愛愛寮は総督府が収容できないでいる本省人のための施設であったことが確認できる。収容総数は 1928（昭和 3）年以降 1947（昭和 22）年まで、一時期を除いて 300 名以上の多くの収容者がいたからである。

表5 愛愛寮收容人員と台北仁済院收容者(人数)

年代別	愛愛寮	台北仁済院
1924(大正13)	24	56
1925(大正14)	36	—
1926(大正15)	79	—
1927(昭和2)	144	—
1928(昭和3)	322	—
1929(昭和4)	341	67
1930(昭和5)	247	—
1931(昭和6)	367	71
1932(昭和7)	341	75
1933(昭和8)	352	—
1934(昭和9)	303	107
1935(昭和10)	340	—
1936(昭和11)	293	85
1937(昭和12)	271	75
1938(昭和13)	287	—
1939(昭和14)	280	282
1940(昭和15)	393	—
1941(昭和16)	334	—
1942(昭和17)	352	—
1943(昭和18)	273	—
1944(昭和19)	244	—
1945(昭和20)	237	—

出典:財団法人台北愛愛寮編『事業概要』(1936年・1937年)

台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』(1931年・1933年・1934年・1935年・1938年・1939年・1942年)

私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)より作成

注1)孫彰良「私的救護施設愛愛寮からみる植民地下の窮民救助」P250、表2参照

注2)「—」はデータなし。

表6 愛愛寮と台北仁済院の収入経費の比較

単位:円

	1929(昭和4)年度		1931(昭和6)年度		1932(昭和7)年度	
収入内訳項目	愛愛寮	台北仁済院	愛愛寮	台北仁済院	愛愛寮	台北仁済院
事業収入	0.00	0.00	0.00	11,521.66	0.00	0.00
奨励金、助成金	6,700.00	2,100.00	0.00	0.00	0.00	0.00
御下賜金	0.00	0.00	500.00	0.00	500.00	100.00
補助金	50.00	2,000.00	700.00	2,360.00	500.00	1,847.00
寄付金	11,842.58	125.00	11,100.51	75.00	11,093.40	485.00
会費	8,977.25	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
財産収入	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	38,797.31
前年度より繰越金	0.00	0.00	2,552.05	271.11	2,667.17	0.00
基金収入	0.00	1,386.40	0.00	38,112.10	1,778.80	0.00
その他	872.14	59,508.38	3,597.53	962.71	1,114.81	17,420.53
収入決算	28,441.97	65,119.78	18,450.09	53,302.58	17,654.18	58,649.84

出典:財団法人台北愛愛寮編『事業概要』(1936年・1937年)

台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』(1931年・1933年・1934年・1935年・1938年・1939年・1942年)

私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)より作成

注)孫彰良「私的救護施設愛愛寮からみる植民地下の窮民救助」P260～261、表8・表9参照

更にその翌年の 1929 (昭和 4) 年の『愛愛寮概況』には、收容者の入寮と退寮の状況が以下のように記載されている。

本年度中に於ける病氣治癒又は扶養者の引受けにより退寮帰宅又は正業に就きし者 79 名死亡者 65 名逃走者 19 名あり死亡率の大なる理由は重病者の入寮多く特に將に死に瀕してその所を得ざる者を殆ど一手に取扱いしに因る、即ち本寮に於いては行旅病人として取扱うべきもの瀕死の間際收容したるものなり⁴⁵⁾

表 7 にも示したが、1928（昭和 3）年度の收容者 322 名中、救護停止（愛愛寮で收容されなくなった）になったものが 163 名で、そのうち更生されたものが 79 名（48.5%）、死亡者が 65 名（39.9%）、逃走者が 19 名（11.7%）いたことになる。死亡者は收容時点で瀕死の状態であり、行旅病人（転々と移動して生活する病人）として取り扱う者を救護していたことにより救護停止者の約 40%が死亡したといえる。この死亡割合は、1935（昭和 10）年、1936（昭和 11）年それぞれ 35.4%、23.9%と減少傾向を示した。しかし 1942（昭和 17）年、1944（昭和 19）年になると各 43.4%、55.1%と増加傾向となった。表 7 を表 4 の年代別收容者出身地と照合すると、死亡割合の増加傾向時は、本省人の收容者割合が高く、逆に死亡割合の減少傾向時は、本省人のその割合が低くなっていることが分かる。この点からも愛愛寮は、台湾の社会状況の中で瀕死状態の乞食になってしまった本省人を收容していたといえる。つまり被植民である本省人は、他機関で十分に救護されなかったことになる。

表 7 愛愛寮收容者の救護停止状況(人数)

	1928(昭和3)年度	%	1935(昭和10)年度 (男/女)	%	1936(昭和11)年度 (男/女)	%	1942(昭和17)年度 (男/女)	%	1944(昭和19)年度 (男/女)	%
許可退寮	79	48.5	94(67/27)	53.7	89(59/30)	62.7	110(90/20)	50.2	59(41/18)	42.8
逃走	19	11.7	19(14/5)	10.9	19(18/1)	13.4	14(13/1)	6.4	3(3/0)	2.2
死亡	65	39.9	62(50/12)	35.4	34(29/5)	23.9	95(82/13)	43.4	76(51/25)	55.1
合計	163	100.0	175(131/44)	100.0	142(106/36)	100.0	219(185/34)	100.0	138(95/43)	100.0

出典：財団法人台北愛愛寮編『事業概要』（1936年、P7）（1937年、P7）
私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』（1945～1951年）より作成

清朝時代には、行病旅人や貧弱者を保護救済する施設として各地に「棲流所^{きりゅうじょ}」があったが、日本統治後、その事業は廃滅した。しかし内地からの流入民が多くなり、行旅病人や死亡者が増加した。そのため、総督府は、開庁の翌年 1896（明治 29）年に「行旅病人及行旅死亡人取扱規則」を制定し、1898（明治 31）年には台北県の台北市内に「行旅病人收容所」が設立された。1899（明治 32）年には、「行旅病人及び行旅死亡人取扱法」が公布され、内地と同じ処遇を受け、地方税で運営された。行旅病人の救護施設は、台北市、台中市、花蓮港庁の 3 か所にあり、そこでの收容者以外は慈恵院や医院に保護された。

行旅病人の救護の対象は本省人と内地人（日籍人）であったが、実際は日本統治全期間を通して内地人が本省人より多かった⁴⁶⁾。收容原因は伝染病が多く、1908（明治 41）年度の統計によると、マラリアで救護されたものが、内地人 93 名に対し本省人は 4 名、脚気は内地人のみで 54 名、神経系、肺結核がそれぞれ内地人は 19 名で、本省人は神経系 3 名と肺結核 2 名、消化器病が内地人 15 名、本省人 2 名であり、全救護者 263 名の割合は内地人が 241 名（91.6%）、本省人 21 名（8.0%）、外国人が 1 名（0.4%）であったとされる⁴⁷⁾。これらの状況から、本省人の行旅病人は、総督府の機関の施設ではなく、愛愛寮で保護救済

を受けていた。この点からしても、愛愛寮は民間の施設として、政府の救護政策を補完する重要な役割を果たしていたといえよう。

1938（昭和 13）年度の『社会事業要覧』によると、行旅病人の救護施設は、内地からの移住の多かった台北市では内地人が多く、内地からの移住の少ない台中では本省人の収容が多かったとする⁴⁸⁾。総督府は、まず本島に行旅死病人の内地人が多いため、1899（明治 32）年に「行旅病人及び行旅死亡人取扱法」を本島に施行した。救護費用は地方税で賄われ、その救護種目等は制限された。同じ 1899（明治 32）年に総督府は一般救護法である「台湾窮民救助規則」を發布した⁴⁹⁾。この規則により州費又は地方費を以って食料費、被服費、治療費等を支出し救助した。清国時代より実施されていた慈善事業は、総督府がこの年に台北仁済院を台北に、台南慈恵院を台南に、1901（明治 34）年澎湖普濟院を媽宮に、1904（明治 37）年彰化慈恵院を彰化に、1906（明治 39）年嘉義慈恵院を嘉義にそれぞれ開設し、引き続き実施された⁵⁰⁾。愛愛寮の近くには、先述したように行旅病人収容所や台北仁済院が政府の機関としてあった。しかし総督府は内地人の救護を優先させたため、本省人の救護まで手が回らず、本省人である施乾が経営する愛愛寮にそれを任せていたのであろう。しかも愛愛寮経営に十分な補助をしなかったため、このことが経営者を資金不足で悩ませた理由の一つになっている。

ともあれ総督府は、1920（大正 9）年代以降の窮民の増大に対応できず、個人や民間の窮民救助の補完が必要であった。

（4）愛愛寮の経営状況

前述したように、1922（大正 12）年に自己資金により 1,000 坪の墓地を買い、翌 23 年（大正 13 年）そこに愛愛寮を設立（創設費 450 円）した。木造平家 2 棟（52 坪）の建設材料は、裕福な親戚施坤山から提供された。1929（昭和 4 年）発行の『愛愛寮状況』によれば、1925（大正 14）年に 1,900 円余りで棟瓦造 2 階建 1 棟（54 坪）新築、1927 年棟瓦造 2 階建 1 棟（72 坪）8,500 円余りで増築及び棟瓦造 1 階建 1 棟（16 坪）診療所を建設した⁵¹⁾。これで愛愛寮は 5 棟 194 坪の敷地建物となった。

この建物の資金と収容者の生活資金をどう工面していくかが、施乾の悩みであった。愛愛寮の経営主体は会員組織であった。収入財源は、一般会員と特別会員組織による会費で賄われていた。台北仁済院の場合、1923（大正 12）年の民法改正で財団に変わったが、愛愛寮のような寄付金収入は少なく、基金等の安定収入があった。維持の方法は御下賜金、補助金、会費、寄附金及び雑収入金になっている⁵²⁾。それに対し愛愛寮の基本金は 400 円でその内訳は、昭和 4 年 2 月 12 日宮内省御下賜金 100 円、昭和 3 年 11 月 10 日明治大正両救済会助成金 200 円、昭和 4 年 2 月 12 日台北州助成金 100 円であった⁵³⁾。この基本金は台湾銀行へ一部預金し、藤細工授産部の資金として愛愛寮の授産施設へ貸し出したようだ⁵⁴⁾。

経費の現状収入（1 か月分）は一定収入の会費が「金 639 円 50 銭」、不定収入の寄付金が「金約 300 円」あり、合計「金約 900 円余」であった。会費は一口 25 銭で会員 2,558 名であったが、1929（昭和 4）年 9 月には「近時會費滯納著シク多ク寄附減少ノ傾向」⁵⁵⁾にあって

た。一方支出（1 か月分）は「金 1,200 円」で「以上ハ最低限度ノ費用デス」⁵⁶⁾と追記している。これらから 1 か月分の不足額は「金約 300 円」となった。それも不定収入を入れての額であり、いかに経費が不足していたかが窺える。

そこで、『乞食撲滅論』の中の「愛愛寮」の項によれば、1925（大正 14）年の 1 月に『乞食社会の生活』を出版（代価 1 円 50 銭）したところ、2,000 部の内 1,500 部売れ、更に篤志家の援助を合わせて 2,000 円の収入があり、それらに依って無理矢理今日まで収入範囲内で経費支出を「押し通してきた」という⁵⁷⁾。収容者の更正のための永久的な寮舎（工場、寝室、医療室、食堂、炊事場、風呂場、便所等）を新築し、その返済と収容者の生活費で財政は苦しかったと思われる。財源確保のため、更に同年 12 月に『乞食撲滅論』を発行（代価 35 銭）した。勿論この利益金は事業費に当てるので、「どうかどうか人道の為に喜捨なさるお考えで誰でも彼でも一部買って下さい」⁵⁸⁾と切願している。

更に 1929（昭和 4）年 9 月には声明文を公示し、資金調達を図った。それについて、施乾は「血と涙を以て尽したる処の声明書」を発したという⁵⁹⁾。声明文は、1929（昭和 4）年の 9 月に出されたものであるが、「市民如再冷淡、愛愛寮必行解散」と副題をつけている。その内容は、市民が街から乞食がいなくなったことで、かつて乞食に悩まされていたことを昔のこととして忘れてしまい、そのため愛愛寮への寄付が滞っており、愛愛寮は経営難の状況であることを綴ったもので、市民への会費や寄付の依頼文となっている。このような声明文を施乾が市民にアピールする目的は、愛愛寮の経済基盤が会員による会費に依存しており、その収入が不足し、経営が困難になっており、資金確保の必要があったからである。施乾が個人経営で設立した愛愛寮の資金調達がいかに困難であったかをその声明書に次のように述べている。

聲明書

市民如再冷淡、愛愛寮必行解散

夫愛愛寮是否有存在價值知問題。更無俟於喋喋爭論知必要。市民諸彦早以了然。然當此愛愛寮為經濟壓迫、徘徊於存亡未卜之秋。苟非費些口舌、簡單申告數語、以促市民諸彦最後之良心的判斷、則愛愛寮沒有苟延喘息之希望也。

蓋如愛愛寮之社會的事業者、非一人之財力所能維持、倘非待乎民眾之自覺、眾力之相扶、則其目的不得而達者明矣。

余當初竊思乞丐為與民眾有最直接利害之關係、當地為臺灣首都、仁富之士頗夥、兼之市民計達二十餘萬、諒不受經濟之困、故毅然計畫收容全市之乞丐。奔走各方、求其了解。當其時也、有一方聲明「不惜鼎力、以一臂相助」者、忽然反受其種々障害、遂決斷一切以自力主義進行、而獨力開始活動矣。

際此之時、幸得各方面之同情、在市內所募集收容所建設基金、計達三千八百元左右。按其數、雖有莫大之不足、不獲以乃急々完備收容所、而著手收容矣。嗣後更為問題者、乃係收容後之維持費一節、殆至二個月後、始得稍々開始會員募集、但夫搖尾乞憐之事、

誠非易々、幾乎嘔盡心血、雖至市上無一臭爛之乞丐、而盡收於愛愛寮、亦難承其贊同、此仰爲同志募集員之無能乎？仰爲市民之冷血緒？余誠不得而知也。

按當時會員口數、雖約募集二千餘口（即每月金約五百圓）而其日已遷延半載有餘。且能承其良心的之加入者、不過時常給與乞丐之半額、（即十口每月金二圓五角）。況此種之口數在於最繁昌之永樂町諸大寶號、亦屬星稀不得多見、其他則可推想而知。以愛愛寮爲一種贅物、如給與乞丐者然、擲捨些兒之欸。此雖爲忍不可之處、然尚可得若干金欸、亦頗值脫帽稱謝。況夫所謂紳士者、則流於不道德之行爲、而忘卻昔日被乞丐纏擾、身居大廈高樓、以行一毛不拔之旨、其所表示吝嗇之態度、而令人嘔吐不已者、殊不乏其人也。

由是觀之、市民諸彥、肯得以舉手之勞、而相贊助者、誠十無一焉。夫前述之會費二千口、業已不足、況自收容乞丐之日起、至募達此口數止、此間所要費用、究竟從何而出一節、敢煩市民諸彥加以考慮。由是可知、著手之當初經濟業已甚缺、嗣後又繼續不足、雖經余空拳善變慘澹經營、但困窮之苦、無時或釋。而余所受之苦楚、諒諸彥難以想及矣。

嗚呼！乞丐之姿、業經遠離市民之眼稍、有損堂月日之今日、市民似乎唯以「乞丐不來攪擾爲佳」而已、寄附唯難、會費日日特有滯留之慘色。市民諸彥則不之顧也、夫市民之不愿負擔者、既日增其數、則愛愛寮自失其經營之可能性也。

竊思臺北市民、擁有二十餘萬之眾、假定一人一錢則有二千餘圓之多。言雖如是、眾人皆以爲「自己不須提出、以他人提出業已過多」。或者、以爲「自己若提出過多、則不過多爲愛愛寮所賺而已」。故遂淹沒其天良之心、社會諸彥、雖有如斯之眾、祇因有此不清不明之思維、入余念頭、故愛愛寮遂有此傾頹之厄。於雖限入此種困境之境、尚苦心講究對策、以其打開此十八層地獄、日夜憂思積慮、搔首問天。無妙！對手爲大眾、故亦無術可施矣。

時有仁人告余曰「市民以如是忘卻昔日被臭爛乞丐糾纏之煩惱、可再放出臭物以引起其感覺」。於聞之、亦以爲然。每欲對此拼命斷行、但不知何故、對余之良心上、總覺缺有決斷之勇敢。至於今日、可惜貸借無門、賒取無方、如是進退唯谷、左右受難、而余又乏點金術、奈何！奈何！

哀哉！吾臺北之神商乎！勿以善小而不爲！勿以惡小而爲之！勿徒以香楮牲儀而禱冥福！勿以相類墜落而不救、勿以眾事而避己！勿以專尚無益之虛榮、須知余今日之經營愛愛寮者、不過爲市民之奴僕！

余竊思之、夫愛愛寮之解散、雖表示施乾之無能、而自引以爲恥、但反想二十餘萬之市民與及所謂臺灣一流紳士豪商、既目睹愛愛寮之崩頹、莫無關心、是施某之無能、乃不能也、非不爲也、較之諸紳商之不爲也、非不能也、亦可以解嘲矣。嗚呼市民諸彥、當此時此際、尚表出一種風馬牛不相及之態度者、豈非令雖索乎！

有如上述之苦情、故余不避刀斧、直言申告、社會諸彥若以愛愛寮有存在之價值、則希勿再避則以區々經費躊躇不施。倘若依然、木立不顧、余對此愛愛寮、則不得不決行解

散。此時唯有對歷來援助愛愛寮諸君子、敦謝不敏而已。

市民大眾！各為豪商！紳士諸彥！此係我臺人之體面、敢請參思。特此聲明。

昭和四年九月三日

臺北市綠町五丁目十六番地

愛 愛 寮

施

乾

臺北市民公鑒

臺北市綠町五丁目十六番地

發行人 施 乾

臺北市新富町一丁目一九四番地

昭和四年八月四日印刷

印刷人 蔡 寶

昭和四年九月三日發行

印刷者 光 明 社⁶⁰⁾

声明書

市民の再度冷淡、愛愛寮の解散

愛愛寮は存在の価値があるかどうか、いまさら言葉であらわそうまでもなく、市民のみなさんが既に心の中に良く分かっているはず。しかしいま愛愛寮は経済的な苦境にあえぎ、存立できるかの関門に立たされている。だから簡単に事態を申し上げ、良心的な判断に委ねなければ、愛愛寮が生き残れる見込みがないのです。

愛愛寮のような社会事業は決して個人の財力で維持できるものでなく、あくまでも民衆の自覚、みなさんの助けを得なければ、期待の目的達成は不可能であることは目に見えているはずです。

私は、この愛愛寮を作る前に、台湾第一の大都市で、民衆と直接利害関係を持っている乞食に対して愛と富を持っている人も多いと思いました。しかも台北市の総人口数も20万以上がいたので事業を起こしても運営にはあまり困らないであろうと樂觀視し、毅然として全台北市の乞食を收容する計画を立て、理解者を得るためあちこちを走り回りました。ついに全力を尽くして手伝いましょうという人が現れたのです。ただその後この方から種々の障害を受けたので、ついに自力主義で行くことを決め、独力でこの事業を始めたのです。

あの時、幸い各方面から同情を得られて市民の收容所建設基金の募集で約3,800円を得ました。所要経費にはかなり不足しているのですが、やむを得ず收容所の設備を充実し、收容者増に踏み切ったのです。その後問題になったのは維持費のことで、開所2か月後会員の募集を行いました。人から同情を得ることはなかなかむずかしいのです。臭くてきたない乞食を全部愛愛院に收容しても、会員は加入に同意してくれないので、これは私を含めた職員の無能というのか、市民の冷血というのか、私の知るところではないのです。

あの時の会員口数は確かに2,000余口（即毎月金500円位）、しかし既に開所してか

ら半年以上たちました。この加入金は普段乞食に与える金額の半分ぐらいしかない（即ち10口は毎月会員費2円50銭をおさめる）。（毎月乞食には5円ぐらいわたすの意味）。この口数を得られるところは台北市内一番商売繁盛の永楽町あたりでもなかなか応じるところが少ないのです。その他は想像がつくでしょう。愛愛寮を余計なもののように乞食に心なしに与える仕草で僅かな金銭をくれるのです。これはましなほうで、いわゆる紳士たちは昔乞食に取り囲まれた思いを忘れて、立派な建物に住みながら一銭も出さないけちな人間も少なくないのです。

だから市民で援助人は、10名中1名といった位惨めな状況です。会員費2,000口はすでに不足ですが、この募集期間の維持費はどこからでるか、みなさん考えて下さい。収容に着手したときからすでに経済的な苦境に直面しているので、いくら惨めな経営といっても限度があります。私の苦痛をみなさんは想像できるでしょう。

ああ、乞食の姿は消したが、市民たちは、「乞食が困らすことがないから良い」としと思わないのです。寄付してくれる会費も、よく遅納する。これらのことは、市民たちが全然関心を示してくれないからです。市民が負担してくれない以上、乞食の数が日に増え続ける愛愛寮の経営はなりたたず、存立の可能性を失いつつあることは明白であります。

台北市民は20万以上もいる。1名1銭を出せば、2,000円以上になる。しかし一般市民はすでに「他の人がだすから、資金を余り出さなくてよい」とか、或いは「自分が出しすぎると、愛愛寮のもうけになる」と考え、出ししぶるのです。市民たちがこのようなマイナスの考えをし、ついに愛愛寮が傾きつつあるのです。この苦境に立ちながら対策を考慮し、難局を打開しようと目論みますが、あいにく対策は一般市民で、ほとんどなすすべがないのが実情です。時には人から、「市民たちは、臭くて汚い乞食が困らしたことを忘れたから、これらの臭いものを放り出せば、彼らは、昔の記憶を甦らすことができているじゃないか」と勧めてくれました。自分もその通りと思い、断行しようと考えたことがあるが、どういうわけか自分の良心がどうしても許さず、そのまま決心がつかないまま、今日までできました。しかし資金の方はどうするかというジレンマに直面しています。どうすればいいのでしょうか。

ああ、台北の紳商たちは、善は小さくて為さず、悪は少なくとも成すべからずなのです。冥福を得るために大きな豚を供えるのも顧みないで、どうして同じ人間に援助の手を差し伸べられないのでしょうか。乞食のことは、みんなのことですが、自分からいさぎよく無益の虚栄に走ってはいけません。私は、いま愛愛寮を経営するのも市民の僕としての働きにすぎません。

愛愛寮の解散は施乾の無能で恥じるべきことですが、20万余りの市民と台湾一流の紳商により、愛愛寮はこれらの人たちの無関心によって経営ができなくなるのです。私は無能ではありますが、全くの不能ではありません。紳商たちが何もしないよりましだと思い、これではせめての自分へのなぐさめです。

あー、市民たち、このときも自分と関係がないという態度をもちつづければ、まさに心寒のかぎりです。

以上直接愛愛寮の苦情を率直に申し上げるのですが、社会のみなさん愛愛寮の存在価値があると思えば、わずかな経費に躊躇して出し惜しみをおやめください。そうでなければ、愛愛寮はただ解散の道しか残っていないのです。そうなれば愛愛寮に援助していただいたかたがたに申し訳ないのですが。

市民のみなさん、各位豪商・紳士のみなさん、台湾人の体面に関わるものですからよく考えてください。

昭和4年9月3日

その当時の状況が明らかになるので全文を掲載し、日本語訳をつけた。その声明書の末尾で、「市民のみなさん」と呼びかけ、台湾人の体面にかけてこの声明内容を良く考えて欲しいという訴えである。市民という言葉以外に何度か紳商と言っているが、なぜだろうか。それはあくまでも紳商は台北市民に入るけれど、この紳商たちは、清朝時代からの保甲制度の担い手であり、地域のまとめ役であったためである。施乾は台湾人のために、乞食撲滅を図ろうとしたことがこの声明文から読み取れる。その当時乞食収容者の約80%が台湾人であった（表4参照）ことからしても、広く台北市の市民に寄付を依頼した⁶¹⁾。

その後篤志家の同情によって、援助が受けられ、一時経済的に安定したが、翌年の昭和5年の末より不況が深刻化し、退会者、減額者、滞納者が続出した。その後もますます愛愛寮の経済状況の悪化により、近い将来苦境に陥ることが明白な事実であると施乾は苦慮した⁶²⁾。

愛愛寮と同様に乞食を収容する台南愛護会が1929（昭和4）年7月に建設された際、募金が好成績をあげて相当の資金が集まったが、愛愛寮の募集成績は話にならないほど少なかった。特に維持費の口数も、最高で愛愛寮は20口（月5円）であるが台南愛護会は100口（月30円）と多かった⁶³⁾。このように台南愛護会の会費を高額にできるのは、台南愛護会が同市民間有志により設立されたものであり、会員の意識がもともと高かったことにあると思われる。それに比べ、愛愛寮は施乾個人の設立であり、愛愛寮の会員意識は低く、施乾に要請されて初めて寄付への行動につながったのではないか。また台南愛護会の会員は有志であるために資産家が多いと思われるが、愛愛寮の会員は全市民を対象にしており、寄付ができるような余裕がない者も含まれているのであろう。更に地域性も会費の額に反映したであろう。台南愛護会は、台南市にあり、愛愛寮のある台北市より歴史的に早くから開かれた町であり、富者が多く、成熟した有志会員が多かったことや、清朝時代からの困っている人を助けるという富者の役割期待が地域の基盤としてあったことが要因になったのではないだろうか。

それ比べ、台北市は新しい都市であり、地方からの流入者も多い。当然寄付への考え方も様々であろうし、貧富の差もあろう。その中で施乾が台北市民全員に寄付会員になるよ

う意識改革を図ろうとすることは非常な困難が伴っていたに違いない。この点について施乾は愚痴をこぼすわけではないがと言いながら、なぜ愛愛寮が経営難になるのかを以下のように分析している⁶⁴⁾。

まず施乾は、市民の自由意思による募集は困難であるという。愛愛寮と会員（経営の支持者）との間に何等の統制的関係がなく、自由放任主義であり、「無政府性」であることが根本的な原因であるとする。愛愛寮の設立当初、その存在価値を認識し、かつ感謝と責任の意思を表示するために会員に加入していた市民は、乞食が目前から遠ざかると当初の気持ちから脳裏から消失し、感謝は当然へと変わり、退会や減額をする。なお新しくできた商店は既に乞食問題で困ることがなく、愛愛寮に対する認識は自然と薄くなり、会員になろうとしないという。次に施乾は、市民の多くが愛愛寮を社会事業と認めるより 1 個の単なる乞食収容所として理解し、乞食による煩いから逃れることに重点を置いた市民の利己的な考えでしかないとする⁶⁵⁾。

それにしても、乞食が施し物を請う対象者は市民全体であり、市民全員が乞食を迷惑とするにもかかわらず、一部少数者だけで会員になって負担するのは、客観的には不合理である。そこで施乾は、今後の統制経営案として本島唯一の自治機関であり、警察の補助機関である保甲団体を主体とする経営案を台北州庁へ提出したが、その案は認められなかったようだ⁶⁶⁾。

日本統治初期の台湾には保甲制度があったが、台湾総督府の方面制度の強化とともに保甲制度は形骸化していった。そこで施乾は、愛愛寮の後の統制経営案として、かつて活発な活動をしていた保甲制度に目をつけ、その担い手であった紳商や豪商に対し資金援助をさせるように請うた。つまり施乾は保甲団体を主体とした公共団体により愛愛寮を経営しようとした。また愛愛寮の会員維持費が台南市にある台南愛護会のそれより少なかったことについては、台北市は台南市より近代文明の都市に近く、市民は進歩をする反面功利主義的存在であり、台南市のような地方に於ける、弱者救済への思いやりが欠けることも施乾は指摘していた⁶⁷⁾。

このような地域の特性のある台北市で、乞食の収容に実績のある愛愛寮に対して、総督府は十分な資金援助をしないどころか、愛愛寮の継続困難な状態を施設管理者に任せ、逃げ腰であったといえる。また施乾は市内の有志者を愛愛寮に招待して協力を依頼したが、結局「手をつけたら後がウルサイ」と思われ、施乾を信用しているからという理由（有志者は放置し、施乾に一任しているという理由：引用者注）で有志者も協力を避けた⁶⁸⁾。

台北市医療救護事業においても、台北市には私設医療として、愛愛寮の他に台北仁濟園（帝国大学付属病院）、日本赤十字社台湾支部医院、馬楷医院、林本源博愛医院があったことは前述した通りである。1925（昭和 3）年における愛愛寮の資産は 29,233 円であったが、どの医院よりも少なく、他はその 2.5 倍から 12 倍以上であった⁶⁹⁾。愛愛寮は創設費 450 円であったが、御下賜金等で資産を 65 倍に増やした。しかし収容者数からみて、それがいかに少ない資産で運営されていたかが分かる。

また当時の役職員は、役員として顧問 3 名、評議員若干名、職員は、寮主寮監 1 名、寮監 2 名、寮医 2 名、寮務員 4 名、傭員 2 名、籐製部教師 1 名、医療助手 1 名、薬局生 1 名、看護婦 1 名で、実質の職員総数は 13 名で、囑託の医師がそれに加わった⁷⁰⁾。

この人数で、実収容人員の 322 名を担当するとして、1 名が約 25 名を 24 時間救護することになる。1925（昭和 3）年度の死者は 65 名であり、各職員は年間 5 名の重症者の救護を実施したといえる。しかも、どの職員も救護を同じようにできるはずがないことは職員職種からも明らかであるが、実際どのような経営がなされ、台湾で重要な救護施設として存続できたのかは不明である。しかし筆者の推論の域を出ないが、施乾の強いリーダーシップのもとで、職員全員が寝食を共にして 24 時間連携を密に効率よく、優先度を考えて救護をしたのではないだろうか。

また施乾は乞食の多数は「労働可能者」⁷¹⁾と分析し、その分析は、前述したように乞食を更正させるための授産方針が明確であり、どの職員も協調性の維持ができたと思われる。更に重症者の多い愛愛寮入所者は、治療実験の段階からの最先端治療を受け、病気治療を積極的に行った。次女施美代によると、施乾の同級生等に医者が多く、彼らの援助があったという⁷²⁾。前述した杜聡明はアヘン治療の研究もあり、部下の医師を連れて治療にあたり、医師の人材確保ができていたことも愛愛寮で重症者の収容が可能になったのではないかと考えられる。

1928 年（昭和 3）年からその後 1947（昭和 22）年までの期間、収容者は常時約 300 名、であった（表 4）。収容者 159 名（1928 年）⁷³⁾の原籍別人員状況は、台北州管内 106 名、新竹州管内 20 名、台南州管内 2 名、高雄州管内 3 名、その他 20 名であり、その当時の 5 州全領域に及んでいた⁷⁴⁾。

1947（昭和 22）年頃までの収容者の出身地をみると、総収容者の約 85%以上が本省人（台湾人）であり、旅台外省人（中華人）や日籍人（内地人）は少なかったことは前述したとおりである。愛愛寮は主に本省人の施設であった。本省人である施乾は、個人で設立した愛愛寮の資金不足で運営の継続が困難になったとき、「活きている同胞の精神、或は肉体を見殺しにしなければならぬようになる」と悩んだ⁷⁵⁾。貧しい台湾人の生活を改善させ、人間的な社会生活をさせたいという施乾の訴えは、表 4 の収容者の出身地から推測できる。すなわち愛愛寮収容者の 80%以上は、施乾と同じ本省人であった。

杵淵は、前述した清朝時代の窮民救助事業において、救助機関としてではなく、富者が年末や年始、一家の吉凶時等に乞食へ金品を施す慈善事業が、富者自身のプライドを高めるものになっていたと指摘する⁷⁶⁾。富者が貧者を助けるという道徳的な社会事業の理想になっていないことを非難しながらも、理想が実現できていない台湾においてこの慈善事業を拒めないとしている⁷⁷⁾。

しかし、施乾はそのような慈善事業は偽善事業であるとした⁷⁸⁾。施乾は、「全世界を風靡した不景気が日に日に深刻化して今や孤島の我が台湾の偏僻な農村を腐蝕し、多くの農民は青天の下に唾を吞んで餓死を待ってゐる状態である」と認識した上で、「不況に伴う貧

乏者の増加延いては窮迫の果ては途頭（路頭：引用者注）に迷ふて乞食を余儀なくされることは明白な事実である」として、貧富の格差は拡大し、大量の乞食が生み出されてきたと考えた。しかも彼は、「乞食の世界に入るや同時にその生活は社会から保障されてゐるのみならず、そのために社会の蒙る有形無形の損失の如何に莫大なる（それは直接関係を有つ一般本島人民衆以外にあづかり知るところでない）かを考慮に入れた場合」と、乞食への偽善による社会保障や一般本島人民衆以外に乞食による社会的な損失が分からないことを指摘した⁷⁹⁾。

その頃林献堂（1881～1956年）のような本省人の中で、植民地政策の貧富格差による政治に反対する自治運動が活発であった。施乾は、その当時「今、吾人がここに社会主義者の及至共產主義者の、所謂破壊思想的、根本的、社会改革の立場に従えば、現時の資本主義経済組織を根底より破壊し、之に代るべき新しき共存共栄の制度組織を以てするにあらざれば、もはや今日の社会は、如何とも度すべからざるものの如く、言ひ振らすであらうが、しかし吾人が今、これが是非を云々するに先立ち、ここに個人としては自己反省に対する怠らざる努力と、社会人としては社会批評者のひとりとして常に、深く広く社会を疑視めねばならぬ」と考えた⁸⁰⁾。そしてまず彼は、乞食撲滅により彼自身から社会に向けて良くしなければならぬと感じていたようである。

このように植民地政策の矛盾を十分に感じとっていたにもかかわらず、愛愛寮の経営の第一義的目的が乞食撲滅であることを施乾は強調した。そして植民地政策から発生した乞食への救済を、彼らも人間としての生活ができるようにという道徳的な真の慈善事業を施乾は求めたのである。その後も彼は、植民地政策への直接的な政治批判をしなかった。そのことについて大業大学工業関係学系の助理教授李健鴻は施乾について以下のようにいっている。

施乾認為慈善与施捨的心態与措施非常錯誤，他甚至很嚴厲的批評，這種消極性、短暫性的慈善施捨導致乞丐永遠存在，是慈善倫理的錯置，所以他要提唱積極性的、預防性的乞丐政策⁸¹⁾。

施乾は慈善家といいながらそれを捨てるという心変わりが激しい。彼はまた慈善について厳しい批判をしながら、その後消極的になる。少しの期間で慈善の気持ちを捨てたが、乞食の救済は永遠であった。これは慈善の倫理的な処遇であり、だから彼は、積極的に乞食撲滅の予防政策を提唱した。

李健鴻は、施乾の「心変わり」を批判はしているが、「乞食の救済」は不変であったことを評価している。前述したように施乾は、保甲団体を主体とする統制経営案が認められなければ、愛愛寮の解散になると言った。しかしながら、それが総督府に認められなかった結果、翌年の1933（昭和8）年、彼は方面委員が代表者となることを受け入れた。このこと

も「心変わり」といえるのかどうかは議論の余地がある。。総督府との関係は微妙であるが、次女施美代によると、設立当初から愛愛院は、政治との直接的な関与はなく、政治体制が変わっても施設経営に直接的な影響はなかったという⁸²⁾。

施乾の没後、施照子が同じ理念で、独裁者による国民党政権下で事業が継続していったのは、施乾と同じく、政治方針に直接的に関与せず、実践に専念したからであろう。

次に1928（昭和3）年度から1943（昭和18）年度の愛愛寮の収支決算状況を表8に示した。施乾は、将来の計画で、前述したように授産問題を重視し、その資金を必要とした⁸³⁾。その中で、施乾は、1928（昭和3）年の資金欠乏により不完全な一時的施設では、授産の徹底が図れないことが一番の重要問題であるとして、その解決に取り組んできた。

ところで1928（昭和3）年の授産部の状況は、「籐細工11名 毛ハタキ8名 家畜3名 出稼（車夫）4名 什役（寮内）5名 計31名」であった⁸⁴⁾。

1928（昭和3）年の収容者が322名であり、授産施設で働けたのは31名で、それは全収容者の9.6%と少ない。当時の授産の収入額は、明らかでないが、1928（昭和3）年度の雑収入180.98円に含まれていると考えられる（表8）。雑収入は、1936（昭和11）年度には約6,000円まで増え、1942（昭和17）年度は約2,500円と減額になった。雑収入が総収入に占める割合は、1928（昭和3）年が1.1%、で1936年は33.1%と多くなったが、1942（昭和17）年度は12.7%と減少した。愛愛寮規約の五、「維持」項目に雑収入の内訳として「授産部収益」と「其の他雑収入」と記載されている⁸⁵⁾。その後の「愛愛寮概況」にも授産部収益についての記載がないため、雑収入の変化から授産部収入の増減を推測するしかないと思われる。

表8 愛愛寮の収支決算状況

単位：円

収入	1928(昭和3)年度決算	%	1935年(昭和10)年度決算	%	1936(昭和11)年度決算	%	* 1937(昭和12)年度予算	%	1942(昭和17)年度決算	%	* 1943(昭和18)年度予算	%
奨励金、助成金	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
御下賜金	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
補助金	1,000.00	6.1%	1,750.00	13.4%	1,400.00	7.8%	2,100.00	13.7%	2,050.00	10.5%	1,950.00	9.5%
寄付金	6,325.20	38.8%	8,199.38	62.6%	7,411.26	41.4%	6,700.00	43.8%	9,717.60	49.8%	10,000.00	48.9%
会費	6,871.05	42.1%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
前年度よりの繰越金	32.97	0.2%	632.94	4.8%	1,061.98	5.9%	500.00	3.3%	924.58	4.7%	500.00	2.4%
基金収入	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
受託料(精神病者、普通患者)	0.00	0.0%	2,114.00	16.1%	2,116.42	11.8%	4,000.00	26.1%	4,043.75	20.7%	5,500.00	26.9%
雑収入	180.98	1.1%	404.80	3.1%	5,919.54	33.1%	2,000.00	13.1%	2,486.59	12.7%	1,495.00	7.3%
特別会計資金繰り越し	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	300.00	1.5%	1,000.00	4.9%
借入金	1,910.28	11.7%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
合計	16,320.48	100.0%	13,101.12	100.0%	17,909.20	100.0%	15,300.00	100.0%	19,522.52	100.0%	20,445.00	100.0%
支出												
事務費	1,547.28	9.5%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
事業費	12,208.87	74.8%	8,199.00	68.1%	7,938.03	47.9%	9,355.00	61.1%	12,602.11	66.3%	13,090.00	64.0%
基金繰入	0.00	0.0%	500.00	4.2%	1,000.00	6.0%	50.00	0.3%	100.00	0.5%	100.00	0.5%
営繕費	501.64	3.1%	163.33	1.4%	358.88	2.2%	300.00	2.0%	592.66	3.1%	500.00	2.4%
償却費	685.00	4.1%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
財産管理費	0.00	0.0%	268.93	2.2%	196.50	1.2%	120.00	0.8%	135.23	0.7%	155.00	0.8%
授産費	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
寮費(1947より院費)	0.00	0.0%	2,907.78	24.2%	5,915.38	35.7%	4,635.00	30.3%	5,491.42	28.9%	5,980.00	29.2%
簡易保険料	0.00	0.0%	0.00	0.0%	481.83	2.9%	240.00	1.6%	99.82	0.5%	120.00	0.6%
繰越金	45.75	0.3%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
予備費	183.94	1.1%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	600.00	3.9%	0.00	0.0%	500.00	2.4%
仮払金	1,168.00	7.2%	0.00	0.0%	682.50	4.1%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
その他	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
合計	16,320.48	100.0%	12,039.04	100.0%	16,573.12	100.0%	15,300.00	100.0%	19,021.24	100.0%	20,445.00	100.0%
差	0.00		1,062.08		1,336.08		0.00		501.28		0.00	

出典：施設『愛愛寮概況』(1929年)、財団法人台北愛愛寮編『事業概要』(1936・1937年)、私立台北愛愛教済院編『事業概況集—民国34年起』(1945年～1951年)より作成『事業概況集—民国34年起』(1945年～1951年)より作成

* 1937年度、1943年度は予算のみのデータあり。

表9 愛愛寮の補助金・寄付金の内訳

単位:円

補助金・寄付金収入	1928(昭和3)年度決算	全収入に占める割合	1935年(昭和10)度決算	全収入に占める割合
補助金	1,000.00	6.1%	1,750.00	13.4%
台北州補助金	500.00		500.00	
台北市補助金	0.00		300.00	
台北仁済院よりの救助費	500.00		0.00	
御下賜金	0.00		500.00	
台北市助成会助成金	0.00		250.00	
台湾婦人慈善会補助金	0.00		200.00	
寄付金	6,325.20	38.8%	8,199.38	62.6%
台北州管内寄付金	357.20		0.00	
台北州管外寄付金	2,768.00		0.00	
定額寄付金	0.00		5077.39(会費含む)	
普通寄付金	0.00		3,121.99	
会費	6,871.05	42.1%	—	—

出典:財団法人台北愛愛寮編『事業概要』(1936年・1937年)より作成

注)「—」はデータなし。

1928(昭和3)年度収入決算補助金・寄付金の内訳(表9)をみると、補助金1,000円は台北州補助金500円、台北仁済院よりの救助費500円であり、寄付金の6,325円は台北州管内寄付金3,572円、州外寄付金2,768円であった⁸⁶⁾。収入は寄付金と会費で約80%余りを占めていたことが分かる。そのために、施乾は市民へ出版物や声明文の公示で資金協力を必死で求めたのであろう。

1935(昭和10)年度収入決算内訳によると会費の項目が削除され、寄付金に含まれている。寄付金8,199.38円の内訳は、定額寄付金5,077.39円(市内1,075戸定額寄付)、普通寄付金3,121.99円(市助成会歳暮慰問金350円、白米募集495円、年末募合金、315円50、任意寄付金945.49円)であった⁸⁷⁾。補助金1,750.00円の内訳は、御下賜金500円(2月11日紀元節御下賜金)、州補助金500円(台北州經常費補助金)、市補助金300円(台北市經常費補助金)、台北市助成会助成金250円(台北市社会事業助成会助成金)、台湾婦人慈善会補助金200円となっている⁸⁸⁾。寄付金と補助金収入が全体の約80%弱に減り、1928(昭和3)年度と同じ収容者数を抱え、経済的基盤の確保に施乾は苦勞したと思われる。その後1936(昭和11)、1937(昭和12)、1942(昭和17)、1943(昭和18)各年度における全収入の寄付金と補助金合計が占める割合(表8)は、それぞれ49.2%、57.5%、60.3%、58.4%と更に減り⁸⁹⁾、毎年施乾は愛愛寮の経営に四苦八苦していたのである。

本章では、施乾が愛愛寮をどのように経営したのかを明らかにした。彼は愛愛寮の資金調達に苦勞し、声明書を発表して広く台北市民からの資金確保に努めた。しかしその声明書だけでは限界を感じ、彼は、1932(昭和7)年に「台北愛愛寮統制経営案」を出したのである。この案は、愛愛寮が無統制な個人の経営であり、資金確保が困難であるため、統制のある法人組織にして経営を安定させようとするものであった。こうして彼は、かつての行政と警察の任務機関であった保甲団体を主体とする愛愛寮の経営案を考えるに至った。彼の目的は、乞食根絶事業が地域で生活する市民の事業であり、台湾唯一の自治機関である保甲団体が愛愛寮の経営をすることを妥当とし、資金確保ができることであったが、前述したように実現しなかった。施乾は、乞食撲滅という先端をいく「社会改革者」であっ

たが、その救済策として、日本統治前に機能していた保甲制度の活用を考えたのも、施乾が台湾人であったからである。施乾が愛愛寮を経営したのは、台湾全域から乞食を撲滅することであったが、台湾州や台北市政府の援助は少なく、また有職者の協力も得られなかった。しかし、彼は乞食撲滅に向けて偽善を許さない彼の一途な姿勢を貫くのである。

注

- 1) 施乾『乞食社会の生活(附) 乞食救済策』愛愛寮刊、1925年1月。

日本語で書かれた原著(A5)が台北県政府文献館に所蔵されていた。中国語訳は、施乾・李天贈訳『孤苦人群録』台北県立文化中心、1994年があり、台北県立文化センターで提供を受けた。

- 2) 施乾『乞食撲滅論＝社会問題の根本問題＝』1925年12月。

日本語で書かれた原著(A5版)が台北県政府文献館に所蔵されていた。1)と同様に、中国語で書かれたものは、施乾、李天贈訳『孤苦人群録』台北県立文化中心から提供を受けた。

- 3) 同上、「おことわり」『乞食撲滅論』1～4頁

- 4) 同上、「宣言」『乞食撲滅論』1～2頁

- 5) 同上

- 6) 同上、『乞食撲滅論』33頁

- 7) 同上、10～11頁

- 8) 同上、11頁

- 9) 同上、9頁

- 10) 賀川豊彦『貧民心理の研究』キリスト新聞社、1962年、7頁

- 11) 河上肇『貧乏物語』岩波文庫、1947年、17頁

- 12) 台湾総督府文教局社会課編・刊『社会事業要覧』1931年、62～63頁

- 13) 井出季和太『台湾治績志』(1937年原刊、1997年南天書局有限公司復刻) 986頁

- 14) 前掲『事業概要』1936年、1頁

役員 代表者理事：金子光太郎、専務理事：施乾

理事：鈴木重嶽、近藤満夫、許智貴、陳茂道、陳清波、施福龍、蔡彬准

監事：谷口巖、張清港、黄金生、中村不羈児、古市健

- 15) 柴山武矩編「第4回全島社会事業大会・第5回全島方面委員大会出席者氏名」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第14号、1932年、所収) 58頁

両出席者名簿に台北州方面委員金子光太郎の名前がある。

台湾社会事業協会編「無料相談所の開設に就いて」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第136号、1940年、所収) 31頁

「弁護士を本職として昭和5年頃から方面委員を嘱託として社会事業に関係し始めた」の記載がある。1940年に城西無料相談所を開設した。

16) 同上

理事の鈴木重嶽、蔡彬准、監事の張清港は両出席者名簿に台北州方面委員として掲載されている。

17) 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1936年、2頁

18) 杵淵義房『台湾社会事業史（上）』（1940年刊行）（永岡『植民地社会事業関係資料集・台湾編』近現代資料刊行会、2000年、所収）254頁

19) 前掲『事業概要』1936年、2頁

18) 前掲『乞食社会の生活』8頁

20) 台湾慈恵院制度が創設され、救貧制度の中核として台北に1899年台北仁済院が設立された。1923年に財団法人に移行した。愛愛寮と同じ地域に建設された。事業内容は、窮民救助（院内救養）、精神病人受託、病人受託（普通患者、結核病患者）、施療および巡回診療、実費診療、院外救養、行旅病人受託であった。

21) 前掲『台湾社会事業史（上）』280頁

22) 大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』ミネルヴァ書房、2007年、190頁

23) 孫彰良「私設救護施設愛愛寮からみる植民地下の窮民救助」（永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001年、所収）250頁

24) 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1936年6月1日現在、1936年8月、9頁

25) 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1937年4月1日現在、1937年5月、9頁

26) 施乾『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』1929年6月1日現在、1929年9月

『愛愛寮概況』、昭和4年9月、29～30頁。なお施乾は文頭を一字下げていないが、原文のままとした。

27) 台北愛愛寮編『台北愛愛寮統制経営案（草案）』1932年6月、2頁

28) 2004年9月21日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。

29) 前掲『台北愛愛寮統制経営案（草案）』2頁

30) 前掲『乞食社会の生活』28～42頁

31) 劉明修『台湾統治と阿片問題』（近代日本研究双書）山川出版社、1983年、191頁

32) 同上、197頁

33) 同上、198頁

34) 杜聡明『回憶録』（上）台北市龍出版社、1989年、123頁

35) 同上

36) 前掲『乞食社会の生活』2頁

「・・・」は原著に記載あり。

37) 同上

38) 前掲『台湾統治と阿片問題』191頁

- 39) 前掲『乞食社会の生活』139 頁
- 40) 2008 年 8 月 25 日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。
- 41) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』10 頁
- 42) 前掲「私設救護施設愛愛療からみる植民地下の窮民救助」260～261 頁
- 43) 同上
- 44) 前掲『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』189 頁
- 45) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』10 頁
- 46) 大友昌子「日本統治下台湾における社会事業政策の展開」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊(解説)近現代資料刊行会、2001 年、所収) 73 頁
- 47) 同上
- 48) 同上、74 頁
- 49) 前掲『台湾治績志』347 頁
- 50) 同上、348 頁
- 51) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』8～9 頁
- 52) 同上
- 53) 同上、11 頁
- 54) 同上
- 55) 同上、19 頁
- 56) 同上、20 頁
- 57) 前掲「愛愛寮より」『乞食撲滅論』1 頁
- 58) 同上、4 頁
- 59) 前掲『台北愛愛寮統制経営案(草案)』5 頁
- 60) 声明書の保存場所は以下の 2 箇所にある。
 私立台北愛愛院救済編『事業概況集—民国 34 年起』(1945～1951 年)(愛愛院書類綴所収)
 施乾・李天贈訳『孤苦人群録』台北縣立文化中心、1994 年
 声明書は施乾の意思を表しているので、出来る限り原文どおりの繁体字を使用した。
- 61) 前掲『台北愛愛寮統制経営案(草案)』5 頁
- 62) 同上、5～6 頁
- 63) 同上、7 頁
- 64) 同上
- 65) 同上、8 頁
- 66) 同上、12 頁
- 67) 同上、7 頁
- 68) 同上、9 頁

- 69) 前掲『台湾社会事業史（上）』276 頁
- 70) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』12～13 頁
- 71) 前掲『乞食撲滅論』23 頁
- 72) 2004 年 9 月 21 日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。
- 73) 1928 年の収容人数は 322 名。1928 年に調査対象が 159 名で矛盾するが、原書どおりで分析の傾向をつかむために掲載した。
- 74) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』14～16 頁
- 75) 前掲「お断り」『乞食社会の生活』4 頁
- 76) 前掲『台湾社会事業史（上）』79 頁
- 77) 同上、111 頁
- 78) 前掲『乞食撲滅論』10～11 頁
- 79) 前掲「おことわり」『台北愛愛寮統制経営案（草案）』
- 80) 前掲『乞食撲滅論』2～3 頁
- 81) 徐蘊康「人間大愛施乾與清水照子」『台湾百年人物誌 1』財団法人公共電視文化事業基金会、玉山社、2005 年、87 頁
- 82) 2008 年 8 月 25 日、愛愛院における次女美代へのインタビューより。
国民党政権交代後の愛愛院新設認可への影響について筆者の質問に答えた。
- 83) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』29 頁
- 84) 同上、18 頁
- 85) 同上、39 頁
- 89) 同上、24～25 頁
- 87) 前掲『事業概要』1936 年、12～13 頁
- 88) 同上
- 89) 前掲『事業概要』1937 年、20～21 頁

第五章 国民党政権下の愛愛院

1. 施照子時代の初期・混乱期

施乾は、戦争中に、南飛行場作りや緑区長と青年団長の任務の遂行に尽力し、過労で倒れそのまま、1944(昭和19)年9月(46歳)に死亡した¹⁾。妻施照子は、その時35歳で彼の意思を継いだ。終戦直後にはほとんどの日本人が引き揚げた。施照子は、ある日本人から「女一人でどうするのか、このまま置いておくのはかわいそうで耐えられないから連れて帰ってやる」と言われたそうである。しかし6名の子供が全部台湾人であり、収容者が200名以上いたため、彼女は台湾に残る決心をした²⁾。彼女は日本人の中で国民政府が必要とする「留用者」の一人となった。「留用者」となることを勧めたのは、そのときの愛愛寮代表理事周延壽(台北市参議会議長)であった³⁾。彼は、このまま収容者を残して、彼女が日本へ帰ったら収容者はどうなるか、彼が「留用者」手続きをするので、このまま彼女に残って欲しいと依頼した⁴⁾。留用の手続きは、周延壽の政治的な力による国民党政府への説得で問題なく行われたようであった⁵⁾。

戦後の愛愛院の歴史は施照子の半生である。それを台湾の政治・行政の動向にも配慮しつつ、今日に至るまでの「愛愛院関係年表」を表10に示す。

表10 愛愛院関係年表(施照子)

愛愛院	年号	西暦	台湾の政治・行政・社会
施照子、国民政府に留用される。その後中華民國に帰化。台北愛愛院。	民国34年	1945	国民党政権。
財団法人台北愛愛院。	民国35年	1946	
施照子記者へ「呼びかけ書」を公示。私立台北愛愛教済院と改称。	民国38年	1949	戒嚴令を発令。
	民国51年	1962	社会調査規則。
養護所業務の開始。	民国52年	1963	配合台北市政府社会局政策。
安老所業務の開始。	民国62年	1973	接受台北市政府社会局政策。
台北市私立愛愛院と改称。	民国65年	1976	
	民国72年	1983	
	民国76年	1987	戒嚴令の解除。
自費安養中心業務の開始。	民国80年	1991	社会変遷及び老人福利法実施。
フィリピン従業員を雇う。	民国83年	1994	
施照子死亡(享年91歳)。武靖が院長(長男59歳)となる。	民国90年	2001	承内政部補助正積極改建。
地下1階、地上6階の新館完成。	民国97年	2008	

出典:私立台北愛愛教済院編『事業概況集—民国34年起』(1945~1951年)より作成

財団法人台北市私立愛愛院編『財団法人台北市私立愛愛院2004年報』他より作成

彼女は、国民党政権に留用された直後、1945年中華民國に帰化した。次女美代によると、国民党政権に代わると、施照子は日本人だから出て行けと愛愛院の職員に言われ、困惑し、長女に相談をした⁶⁾。そして、施照子は長女に励まされ、看護助手となった長女と共に事業を継続した⁷⁾。

その後国民党政権下でインフレーションにより経済が混乱し、台湾人は生活の不平と不満を爆発させた。国民党政府は、それを弾圧するため1949(昭和24)年に戒嚴令を発し、弾圧政治を行った。その年に約500名の収容者をかかえた愛愛院は、寄付者が少なくなり、経営困難に陥った。その状況については、後「愛愛院の財務状況」で述べたい。

施乾が死去した後、施照子はどのように愛愛寮運営にあたったか。施乾時代の役員組織については、前章で述べたが、1936(昭和11)年当時、代表理事1名(金子光太郎)、専務理事1名(施乾)、理事7名、監事3名、常任幹事1名の総数13名であった⁸⁾。1944年になるとその役員組織は、代表理事1名(金子光太郎)、専務理事1名(施照子)、理事7名、

監事 2 名、常任幹事 1 名で総数 12 名であった⁹⁾。1936 (昭和 11) 年と 1944 (昭和 19) 年の役員組織を比較すると、監事が 1 名減ったのと理事の交代が数名あっただけである。代表理事 1 名は弁護士で方面委員であった金子光太郎で変わらなかった。金子光太郎が日本人でしかも方面委員であったために総督府との関係が円滑化された¹⁰⁾。その頃民間社会事業の類型は三つあり、日本人による活動、キリスト教団体による活動、愛愛寮のような台湾人による活動があった¹¹⁾。日本人による活動では、人類の家、台北盲啞学校、豊国養老院 (神道系) などがあった。キリスト教団体による活動には、高雄天皇公教会孤児院、馬偕医院および樂山園 (カナダ長老会)、台南新樓医院 (英国長老会)、彰化基督教医院 (英国長老会) などがあったが、その多くは総督府から弾圧の対象になり、最後はすべて国外退去を余儀なくされた¹²⁾。台湾人による活動には愛愛寮の他に存仁院、林本源博愛医院があったが、何れも「皇民化ハ幼児カラ」等のスローガンをあげ、総督府の方針で運営された¹³⁾。愛愛寮は同じ台湾人施乾による経営であったが、金子光太郎のような日本人の理事も在職し、施乾の妻も日本人であったことから、総督府との関係は特にこれといった大きな問題にならなかったようだ。

施乾の時代の「乞食の更正事業」は、1944 (昭和 19) 年には、「一般救護事業」へカテゴリーの変更があったが、愛愛寮の事業の目的は、施乾の時代のそれを継承した。

1945 (昭和 20) 年に日本統治時代が終わり、愛愛寮の役員組織は、代表理事 1 名 (周延壽)、専務理事 1 名 (施照子)、理事 8 名、監事 5 名、常任幹事 1 名の総数 16 名となった¹⁴⁾。1945 年の役員組織を前年と比較すると、代表理事が台北市参議会議長周延壽^{じゅう}にかわり、理事、監事で 4 名増えた。

1946 (昭和 21) 年 6 月 4 日法令改革のため、愛愛寮は「財団法人台北愛愛院」と名称を変更した。それに伴い組織が変更され、役員は、代表者理事 1 名 (周延壽)、専務理事 1 名 (施照子)、理事 7 名、監事 2 名、常任幹事 1 名の総数 12 名となった¹⁵⁾。職員として常務理事に照子が就任し、長女施明月 23 歳 (台北第 3 高女卒業、1946 年 8 月) が職員として新たに運営スタッフに加わった。明月は、戦時中に志願して従軍看護婦助手となり、中国大陸の日本陸軍病院で負傷兵の看護をしてきた経験を生かし、護仕 (看護婦) として働いた。愛愛院の職員は、常務理事照子を筆頭に総数 9 名であった。この時期の組織を図示すれば図 1 のようになる。常務理事 1 名、書記、集金員、囑託医、護仕^{まも}が各 1 名、雇人が 4 名で、国民党政府による職員の審査は優良であった¹⁶⁾。1928 (昭和 3) 年の職員数は、寮主寮監 1 名、寮医 2 名、寮務院 4 名、雇人 2 名、藤製部教師、医療助手、薬局生、看護婦が各 1 名であり、総数 13 名であったが¹⁷⁾、1946 (昭和 21) 年の職員数は、4 名少なくなっていた。しかし 1946 年当時の収容者は 368 名で、1928 (昭和 3) 年の収容者 322 名より約 50 名増加していた¹⁸⁾。

その時 (1946 年 6 月) に作成された「財団法人台北愛愛院捐助章程」は、1929 (昭和 4) 年当時の「愛愛寮規約」より詳細な規定がなされていた。愛愛寮規約は、名称、目的、事業、役職員、維持の 5 項目だけであったが、財団法人台北愛愛院捐助章程は総則、任務及

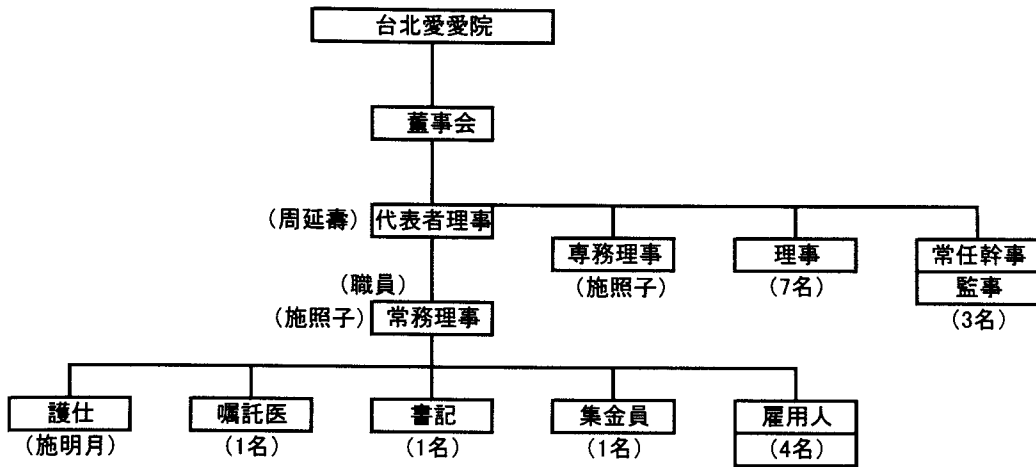
施設、資産及会計、組織及職権、会議、章程変更後及解散・清算、附則の7章・全31条に及ぶ規定になっている¹⁹⁾。

この章程において、目的に社会救済事業項目を追加しており、社会福利事業をすること、その事業区域は台北市行政区域としている。また入所対象者については、貧窮で、生活ができない者として、年齢が60歳以上の老衰者、12歳未満の者、疾病・傷害・廢疾不具で産業に従事できない者、その他として本院が救済事業の必要と認めた者であった。創立当初の愛愛寮規約にはその対象者の記載がなかったが、その後1936（昭和11）年度の事業概要に対象者として、「1. 乞丐（乞食）、2. 疾病、不具、廢疾者、3. 老衰者又ハ幼弱者、4. 精神異常者」と明記された。

日本統治時代最後のこの規約と1946（昭和21）年の章程における乞食の収容対象の相違は、高齢者は60歳以上、幼弱者は12歳未満と年齢の制限を新たに設けたことと、「乞丐」・「精神異常者」が削除されたことである²⁰⁾。1946・1947（昭和22）年台湾省行政長官公署**檔案**（永久保存用の文書：引用者注）によると1945（昭和20）年現在における日本人の愛愛寮収容者は23名で、入寮原因では貧困はわずか6名であった²¹⁾。かつて乞食の原因の一つであった貧困は、1946年には、乞食としてではなく、単なる貧困として掲載されている。

更に、本院の資産管理や最終決定は図1に示すように董事会の会議で決定され、董事会の役員は選挙で選任された。但し本院創立時から設立者を選定し、評議員は、台北市民を代表する機関で社会救済事業に熱心な者を代表に選定するとある。つまり、光復（日本の植民地支配から解放された）後の台北愛愛院には、創立時から設立者の照子を除いて、政府役員の代表が占め、少なくとも彼等が形式上は運営の実権を握ったことになる。それによって、日本統治時代の企業が国民党政権に接收されたのと同じように、台北愛愛院も国民党政権の管理下での運営に切り替えられた。日本統治時代の総督府は愛愛寮に乞食の救済施設としての期待があったが、1950（昭和25）年末の国民党時代になると、徐々に乞食数の減少に伴い、その期待はもはや乞食ではなく、貧困者の救済にあったといえるだろう。そのような大きな変化の中で、照子は董事会の次席の地位にあり、実質的に困窮している者の収容を行い、愛愛院が継続された（図1参照）。

図1 財団法人台北愛愛院管理組織(1946年)



出典:私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)より作成

1949 (昭和 24) 年 4 月、中央規定社会事業改組 (中央規定社会事業組織変更) により、名称は「私立台北愛愛救済院」に、更に 1976 (昭和 31) 年には政府の福利政策 (福祉政策) による「財団法人台北市私立愛愛院」と逐次名称が変えられ、現在に至っている。

ところで私立台北愛愛救済院は、1955 (昭和 30) 年に記念誌『私立台北愛愛救済院創立 30 周年記念』を発行し、常務董事である黄連發 (台北市議会議員) が、その編集後記で、本院の財政悪化を訴え、市民の援助を求めている²²⁾。図 2 のごとく施照子は、事務董事、基金管理委員、院長の三つの職務を兼任していた。黄連發は、愛愛院の職員として院長施照子の下で総幹事を務め、院長を助け、院内の財政、人事、事業内容等のまとめ役であった。前述した 1946 (昭和 21) 年の財団法人台北愛愛院の職員 9 名の経歴には、黄連發のように台北市議会議員のような経歴をもつ者はいなかった。

1952 (昭和 27) 年に作成された私立台北愛愛救済院の章程は、1946 (昭和 21) 年の台北愛愛院捐助章程より、更に細分化された。1946 年の台北愛愛院捐助章程は、台北愛愛院の唯一の規定であり、7 章と第 31 条で統括されていたが²³⁾、1952 年の私立台北愛愛救済院の章程は、二部から構成され、私立台北愛愛救済院董事会章程の 5 章 18 条と私立台北愛愛救済院章程 14 条になった²⁴⁾。更に新しく私立台北愛愛救済院院民入院出院弁法甲・乙・丙・丁の 29 条、規定が二つ (私立台北愛愛救済院基金管理委員会組織規程の 10 条、私立台北愛愛救済院院民膳食委員会組織規程の 10 項目)、細則が二つ (私立台北愛愛救済院弁事細則 20 条、私立台北愛愛救済院院民自治会実施細則の 18 項目)、私立台北愛愛救済院院民守則の 14 項目が追加規定になり、各事業ごとに項目が整理された²⁵⁾。

その中で私立台北愛愛救済院章程は、第 14 条まであり、その第 3 条に社会救济事業の発展を以て社会福利事業を増進することを目的とし、「貧苦殘疾興孤兒流乞為收容対象」(貧困、障害、疾病のある者、及び孤兒、流乞²⁶⁾の為の收容所) としている。台北愛愛院捐助章程と比較すると、目的は同じであるが、流乞が新しく対象とされたことが大きな相違で

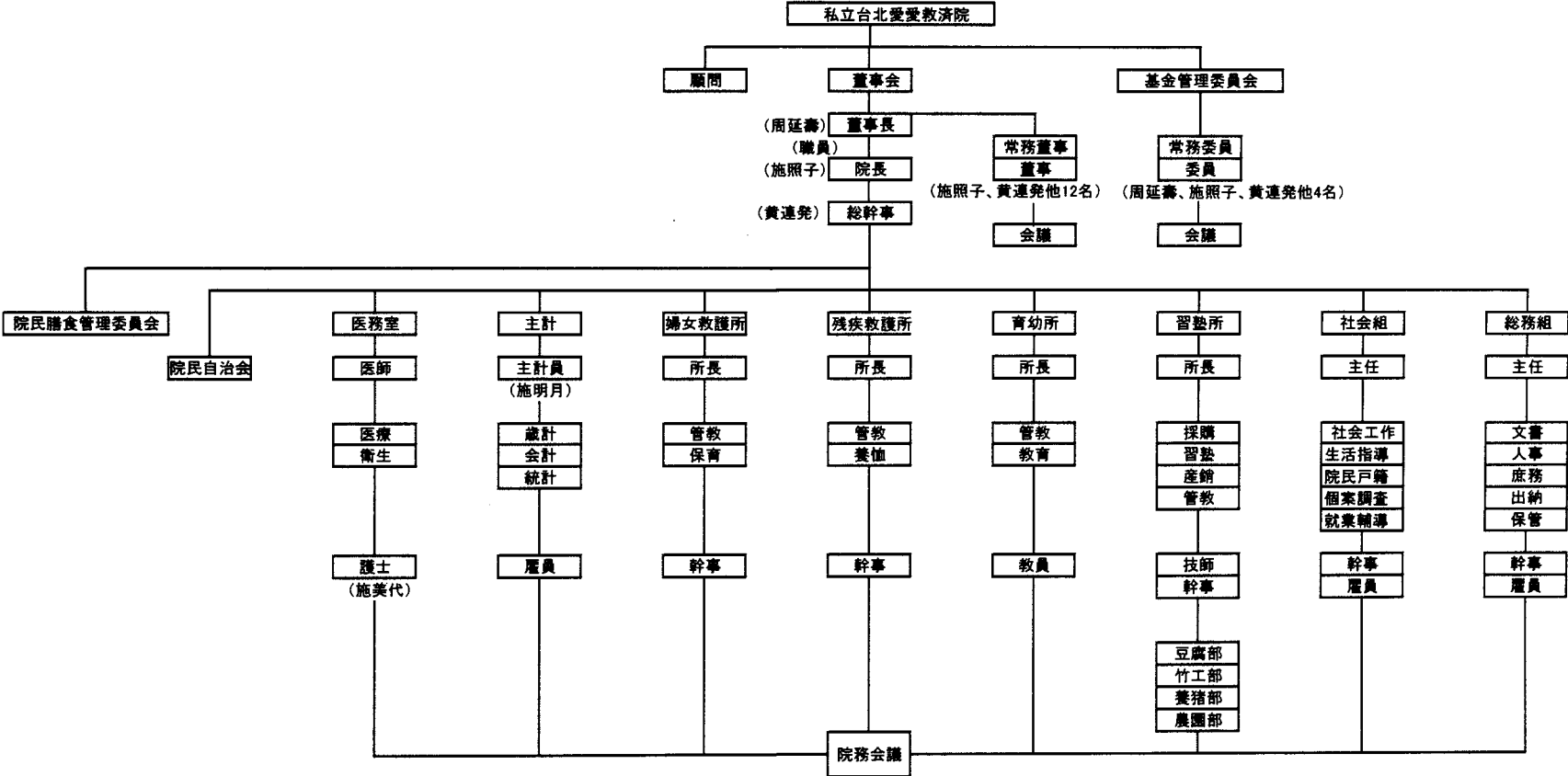
ある。

第4条は、「社会救済法」の規定に準じ、習熟所、育幼所、残疾教養所、婦女教所の施設を置くとの規定がある。ここで初めて社会救済法の言葉で置き換え、それを使用している。

第9条には、職員として、医師1名、技師2名、幹事6名、教員2名、護士（看護師）2名、雇用若干名としている。現在の愛愛院での生き字引と言われる施美代（二女、当時26歳）が初めて護士として採用された（図2）。彼女は台湾にあった日本赤十字社看護婦学校を卒業し、台湾省立台北医院、台北育幼院に護士として勤務した経歴があった。この時院長の照子は45歳、すでに職員となっていた長女明月は30歳で、経理を担当していた。ここに、施乾時代の愛愛寮で収容者と生活を共にした故施乾の妻と2名の子供の3名が職員となり、家族協同による愛愛院の経営によって、その設立の理念のさらなる実現のために愛愛院が継続されることになる。

このようにして組織ができ、施照子院長により私立台北愛愛救済院は経営継続が可能になった。すなわち、このようにして進められた新たな組織が、その後も政府の政策と社会需要の中で、後述するような入所者の更生を考えた独自の事業展開を可能とし、今日の愛愛院へとつながったのであろう。

図2 私立台北愛愛救済院管理組織(1952年)



出典: 私立台北愛愛救済院編『私立台北愛愛救済院創立30周年記念』(1955年)より作成

2. 愛愛院収容者の救護原因と出身地

第二次世界大戦終結後の1945（昭和20）年9月20日に台湾省行政長官公署が設立され、国民党が台湾政府の実権を握った。1940年代頃各地に12棟の仁愛の家が救済院として建てられていた。その後1952（昭和27）年には台湾省政府社会局の方針で、すべての高齢者施設が「救済院」と名称統一された。すでに述べたように愛愛院は、国民党政権下で財団法人台北愛愛院と改名し、その後、政府の方針で高齢者施設として私立台北市愛愛救済院と名称変更をし、その都度組織の改変が行われた。1945（昭和20）年から1950（昭和25）年まで、中国大陆から台湾へ移住してきた身寄りのない兵士が高齢者となったため、彼等の居住問題の解決に向けた救済院として、政府は、多くの榮譽国民の家を建設した。

その頃1945年から1952年までの愛愛院の収容者救護原因は表11-1・2のとおりである。施照子も施乾と同様、他の施設で受け入れが困難な生活困窮者を収容していた。この期間は表12で示すように入所者の出身地は本省人、外省人（旅台外省人を以下「外省人」と記す）、日本人（日籍人を以下「日本人」と記す）で分類されていた。本省人が60%以上を占め、外省人は約30%であった。外省人は国民党政権が建設した榮譽国民の家に入所できない者が、愛愛院に入所した。本省人のための救済院は、この期間に新たに建設されなかった²⁷⁾。愛愛院入所者の救護原因は、「貧困」、「疾病」のものを合わせると、全収容者の50%以上を占めていたが、特に1948（昭和23）年で80%以上に増加し、その後1949（昭和24）年以降は約60%に減じた。この時期は、前述したとおり、不安定な政治とインフレーションの中で、台湾市民は誰もが生活困難であったと思われる。例えば施照子は「インフレでお米がなくなると市政府へ飛んで行きました」²⁸⁾と小久保晴行のインタビューに答えている。このように社会の最低辺にある生活困難者は食事摂取が困難となり、路頭に迷っていた。

モルヒネ中毒者や阿片中毒者の収容は、1947（昭和22）年までであった。日本の敗戦から1947年末までの2年余りで、毎年約10名の収容であり、施乾の頃の約60名に比べるとその数は大きく減少した（表11-1）。政府の麻薬中毒者の矯正治療機関であった更生院は、国民党政権に接収され、「戒煙所」と改名され、所長に杜聡明教授が就任していた。それは最後の患者が退院した1946（昭和21）年末に閉鎖された²⁹⁾。愛愛院は、政府機関と同じく1947年の最後までモルヒネ中毒者等の収容を行っており、準総督府機関という重責を担っていた。また精神病者の委託は、1946年で終了となったが、これも最後まで施乾の頃と同程度の約50名を収容していた。

第四章でも述べたように、施乾が世の中で非常に悲惨な問題と嘆いたモルヒネ中毒者や阿片中毒者を、政府機関が完全収容するまでの約25年もの間、愛愛院が救護してきた功績は大きい。また精神障害者についても、施乾は、養神院（1934年）等の公的施設が設けられるまで、精神障害者の独立自営のための授産施設設立に奮闘し、政府機関が設立されたものの、それらが収容できなかった精神障害者の救護を愛愛院は、同期間実施してきたのである。

次に1950（昭和25）年以降の乞食の収容者数を表13に示した。1957（昭和32）年まで

は、乞食の收容が年間 100 名前後で同年の全收容者（表 12）の 223 名の約半分を占めていて多い。それ以降は、乞食が急減し、1961（昭和 36）年には 16 名と激減した。

これからすれば、1920 年代にその事業を開始した愛愛院は、施乾の乞食撲滅を 1960 年代初めに約 40 年間の歳月をかけて果たしたことになる。資本主義経済の社会病理として産み出された乞食も、高度成長で労働市場の需要が高まり、誰もが働けるようになれば、社会は経済的に安定し、貧民や障害者が乞食になる必要がなくなったのであろう。当然乞食になり、人の施しによって生きるという「乞食病」者も少なくなった。

経済成長の目標を達成するため、国民党政府は 4 か年経済建設計画（1953～1975 年）を立てた。各期 4 年であわせて 6 期行われた。第 1、2 期の重点は公共施設を拡張し、物価の安定、外貨制度の改革、生産の拡大、輸入代替公共（輸入に替わる公共施設：引用者注）の発展であった。第 3 から 5 期までの重点は、投資を増やし、輸出工業を發展させ、経済構造を改善することであった。第 6 期の重点は、重工業の發展を促進することだった。この 23 年間に、台湾の年平均経済成長率は、9.07%、生産額総額は 8.74 倍、工業の生産額は 16.37 倍、農業の生産額は 3.57 倍、対外貿易は 37.17 倍に増加し、住民の生活が豊かになった³⁰⁾。この豊かな時代を迎えるまでに、愛愛院が果たしてきた役割は大きかった。

ここで表 12 の 1950 年から 1960 年代初めの愛愛院收容者数の出身地に着目したい。愛愛院の收容者合計は、1945（昭和 20）年は 237 名（表 4）であったが、翌年から一気に 100 名以上増え、368 名になった。その原因は本省人が 1945 年 187 名であったが、翌年はその 1.5 倍の 306 名に増加したことによる。その状況が 1948（昭和 23）年まで続いたのである。日本人は、1948（昭和 23）年の 15 名が 1949（昭和 24）年以降 2 名、1 名に減り、1955（昭和 30）年以降の入所者はいなかった。次女美代によると、終戦後すぐに日本へ帰れない多数の日本人と同じ境遇にあった照子を、帰国を目指す日本人たちが訪ね、愛愛院で体調回復後日本へ帰ったという³¹⁾。このようにして照子は戦後台湾に在住していた日本人の世話をし、その果たした役割は小さくなくったようである。

1949（昭和 24）年から 1963（昭和 38）年までの 10 年以上にわたり、愛愛院は、約 200 名前後の収

容者を抱えていた。その出身地は 1948（昭和 23）年までは本省人が多く、総数の約 8 割を占め、日本人は、外省人よりも少なかった。

表 12 のとおり本省人の收容者が 1948（昭和 23）年に 321 名であったが、1949（昭和 24）年には半減し、1964（昭和 39）年には 2 桁の 80 名までに減った。外省人は、1947（昭和 22）年に初めて 58 名に増え、その後 1963（昭和 38）年まで 126 名收容されていた。このように愛愛院入所者の本省人が減っていったのは、前述したように政府が主導で行った経済発展により、本省人が職を見つけて自立できたことにあると思われる。一方外省人の方は戦後中国大陆から台湾に移住した兵士が多く、本省人に比べて台湾で職を見つけることが困難であったと考えられる。1971（昭和 46）年当時の本省人の入所者は、1 名であったが、外省人のそれは 36 名であった。長男施武靖や次女施美代によれば、外省人は、貧困

であり、行き場もなく、最後まで愛愛院に入所していたとのことである³²⁾。蒋介石と一緒に台湾にやってきた兵士や国民党関係者は戦後 20 年以上が経過し、40 歳代からそれ以上の年齢であった。このように 1945（昭和 20）年から 1960 年代初めまでは愛愛院にとって照子時代の初期・混乱期と呼ぶべき時期であったが、愛愛院は施乾時代のような乞食収容施設ではなく、国民党政府の期待する中、高齢者収容施設に移行したのである。愛愛院の名称の経歴を見ると、政府の方針変更に伴う指導により 1944（昭和 19）年以降 20 年間に 6 回の改名があった。1944 年 9 月に施乾死亡により、妻施照子は「愛愛寮」の事業を継続した。1945 年台湾光復後「台北愛愛院」に改名、1946（昭和 21）年台北市政府に登記、1947（昭和 22）年政府方針で「財団法人台北愛愛院」に改名した。

表11-1 愛愛院収容者の救護原因内訳（人数）

救護原因	1945年度 (男/女)	%	1946年度 (男/女)	%	1947年度 (男/女)	%	1948年度	%
貧困	51(36/15)	19.8%	113(71/42)	24.1%	164(98/66)	36.1%	112	42.4%
疾病	85(67/18)	33.1%	138(120/18)	29.5%	85(53/32)	18.7%	100	37.9%
老衰	21(9/12)	8.2%	29(15/14)	6.2%	48(29/19)	10.6%	15	5.7%
不具	6(6/0)	2.3%	6(6/0)	1.3%	13(10/3)	2.9%	3	1.1%
盲	11(6/5)	4.3%	31(20/11)	6.6%	45(27/18)	9.9%	3	1.1%
モルヒネ中毒者	10(6/4)	3.9%	8(6/2)	1.7%	8(7/1)	1.8%	0	0.0%
阿片中毒者	2(0/2)	0.8%	2(2/0)	0.4%	2(2/0)	0.4%	0	0.0%
唾	3(2/1)	1.2%	3(2/1)	0.6%	3(2/1)	0.7%	1	0.4%
児童	29(11/18)	11.3%	81(55/26)	17.3%	86(52/34)	18.9%	30	11.4%
精神病患者	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
委託精神病患者	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
委託普通患者	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要監置精神病患者	33(16/17)	12.8%	54(36/18)	11.5%	0	0.0%	0	0.0%
非監置精神病患者	6(2/4)	2.3%	3(2/1)	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
合計	257(161/96)	100.0%	468(335/133)	100.0%	454(280/174)	100.0%	264	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集-民国34年起』(1945～1951年)より作成

表11-2 愛愛院収容者の救護原因内訳（人数）

救護原因	1949年度	%		1950年度 (男/女)	%	1951年度 (男/女)	%	1952年度 (男/女)	%
疾病	50	18.1%	疾病	41(32/9)	16.1%	54(39/15)	21.5%	53(34/19)	20.1%
障害	34	12.3%	障害	31(23/8)	12.2%	37(29/8)	14.7%	14(9/5)	5.3%
老衰	7	2.5%	老衰	7(5/2)	2.8%	7(5/2)	2.8%	4(1/3)	1.5%
盲・唾	20	7.2%	盲・唾	22(6/16)	8.7%	23(7/16)	9.2%	29(6/23)	11.0%
児童	48	17.3%	児童	40(18/22)	15.7%	42(22/20)	16.7%	59(37/22)	22.3%
その他	118	42.6%	貧困	113(74/39)	44.5%	88(54/34)	35.1%	105(69/36)	39.8%
合計	277	100.0%	合計	254(158/96)	100.0%	251(156/95)	100.0%	264(156/108)	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集-民国34年起』(1945～1951年)、私立台北愛愛救済院編『事業概況集』(1952年)より作成

表12 愛愛院収容者の出身地内訳（人数）

年代別	本省人	%	外省人	%	日本人	%	合計	%
1948(民国37)	321	80.9%	61	15.4%	15	3.8%	397	100.0%
1949(民国38)	175	68.6%	78	30.6%	2	0.8%	255	100.0%
1950(民国39)	139	63.8%	78	35.8%	1	0.5%	218	100.0%
1951(民国40)	195	82.3%	41	17.3%	1	0.4%	237	100.0%
1952(民国41)	175	70.9%	72	29.1%	0	0.0%	247	100.0%
1953(民国42)	92	47.9%	100	52.1%	0	0.0%	192	100.0%
1954(民国43)	114	50.7%	110	48.9%	1	0.4%	225	100.0%
1955(民国44)	128	60.4%	84	39.6%	0	0.0%	212	100.0%
1956(民国45)	109	55.6%	87	44.4%	0	0.0%	196	100.0%
1957(民国46)	123	55.2%	100	44.8%	0	0.0%	223	100.0%
1958(民国47)	107	51.2%	102	48.8%	0	0.0%	209	100.0%
1959(民国48)	110	52.6%	99	47.4%	0	0.0%	209	100.0%
1960(民国49)	115	47.3%	128	52.7%	0	0.0%	243	100.0%
1961(民国50)	121	47.8%	132	52.2%	0	0.0%	253	100.0%
1962(民国51)	149	45.7%	177	54.3%	0	0.0%	326	100.0%
1963(民国52)	114	47.5%	126	52.5%	0	0.0%	240	100.0%
1964(民国53)	80	71.4%	32	28.6%	0	0.0%	112	100.0%
1965(民国54)	78	68.4%	36	31.6%	0	0.0%	114	100.0%
1966(民国55)	42	63.6%	24	36.4%	0	0.0%	66	100.0%
1967(民国56)	24	49.0%	25	51.0%	0	0.0%	49	100.0%
1968(民国57)	24	32.9%	49	67.1%	0	0.0%	73	100.0%
1969(民国58)	11	23.4%	36	76.6%	0	0.0%	47	100.0%
1970(民国59)	2	7.7%	24	92.3%	0	0.0%	26	100.0%
1971(民国60)	1	2.7%	36	97.3%	0	0.0%	37	100.0%
合計	2,549	58.1%	1,837	41.9%	0	0.0%	4,386	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業概況』（1971年）より作成

表13 年齢別乞食収容者（人数）

	18歳以下 (男/女)	%	19～59歳 (男/女)	%	60歳以上 (男/女)	%	合計 (男/女)	%
1950(民国39)	24(16/8)	25.3%	65(52/13)	68.4%	6(5/1)	6.3%	95(73/22)	100.0%
1951(民国40)	14(14/0)	25.0%	41(35/6)	73.2%	1(1/0)	1.8%	56(50/6)	100.0%
1952(民国41)	60(37/23)	33.7%	112(73/39)	62.9%	6(3/3)	3.4%	178(113/65)	100.0%
1953(民国42)	41(31/10)	22.7%	131(103/28)	72.4%	9(9/0)	5.0%	181(143/38)	100.0%
1954(民国43)	29(23/6)	19.5%	112(76/36)	75.2%	8(6/2)	5.4%	149(105/44)	100.0%
1955(民国44)	15(12/3)	20.8%	53(41/12)	73.6%	4(4/0)	5.6%	72(57/15)	100.0%
1956(民国45)	17(14/3)	37.0%	27(23/4)	58.7%	2(2/0)	4.3%	46(39/7)	100.0%
1957(民国46)	21(11/10)	18.6%	82(62/20)	72.6%	10(7/3)	8.8%	113(80/33)	100.0%
1958(民国47)	5(3/2)	11.1%	20(18/2)	44.4%	20(20/0)	44.4%	45(41/4)	100.0%
1959(民国48)	4(3/1)	13.8%	15(6/9)	51.7%	10(8/2)	34.5%	29(17/12)	100.0%
1960(民国49)	1(1/0)	6.3%	10(8/2)	62.5%	5(4/1)	31.3%	16(13/3)	100.0%
1961(民国50)	1(0/1)	6.3%	11(7/4)	68.8%	4(3/1)	25.0%	16(10/6)	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』（1961年）より作成

3. 愛愛院収容者の救護停止

施照子は愛愛院の多くの収容者に対し、どのように接してきたのであろうか。表14－1・2は、1945（昭和20）年度から1952（昭和27）年度の愛愛院の収容者の救護停止者の内訳である。表15は表14－1・2から筆者が作成した。救護停止に至った理由としては、社会活動ができるようになった、家族等に引き取られた、他の施設に移った、愛愛院の許可なく無断で出て行ってしまった、死亡してしまっことが挙げられる。表14－2の「自力更生」は1949（昭和24）年の事業概況集の中で救護停止者の分類に使用されている。自

力更生とは、一般的に他の力を頼まず、全く自分の力によって生活を改めて行く事である³³⁾。表 14-1 のように 1948 (昭和 23) 年度までの「許可退寮」には、自立して社会活動ができるようになった者と家族等に引き取られていった者が含まれている。そのため真に社会で生活ができるようになった者は「許可退寮」の中の一部と考えられる。そこで、1948 (昭和 23) 年度までの「許可退寮」と 1949 (昭和 24) 年度以降のカテゴリーの比較をする場合、「自力更生」と「退院」を加えたものが「許可退寮」といえる。本論では、表 15 のように 1949 (昭和 24) 年度以降の「自力更生」と「退院」を加えたものを「許可退寮」と表すことにする。

表14-1 愛愛院収容者の救護停止状況(人数)

	1945年度 (男/女)	%	1946年度 (男/女)	%	1947年度*	%	1948年度*	%
許可退寮	72(49/23)	48.6%	202(112/90)	64.7%	242	58.7%	201	64.6%
逃走	6(4/2)	4.1%	28(17/11)	9.0%	92	22.3%	68	21.9%
死亡	70(53/17)	47.3%	82(61/21)	26.3%	78	18.9%	42	13.5%
合計	148(106/42)	100.0%	312(190/122)	100.0%	412	100.0%	311	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)より作成

* 1947年度、1948年度は男/女の統計なし

表14-2 愛愛院収容者の救護停止状況(人数)

		1949年度*	%	1950年度 (男/女)	%	1951年度 (男/女)	%	1952年度 (男/女)	%
許可退寮	自力更生	190	58.8%	201(171/30)	69.3%	173(127/46)	71.5%	131(85/46)	56.7%
	退院	31	9.6%	27(19/8)	9.3%	24(19/5)	9.9%	33(25/8)	14.3%
逃走		67	20.7%	27(23/4)	9.3%	22(21/1)	9.1%	41(36/5)	17.7%
死亡		35	10.8%	35(24/11)	12.1%	23(18/5)	9.5%	26(23/3)	11.3%
合計		323	100.0%	290(237/53)	100.0%	242(185/57)	100.0%	231(169/62)	100.0%

典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)、私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国41年起』(1952年)より

* 1949年度は男/女の統計なし

表15 許可退寮(院)・救護停止者割合(%)

	1945年度	1946年度	1947年度	1948年度	1949年度	1950年度	1951年度	1952年度
許可退寮(院)/救護停止者総数	48.6%	64.7%	58.7%	64.6%	68.4%	78.6%	81.4%	71.0%
許可退寮(院)/愛愛院収容者総数	28.0%	43.2%	53.3%	25.3%	43.3%	52.3%	41.6%	33.2%
救護停止者総数/愛愛院収容者総数	57.6%	66.7%	90.7%	39.2%	63.3%	66.5%	51.1%	46.8%

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)、私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国41年起』(1952年)

表 15 は、許可退寮 (1949 年度以降は自力更生と退院を合わせたもの) が救護停止者総数及び愛愛院収容者総数に占める割合、救護停止者が愛愛院収容者総数に占める割合を経年変化で示したものである。表 15 のように救護停止者のうちの「許可退寮」は、1945 (昭和 20) 年度の 72 名 (48.6%) 以外、1946 (昭和 21) 年度から 1952 (昭和 27) 年度まで 60%以上であり、施乾時代では約 50%であったが、それを上回った。特に 1951 (昭和 26) 年度、1952 (昭和 27) 年度はそれぞれ 197 名 (自力更生の 173 名と退院の 24 名を加えた人数)、164 名 (自力更生の 131 名と退院の 33 名を加えた人数) で、救護停止者総数の各 81.4%、71.0% を占めた (表 14-1・2、表 15)。

また愛愛院収容者総数のうちの「許可退寮」は、施乾時代の 30%より高かった。1949 (昭和 24)、1950 (昭和 25)、1951 (昭和 26) 年度の許可退寮は愛愛院収容者数の 40%以上を占めた (表 15)。戦前は乞食の自立を目指した許可退寮は約 30%であったが、戦後はそれ以上の 40%を占め、施乾の自立への理念が施照子に引き継がれ、その実践の成果を上げて

いる。

愛愛院収容者総数のうち「救護停止者」が、1945（昭和 20）年度 148 名の 57.6%と上昇し、1947（昭和 22）年度 412 名の 90.7%で最高となった。その翌年度は、311 名の 39.2%に減少したが、再び上昇し、1950（昭和 25）年度には 290 名の 74.1%になった。1951（昭和 26）、1952（昭和 27）年度には 242 名の 51.1%、231 名の 46.8%と施乾時代の約 5 割に近づいた。特に 1947 年度には、収容者 454 名（表 11-1）のうち救護停止者が 412 名（表 14-1）であり、殆どどの収容者が入れ替わり、事業手続きの煩雑さがあったと思われる。それにも関わらず、翌年 1948 年の救護停止者のうちの許可退院は 201 名（64.6%）で、他の年度に比べても低下していない。このことは、表 14-1 の死亡率をみると 1946 年 26.3%であったのが、1947（昭和 22）年度 18.9%、1948（昭和 23）年度 13.5%と減少していることから、重症の新規収容は少なかったのではないかとと思われる。

いずれにしても救護停止者の「許可退寮」の割合や愛愛院収容者総数の「救護停止者」の割合は、施乾時代より数値が高く、より多くの収容者を許可退寮させたといえる。1946（昭和 21）年の職員数は 9 名であり、施乾時代より少ない職員の人数で多くの収容者を更生させて社会へ送り出し、その一方で新規に需要のある貧困者を受け入れた。施乾が新しい窮民救助体制への改革者であると同じく、施照子は、社会混乱の中での的確な経営判断と愛愛院への多数の入所希望者に対して適切な援助ができた聡明な実践家といえよう。

救護停止者のうち「逃走」は、先にもふれたように施乾時代に約 1 割であったが、1944（昭和 19）年度には、約 2%に減少した。翌年 1945（昭和 20）年度になると、6 名（4.1%）と多くなった（表 14-1、表 7）。それはその後も上昇し、1947（昭和 22）年度から 1949（昭和 24）年度は救護停止者の 20%が逃走し、1950（昭和 25）、1951（昭和 26）年度は約 10%に減少したが、1952（昭和 27）年度には再び 42 名の 17.7%へと上昇した。逃走の理由については、まず、乞食がいよいよ愛愛院へ連れて来られたことがあげられる。戦後も施照子はリヤカーを引いて乞食を連れて来たが、これは施乾と同じ強制的収容方法であり、逃走者の割合は減少しなかった。次に、1949（昭和 24）年度以降の本省人の入所者の減少傾向から、国民党政権になり、世の中が不景気とはいえ、前述したような政府の経済政策で職場や求人が増え、本省人が活路をみつけるために、社会へ飛び出して行くことができたことが見てとれる³⁴⁾。

更に救護停止者総数の「死亡者」割合をみると、施乾時代の 1942（昭和 17）、1944（昭和 19）年度の死亡者は、それぞれ 95 名（救護停止者総数の 43.3%）、76 名（救護停止者総数の 55.1%）であった（表 7）。それが、1945（昭和 20）年度の死亡者は 70 名（救護停止者総数の 47.3%、収容者総数 237 名（表 4）の 29.5%）であり、1946（昭和 21）、1947（昭和 22）年度も死亡者人数に大差はなかった（表 14-1）。しかし 1948（昭和 23）年度の死亡者は 42 名（救護停止者総数の 13.5%、表 12 の収容者総数 397 名の 10.6%）にまで減少した。以降も同程度の死亡者であった。その死亡率低下の理由としてまず一つは、戦後台湾の健康状態の改善が挙げられる。終戦後、先進国から導入された医療技術により、伝染病等の感

染症の予防で、平均寿命は1950（昭和25）年の男53.1年、女55.7年から、1965（昭和40）年の男65.1年、女69.7年と10歳以上伸びた。特にDDTの使用で、マラリヤが撲滅され、多数の生命が救われた³⁵⁾。そのような医療と公衆衛生の向上によって愛愛院入所者の死亡者が減少したと思われる。また1948（昭和23）年以降入所者は、社会が豊かになり、大半の収容者は重篤な病気をもつことが少なくなり、施乾時代のように瀕死の状態の入所者は大幅に減少した³⁶⁾。更に愛愛寮が1946（昭和21）年に台湾省政府により「優良」と評価された優秀な職員が収容者のケアにあたったことで死亡者が減ったと思われる³⁷⁾。

前述の表13は乞食収容者の減少を示した。これと表12から愛愛院の収容者数を計算すると、1950（昭和25）年の収容者218名のうち乞食は95名しかいないので、残りの123名は乞食ではないことになる。収容者救護原因の表11-2との照合においても、1950（昭和25）年の収容合計の254名中159名は乞食に該当しない。それ以降の年度においても乞食収容者の減少に反して乞食以外の収容者が多かったといえる。表3で示したように施乾時代の救護原因の内訳には、「乞食」の項目はない。彼は乞食撲滅を掲げ、愛愛寮を設立経営したのであるから、愛愛寮の収容者は政府の委託者を含めて全員乞食であったと考えられる。しかし前述したように終戦直後一部の日本人が一時愛愛院で生活し、体調を整えてから日本へ帰ったという次女施美代の話からも、愛愛院の収容者は乞食ではなく、表11-2のように貧困や病気であり、児童または自立した社会生活を営むことが困難な者もいたのである。

施乾は、『乞食社会の生活』の中で、自活しないで人の施しによって生きていることは「乞食病」であると述べているが、乞食を「同胞」と呼びつつも第三章で述べたように最も賤しきものとしている³⁸⁾。そして乞食になる原因については貧困との関係は大いにあるが、食べられない者でも乞食にはならないという³⁹⁾。そのような乞食を自立させて生活させることが「独立自営ノ精神涵養」という彼の理念であった。その点からみると、1955年以降の入所者は、社会の経済成長と後述のように子供への教育により識字者が増え、食べられない者が少なくなったため、施乾の述べた「乞食病」以外の者が多くなり、救護原因の解消を図れば、他人から搾取するといった精神的な病への対応は必要なく、比較的早く退所させることができたと推測できる。この教育の効果については、一例であるが第二章で前述した『乞食の子』の著者が、両親は乞食であったが苦学して学校教育を受けることで、現在は社会人として活躍していることからいえる。この著者は「乞食病」にかかっていたが、教育により自活できることで「乞食病」から回復できたといえる。

施乾時代は、瀕死の重症の乞食が多く、その最後を愛愛寮で看取るという収容者への終末期ケアの支援も多かったが、1960（昭和35）年初めの施照子時代は、そのような重症者も少なくなり、健康状態を悪化させないための一時的な収容が中心であったとみられる。そしてその後の施照子時代は、前述したように高齢者の収容が多くなり、愛愛院は最後まで人間らしい生活ができるような生活保障をする施設へと変化したのである。

4. 愛愛院の経営状況（乞食の施設から高齢者の施設への移行期）

(1) 愛愛院の更正状況

施照子は、施乾時代の収容者数を抱え、その生活はどのように変化したのであろうか。まず着目すべきは、授産部収益を大幅に増やした点である。それはどの位か、彼女の手腕を検討する前に収益増加の担い手についてみてみよう。まず職業につけた者の更生状況であるが、1946（昭和 21）年度からの 3 年間の資料によると、更生者が仕事をしたのは、養豚夫、竹細工、畑工作、厨夫・助手、看護人、庸工⁴⁰⁾、国軍兵士、自活生計可能者⁴¹⁾であった（表 16）⁴²⁾。

表16 愛愛院の更生者状況(人数)

	1946年度 (男/女)	%	1947年度 (男/女)	%	1948年度 (男/女)	%
養豚夫	0	0.0%	3(2/1)	4.2%	3(2/1)	4.8%
竹細工	13(13/0)	44.8%	10(6/4)	13.9%	23(12/11)	36.5%
畑耕作	0	0.0%	18(18/0)	25.0%	6(6/0)	9.5%
厨夫・助手	7(4/3)	24.1%	7(4/3)	9.7%	2(2/0)	3.2%
看護人	4(3/1)	13.8%	18(8/10)	25.0%	18(9/9)	28.6%
傭工	3(3/0)	10.3%	3(3/0)	4.2%	3(3/0)	4.8%
国軍兵士	2(2/0)	6.9%	6(6/0)	8.3%	0	0.0%
自活生計可能者	0	0.0%	7(3/4)	9.7%	8(8/0)	12.7%
合計	29	100.0%	72	100.0%	63	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945～1951年)より作成

更生者の中でも竹細工や看護人が多く、1948（昭和 23）年度の更生者総数 63 名のうち両者を合わせると 65%以上を占めていた。これらの職業は、愛愛院の授産所で実際に訓練された者である。1947（昭和 22）年職員名簿より職員数を増やし、それぞれの訓練について、職員 1 名あたりの受け持ち指導を少なくしてより充実した計画的な指導がなされたと推論できる⁴³⁾。

表 16 の更生者状況と表 14-1 の救護者停止内訳の「許可退寮（院）」を照合して計算すると、許可退寮（院）は、1946（昭和 21）、1947（昭和 22）、1948（昭和 23）年度はそれぞれ 202 名、242 名、201 名であり、そのうちの更生者は、各年度それぞれ 29 名、72 名、63 名のみであった。これらの更生者は許可退寮（院）者の約 3 分の 1 であり、残りの 3 分の 2 は、自分一人では生活ができなくても、家族や他の施設職員の援助があれば生活ができるようになり、愛愛院を退所した者と思われる⁴⁴⁾。

(2) 愛愛院の生産部の状況

更に生産部収益の額を確認したい。1949（昭和 24）年 6 月に旧台幣 4 萬元を新台幣 1 元に切り変える通貨改革があったため、それ以降のデータを分析した。この表 17-1・2 から、授産施設での収益内容が理解できる。

表17-1 愛愛院入所者の生産部収益状況

単位元

	1949年度	%	1950年度	%	1951年度	%	1952年度	%
竹細工部	872.53	0.46	2,656.32	0.12	2,719.78	0.20	10.27	0.00
藤工部	126.33	0.07	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
養豚部	793.33	0.42	1,385.52	0.06	3,343.02	0.24	3,703.00	0.24
花輪部	100.96	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
豆腐部	0.00	0.00	17,325.10	0.81	6,908.45	0.50	11,587.63	0.76
農園部	0.00	0.00	0.00	0.00	721.50	0.05	0.00	0.00
合計	1,893.15	1.00	21,366.94	1.00	13,692.75	1.00	15,300.90	1.00

出典：私立台北愛愛救済院編『事業生産部決算報告書』（1949・1950・1951・1952年）より作成

表17-2 愛愛院入所者の生産部収益状況

単位元

	1955年度	%	1956年度	%	1957年度	%	1958年度	%	1959年度	%	1960年度	%
豆腐部	36,225.15	0.73	33,844.44	0.69	52,897.90	0.84	40,729.18	0.83	64,875.00	0.90	102,235.15	0.93
紙部	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	62.50	0.00	543.50	0.01	0.00	0.00
院外工作	13,081.30	0.27	15,347.90	0.31	10,042.90	0.16	8,510.30	0.17	7,022.70	0.10	8,075.80	0.07
合計	49,306.45	1.00	49,192.34	1.00	62,940.80	1.00	49,301.98	1.00	72,441.20	1.00	110,310.95	1.00

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』（1961年）より作成

生産部は、内容によって分類され、当初藤工部は、籐で笠等をつくり、花輪部は花作りをして近くの寺院で売っていたが、1949（昭和24）年度をもって廃止された。そして1952（昭和27）年度までは、竹細工部、養豚部、花輪部、豆腐部、農園部があり、1955（昭和30）年度以降は豆腐部のみ継続され、新たに紙部、院外工作部が増えた。そのうち1950（昭和25）年度にできた豆腐部の1950（昭和25）年度の収益は21,366.94元となり、前年の約10倍以上の収益を上げた。また豆腐部はその年の収益全体の8割以上を占め、1960（昭和35）年には総収益金の9割以上を占めるまで大きく成長した。更に1955（昭和30）年度からは新たに院外工作（施設外の仕事）が始められ、1960（昭和35）年度に廃止されるまで授産施設における収益につながった。次女美代によると「院外工作」は主にマッサージ業であったようだ⁴⁵⁾。

施乾は、将来の計画の中で授産事業の充実が愛愛寮にとって一番の重要課題であるとしてそれに取り組んできた⁴⁶⁾。1950（昭和25）年度豆腐部授産室ができたことは、愛愛寮にとってその問題の一部を解決した。更に、1949（昭和24）年度には、愛愛院の組織改編により規定が細分化され、効率的な授産指導ができたことが、愛愛院収容者に対し「独立自営ノ精神涵養」するのにプラスに作用したのではないかと評価できる⁴⁷⁾。

(3) 愛愛院の財務状況

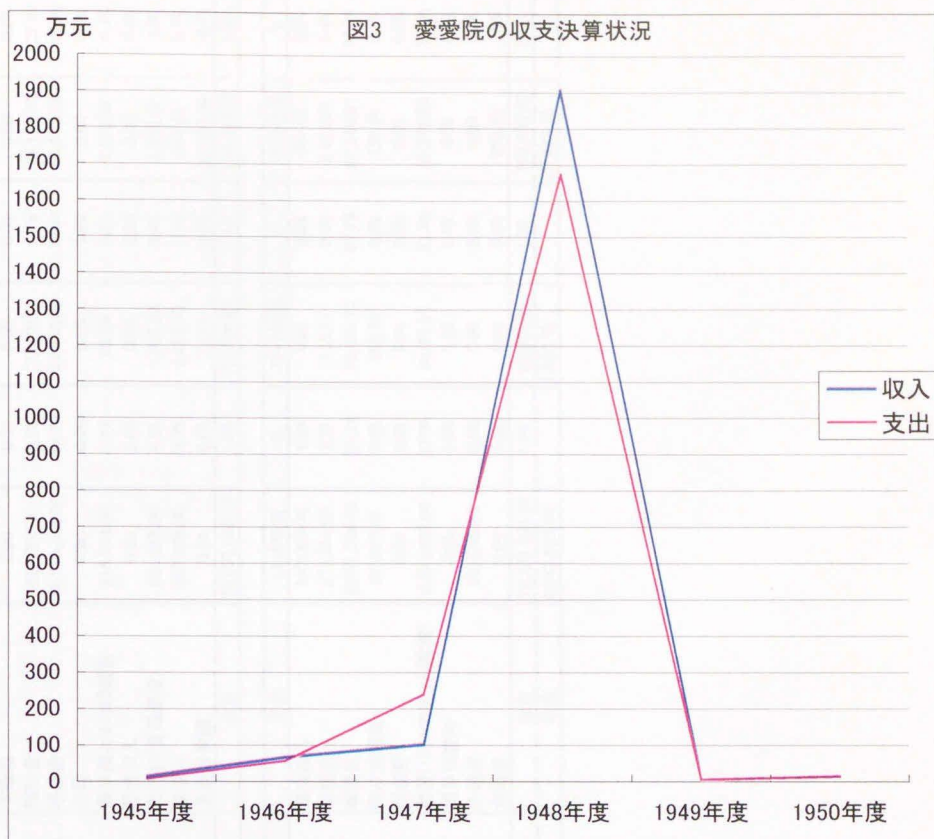
表18-1・2に愛愛院の収支決算額状況を示した。またグラフにしてみると図3・4のようになった。まず1945（昭和20）年度から1960（昭和35）年度の15年間全体の収入をみると、1945年度の収入は130,080.1円、1946（昭和21）年度は661,448.9元と5倍に増えた。1947（昭和22）年度は1,013,450円で前年度より1.5倍以上増え、翌1948（昭和23）年度は19,053,060元であり、前年度より約19倍に増えた。1949（昭和24）年度には旧貨幣40,000元が新貨幣1元に兌換され、その年の収入は35,484.63元（新貨幣）に調整された。1950（昭和25）年度130,368.6元、1951（昭和26）年度は192,253.8元で前年度の1.5倍、1952（昭和27）年度は220,650.3元で前年度の1.1倍、1955（昭和30）年度は742,001.9元で3年前の1952（昭和27）年度の3.4倍、1956（昭和31）年度は685,537.3元で前年度

の 0.9 倍、1957（昭和 32）年度は 725,903.1 円で前年度の 1.1 倍、1958（昭和 33）年度は 670,576.31 円で前年の 0.9 倍、1959（昭和 34）年度は 841,192.4 円で前年の 1.3 倍、1960（昭和 35）年度は 778,795 円で前年度の 0.9 倍であった。

1945（昭和 20）年度から 1949（昭和 24）年度の貨幣改革までは、収入の伸びが大きい、インフレーションの影響が大きく、その後は安定していった。その経過の中で 1956 年になると愛愛院の収入は、減少傾向になった。

一方 1945（昭和 20）年度から 1960（昭和 35）年度の 15 年間全体の支出をみると、1945（昭和 20）年度の支出は 43,321.82 円、1946（昭和 21）年度は 532,809.8 円と 12.3 倍に増えた。1947（昭和 22）年度は 2,363,116 円で前年度より 4.4 倍増え、翌年 1948（昭和 23）年度は 16,709,367 円で前年度より 7 倍に増えた。1949（昭和 24）年度の支出は 28,821.88 円（新貨幣）に抑えられた。1950（昭和 25）年度 102,486.8 円、1951（昭和 26）年度は 151,423.7 円で前年の約 5.3 倍であり、その年の収入増加より支出増加が大きい。1952（昭和 27）年度は 182,385.4 円で前年の 1.2 倍でその年の収入増加と同程度であり、1955（昭和 30）年度は 615,8000 円で 3 年前の 1952 年の約 3.4 倍でその年の収入増加と同じである。1956（昭和 31）年度は 589,032 円で前年約 0.96 倍、1957（昭和 32）年度は 591,554.8 円で前年度とほぼ同じ、1958（昭和 33）年度は 592,296 円で前年度とほぼ同じ、1959（昭和 34）年度は 1,120,565 円で前年の 2 倍、1960（昭和 35）年度とほぼ同じ 803,087.1 円で前年の 0.7 倍であった。1945（昭和 20）年度から 1952（昭和 27）年度までは、支出の伸びが大きく、インフレーションにもかかわらず、物価が上昇するというスタグレーションによる不況が続いた。その後支出も安定していったが、1958 年から収益が減少し、1959（昭和 34）年度、1960（昭和 35）年度は赤字経営となった。

財務は長女明月が 1949 年度以降一手に引き受けていた。以上のような経済状況の中で財務のやりくりは大変困難であり、おおむね黒字経営を維持できたのは彼女の手腕によるものであった。次女施美代はそのことについても、「姉は頭が良く、愛愛院の経営をすべて管理していた。母はその姉の方針にうなずき、ついていった。」と筆者に話した⁴⁸⁾。さらに次女施美代によると、多いときは収容者 400 名以上を抱えており、入所者は、互いに団結し、協力し合った⁴⁹⁾。職員や施照子を筆頭に家族である長女施明月や次女施美代の熱意と努力は言うに及ばず、「独立自営ノ精神涵養」という理念とそれを実現するという熱意、そしてそのための工夫がなければ生活の維持と収益をあげることはできなかったであろう。表 17-1、2 から収益のあがらないものは廃止し、豆腐部のようなより高い収益の上がる生産を考え、収容者の生活の保障に努めたといえる。



出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』（1945～1951年）

私立台北愛愛救済院編『私立台北愛愛救済院創立30周年紀年』1955年より作成

表18-1 愛愛院の収支決算額状況

単位:円			単位:元										
収入	1945年度	%	1946年度	%	1947年度	%	収入	1948年度	%	1949年度	%	1950年度	%
奨励金、助成金	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	奨励金	153,000.00	0.8%	125.00	0.4%	6,500.00	5.0%
下賜金	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	下賜金	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
補助金	12,850.00	9.9%	182,000.00	27.5%	700,000.00	69.1%	補助金	620,000.00	3.3%	3,090.00	8.7%	29,168.00	22.4%
寄付金	95,679.79	73.6%	346,249.39	52.3%	1,575,906.00	155.5%	援助金	16,510,486.00	86.7%	27,646.06	77.9%	60,673.15	46.5%
会費	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	会費	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
前年度よりの繰越金	6,720.94	5.2%	86,758.25	13.1%	128,639.00	12.7%	前年度よりの繰越金	216,964.04	1.1%	62.34	0.2%	7,418.56	5.7%
基金収入	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	基金収入	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
受託料(精神病患者、普通患者)	5,262.50	4.0%	46,102.50	7.0%	134,745.00	13.3%	受託料(普通患者)	854,625.00	4.5%	1,905.83	5.4%	4,290.00	3.3%
雑収入	9,566.84	7.4%	338.80	0.1%	40,790.00	4.0%	雑収入	697,985.00	3.7%	2,655.40	7.5%	951.93	0.7%
特別会計資金繰り越し	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	生産事業部	0.00	0.0%	0.00	0.0%	21,366.94	16.4%
合計	130,080.07	1.00	661,448.94	1.00	1,013,450.00	1.00	合計	19,053,060.04	1.00	35,484.63	1.00	130,368.58	1.00

支出	1945年度	%	1946年度	%	1947年度	%	支出	1948年度	%	1949年度	%	1950年度	%
基金繰入	0.00	0.0%	100,000.00	18.8%	100,000.00	4.2%	基金繰入	200,000.00	1.2%	0.00	0.0%	500.00	0.5%
営繕費	1,335.00	3.1%	10,586.00	2.0%	48,601.00	2.1%	営繕費	377,234.00	2.3%	135.11	0.5%	2,432.00	2.4%
事業費	29,573.43	68.3%	268,932.55	50.5%	1,462,693.50	61.9%	事業費	9,581,584.00	57.3%	19,498.12	67.7%	67,340.01	65.7%
財産管理費	183.06	0.4%	6,433.05	1.2%	17,172.00	0.7%	財産管理費	67,597.00	0.4%	168.30	0.6%	734.26	0.7%
授産費	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	授産費	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
寮費(1947年度より院費)	12,179.93	28.1%	101,188.90	19.0%	666,735.00	28.2%	寮費(1947年度より院費)	6,332,952.00	37.9%	9,020.35	31.3%	31,279.86	30.5%
簡易保険料	50.40	0.1%	69.30	0.0%	94.50	0.0%	簡易保険料	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
予備費	0.00	0.0%	45,600.00	8.6%	67,820.00	2.9%	予備費	150,000.00	0.9%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
							会費	0.00	0.0%	0.00	0.0%	200.70	0.2%
合計	43,321.82	1.00	532,809.80	1.00	2,363,116.00	1.00	合計	16,709,367.00	1.00	28,821.88	1.00	102,486.83	1.00
収益	86,758.25		128,639.14		-1,349,666.00		収益	2,343,693.04		6,662.75		27,881.75	

出典:私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』(1945~1951年)

私立台北愛愛救済院編『私立台北愛愛救済院創立30周年記念』1955年より作成

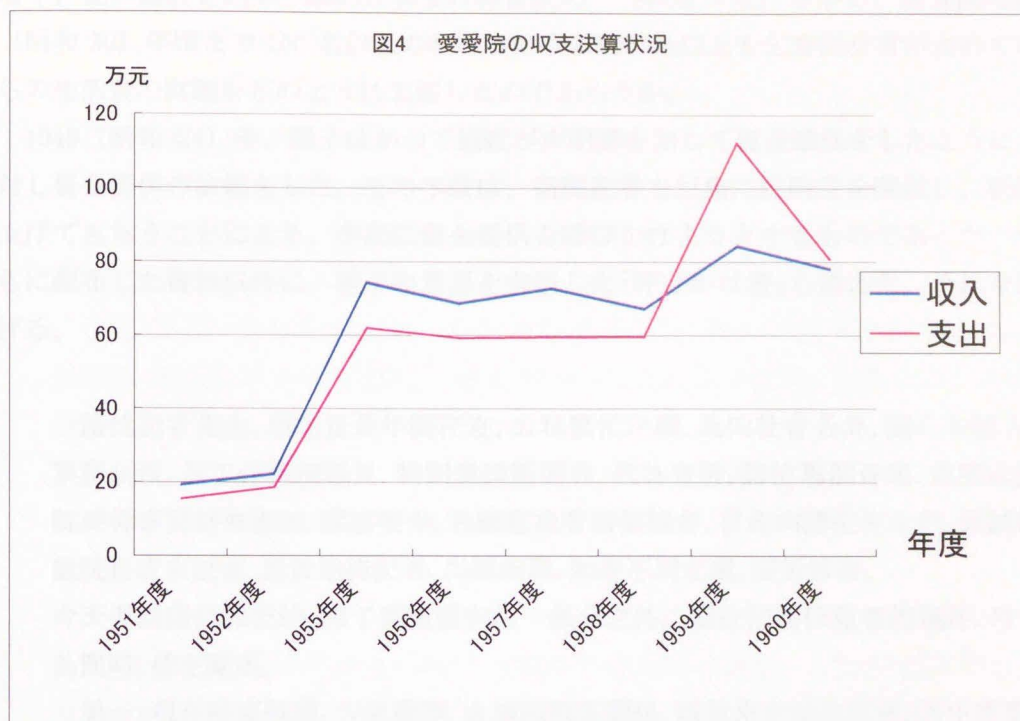
表18-2 愛愛院の収支決算額状況

単位元

収入	1951年度	%	1952年度	%	1955年度	%	1956年度	%	収入	1957年度	%	1958年度	%	1959年度	%	1960年度	%
援助金	78,529.30	40.8%	65,445.12	29.7%	138,538.60	18.7%	135,608.60	19.8%	援助金	156,712.06	21.6%	129,960.01	19.4%	167,823.30	20.0%	38,095.00	4.9%
奨励金	72,000.00	37.5%	85,860.00	38.9%	246,805.00	33.3%	298,483.24	43.5%	奨励金	308,212.00	42.5%	266,280.00	39.7%	295,900.00	35.2%	300,860.00	38.6%
生産事業	13,692.75	7.1%	15,300.90	6.9%	43,081.30	5.8%	45,347.90	6.6%	生産事業	10,042.90	1.4%	48,510.30	7.2%	47,022.70	5.6%	88,075.80	11.3%
その他	28,031.75	14.6%	54,044.30	24.5%	313,577.00	42.3%	206,097.60	30.1%	その他	250,936.10	34.6%	225,826.00	33.7%	330,446.40	39.3%	351,764.20	45.2%
合計	192,253.80	100.0%	220,650.32	100.0%	742,001.90	100.0%	685,537.34	100.0%	合計	725,903.06	100.0%	670,576.31	100.0%	841,192.40	100.0%	778,795.00	100.0%

支出	1951年度	%	1952年度	%	1955年度	%	1956年度	%	支出	1957年度	%	1958年度	%	1959年度	%	1960年度	%
事業費	51,476.99	34.0%	103,450.12	56.7%	148,759.10	24.2%	171,176.00	29.1%	事業費	199,919.70	33.8%	196,873.20	33.2%	212,572.60	19.0%	211,602.70	26.3%
事務費	85,969.57	56.8%	68,003.10	37.3%	266,347.03	43.3%	329,667.05	56.0%	事務費	350,382.60	59.2%	331,099.22	55.9%	353,094.40	31.5%	374,676.86	46.7%
財産管理費	8,014.14	5.3%	4,533.30	2.5%	18,591.70	3.0%	34,016.30	5.8%	財産管理費	21,252.50	3.6%	37,323.90	6.3%	25,050.80	2.2%	9,104.00	1.1%
予備金		0.0%	839.20	0.5%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	繰越金	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%	0.00	0.0%
その他	5,963.00	3.9%	5,559.70	3.0%	182,103.00	29.6%	54,173.00	9.2%	その他	20,000.00	3.4%	27,000.00	4.6%	529,847.16	47.3%	207,703.54	25.9%
合計	151,423.70	100.0%	182,385.42	100.0%	615,800.83	100.0%	589,032.35	100.0%	合計	591,554.80	100.0%	592,296.32	100.0%	1,120,564.96	100.0%	803,087.10	100.0%
収益	40,830.10		38,264.90		126,201.07		96,504.99		収益	134,348.26		78,279.99		-279,372.56		-24,292.10	

出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』（1945～1951年）、私立台北愛愛救済院編『事業概況—民国41年起』（1952年）、私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』（1961年）より作成



出典：私立台北愛愛救済院編『事業概況』1951,1952年

私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』1961年

表 18-1 に明らかなように 1945（昭和 20）年から 1947（昭和 22）年度まで、台北市政府受託料（精神病患者・普通患者）が補助金や寄付金以外の重要な収入源になった。1947 年度にはそれが総収入の 13.3%を占めていたが、1948（昭和 23）年度以降は 4.5%に減少した。表 11-1、2 にも示したように 1947 年度以降、要監視・非監視の精神病患者を政府から委託されなくなり、委託料の収入が減った。1946（昭和 21）年度経常費決算書と 1947 年度のそれとを比較すると表 18-1 に示したようにそれぞれの受託料は、46,102.5 元（内訳：精神病患者委託料 10,174.5 元と普通患者委託料 35,928 元で両者とも 1 名につき 180 元）⁵⁰⁾ から普通患者委託料のみの 134,745 元（普通患者委託料は 1 名につき 600 元）⁵¹⁾ に増加した。精神病患者委託料が減っても普通患者委託料の単価が約 3 倍になり増収となった。その翌年の 1948（昭和 23）年度には、モルヒネ中毒者や阿片中毒者の収容者がいなくなり、それに変わって、1947 年度より貧困者の割合が多くなった。さらに政府からの 1948 年度普通患者委託料は、1 名につき 900 元⁵²⁾ に増額された。1949（昭和 24）年度にそれは 1 名につき 5000 元と大幅な増額になったが、新貨幣で普通患者委託料総収入は 50 元と統制された⁵³⁾。そのために前年より総収入における普通患者委託料の割合が少なくなり、愛愛院の生産部の収入や寄付で賄う必要があった。

(3) 財源確保対策

1949（昭和 24）年には、前述したように国民党政府は社会事業改革を実施し、日本統治時代の救済施設を「救済院」として名称を統一した。愛愛院はもはや乞食の施設としてでは

なく、他の施設と同じ一般的な私立の救済院の一つになった。しかし、愛愛院では、1955（昭和 30）年頃まで 200 名以上の収容者のうち約半数以上を乞食出身者が占めていた。彼らの生活費の財源をどのように工面したのであろうか。

1949（昭和 24）年、照子がかつて施乾が声明書を出して資金確保をしたように、社会に対し資金提供の依頼をした。その手段は、新聞記者を対象に説明会を開催し、新聞で取り上げてもらうことにより、市民に資金提供を呼びかけようとするものであった。その時彼らに配布した資料以外に、照子の意思を表明した「呼びかけ書」も添えた。それを以下に掲げる。

諸位記者先生，現在正是年關在迺，公私繁忙之際，為向社會各界，關心本院人事，報告業務狀況，及工作情況起見，特別邀請新聞界，代為宣勞，諸位惠然肯臨，建明以愛愛救濟院總幹事資格來參加，深感榮幸，我願意趁著這個機會，首先向諸位先生們，致誠懇的敬意。敝院自成立以來，對於招待記者，尚屬創舉，如有不周之處，望祈原宥。今天要向諸位報告的，除了書面報告的一部分之外。現在把關係重要的幾件，用口頭來作為簡略，補充陳述。

第一，現在時高動盪，天氣嚴寒，內地因戰亂關係，疏散來台難胞眾多，其中需要救濟者，當不乏人，救濟工作，關係社會秩序安定，至鉅且大，若是救濟工作，辦理完善，則竊盜案件，當然減少，政府近來辦理取締散兵遊民，旨意並在於此，敝院成立之初，即以收容台北市區，所有乞丐為主旨，直到現在，每日仍派有專人，沿街巡視，收容乞丐，敝院鑑於國府遷來台北，各國使節，主將隨之而來，台北驟然成為國際都市，街面有無乞丐，關係國體民生，民族文化，至為重要，前為協助政府，整肅市容，曾自十二月一日起，加強收容乞丐工作，實行以來，市面乞丐，已絕影跡，成績尚屬良好，此為敝院協助政府，整肅市容幫助社會，維持秩序之一部分，這個事實，應為社會人士，共之共見。

第二，社會事業，是屬於社會行政之一，是國家所訂的社會政策，而基於人到主義的仁政，社會行政工作，為救人與救世工作，其對象是人，是一群最需要迫切救助的無衣無食，無住處的貧苦大眾，這些人，實在是社會上最不幸的人，她們遭受到這樣不幸的境遇，雖然她們個人要負一部分的責任，其最大原因，還是受著現代社會經濟制度不完美即不合理影響，尤其是在戡亂時期，政變無常，更是不容忽視的，政府現在的社會政策是為彌補這種制度的缺陷，若以社會的立場來講，這是一種責任，如以政府的立場來看，這是一種義務，以被救濟者的立場來說，這是一種權利，今天我們在台北愛愛救濟院服務的人，是在替政府盡義務，替社會負責任，所以，建明時常對同仁們說：「這些老老小小，男男女女，跛子癱瘓，瞎子啞巴，孤兒孀婦，都是我們的主人，我們自己要退居到公僕的地位，我們的主義是，為社會盡義務，為人群謀幸福」因此，我們也要有一個要求，

第一，希望各級政府予以行政上的支持，

第二，希望社會人士予以經濟上的援助。

第三，現在我要以台北市目前的現狀，和其他的都市，做一個比較，諸位一定都能到過

北平，南京，上海的，就拿乘公共汽車一項來講，乞丐們也時常討到一枚汽車票錢，買上一枚車票，在乘客候車排隊的時候，乘客們常常告示售票員們。不容許乞丐上車，尤其是車內擁擠的時候，因其衣服骯髒，躲之不急，靠近則衣服受害，故時時發生口角，乞丐也有理由，她們常常說：「我有錢買到車票，就有乘車的權利，同是人類，同是國民，你們能以隨便乘車，為什麼我們不能乘車？衣服襤褸，我也願意穿好的，祇是因為沒錢買，妳能替我買麼？」

其次，就是無論某一個大都市，越在人煙稠密，商業繁華的街道上，乞討的人越多，南腔北調，吵鬧不休，不但有碍營業交易，即遭受騷擾，且時有被偷竊之虞發生。

復次，即是一些苦命的人，因為時宿無定，飢飽勞碌，環境不佳，衛生缺乏，以致多患有結核肺病，或梅毒等，傳染性病，一經接觸，傳染堪虞，危害之甚，實非以短促時間，所能盡述。

請諸位稍為冷靜，建明以上所講各節，是否事實？大家要知道，現在台北市內所有的乞丐，因為完全收容在，私立愛愛救濟院，所以在街面上，絕少看見乞丐，總而言之，居住於台北市的人們，實在是太幸福了！

最後的希望，就是要借重諸位記者的力量，將敝院所有的實在困難情形，和現在經營的狀況，確確實實的，向社會各界人士，以職於社會事業的立場，以達到人類互助互惠為目標，代為宣傳，適值年間關近，冬寒已屆，現在本院收容中，三百餘個，老弱孀孤，殘疾病苦，赤足裸身，食不果腹，苦命的人等，情極可憐，希望各界人士，予以同情，助以財物，敝院同人，向以取之於眾，用之於眾，為主導，絕不敢稍有虛糜，前曾由敝院發函五百餘件，向各機關，團體，銀行，公司商號，及熱心社會事業人士，惠予希望援助去後，但截至本日止，僅有九十八件回函捐助財物，尚不足百分之二十，距離理想，實尚甚遠，國人「本位主義」即所謂「只顧自己」的思想，希望站在文化界先鋒的諸位，為國為民，領到社會的諸位，全力與提倡，使令貧困難同胞，保有安居樂業之日，即是國家太平，社會安置之年，敬祝新聞界前途光明，和諸位記者先生健康。⁵⁴⁾

記者の皆さん、いまは年末のときで公私にわたって業務多忙の折柄、今回かねてから当院に対し関心をお持ちの方々に当院人事業務状況、進展具合を報告するため各新聞社に案内状を出し、宣伝する労をとっていただけるようお願いを申しあげた次第でございます。建設当初から愛愛院の院長として参加できることは非常に光栄に存じます。当院ができてから記者を集めて説明会を開くことは嘗てなかったことで、何か至らないことがあればお許し願いたいのです。

今日、皆さんに申しあげたいことは、書面資料の他、補足として重要事項を口語文でまとめて説明させていただきます。

第一、現在の時局はひどく不安定で、寒い中国内地から戦乱から逃れて台湾に疎開してきた難民が多くいます。その中には救済の手を差し伸べなければ、とても生きていられない者も決して少なくありません。難民救援という仕事は、社会秩序、社会安定に関わるもので、十分な救済支援をすれば当然窃盗事件も少なくなります。近頃政

府側が厳しく、脱走兵、遊民を取り締まるのも同じ趣旨による行動です。当院設立の主旨は、台北市内にあるすべての乞食を收容することです。いまでも毎日乞食を收容するため、人を使って各街道を巡回してます。国民政府が台北に移転してきた以上、各国の外交官、高級軍官なども台北を訪れるので台北市が一変し国際都市になりました。道路上の乞食の有無が国の面子と民族文化に関わると考え、12月1日から政府を助けるため乞食收容に非常に力を入れ、実行して以来、市内の乞食の姿が消えたことは、社会の人々が知り、ともに見た事実です。

第二に社会事業は、社会行政の一つの分野で国の決めた社会政策と人道主義に基づいて行われた仁愛的な措置であります。この仕事は人を救い、世界を救う事業でもあります。この対象は衣食を欠き、住むところもない貧しい民衆であります。これらの人々は、社会で最も不幸な人間で、このような不幸な境遇に落ちた原因は、彼ら個人が一部分の責任を負わなければならないところもあります。しかし、その最大の原因は、なんと言っても現代社会経済制度の不備、即ち不合理の影響によるところが大きいのです。特に中国で共産党を鎮圧するとき、政局の変転が激しかったため、鎮圧できずに、台湾へ逃げてきた国民党政府であることは無視できない現実でした。その国民党政府が今の政府として社会政策の制度上の欠陥を補完することにあるのです。社会的立場から言えば、一つの責任であり、政府の立場から見れば尽くすべき義務であり、被救援者の立場から見れば権利であります。わが台北愛愛救済院に勤めている人は、政府の義務を代行して、社会的責任を果たすのです。だから建設当初から私は、よく同僚に「入寮の人々が、老人か子供、男か女、足の不自由な人か体の不自由な人、盲か聾、孤児か未亡人かを問わず、みんなは私たちの雇主で自分は僕（しもべ）という地位にある人間と思わなければならない」と言うのです。私たちのモットーは、「社会的義務を尽くして、多数の人間の福祉を図る」ことです。よって私たちも以下のことを要求します。

第一、各レベルの政府機関から行政上の支援を得ます。

第二、社会民衆から経済的支援を要求します。

第三、今の台北市の状態を北平（北京：引用者注）、南京、上海などと比較すると一つ違った現象を体得することができるでありましょう。例をあげるとたとえばバスに乗るとき、乞食も一枚の切符を買って列に並ぶことがあります。この時必ずほかの客たちから苦言が出ます。特にバスが込むとき、一般の乗客が乞食の汚い衣服を避けるため、口喧嘩などのトラブルがよくあるのです。勿論乞食からも、「自分はお金を出して買った切符だからどうして乗れないのか、着ているものが汚いからですか。自分も新しいのに着替えたいのですが、買ってくれるのですか。」という文句が返ってくるトラブルが絶えない状況であるということです。

このほかいかなる大都市であってもにぎやかなところと商売繁盛のところに必ずと

言っていい乞食が居るのです。各地の訛りをまじえて、非常に激しい営業の妨害になるばかりでなく、ときには商品が窃盗の被害に会うことも不思議なことではないでしょう。

次に、生来不運な人たちは、食事、宿泊もままならず、生活の場所がなく、不衛生な生活をしており、肺結核、梅毒などの伝染病にかかりやすいのです。これらの人と接触すると感染率が高くなるといいます。このようなことは、決して短時間で言い尽くされないものであります。

みなさん、前述したことは事実であるかどうか考えてください。現在台北市にいる殆どの乞食が私立愛愛救済院に収容されているから町に乞食が少ないのです。台北市民は幸せと思わなければならないのです。

最後にこちらの要望を述べさせていただきます。それは、即ち記者の力を借りて、当院の直面している困難な状態と現在の経営状態を確実に民衆に宣伝して知らせたいことです。当院は、社会事業の立場に立っていて、その目標は人類互いに助け合って、お互いのメリットがあるということです。

現在は年末で寒い冬が訪れて来ています。当院に収容されている 300 名以上の老人、子供など、食事や着るものに事欠けているだけでなく、病気などに苦しんでいる者居るのです。これら同情すべき境遇に喘ぐ人たちに金銭と物質的救援を求めたいのです。当院は決して無駄はしませんので安心ください。実は前に各政府機関、法人団体、銀行や会社、熱心な社会事業家宛てに 500 件以上の支援を依頼する文書を出したのですが、財物、物質的援助に応じてくれただけで支援状況は不十分です。目標まであと 20% が不足しています。国民はどうしても「自分本位」、「自分さえよければという考え」を持ちがちです。文化のパイオニアの立場に立っている皆さんはリーダーとして、貧困の国民同胞にも安全に暮らせるようなところに住ませたいと呼びかけるようお願いしたいのです。これは即ち国家泰平、社会安定の日につながるのです。最後に新聞に輝かしい未来があるようにと、記者のみなさんの健康をお祈り申し上げます。

挨拶から始まり、まず当時の台湾社会について述べ、愛愛寮が乞食を収容した実績について述べた。乞食救済はどのようにしなければならないのか、国の体面にかけても実施しなければならないことであり、愛愛寮は政府の代行をしているのである。その愛愛寮が経営が困難であるために、寄付をお願いしたいという内容である。

施照子は、愛愛寮の実質的な経営者であったが、彼女やその職員は入所者の僕であると考えていた。ちなみに前述したように、西田天香は、1935（昭和 10）年の『光誌』に、照子がうれしそうに働いていたと書いている⁵⁶⁾が、彼女の働く姿勢そのものであったと思われる。

ところで、施照子は施乾の手法をまね、社会に愛愛寮の窮状を訴え、寄付をつのつた。しかし両者には違いがある。施乾がかつて市民に出した声明書と彼女が記者を通して市民

に訴えた文はどこが違うのか。目的は二人とも同じ経済的支援を要請している。まず彼は日本統治時代にあり、彼女は国民党時代にあった。彼の内容は、市民のなかでも富裕な紳商たちに呼びかけ、同じ人間としての乞食に対する理解と紳商たちに代わって彼が愛愛寮で乞食を収容していることによる寄付の依頼である。寄付がないと愛愛寮が崩壊し、存在価値がなかったことになる」と彼は訴えた。ところが彼女は、乞食収容は社会のために実施しており、政府や市民から経済的支援は当然であるという。更に乞食は、最も不幸な境遇にあり、社会的欠陥による影響が大きく補償される権利があり、市民や政府は補償する義務があるという。経済的に愛愛寮で乞食を収容できなくなると、盗みや伝染病が発生し、社会状況が悪化することを例にし、皆が安全な暮らしができるように乞食以外の国民からの寄付を求めている。彼女は、愛愛寮が社会に代わって乞食収容をやっていることへの支援を求めている。

このように政府批判が含まれない内容であったが、台湾全島が国民党の独裁政権で騒乱状態の時に、新聞記者へこのような呼びかけをした施照子は、愛愛院継続のための強固な意志の持ち主であったと思われる。資金不足のために身動きがとれなくなっているための抗議行動としてだけでなく、そのような混乱期に冷静な判断で寄付依頼をした施照子が、前述の次女施美代の話した終戦直後におどおどして長女施明月に相談していた彼女と同一人物とは思えない程の強い彼女の意思が読みとれる。その後援助金は増え、1957（昭和 32）年度は今までの最高額の 156,712.1 元となり、この年の総収入 725,903.06 元の 21.6%を占め、彼女は、記者が市民へ呼びかけるよう寄付依頼した不足額 20%を補充できたことになる⁵⁶⁾。

一方 1950（昭和 25）年度から生産事業の追加項目収入の推移が 1961（昭和 35）年度『私立台北愛愛救済院事業近況報告』⁵⁷⁾に掲載されているが、それによると 1950 年度頃から収益額が急上昇した。その後も増え、1960 年度では最高の 88,075.8 円で総収入 11.3%を占めていた。この年は援助金額の減少もあるが、生産事業が援助金額の 2 倍の収益を上げたことになる。

このようにして、施照子の愛愛院の経営は、社会状況の変化に押し流されず、多くの収容者がまず住む所を確保し、生産事業により自力で生活できるような自立支援を図つたのである。次女施美代によると、敗戦直後に愛愛院を頼ってきた日本人の姿は貧しく、施照子は「かわいそう」と繰り返し、全力で彼等を養護していたという⁵⁸⁾。一方、小久保晴行のインタビューで、彼が明らかにしたところでは、施照子は、その頃の日本の兵士が台湾を去る前に生活用品を愛愛院に置いていってくれたので助かったと語っている⁵⁹⁾。これらの話から、愛愛院では敗戦後多数の日本人兵士との交流があり、施照子はすぐに日本へ帰れた者、帰られなかった者を問わず愛愛院に滞在させ、彼らがその後の身の振り方を自己決定できる状況まで支援したのである⁶⁰⁾。

次に 1949（昭和 24）年度から 1958（昭和 33）年度の愛愛院出院の原因を表 19-1 に示した。前述の表 14-2 の 1949（昭和 24）、1950（昭和 25）、1951（昭和 26）、1952（昭和 27）

年度の自力更生者数は各 190、201、173、131 名であった。

更に表 19-1 の更生者数の内訳（就職内訳として公務員、農業、工業、商業、漁業、使用人、兵役、その他の合計数）をみた。1949（昭和 24）、1950（昭和 25）、1951（昭和 26）、1952（昭和 27）年度の就職者総数と愛愛院出院者総数に対するその割合は各年度それぞれ 68 名（29.4%）、56 名（29.6%）、52 名（21.3%）、57 名（21.8%）であった。表 14-1 と表 16 で前述した 1946（昭和 21）、1947（昭和 22）、1948（昭和 23）年度の 3 年間における更生者総数と救護停止者総数に対するその割合は各年度 29 名（9.2%）、72 名（17.5%）、63 名（20.3%）であり、1949 年度から 1952 年度は、1946 年度から 1948 年度に比べてより多く更正できたことになる。

1949（昭和 24）、1950（昭和 25）、1951（昭和 26）、1952（昭和 27）年度の表 14-2 の救護停止者総数と表 19 の愛愛院入所者の退院原因総数に不一致がある。さらに逃走（亡）、死亡とあきらかになっている項目についても、両者の数が一致していない。そのために両者の表を各別に検討し、また各年度の傾向を把握する以外の分析は困難であり、限界がみられる。

表 19 の更生者数をみると、1949（昭和 24）年度の 68 名を頂点にし、1953（昭和 28）年度 46 名、1958（昭和 33）年度には 18 名まで減少した。表 19 の 1949（昭和 24）年度から 1958（昭和 33）年度の愛愛院の退院状況によると各年度の愛愛院退院者総数に対する「保証」（愛愛院が許可）、「申請」（本人からの申し出）、「輔導」（就職）により出院した総数の割合は、殆どが 6 割以上を占めており、愛愛院から数多くの入所者が退院していったことが窺われる。

表 19 愛愛院入所者の退院原因状況(人数)

		1949年度			1950年度			1951年度			1952年度			1953年度			1954年度			1955年度			1956年度			1957年度			1958年度			
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
保証		20	12	32	21	5	26	32	6	38	29	8	37	20	12	32	36	18	52	14	17	31	11	9	20	19	15	34	20	8	28	
申請		29	15	44	27	10	37	49	23	72	41	23	64	36	20	56	28	27	55	30	10	40	14	3	17	19	12	31	23	14	37	
就職	公務員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	農業	2	0	2	5	3	8	4	2	6	2	1	3	3	4	7	7	2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	工業	16	8	24	14	10	24	8	4	12	11	2	13	2	5	7	9	2	11	4	0	4	0	2	2	1	0	1	0	0	0	0
	商業	5	0	5	4	2	6	3	0	3	5	0	5	8	1	9	4	3	7	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	漁業	0	0	0	0	0	0	2	0	2	6	2	8	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	使用人	13	11	24	10	3	13	7	4	11	10	2	12	9	3	12	2	4	6	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	兵役	9	2	11	3	2	5	8	3	11	6	2	8	10	1	11	3	0	3	7	0	7	0	5	5	8	6	14	4	0	4	
	その他	2	0	2	0	0	0	6	1	7	8	0	8	0	0	0	0	0	4	1	5	6	0	6	7	4	11	7	5	12		
	(計)			68			56			52			57			46			37			21			13			26			18	
逃亡		24	11	35	24	13	37	28	12	40	34	26	60	25	10	35	21	10	31	24	3	27	19	4	23	27	10	37	19	1	20	
死亡		28	9	37	16	2	18	13	3	16	22	4	26	25	12	37	23	10	33	14	4	18	8	4	12	18	2	20	17	1	18	
転院		4	0	4	4	0	4	6	3	9	3	2	5	2	0	2	5	1	6	1	0	1	7	0	7	8	0	8	8	1	9	
不法入国		2	0	2	5	2	7	4	0	4	6	0	6	1	4	5	3	1	4	2	0	2	2	0	2	1	0	1	2	0	2	
休職後帰院拒否		7	2	9	3	1	4	9	4	13	5	1	6	6	1	7	8	3	11	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	
合計		181	70	231	136	53	189	179	65	244	188	73	261	147	73	220	150	79	229	103	38	141	68	27	95	109	49	158	102	31	133	

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業概況』（1971年）年より作成

5. 愛愛院の入所者の教育

表 20 の愛愛院入所者学歴状況をみると、1955（昭和 30）年度から 1961（昭和 36）年度において、小学校へ行っていない者（非識字⁶¹⁾と識字者）が、各年度の入所者総数の 60%から 70%を占めている。小学校へ行っていない者で、1961（昭和 36）年度までの識字者は 1 割程度であった。1961（昭和 36）年度になって、その識字者は 20%に増えたのである。小学校卒の者が全体の 25%で、中学卒が 10%弱である。高校卒は約 2 から 3%で、専

門学校や大学卒の学歴があるものも数名いる。

台湾では、日本統治時代の 1922（大正 11）年に総督田健治郎が「台湾教育令」を發布し、内地と同じ教育を受けることができるとされた。初等教育においては、日本語の能力によって、小学校と公学校とに分けられたが、その後 1941（昭和 16）年の日本の国内初等教育制度の改革に伴う「国民学校令」によって、小学校と公学校とは「国民学校」に統一改称されていた。

しかし国民党時代の 1955（昭和 30）年度当時、収容者の 45 歳以上の者は特定の者しか教育の機会が与えられておらず、非識字の者が多くなった。親が非識字であってもその子供の教育をしていくことが愛愛院の規定に明示されていた。その愛愛院では、育幼所の施設を設置し、他の収容者と分け、教員 2 名を配置していた。

表20 愛愛院入所者の学歴状況(人数)

年度	非識字	%	識字	%	小学	%	中学	%	高校	%	専門学校	%	大学	%	合計	%
1955年度	124	58.5%	12	5.7%	53	25.0%	16	7.5%	6	2.8%	1	0.5%	0	0.0%	212	100.0%
1956年度	117	54.2%	21	9.7%	56	25.9%	13	6.0%	6	2.8%	2	0.9%	1	0.5%	216	100.0%
1957年度	129	57.8%	15	6.7%	60	26.9%	12	5.4%	3	1.3%	3	1.3%	1	0.4%	223	100.0%
1958年度	121	57.9%	14	6.7%	53	25.4%	12	5.7%	4	1.9%	4	1.9%	1	0.5%	209	100.0%
1959年度	134	64.1%	16	7.7%	46	22.0%	9	4.3%	2	1.0%	2	1.0%	0	0.0%	209	100.0%
1960年度	133	61.9%	16	7.4%	46	21.4%	16	7.4%	2	0.9%	2	0.9%	0	0.0%	215	100.0%
1961年度	131	51.8%	33	13.0%	64	25.3%	18	7.1%	5	2.0%	2	0.8%	0	0.0%	253	100.0%

出典: 私立台北愛愛教済院編『台北市私立愛愛教済院事業近況報告』(1961年)より作成

歴年就学児童を表 21 に示した。愛愛院より国民学校等へ通う児童・生徒は 30 名前後おり、彼らの学用品代や、教育環境の整備に施照子は苦慮した⁶²⁾。また児童・生徒も小学生、中学生や高校生がいて、年齢幅も大きい。また同じ敷地内では、豆腐部の生産活動や施設外の仕事が活発に行われる一方、子供たちが一緒に勉強を教え合ったり、また食事、掃除、育児等組織運営の手伝いもし、全員の協力でひとつの大きな家族のような生活が営まれていた⁶³⁾。愛愛寮を 1944（昭和 19）年に訪問した古閑文夫によると、家族と同居している少年達は国民学校に通い、或いは卒業して労務奉公隊に入って活動している者も数名いたようだ⁶⁴⁾。彼はその少年たちの存在が寮にさしこんだ一条の光明であり、輝く希望の象徴でもあったと感じたという。更にそれから 10 年後も愛愛院では表 21 で明らかなように子供を通学させる等配慮したことがわかる⁶⁵⁾。施照子は施乾の「独立自営」の考えをそのまま引継ぎ、まず子供への教育を工夫し、彼らの力で生活できるような支援に努めたといえよう。

表21 歴年就学児童統計表（人数）

		1955年度	1956年度	1957年度	1958年度	1959年度	1960年度	1961年度
国民学校	1年	1	6	5	0	1	1	0
	2年	1	1	6	4	1	1	2
	3年	2	2	1	9	10	3	3
	4年	3	5	3	2	9	10	3
	5年	7	4	4	4	2	2	1
	6年	7	7	4	1	2	3	12
初中	1年	0	4	1	0	4	6	6
	2年	0	0	4	3	1	2	1
	3年	4	0	0	2	2	1	0
高中		0	2	0	0	0	1	1
		0	0	0	0	0	0	0
合計		25	31	28	25	32	30	29

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』（1961年）より作成

本章では、施乾の死後、戦後の混乱した国民党政権下において、施照子が愛愛院をどのように継続したかを述べた。1945（昭和20）年から1960年代にかけて、照子は、施乾の目的であった乞食撲滅を果たした。それを達成するために、施照子は愛愛院の経営状況の悪化に苦慮し、施乾と同じように市民へ寄付金を新聞記者へ依頼した。その手段として、新聞記者を集め説明会を開き、資料の他に「記者への呼びかけ書」も提示し、直接記者へ訴えた。その内容は愛愛院での乞食収容が、社会に代わって実施しているというものであった。

注

- 1) 林金田『施乾伝』台湾省文献委員会、1996年、103頁
- 2) 小久保晴行「台湾の土となる元日本女性 愛愛院にささげる博愛の半生」（同著『生きている台湾—知られざる自由中国—』20世紀社、1979年）98頁
小久保による照子へのインタビューを中心に構成されたルポルタージュである。
- 3) 2008年8月25日愛愛院における次女施美代へのインタビューより。
- 4) 同上
- 5) 同上
- 6) 2004年9月21日、2005年3月20日、2005年9月20日、2006年8月15日愛愛院における次女施美代へのインタビューより。
照子が困るとすぐ「どうしょう」と言って中国にいる姉に相談し、「もう少しの辛抱」と姉に照子は励まされていた。
- 7) 同上
- 8) 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1936年6月1日現在、1936年8月、1～2頁
- 9) 私立台北愛愛救済院編『事業概要』1944年（愛愛院書類綴所収）
- 10) 台湾社会事業協会編「無料法律相談所の開設に就いて」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第136号、1940年、所収）32頁

金子光太郎は、1887（明治 20）年兵庫県丹波大江山で生まれた。1896（明治 29）年の台風で新築中の家屋が流され、一家は離散した。彼は 13 歳の時キリスト教に入信したが、その後禅寺で修業し、1910（明治 43）年には日蓮宗に帰依した。彼は、「弁護士という肩書きより方面委員という肩書きの方に非常に執着」をしてきた。そのために開設した無料法律相談所は一方面委員としての社会事業であり、内地のそれと違うと彼は言う。それは、内地は最初は無料だが、客を釣っておいて後で報酬をとるという営利を目的としているが、彼の無料法律相談所は最後まで無料奉仕ということである。金子光太郎が乞食や愛愛寮についてどのように考えていたかは不明である。彼の記事は、「無料法律相談所の開設に就いて」以外に、本島軍事援護社会事業に対する地方の要望で台北州の方面委員として「遺族及傷痍軍人に対する小公学校教員養成施設に関する件」の議題を提出したことが『社会事業の友』第 136 号に掲載されているが、同誌の他の号に彼の記事は見当たらない。

- 11) 永岡正己「日本統治下台湾社会事業史研究の意義と課題」（永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001 年、所収）29 頁
- 12) 同上、28 頁
- 13) 同上
- 14) 私立台北愛愛救済院編「事業概要」（『事業概況集—民国 34 年起』（1945～1951 年）（愛愛院書類綴所収）
- 15) 同上
- 16) 1946 年 6 月 4 日法令改正で職員の審査が義務づけられた。その審査のために、職員の職名、姓名、性別、年齢、籍貫（県）、学歴、資歴（経歴）、住址（住所）、任免年月日項目を記入する必要があった。
その時施照子は 37 歳、明月は 23 歳であった。職員 9 名のうち愛愛院に住所がない者は、集金員と嘱託医の 2 名だけで、後の職員は収容者と一緒に共同生活をしていた。
- 17) 施乾『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』1929 年 6 月 1 日現在、1929 年 9 月、12～13 頁
- 18) 前掲「事業概要」
- 19) 私立台北愛愛救済院編『私立台北愛愛救済院創立 30 周年記念』1955 年（愛愛院書類綴所収）
- 20) 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』昭和 11 年 6 月 1 日現在、1936 年 8 月、2 頁
- 21) 台湾省編「日僑遺送 第 8 卷」『台湾省行政長官公署檔案清冊』4498 卷号（民国 35 年、民国 36 年）国史館台湾文献館、2004 年、31 頁
- 22) 前掲『私立台北愛愛救済院創立 30 周年記念』
- 23) 財団法人台北愛愛院編『財団法人台北愛愛院援助章程（民国 35 年起案）』1946 年（愛愛院書類綴所収）
- 24) 私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国 41 年度起』1952 年（愛愛院書類綴所収）

- 25) 同上
- 26) 流乞とは地域を転々と移動する乞食のこと。
- 27) 謝嬌娉「台湾台北における中・低所得高齢者世帯の居住様態からみた居住環境と生活支援のあり方に関する研究」奈良女子大学博士論文、2003 年、17 頁
- 28) 前掲「台湾の土となる元日本女性 愛愛院にささげる博愛の半生」99 頁
- 29) 劉明修『台湾統治と阿片問題』近代日本研究双書、山川出版社、1983 年、235 頁
- 30) 遠流台湾館編著『台湾史小事典』中国書店、2007 年、244 頁
- 31) 前掲、2004 年 9 月 21 日次女施美代へのインタビューより。
「病気で日本へ帰れない、または身寄りのない単身者であり、日本での帰り場所がなかった。」
- 32) 2008 年 8 月 25 日愛愛院における長男（院長）、次女施美代へのインタビューより。
- 33) 広辞苑第 5 版による。
- 34) 前掲『台湾史小事典』244 頁
- 35) 東アジア地域高齢化問題研究委員会編『台湾の人口高齢化と高齢者福祉平成 8 年度研究報告書』エイジング総合研究センター、1997 年、15 頁
- 36) 前掲、2008 年 8 月 25 日愛愛院における次女へのインタビューより。
- 37) 前掲『事業概況集—民国 34 年起』
1946、47 年の職員の審査は共に「優良」であった。1947 年には、職員を 3 名増やし 12 名にしている。2008 年 8 月 25 日愛愛院にて次女美代は、その当時職員の質と量が充実したとインタビューにて話していた。
- 38) 施乾『乞食社会の生活(附) 乞食救済策』愛愛寮刊、1925 年 1 月、24 頁
- 39) 同上、30 頁
- 40) 庸工は雇用人や使用人を意味する。
- 41) 自活生計可能者は、養豚夫、竹細工、畑工作、厨夫・助手、看護人、庸工、国軍兵士以外の者で自活生計可能な者を意味している。
- 42) 他の施設について、残された資料はない。国民党政権になり、日本統治時代の所有物の移管が行われたが台湾文献館の書類の中に、愛愛院のような福祉関連施設の資料は保存されず、台湾文献館の陳文添によれば国民党政権にとっては価値がないと見なされていたように思われる。この資料は、愛愛院が現存しているから手に入ったものであり、当時の施設はそのまま残っていないため、愛愛院と他の施設の比較は困難である。
- 43) 前掲『事業概況集—民国 34 年起』
- 44) 前掲、2008 年 8 月 25 日愛愛院における次女美代へのインタビューより。
- 45) 同上
- 46) 前掲『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』2 頁
- 47) 1949 年に「財団法人台北愛愛院援助章程」が発行された。これは、今までの「愛愛寮規約」

と違い、第7章第31条項の細部について記載がある。会計は、第8条に会計年度毎年1月1日起こし同年12月31日止に至ると明記され、数値で把握されるようになった。前掲、2008年8月25日愛愛院における次女施美代へのインタビューにて効率的な授産指導がなされたと述べた。

48) 前掲、2004年9月21日次女施美代へのインタビューより。

自分は専門学校出身であるが、姉は市立第1高女学校の出身で頭が良いと話した。

49) 前掲、2008年8月25日愛愛院における次女施美代へのインタビューより。

50) 財団法人台北愛愛院編『経常費決算書』1946年

51) 財団法人台北愛愛院編『経常費決算書』1947年

52) 財団法人台北愛愛院編『経常費決算書』1948年

53) 私立台北愛愛救済院編『経常費決算書』1949年

54) 私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国34年起』、『事業概況集—民国41年起』

(愛愛院書類綴所収)。「呼びかけ書」は施照子の意思を表しているので原文どおりの繁体字を使用した。

55) 西田天香「台湾再遊」『光誌』163号1935年7月(一燈園資料館「香倉院」所蔵資料) 9頁

56) 私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』1961年10月(愛愛院書類綴所収)

57) 同上

58) 前掲、次女施美代へのインタビューより。

日本人以外に中国大陆や朝鮮半島の出身者が照子を頼ってくる人が多かったと言う。施照子は訪ねてきた人全員を「かわいそう」と言って受け入れていたので、毎日訪ね人で愛愛院は混乱していたとのことであった。

59) 前掲「台湾の土となる元日本女性 愛愛院にささげる博愛の半生」98～99頁

60) 2004年9月21日愛愛院における次女施美代へのインタビューより。

61) 前掲『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』1961年。

原文では「不識字」となっている。

62) 前掲、2004年9月21日次女施美代へのインタビューより。

63) 同上

64) 古閑文夫「愛愛寮の生活—台北市緑町所在」(『民俗台湾』第4巻11号、1944年、所収) 38頁

65) 前掲『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』1961年

第六章 高齢者施設としての愛愛院

1. 施照子時代の中・後期で高齢者施設化した時代

1955（昭和 30）年度から 7 年間に於いて、愛愛院へ入院してきた原因を表 22 に示した。

表 22 愛愛院入所者の歴年入院原因統計表（人数）

類別	1955年度				1956年度				1957年度				1958年度				1959年度				1960年度				1961年度			
	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%	男	女	計	%
補入																												
本院	8	6	14	6.6%	5	4	9	4.2%	4	3	7	3.1%	4	3	7	3.3%	4	3	7	3.3%	4	2	6	2.5%	4	2	6	2.4%
警局	33	9	42	19.8%	38	12	50	23.1%	39	14	53	23.8%	35	16	51	24.4%	35	14	49	23.4%	43	21	64	26.3%	37	24	61	24.1%
流浪	6	1	7	3.3%	6	1	7	3.2%	4	1	5	2.2%	3	1	4	1.9%	2	0	2	1.0%	4	1	5	2.1%	4	0	4	1.6%
介送																												
貧困	10	4	14	6.6%	12	3	15	6.9%	14	4	18	8.1%	15	4	19	9.1%	12	3	15	7.2%	14	5	19	7.8%	18	7	25	9.9%
残障	35	12	47	22.2%	41	12	53	24.5%	42	13	55	24.7%	36	14	50	23.9%	38	12	50	23.9%	39	14	53	21.8%	46	8	54	21.3%
老弱	10	2	12	5.7%	10	4	14	6.5%	9	3	12	5.4%	11	4	15	7.2%	21	7	28	13.4%	24	8	32	13.2%	25	17	42	16.6%
災害	1	0	1	0.5%	0	0	0	0.0%	0	0	0	0.0%	0	0	0	0.0%	0	0	0	0.0%	0	0	0	0.0%	0	0	0	0.0%
失依	18	11	29	13.7%	19	10	29	13.4%	22	11	33	14.8%	17	5	22	10.5%	17	3	20	9.6%	19	5	24	9.9%	18	5	23	9.1%
請求																												
無養	17	13	30	14.2%	16	12	28	13.0%	15	13	28	12.6%	16	13	29	13.9%	15	13	28	13.4%	16	14	30	12.3%	15	13	28	11.1%
無居	5	3	8	3.8%	4	1	5	2.3%	5	1	6	2.7%	4	2	6	2.9%	3	1	4	1.9%	3	1	4	1.6%	3	1	4	1.6%
其他	7	1	8	3.8%	6	0	6	2.8%	6	0	6	2.7%	6	0	6	2.9%	6	0	6	2.9%	6	0	6	2.5%	6	0	6	2.4%
合計	150	62	212	100.0%	157	59	216	100.0%	160	63	223	100.0%	147	62	209	100.0%	153	56	209	100.0%	172	71	243	100.0%	176	77	253	100.0%

出典：私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』（1961年）より作成

1955（昭和 30）年度から 1961（昭和 36）年度までの愛愛院入院原因をみると、それまで多かった貧困や疾病に変わり、警局（警察）から保護された者が約 25%、障害・老弱（虚弱高齢者）・災害・「失依」（頼る親戚がいない）で行く所がなく送られて来た者がその約 30%で、それらの合計が入所者の約半数以上を占めた。その他「無養」（扶養義務者が扶養できない）の理由で家族から請求のあった者がどの年度にも約 10%以上いた。また「老弱」は 1959（昭和 34）年度から入院者総数の 10%以上になり、高齢化がみられるようになった。一方で 1960（昭和 35）年度には、入所者 243 名のうち乞食は僅か 16 名であった（表 11、12）。乞食が激減した 1963（昭和 38）年度に「養護所」、1973（昭和 48）年度に「安老所」を開始され、愛愛院は虚弱高齢者業務が開始されることになったのである。

愛愛院は、施乾の頃と比べて入所者に障害者や老弱者が増え、授産施設で更生させることが不可能な入所者も多くなってきた。また家族問題を抱えた「無養」（養う者がいない）のような入所者、他に「流浪」（他地方から流れてきた）¹⁾、「無居」（住むところがない）²⁾の者がいた。このような問題を抱える高齢入所者状況の中で、院長は、政府から公的に委託された人々を収容したが、それ以外に政府の基準に合わない人は多くいたであろうし、その困窮者を院長判断により収容の決定ができた³⁾。しかし、苦しい財政状況で、院長は入所予定者の思いを抱きながらその収容の決断に苦しんだと思われる。

ところで施照子は、施乾のように「乞食撲滅」の理念について発言をしていない。施乾は、理念を実現するのに「今やわたしは正に倒れんとしてゐる。瀕死のドン底に陥つてゐる」と述べ、経済的に倒産に追い込まれていると告白している⁴⁾。施照子は 1947（昭和 22）年に一度だけ行政からの援助を公言したが、それ以外は自らの理念を公に語ることはなかった。施乾同様の苦労があったと思われる。前述したように、「乞食撲滅」を 1960 年代の初めに果たしたことである。これは、施乾が死亡してから約 20 年間かけてやっと実践できたことを意味する。更に収容者の様相が施乾の時代と異なり、更生できない障がい者や虚弱高齢者、家族扶養を受けられない者等、問題をかかえる高齢者を授産施設として多く収容するようになり、彼らの救護をしなければならなかったからである。台湾の経済成長に伴った社会の変化により、乞食が少なくなり、それに代わって自立できない高齢者への支

援となった。それも前述したように市政府の先駆けとなり、公的に収容されない高齢者が愛愛院で収容された。パンフレット『愛愛寮の物語』で、この収容者について施照子は、「この社会で一番困っている人、一番可愛相な人達、身寄りのない人」⁶⁾と言っている。まさに施乾がかつて「乞食」について、「誰ひとりとして相手にしてくれる者はなく、人間はずれの者として」⁶⁾世間がみており、その境遇の悲惨を、言葉に言い表すことができないと述べた乞食の境遇と、施照子が収容した 1960 年代の高齢者たちのそれとはなんら変わらないと思われる。そしてまた施乾が乞食たちに人間らしい生活をさせようと彼らの更生に努めたことと、施照子が「かわいそう」⁷⁾を連発しつつ、高齢者を収容し、彼らに生活の場を提供し、高齢者に尊厳の保持ができるように支援をしたことは同じである。そうであるならば、施照子において施乾の精神が受け継がれたと考えるのが適切である。大きな違いは収容者の年齢だけであり、そのための支援の方法の相違だけであつたといえよう。社会的な影響を考えるならば、乞食は周囲の者を巻き込んだ悪影響を及ぼすが、高齢者の場合は、彼ら自身の生活の保障が重要であり、問題が周囲に拡散していく心配は少ない。そのために照子は、1960 年代以降、今後の愛愛院のあり方や運営についても時間をかけて十分検討できたのではないだろうか。

いずれにしても、施照子の業績は、施乾の「独立自営」の理念が乞食撲滅後も継承され、職員と一体となって、困っている収容者に住む家を与え、救護したことにある。施乾時代の入所者に対して授産事業を実施し、社会で自立させることを目的としたが、1960 年代の施照子の特徴は、入所者の殆どが高齢者であつたことに配慮し、彼等自身が自立した生活ができるように施設を経営をしたことであろう。次女施美代によると、照子は、彼女自身が高齢になっても、杖をつきながら高齢者の食事介助や衣服着脱等の支援を自ら実践していたという⁸⁾。

2. 愛愛院収容者の救護原因と出身地

1964（昭和 39）年愛愛院の収容者は前年に比べて、本省人が 114 名から 80 名に、外省人が 126 名から 32 名にそれぞれ減少した（表 12）。なぜ愛愛院の収容がこの時期に減少したのか。

台湾では経済の成長とともに、公衆衛生と栄養状態の改善により、死亡率が減少し、合計特殊出生率が 1950（昭和 25）年 7.04、1960（昭和 35）年 5.59 と減少し始めた。これらにより高齢化を招くことになり、台湾政府は 1962（昭和 37）年に社会調査規則を施行し、1963（昭和 38）年に社会調査を実施した。その結果を踏まえて、1964（昭和 39）年には「民生主義現段階社会政策」⁹⁾がとられた。この政策は、当時の救済的政策から、多様な福祉サービスの導入による民主的な政策であり、高齢者向けの福祉政策が充実した¹⁰⁾。1968（昭和 43）年に政府は民主主義による福祉政策の一環として、以前「救済院」と呼ばれていた高齢者施設を「仁愛之家」、「廣慈博愛院」と名称変更し、窮民以外の高齢者にも門戸を広げた。愛愛院入所者は表 12 で示すように、1964（昭和 39）年には入所者が前年に比べて半減している。その頃の愛愛院の救護停止状況に関する資料がないが、愛愛院以外に

も高齢者の施設ができたのでそれらの施設へ移れたのである。収容者が愛愛院から他の施設へ移ったことは、行き場がなく愛愛院で収容されていた彼らが他の施設へ移動する選択ができたことになる。国民党政府の福祉住宅に入所できない者が主にそのまま残り、愛愛院で収容されていた¹¹⁾。そして 1971 (昭和 46) 年の最後まで愛愛院での外省人収容は、30 名を下回らなかった。政府は榮譽国民の家を増やし国民党兵士を救済したにもかかわらず、行き場を失った外省人が愛愛院に収容されていたのである。施乾時代の収容者は本省人が多かったが、施照子時代は、本省人が死亡か退所し、残り 1 名となった時、高齢になった社会生活の困難な外省人の多くを収容していたことになる。

他院の高齢者へのサービスは、相変わらず救済的な援助であった。前述したように 1940 (昭和 15) 年代には、仁愛の家が救済院として建てられていたが、1968 (昭和 43) 年以後は、入所対象者を低所得者の公費負担だけに限定せず、中所得者の自費負担にも広げられた。しかしその仁愛の家は、低所得者が対象であることは変わらず、サービスも後にみるような高齢者自身の主体性を考えたレクリエーション活動はなく、ただ住みかを与えるという単なる救済的なものであった。¹²⁾

1970 (昭和 45) 年の台北地区の高齢化率は台北市で 2.4%、台北県で 2.9%であり¹³⁾、日本の 7.0%より高齢者の割合は少ないが、高齢者の増加は着実に進んできた¹⁴⁾。更に台湾では中国的家族制度が規範とされたため、親の扶養は家族の責任とする 3 世代同居という居住形態である大家族を理想としていたが、社会の近代化や工業化に伴って、核家族が増えてきた。台湾家族計画研究所の調査によると、核家族は、1965 (昭和 40) 年 35%、1973 (昭和 48) 年 43%、1980 (昭和 55) 年 50%と増え、住宅が不足した¹⁵⁾。そのために政府の福祉対策として 1972 年には、私立の福祉施設が設立された。さらに 1976 (昭和 51) 年に、台湾省政府は住みなれた地域に居住したいという高齢者の意向を汲み、「社区村里設置安養堂一級老年貧民作法」を公布した。基礎自治体である「郷」、「鎮」、「区」の「老人文康活動中心」(公民館に相当)でそれまで高齢者の交流活動が行われていたが、この法律により、それよりも身近な「村」、「里」の地域に安養堂が設置されたのである¹⁶⁾。

その頃健康な高齢者居住施設として、仁愛の家(台湾省政府が運営)、榮譽国民の家(国軍退役軍人輔導委員会が運営)、社区安養堂(台湾省政府が運営)、私立老人ホーム、養護センター、長期養護センターがあった¹⁷⁾。仁愛の家、榮譽国民の家、社区安養堂は自立生活のできる高齢者が対象であった。2002 (平成 14) 年仁愛の家は 44 施設で収容者 7,057 名(入所者 4,214 名)、榮譽国民の家は 18 施設で収容者 129,517 名(入所者 15,293 名)であった。そのうち社区安養堂は、「社区村里設置安養堂一級老年貧民作法」に基づき 1978 (昭和 53) 年から 1982 (昭和 57) 年に集中的に建設された。この施設は、60 歳以上の低所得高齢者のみを対象として公費で運営され、2001 (平成 13) 年に台湾で 17 箇所にあり、552 名の総定員数の小さな施設として、住み慣れた地域で生活できるコミュニティー住宅になった。しかし入所者数は定員の半数にも満たなかった¹⁸⁾。その理由は、入所基準が厳しく、生活保護を必要とする世帯であり、身体的に自立して生活ができることが求められたから

であろう。

1980（昭和 55）年に老人福祉法が發布され、1983（昭和 58）年に初めて 10 か年計画が立てられ、老人福祉の充実を図った。老人福祉法第 7 条には、老人福祉施設として①扶養施設：扶養の義務のない、又は扶養の義務があっても扶養能力のない親族の老人の収容を目的とする施設、②療養施設：長期的慢性病（特病）の老人又は寝たきりの老人の収容を目的とする施設、③休養施設：老人の休閒、ウェルネスや娯楽及び交際活動を行うことを主な目的とする施設、④サービス施設：老人への総合的サービスの提供を主な目的とする施設をそれぞれ設立し、各施設の設立基準は中央政府の管理機関が制定すると明記されている。①の扶養施設基準は厳しく、子供のいる世帯の高齢者は入所ができなかった。また②の療養施設も収容人員の限界があり、退所を余儀なくされた高齢者の受け皿が問題になったであろう。

その後約 20 年後の 1996（平成 8）年には、全省で公、私営の療養機関が 23 箇所、老人ホーム施設に付随する療養施設が 17 箇所あり、3700 余のベッドがあった¹⁹⁾。また慢性病にかかった老人や寝たきり老人を収容する特別養護老人ホームが 14 箇所になったのである²⁰⁾。

このような低所得高齢者施設の現状から、愛愛院は高齢者の増加に対応できる施設として脱皮をはかることができたのである。愛愛院は、「社区村里設置安養堂一級老年貧民作法」方針に先駆けて、表 10 のように養護所業務（医療収容しても治癒しなかった寝たきり老人の収容）、安老所業務（孤独で経済的に貧しく、頼る者がいない政府からの委託老人の収容）を開始した。そして 1976（昭和 51）年にこの法に基づき乞食の救済院としてではなく、高齢者施設として「財団法人台北市私立愛愛院」と名称を変更したのである。その収容者について、小久保晴行が 1978（昭和 53）年に施照子にインタビューをした際、彼女は次のように答えた²¹⁾。以下それを要約する。

愛愛院は私立の施設であり、基金はなく、1 か月 40 万元近くかかる。市政府から約半分の 20 万元の補助があり、後は寄付金でまかなっているが、その日ぐらしであり、大変である。現在の収容者は 253 名で、普通の老人が主であれば問題はないのだが、寝たきりの人や恍惚の人が、市立の老人院に入りきらずに、愛愛院へ送られてくる。こちらの職員は、8 名であり、市立と違って手が届かず骨が折れる。80%が大陸から来た人で、昔偉かった人もいるらしい。台湾の人は 20%である。入所者の状況は様々である。両手が使用できず、口で食事をする外省人が 2～3 年間入所している。女姓 19 名のうち年齢が不明で、話もしない女性、10 年以上の長期にわたり入所しており、職員のいいつけを良く聞いている。他にも 30 数年入所している「おしゃればあさん」や、母親を愛愛院でガンで失った中学 1 年の娘がどこにも出かけないでいる。現在 77 歳か 78 歳のマレーシアから来た人で、昨年姉と再会し、テレビ放映された盲目の女姓もいる。更に年中口の開閉運動しかできない植物状態になった元警察関係の仕事をしていた人がいる。彼には時々小遣いを持ってきてくれる人がいる。このように 1970 年代において、収容者の多くは高齢者で、その殆どが外省

人であった。

愛愛院は、高齢者が多く、それも介護が必要な収容者であった。施乾時代から「独立自営ノ精神涵養」により乞食を更正させることが愛愛院目的であった。施照子時代も 1950 年代中頃には、収容者が乞食から貧困者になりつつあったが、彼と同じように、貧困の収容者の更正を目的としつつ生産部による収益をあげていた。しかし、1970 年代の後半には、照子の先述の話から、一部を除いて殆どの入所者は高齢者であった。1960 年代中頃から愛愛院収容者の激減（表 12）と社会ニーズによる高齢者の収容となり、愛愛院経営方針の大転換を余儀なくされた。すなわち今までのように「独立自営」が可能な若者は入所しなくなり、それに代わって高齢者が多数入所した。しかし彼らを更生させるための授産活動は無理であった。そこで愛愛院は政府からの補助を受けながら、行き場のない高齢者の収容施設に経営の転換を図ったのである。寝たきりの人や認知症の人の収容者が、市立の老人院に入りきれなく、その受け皿として政府は彼らを愛愛院へ送ったのである。次女施美代によると、入所期間の長い者は、戦後乞食として親と共に収容され、親の死後、自活する能力を身につけての退所ができず、そのまま愛愛院で生活をしている者がいるという²²⁾。

さて、上記の施照子の話から、愛愛院は私立の機関として施乾の頃と同じく資金繰りが苦しいが、1979（昭和 54）年の小久保晴行の取材当時に 1 日 2 俵（80 升）の米を入所者に食べさせている²³⁾。その後 1984（昭和 59）年の「愛愛寮の物語り」の中で、照子は、老人の安老病院で治療しても治癒しない「慢性の病人、残廢等 250 名程を収容」しており、そのうち「60 歳以上が 100 名」いること、「残廢（盲、啞不具）」が 105 名いて、この社会で一番困っている者、一番可愛そうな者、身寄りのない者を収容しているという²⁴⁾。このように公的機関で収容できない重症な高齢者の受け皿として、国民党政府の高齢者対策を支えているといえる。それも施乾の頃は、同じ台湾人の収容者が多かったが、照子のこの頃は、多くの外省人が収容されるようになった。戦後 100 万人の兵士が大陸から来たといわれているが、その後 30 年経ち、彼らが身寄りのない高齢者になり、公的機関からの委託を受けて愛愛院に収容されるようになった²⁵⁾。

そのころ各部屋にテレビがあり、入所者の一人が班長になり、他の入所者の世話をする。また食堂がなく、いくつかのベッドのある大部屋の中央の机で食事をするといった貧しい施設であった（現在は食堂が分離され、食事以外の時も団欒の場となっている）。この頃はまだ以前と同様に、1 階で豆腐を作るなどし、売ることこそしないが出来る限り自給自足をする施設であった。更に 1 階に診察室があり、日本から毎年大久保という医者が診察に来てくれるので、照子や入所者はとても喜んでいたという²⁶⁾。

次女施美代によると千葉の医師である大久保は 10 数年前から他の医師を連れて 1 年に 1 回 1 週間位滞在し、愛愛院の収容者の診察をしてくれた。またその医師は施照子が新聞の読み物に出たことで愛愛院を知り、その後施照子への個人的支援を惜しなかった²⁷⁾。

市政府は、この愛愛院を 3 階に建て直して、収容人員を増やすことを勧めるが、照子はこれ以上は大きくしたくはなかった。市政府としては、今後増加する高齢者の収容施設と

して、民間の愛愛院に期待するところが大きかったことがわかる。

その当時愛愛院は創立 55 年にあたり、その後も愛愛院は、政府からの委託高齢者を受け入れることで、公的機関で収容できない、行き場のない高齢者の受け皿としての機能を請け負うことになったのである。これは、施乾が総督府で収容できない本省人の乞食を主に収容をしていたのと類似している。

以上のように愛愛院は、国民党政府の高齢者福祉政策のため 1964（昭和 39）年を境に低所得者の高齢者収容施設に変わった。このことは、愛愛院が施乾の理念であった社会で自活することを目指し訓練する自立支援ではなく、他の施設と同じような収容を目的とする施設になっていったのである。確かに収容者が高齢者中心になってしまい、生産部で収益をあげ、彼らが自力で社会生活することは困難になったが、前述したように 1980（昭和 55）年頃まで豆腐作りをし、最後まで自給自足の生活を続けた。その後豆腐作りがなくなり、かつ体力的に限界に達した高齢者は、愛愛院で残された余生を送っている。施乾の愛愛寮設立当初の規約にあった「人間的生活を基調とする社会生活の実現」²⁸⁾ という理想は、入所対象者が若く、更正後、愛愛院を退所して社会で自立した生活をするのが可能になった。しかし、施照子時代における高齢の入所者については、更正による退所は不可能になったが、最終の目標である人間としての生活が送れるような支援はしっかり引き継がれた。

3. 愛愛院の経済状況（高齢者施設化した時期）

1958（昭和 33）年頃より乞食は急激に高齢化し、60 歳以上が前年の 10%以下から 40%以上を占めた（表 13）。更生者として愛愛院からの退所は望めなくなったが、この経済成長の影響で豆腐部は着実に収益をあげ、高齢者の授産としてもかなり適していたといえる。

表 18-2 に愛愛院の収支決算額状況によると 1959（昭和 34）年度、1960（昭和 35）年度は赤字経営であった。なおその時の支出項目でその他の額が多いが、詳細は不明である。

この頃の愛愛院は経済的に困難であったと思われる。その生産部も入所者の高齢化で事業の継続が困難になったことも要因となったのであろう。愛愛院は今までの更生施設ではなく、市政府に期待される高齢者施設に変わって行ったといえる。1963（昭和 38）年の養護所開設で政府からの委託高齢者を受けようになり、経済的な保障の確保ができるようになり、その後経営の目途がたったのである。

表 23 の更生者数をみると、1959（昭和 34）年度は 6 名と 1 桁になり、1962（昭和 37）年度は更生者をだすことができなくなった。それも 1959（昭和 34）年度から 1964（昭和 39）年度に至って、更正者は兵役とその他のみとなり、更にそれ以降は仕事につけなかったため、本来の更正者を出すことができなくなったのである。

表23 愛愛院入所者の退院原因状況

	1959年度			1960年度			1961年度			1962年度			1963年度			1964年度			1965年度			1966年度			1967年度			1968年度			1969年度		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
保証	7	4	11	2	1	3	4	1	5	5	5	10	1	1	2	40	13	53	41	14	55	21	5	26	10	5	15	6	3	9	1	4	5
申請	7	2	9	7	6	13	1	3	4	8	3	11	8	4	12	5	2	7	10	1	11	2	1	3	11	0	11	4	1	5	4	1	5
就職	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
公務員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
農業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
工業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
商業	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
漁業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
使用人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
兵役	3	0	3	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	1	3	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(計)	5	1	6	6	0	6	1	0	1	0	0	0	0	0	0	3	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
逃亡	8	1	9	8	3	11	1	0	1	3	0	3	0	0	0	29	0	29	17	0	17	13	0	13	8	0	8	8	0	8	1	0	1
死亡	4	4	8	7	2	9	4	1	5	15	4	19	11	3	14	10	2	12	19	4	23	18	3	21	27	3	30	32	4	36	28	3	31
転院	3	0	3	6	1	7	1	0	1	1	0	1	0	0	2	4	0	4	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
不法入国	1	1	2	3	0	3	0	0	0	0	0	0	3	3	1	1	2	11	0	11	5	0	5	5	2	7	1	0	1	0	0	0	0
休暇後帰院拒否	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	35	13	48	39	13	52	12	5	17	32	12	44	20	11	31	91	19	110	102	19	121	59	9	68	61	10	71	52	8	60	34	8	42

出典：私立台北愛愛教済院編『台北市私立愛愛教済院事業近況報告』(1961年)、私立台北愛愛教済院編『台北市私立愛愛教済院事業概況』(1971年)より作成

4. 施照子の大家族支援

施乾は乞食が独立できるように授産を実践したが、それは照子に継続されたのか。彼は、授産により、乞食を更生させることを理念とした。今まで述べたように、照子の時代は政権が代わり、戦後の混乱期であった。そのために、授産については、林金田のインタビューからも、戦争直後は乞食たちの生活維持のために資金確保が第一の目的であった²⁹⁾。前章で述べたように照子は、記者への呼びかけをして、かわいそうな乞食への社会支援を求めることがあった。

戦後多数存在した乞食は、1960年代以降殆どいなくなり、それに代わり高齢者が多くなった。その後、経済が成長し、食べることに困らなくなったが、収容されている高齢者をどのように支援するか。それも、もはや授産による独立自営のための更正は、高齢者にとって不可能であった。愛愛院に収容された高齢者は、生活の場や療養場所を求めている。施乾の頃、重症な高齢者に対しては、まず治療してから授産をさせていたが、高齢者ばかりの収容になれば、授産による社会参加の可能性がなくなる。つまり授産については高齢者になったため、施乾の継承は困難となった。

前述のように、この時期愛愛院は、政府の依頼を受けて高齢者施設へと変わった。そのため、政府の入所者委託費用で愛愛院の経営の大部分をまかなうことができるようになった。そこで施照子は、乞食や貧困者の社会的支援から貧困者や高齢者に対し施照子の家族と一緒に生活をしながら「大家族支援」を行った。

「大家族支援」とは、単なる施設収容ではなく、収容者と施照子の家族を含めた愛愛院の職員が一つの家族的なコミュニティをつくり、職員の手を借りつつ、収容者どうしが互いに支え合うことである。その先頭に立ったのは、施照子自身であった。彼女は87歳の高齢で杖を使用しつつ、収容者に食事の介助を行っていたという³⁰⁾。

その当時のことを入所者であった張文明は次のように語っている³¹⁾。彼は、幼少の頃照子に愛愛院へ連れてこられ、成人してからも職員として働いた。次女施美代も看護師として、彼と一緒に長年愛愛院で働いた。

老家在二次世界大戰期間被空襲炸毀,當年他的父親已經過世,母親也無力撫養,從此從

宜蘭流浪到台北,過著天亮找東西吃、在街頭到處睡的生活,當時和他一樣在街頭流浪的小孩很多,他們告訴張文明,如果看到有人推著手拉板車,掛著「愛愛寮」的布條叫他們,張文明還想說:「這不是養鴨的嗎?」

第二次世界大戰で空襲を受け、張文明の父親は既に亡くなり、母親は子供を養う力が亡くなっていた。そこで彼は、宜蘭から台北にかけて乞食をし、食べ物を探し、街頭で寝る生活をしていたという。その頃街頭には、彼のような子供の乞食が多かったようだ。子供の乞食たちは、彼に、「愛愛寮」の布の垂れ幕がかかっている手押し車を押している人は、「愛愛寮」の人であるといった。

その後彼は愛愛寮の院児となった。そしてそのまま成長し、その職員として 1990（平成 2）年に体を壊し退職するまで愛愛院で働いた。それは施乾の家族支援の理念^{32）}とは変らないものの施照子のやさしさと温かみが更に加わった家族支援で愛愛寮を運営したのである^{33）}。

こうして施照子は、対象者こそ高齢者になったが、施乾の言う「人間的な生活」を収容者に送らせることについては変えることなく愛愛院を継続させたのである。

注

- 1) 流浪とは、例えば夏は台北市、冬は台南市へと季節によって移動する乞食をいう。
- 2) 無居とは家庭から追い出されたりして住む家のない乞食をいう。
- 3) 私立台北愛愛救済院編『財団法人台北愛愛院援助章程』1946 年（愛愛院書類綴所収）
- 4) 施乾「おことわり」『乞食撲滅論＝社会問題の根本問題＝』1925 年 12 月、2 頁
- 5) 財団法人台北市私立愛愛院編『愛愛寮の物語り』（愛愛院のパンフレット）1983 年 10 月（愛愛院書類綴所収）
- 6) 前掲「パンフレット」『乞食撲滅論』1 頁
- 7) 2004 年 9 月 21 日、愛愛院における次女施美代へのインタビューより。
- 8) 同上
- 9) 民生主義現段階社会政策とは民主主義政策のことである。
- 10) 謝嬌嫻「台湾台北における中・低所得高齢者世帯の居住様態からみた居住環境と生活支援のあり方に関する研究」奈良女子大学博士論文、2003 年、18 頁
- 11) 前掲、2004 年 9 月 21 日、愛愛院における次女施美代へのインタビューより。
国民党政府の福祉住宅は入所基準があり、低所得、子供がいない等の制限がある。
また病気で自立生活ができなければ、病院へ入院するが、公的な病院は介護が主になると退院させられた。
- 12) 前掲「台湾台北における中・低所得高齢者世帯の居住様態からみた居住環境と生活支援のあり方に関する研究」18 頁

- 13) 台北県は台北地区で台北市と基隆市を除いた地域である。
- 14) 孫得雄「台湾・台北高齢化社会事情」（東アジア地域高齢化研究委員会編『東アジア地域/高齢化問題研究 都市の少子高齢化研究〈総括編〉』平成 11 年度研究報告書、エイジング総合研究センター、2000 年、所収）41 頁
- 15) 同上、44 頁
- 16) 徐明仿「『老人福利法』に基づく高齢者福祉の展開」（沈潔編『中華圏の高齢者福祉と介護—中国・香港・台湾—』ミネルヴァ書房、2007 年、所収）198 頁
- 17) 前掲「台湾台北における中・低所得高齢者世帯の居住様態からみた居住環境と生活支援のあり方に関する研究」20 頁
- 18) 同上、21 頁
- 19) 前掲「台湾・台北高齢化社会事情」64 頁
- 20) 同上、66 頁
- 21) 小久保晴行「台湾の土となる元日本女性」『生きている台湾—知られざる自由中国—』20 世紀社、1979 年、99～10 頁
- 22) 2008 年 8 月 25 日次女施美代へのインタビューより。乞食の子供の中には、最初から病気があり、愛愛院からの退所ができなかったという。
- 23) 前掲「台湾の土となる元日本女性」102 頁
- 24) 前掲「愛愛寮の物語り」
- 25) 前掲「台湾の土となる元日本女性」100 頁
- 26) 同上、102 頁
- 27) 前掲、2008 年 8 月 25 日愛愛院における次女施美代へのインタビューより。

次女美代が昨年、愛愛院が新設されるということで彼に手紙を出したところ、彼の妻から返信があり、体調不良ということであった。彼は美代より 2 歳年下の昭和 6 年生まれであった。1981 年 3 月（3 から 4 回目の訪問）付けで、照子と写っている愛愛院の写真を前にして美代は彼の親切に感謝していた。
- 28) 施乾『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』1929 年 6 月 1 日現在、1929 年 9 月、37 頁
- 29) 2008 年 8 月 19 日、台湾省文献館副館長室における林金田訪問インタビュー。
- 30) 前掲、2004 年 9 月 21 日、愛愛院における次女施美代へのインタビューより。
- 31) 蔡明雲編『台湾百年人物誌 1』財団法人公共電視文化事業基金会、玉山社、2005 年、84 頁
- 32) 前掲「台湾の土となる元日本女性」95 頁

収容者たちも共に汗を流して工事に携わった。建物が完成したときの一同の喜びは一生忘れられないものであったという。
- 33) 前掲『台湾百年人物誌 1』89 頁

終章

施乾が「乞食」をどのように捉え、その救済施設として愛愛寮をどのように経営したのか、そして彼の死後、妻施照子が夫の事業をどのように継承し、運営したかについてまとめておきたい。

1. 施乾が愛愛寮を設立し、それをどのように経営したのか。

孫彰良は、植民地下の窮民救助福祉事業という視点から、資金が少ないにもかかわらず多くの収容者をかかえていたことで、「愛愛寮」は行政機関の単なる補完ではなく、その代替機能を果たしていたとする。また大友昌子は、その著書『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』で、台湾人の代表的な社会事業家としての施乾についてふれ、彼の行為は植民地政策のなかの社会事業への批判によるものであることを指摘する。つまり、植民地政策は「欧米の模倣」であり、また植民地政策のなかの社会事業は「本島特殊の事情」の社会事業でないことを施乾が認識していたとしている。その意味で施乾は、新たなタイプの個人による窮民救助事業家であるとする。

それらの研究を踏まえ、筆者は、施乾の出生前からの台湾について、更に施乾による社会事業の展開を跡付けた。施乾は、現地調査により乞食の悲惨な実態を把握し、旺盛な研究心と強い情熱を持って、同胞である台湾人の乞食撲滅を図るため愛愛寮を設立したのである。その後、総督府の補完事業としての経営を実践した。すなわち総督府は、乞食が街で徘徊していたのを放置していたが、施乾は、その乞食を愛愛寮で収容し、救済した。

施乾は単に、孫彰良のいうように行政機関の代替機能を果たそうとしたのではないし、大友昌子のいう植民地政策への批判があったとは考えられない。

施乾は台湾人であり、エリート教育を受け、総督府に就職した。そこで艋舺一帯の社会調査をし、台湾人である乞食の生活が非人間的な生活で悲惨なことを身をもって感じ、人間的な生活改善のためには、乞食を乞食部落からまず引き離し、自ら愛愛寮の建設をし、そこに彼等を収容した。施乾は3年間で乞食の撲滅ができると考えたが、実際はその後約40年の年月を要した。社会事業を始めたときの施乾は、20歳を過ぎたばかりの若輩であり、惨めな生活をしている乞食を、自らの情熱と努力によって、自立させ更正できると簡単に考えていたのである。

しかし、その経営は、施乾が考えていたように甘くなかった。まず、植民地政策の中で、私設である愛愛寮への補助は少なく、経済的に愛愛寮の経営難に直面する。そこで清朝時代に地域の有力者による自治団体である保甲団体を主体にした財団組織をもって愛愛寮を経営しようと考え、総督府にその旨の意見書を提出したのである。その結果翌年に、愛愛寮は、施乾の個人施設から公益団体へと組織の再編がなされた。その財団役員は、総督府が任命してきた方面委員がなった。施乾は、従来の方面委員の活動状況から、彼等による乞食救済は困難であると考えたが、結局総督府の方針に従い、数名の方面委員を愛愛寮の役員として受け入れて経営をすることになる。

施乾は、台湾市民にも寄付金を求めるが、乞食が街からいなくなると、施乾に事業を任

せておけばよいという考えで、寄付をする市民も少なかった。そこで施乾は、「声明文」を出し、特に地域の担い手であった紳商と呼ばれる富裕層に呼びかけた。

このように、施乾が愛愛寮の経営が困難な時の救い手として、保甲団体や紳商と呼ばれる富裕層を対象とすることは、施乾が「本島特殊の事情」の社会事業を求めていたという大友昌子の指摘と重なる。

施乾が、愛愛寮を経営するにあたって、乞食救済を単なる事業としてではなく、被收容者である台湾人の同胞として、彼等を通じ、彼等の生活改善をはかろうとした。施乾は、日本の宗教家である西田天香の「自他一体」の考えから利己利他、利他利己の道理を取り入れ、また賀川豊彦の『貧民心理の研究』著作から乞食の心理についての研究や、賀川と同じく農業による授産事業重視するという、強い影響を受けた。そして「独立自営の精神」を涵養することを目的とする理念をもって愛愛寮の経営を行った。また当時の日本の植民地政策における乞食救済の不十分なことを指摘し、総督府への批判精神をもって愛愛寮を経営したのである。

2. 妻施照子が夫の事業をどのように継承し、運営したか。

施照子は植民地時代に施乾の死後、愛愛寮をどのように継承したか。国民党政権に交代があった当初は、物価高騰と不景気で社会は混乱していたが、施照子は 300 名余りの收容者を抱えどのように、愛愛寮を運営したのかについて、先行研究は明らかにしていない。

施照子は、施乾の乞食救済事業に心酔し、彼と結婚し、台湾での生活を始めたが、愛愛寮の経営実態は彼女の予想を超えて厳しいものであった。しかし施乾の激励もあり、彼女はその厳しい現実を直視し、先行研究者のいうキリスト教による「愛」の精神で施乾と協働で愛愛寮を経営した。戦後国民党政権になって以降、施照子は日本人であることにより迫害を受けるが、台湾に踏みとどまり愛愛寮の経営を継続した。

国民党政権に変わって、誰もが苦しい生活の時に、彼女は夫施乾と同じように、徘徊している乞食を愛愛寮で收容した。しかし施照子は、時代の変化とともに、一般市民のために愛愛寮を経営したのである。そして愛愛寮の経営が経済的に困難なときに、施乾は当時紳商と呼ばれる富裕層に対し援助を求めたが、施照子は、新聞記者への「呼びかけ書」を通じ広く市民に対し援助を求めた。広く一般市民のため、社会全体のために愛愛寮は存在し経営されていると、そこで主張される。

施照子は日本統治最期の 1 年、施乾時代と同種の救護原因を持つ多くの本省人を対象として乞食救済事業を行った。施乾の「独立自営の精神」を涵養することが目的である授産事業は、こうして施照子により継承された。それらの点から、施照子は施乾と同じ方法で乞食救済事業を実施した。戦時体制下にある 1950 年代において、政府の貧民救済が乞食まで手が回らなかった。施照子は、日本統治下の施乾と同様、総督府や政府による社会政策の欠陥を補填する事業を行ったのである。

国民党政権直後、日本人であった施照子は中華民国に帰化したとはいえ、彼女の出身国であった日本統治時代と同じように、彼女は、施乾の事業をそのまま継承することに困難

があった。また施乾時代の収容者と異なり、愛愛寮の収容者は、本省人に代わって外省人が増加した。更に国民党政権政策の変更や時代の変化の中で、施乾時代に多かった精神病患者やモルヒネ中毒者の収容者はいなくなった。しかし、収容者数は多かった。

施照子は、施乾と同じように収容者の授産に力を入れた。授産事業の種類についても彼と同じように創意工夫した。特に豆腐部を立ち上げてからは、授産による収益が上った。その結果、愛愛寮の財務状況の多くを授産収益が占めた。しかし、その授産事業により自立できる者は収容者の高齢化とともに少なくなっていく。

こうして施照子は、国民党政権の初期においても、施乾の経営理念や経営方針を基盤にした上で、彼女自身が創意工夫しながら、政府のやるべき社会政策の一端を担った。

その後の国民党政権下で1960（昭和35）年以降は、台湾の経済発展と国民の生活水準の向上により、乞食は少なくなり、愛愛寮は乞食収容施設としての役割を終えていった。そして、愛愛寮は、国民党政権の高齢化対策の一環を担う、一施設となり、今日に至っている。

こうした施乾と彼から愛愛寮を継承した施照子の貧民救済の実践活動をみると、戦前については、台湾の最も悲惨な乞食の救済を台湾人である施乾と彼の妻が、日本の植民地政策を補完する活動として実施した。宗主国日本の植民地である台湾での総督府の社会事業は、乞食の救済事業にまで行き渡らなかったといえる。世界において他の被植民地域でも、台湾と同様に植民者や宗主国による弱者救済への支援は不十分であったと思われる。その点からも施乾と施照子が実践した植民地政策の中での乞食の救済事業は、台湾の事例としてユニークであろう。

更に戦後については、中華民国人となった施照子が、社会混乱の中で、政府の手の届かない乞食救済事業を国民党政権下で続行した。その後、愛愛寮は、乞食が減少し、それに代わって行き場を失った高齢者を政府の方針で収容することになった。愛愛寮は、戦後の当初、政府に先立ち乞食救済事業を行ったが、その後の経済発展により政府の高齢者政策の充足への一施設となった。世界においても、戦後独立国となった多くの国は、経済発展途上国であり、貧困や弱者への政府による支援が不十分である。その点から施照子の果たした戦後の役割は、歴史的な国の発展とともに変化し、特殊な乞食の救済から一般的な高齢者の救済になった。

愛愛寮は、植民地政府や国の発展段階での政府の補完事業であったが、その活動の原点と意義を、以上の内容との重複を恐れず、以下の5点にまとめた。

（1）人間としての自立

施乾は、最も生活に困窮している乞食村に居住し、実態把握に努めた。そして乞食が同じ人間であるのに、人間としての生活が保障されていないことを強く感じた。そのため彼らに人間的な生活ができる方策として彼らに対し授産を行い、彼らが社会で自立できるように愛愛寮を運営した。彼らに「独立自営ノ精神を涵養」することを愛愛寮経営の理念とし、乞食撲滅のために、彼は一生をかけたのである。

（２）私財を投げての民間施設

植民地時代総督府主導で行われた救済事業は、乞食救済まで行き届かなかった。慈恵院の数は少なく、収容されるところがなくなった乞食は、街で徘徊し、社会問題をおこすようになった。施乾は、総督府の対応で解決されないため、民間人として私財を投げて、乞食収容の愛愛寮を設立した。施照子は、誰もが貧しい中、私財を作り出す工夫をしながら愛愛院を経営した。誰もが手につけない乞食救済を施乾と施照子が民間の施設として長期に渡り実施した意義は大きい。

（３）社会的なアピール

施乾は「声明文」、また施照子は「呼びかけ書」により、愛愛寮・愛愛院への経済的支援を求めた。このように、社会へアピールすることは、救済事業を実施する基盤となる社会風土づくりとして重要であろう。

（４）平等性

台湾の植民地政府の中では、被植民地である台湾人と日本人（内地人）との住み分けがあり、差別があった。また台湾人である乞食が徘徊するようになった。施乾は、このような乞食が同じ台湾人であり、多くの台湾人の乞食を同胞として救いたかったのである。

一方施照子は、愛愛院の職員が乞食の「僕」であると言ったように、キリスト教の信者として人類愛による平等性をもって収容者と対応したのである。

（５）実践力

施乾は、乞食に対し「独立自営の精神を涵養する」理念で終始一貫授産による自立支援を行った。また施乾は、民間経営で経済的基盤がなく、植民地下で乞食救済を実践するために、政府や市民への協力を求め、乞食撲滅を目指した。施照子は、彼の乞食撲滅の理念を理解し、彼と結婚し、台湾に行った。彼女は、国民党政権交代後も中華民国に帰化して、死亡寸前まで長期にわたり院長として愛愛院を経営した実践家であった。

以上のようなことから愛愛寮の経営実態の事例は、台湾の弱者救済にそして今日の日本や世界の弱者救済の実践タイプといえる。すなわち、清朝時代や日本統治時代に主に行われていたように、ただ弱者にものを与えるだけでなく、弱者の意思を尊重した自立支援が重要であるといえる。弱者になっても最期までその人らしく自立した生き方がある。また弱者がそのように自立することにより、弱者救済にかかる市民の経費も少なくなる。まさに施乾と施照子が最困窮者である乞食に「独立自営ノ精神」を涵養することを理念とした救済は、乞食にとっても人間らしい生活ができ、市民にとっても乞食から受ける負担の減少になったからである。

また日本統治から国民党政権の中で行われた愛愛院の実践は今日的な意義がある。弱者の支援には、施乾と施照子のような弱者への同胞としての人間理解が根底に必要であり、それは時代や地域を越えて妥当する。

研究の限界としては、愛愛院の国民党政権下での1970年代頃までの資料が不十分であったことがある。戦前の他の施設についても、例えば台南愛護会や台北仁濟院を始めとする社

会事業を担ってきた施設に関する情報は殆どなく、戦後の社会事業についても、殆どないか、行政機関の都合で閲覧できない状況にある。今回、幸運にも、愛愛院が存続してそこに保存されていたから愛愛院の組織としての資料が手に入ったのである。

今回不十分であった愛愛院の内容については、当時の施乾や施照子を知って現在も愛愛院へ寄付を続けている無名の人々、愛愛院を訪問したことのある施乾と公学校が同じであった元総統、愛愛院を訪れて診療の援助をされていた日本医師の家族との面接を計画し、更に実態を明らかにしたい。又他の施設の経営実態の把握についても今後の研究の課題としたい。

最後に今回の指導をしていただいた主査の西尾先生には、歴史的研究の手ほどきを受けた。最初は台湾の虚弱高齢者の実態を把握し、法的整備のない台湾での高齢者の意識を分析したいと考えた。しかし、台湾の人々は生育歴が大きく違い、出身地により考え方も様々であった。同じ台湾人でも周りの人々に気を使い、時には警戒をしているようであった。そのために研究方法について悩んでいたところ、西尾先生からの助言と紹介を受けた愛愛院の歴史研究に焦点をあてることになった。副査の渡辺先生には、学術論文作成としての手ほどきを受けた。愛愛院の思いが先行してしまった読みづらい文を何度も修正して戴いた。論文以外にも教育者としての指導方法も学ばせて戴いた。同じく副査の藤井先生からは、民族学の視点で助言を戴いた。先生方にはここで深く感謝したい。

また貴重な資料を戴いた愛愛院の院長施武靖や次女施美代氏を始め、職員の皆様には、何回かの訪問時いつも快く迎えて戴き感謝したい。論文完成後一番に報告に伺いたいと思っている。台湾国史館文献館の陳文溪氏には、国民党政権時代の資料協力を戴いた。同じく台湾国史館文献館長の林金田氏には、かつて愛愛院調査時の状況について貴重な体験談を語って戴いた。賀川豊彦記念館の学芸員杉浦秀典氏、一燈園の学校長、同じく一燈園資料館長、一燈園研究者の宮田昌明氏に貴重な資料提供を戴き、励まして戴いた。大学院後期課程の徐正樺氏には、何度か台湾での調査時に協力して戴いた。皆様に深くお礼を述べたい。

資料・参考文献

A 資料（愛愛院関係の資料や資料集）

（愛愛院）

- ・ 愛愛寮編『乞丐撲滅協会 宣言、要旨、規約』1926 年 11 月
- ・ 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1936 年 6 月 1 日現在、1936 年 8 月
- ・ 財団法人台北愛愛寮編『事業概要』1937 年 4 月 1 日現在、1937 年 5 月
- ・ 財団法人台北愛愛院編『経常費決算書』1946 年財団法人台北愛愛院編『財団法人台北愛愛院援助章程（民国 35 年起案）』1946 年（愛愛院書類綴所収）
- ・ 財団法人台北愛愛院編『経常費決算書』1947 年
- ・ 財団法人台北愛愛院編『経常費決算書』1948 年
- ・ 財団法人台北市私立愛愛院編『愛愛寮の物語り』（愛愛院のパフレット）1983 年 10 月（愛愛院書類綴所収）、
- ・ 財団法人台北市私立愛愛院編『財団法人台北市私立愛愛院 2003 年報』
- ・ 財団法人台北市私立愛愛院編『財団法人台北市私立愛愛院 2004 年報』
- ・ 財団法人台北市私立愛愛院編『歓迎台北市私立愛愛院』2004 年
- ・ 施乾『乞食社会の生活（附）乞食救済策』愛愛寮刊、1925 年 1 月
- ・ 施乾『乞食撲滅論＝社会問題の根本問題＝』1925 年 12 月
- ・ 施乾「初めて助成金を載いて」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 2 号、1928 年、所収）
- ・ 施乾『愛愛寮概況 附・愛愛寮規約』1929 年 9 月
- ・ 施乾「妄想妄談」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第 14 号、1930 年、所収）
- ・ 施乾・李天贈訳『孤苦人群録』台北県立文化中心、1994 年
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業概要』1944 年（愛愛院書類綴所収）
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国 34 年起』（1945～1951 年）（愛愛院書類綴所収）
- ・ 私立台北愛愛救済院編『経常費決算書』1949 年
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業生産部決算報告書』1949 年
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業生産部決算報告書』1950 年
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業生産部決算報告書』1951 年
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業生産部決算報告書』1952 年
- ・ 私立台北愛愛救済院編『私立台北愛愛救済院創立 30 周年記念』1955 年（愛愛院書類綴所収）
- ・ 私立台北愛愛救済院編『事業概況集—民国 41 年度起』1952 年（愛愛院書類綴所収）
- ・ 私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業近況報告』1961 年（愛愛院書類綴所収）
- ・ 私立台北愛愛救済院編『台北市私立愛愛救済院事業概況』1971 年（愛愛院書類綴所収）

- ・ 台北愛愛寮編『台北愛愛寮統制経営案（草案）』1932年6月（日本）
- ・ 井出季和太『台湾治績志』（1937年原刊、1997年南天書局有限公司復刻）
- ・ 大友昌子「日本統治下台湾における社会事業政策の展開」（永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001年、所収）
- ・ 大友昌子「台湾窮民の生活と社会事業—台湾における1920年代～1930年代『社会調査』からの一考察—」（中京大学社会科学研究所台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』中京大学社会科学研究所刊、2003年、所収）
- ・ 大友昌子「帝国日本の植民地社会事業政策研究：台湾・朝鮮の比較を通して」長崎純心大学博士論文、2006年
- ・ 大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究—台湾・朝鮮—』ミネルヴァ書房、2007年
- ・ 賀川豊彦（賀川豊彦全集刊行会編『貧民心理の研究』賀川豊彦全集第8巻、キリスト新聞社、1962年、所収）
- ・ 賀川豊彦「台湾紀行」（『雲の柱』4号、1922年、賀川豊彦記念松沢資料館所蔵）
- ・ 河上肇『貧乏物語』岩波文庫、1947年
- ・ 河上肇『自叙伝（1～4）』岩波文庫、1996年
『自叙伝（5）』岩波文庫、1997年
- ・ 金子保「台湾の社会事業家施乾と愛愛寮」（淑徳大学院編・刊『淑徳大学院紀要』第6号、1999年、所収）
- ・ 金子保『生涯発達心理研究—淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心に—（淑徳大学社会学部研究叢書15）』学文社、2002年
- ・ 杵淵義房『台湾社会事業史（上）』（1940年刊行）（永岡『植民地社会事業関係資料集 台湾編9』近現代資料刊行会、2000年、所収）
- ・ 近現代資料刊行会企画編『私設社会事業概要』2001年
- ・ 古閑文夫「愛愛寮の生活—台北市緑町所在」（『民俗台湾』第4巻11号、1944年、所収）
- ・ 小久保晴行「台湾の土となる元日本女性 愛愛院にささげる博愛の半生」（同著『生きている台湾—知られざる自由中国—』20世紀社、1979年）
- ・ T, Chizuru「A Study on the Actual Situation of Elderly People in Taiwan」愛知淑徳大学現代社会学部論集、第10号、2005年
- ・ 栃本千鶴「台湾の高齢者の意識—2005年3月のインタビュー調査から—」愛知淑徳大学現代社会学部論集、第11号、2006年
- ・ 栃本千鶴「戦後台湾の高齢者福祉と『台北市私立愛愛院』」法政論叢第44巻第1号、2007年
- ・ 永山英樹「万華・愛愛院と『仁の人』施乾先生」（許國雄編『台湾と日本・交流秘話』第2刷、1997年、所収）

- ・ 永岡正己「日本統治下台湾社会事業史研究の意義と課題」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊(解説)近現代資料刊行会、2001年、所収)
- ・ 西田天香『天華香洞録』第6巻、2004年
- ・ 西田天香『西田天香日記昭和10年4月29日』一燈園資料館「香倉院」所蔵資料
- ・ 西田天香「台湾再遊」(『光誌』163号、1935年7月、一燈園資料館「香倉院」所蔵資料)
- ・ 西田天香『懺悔の生活』春秋社、1995年
- ・ 宮本義信『『台北市私立愛愛院』の思想と実践—施乾、施照子が遺したもの—』(日本キリスト教社会福祉学会編『キリスト教社会福祉学研究』38号、2005年、所収)
- ・ 宮田昌明『西田天香』ミネルヴァ書房、2007年
- ・ 吉田莊人『人物でみる台湾百年史』東方書店、1993年
(台湾)
- ・ 伊藤潔『台湾』中公新書、第12版、2000年
- ・ 蔡明雲編『台湾百年人物誌1』財団法人公共電視文化事業基金会、玉山社、2005年
- ・ 孫彰良「私設救護施設愛愛療からみる植民地下の窮民救助」(永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集・台湾編』別冊(解説)近現代資料刊行会、2001年所収、)
- ・ 淡水国小編『淡水国小一百年誌』1996年5月26日発行
- ・ 柴山武矩「社会的私設歴訪記(台北市)」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』2第6号、1929年、所収)
- ・ 柴山武矩編「第4回全島社会事業大会・第5回全島方面委員大会出席者氏名」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第14号、1932年、所収)
- ・ 徐蘊康「人間大愛施乾与清水照子」『台湾百年人物誌1』財団法人公共電視文化事業基金会、玉山社、2005年
- ・ 台湾社会事業協会編「第1回全島社会事業大会」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第2号、1928年、所収)
- ・ 台湾社会事業協会編「内地便り『3日やつたら止められぬ乞食 収入は1円50銭から5円』」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』3第8号、所収、1929年)
- ・ 台湾社会事業協会編「社会事業家の声」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第9号、1929年、所収)
- ・ 台湾社会事業協会編「山室軍平氏講演会及懇親会」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第9号、1929年、所収)
- ・ 台湾社会事業協会編「乞食の収入」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第9号1929年、所収)
- ・ 台湾社会事業協会編「社会事業の諸問題—『座談会』—」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第4号、1929年、所収)
- ・ 台湾社会事業協会編「無料相談所の開設に就いて」(台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第136号、1940年、所収)

- ・ 台湾総督府文教局社会課編『台湾社会事業要覧』1931 年
- ・ 台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』1933 年
- ・ 台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』1934 年
- ・ 台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』1935 年
- ・ 台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』1938 年
- ・ 台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』1939 年
- ・ 台湾総督府文教局編『台湾社会事業要覧』1942 年
- ・ 台北市政府社会局編印『台北市社会事業統計年報』、2002 年
- ・ 台湾省編「日僑遺送 第8巻」『台湾省行政長官公署檔案清冊』（民国三十五年、三十六年）4498 巻号、国史館台湾文献館、2004 年
- ・ 張紹濂「愛々寮に於けるモルヒネ中毒者の治療撲滅」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』第15号、1929年、所収）
- ・ 内政部社會司編印『社會福利基本數據』2004 年
- ・ 杜聰明『回憶錄』（上巻）台北市龍出版社、1989 年
- ・ 劉明修『台湾統治と阿片問題』（近代日本研究双書）山川出版社、1983 年
- ・ 林金田『施乾伝』台湾省文献委員会、1996 年
- ・ 李健鴻「恩待福利体制与不平等」（李健鴻『慈善与宰制』台北県立文化中心、1996 年）
- ・ 王昭文「承教乞巧的社会改革者—施乾」（『20 世紀台湾歴史与人物—第6 屆中華民國史專題論文集一』国史館印行、2002 年、所収）

B 資料（愛愛院関係以外の資料や資料集）

（日本）

- ・ アジア旅行研究会『[台湾]旅行写真館』日本機関誌出版センター、2001 年
- ・ アジア遊学『東アジアのグローバル化』勉誠出版、2005 年
- ・ アドルフD. ラッカ著、河東田博他訳『スエーデンにおける自立生活とパーソナル・アシスタンス』現代書館、2002 年
- ・ 相大二郎『いのちって何』PHP 研究所、2008 年
- ・ 一番ヶ瀬康子『地域に福祉をい築く』旬報社、1994 年
- ・ 井部俊子「看護提供チームにおけるエンパワーメントの様相」聖路加看護大学博士論文、2001 年
- ・ E. O. コックス・R. J. パーソンズ著、小松源助監訳『高齢者エンパワーメントの基礎』相川書房、1997 年
- ・ Orem, D. E. Nursing: Concepts of Practice. New York: McGraw-Hill Book Company, 1971
小野寺杜紀訳：オレムの看護論—看護実践における基本概念、医学書院、1988 年
- ・ 大久保洋子『高齢者の自立と健康に関する研究』近代文藝社、1996 年
- ・ 大沢真里『アジア諸国の福祉戦略』ミネルヴァ書房、2004 年

- ・ 金子勇「台北の高齢化と都市生活」『地域福祉社会学—新しい高齢化社会像』ミネルヴァ書房、1997 年
- ・ 金子勇『高齢社会とあなた』NHKブックス、2001 年
- ・ 金子勇『都市の少子社会—世代共生をめざして—』東京大学出版会、2003 年
- ・ 金子史代「ドロセア・E. オレムにおける看護のセルフケア不足理論の基礎的研究：ケアリング・学習・援助を中心として」新潟大学博士論文、2003 年
- ・ 金井一薫『ナイチンゲール看護論・入門』（現代社白鳳選書 14）現代社、2006 年
- ・ 樹神弘「明治・大正の女傑 下田歌子女史」岩村朝教育委員会発行、年月日不明
- ・ 菊池正治他編著『日本社会福祉の歴史付・資料』ミネルヴァ書房、2003 年
- ・ 白取春彦『東洋哲学は図で考えると面白い』、青春出版社、2005 年
- ・ 司馬遼太郎『台湾紀行』、朝日新聞社、2005 年]
- ・ 司馬遼太郎『歴史と小説』集英社、2006 年
- ・ 塩川太郎「台湾における少子化と教育政策」『海外事情』Vol. 54.No. 12、拓殖大学海外事情研究所刊、2006 年
- ・ James E. Birren al., The Concept and Measurement of Quality of Life Frail Elderly, Academic Press, Inc., 1991 三谷嘉明他訳：虚弱な高齢者のQOL—その概念と測定—、医歯薬出版株式会社、2001 年
- ・ 斉藤嘉孝他「韓国の敬老堂におけるソーシャルキャピタルと健康」『公衆衛生』医学書院、Vol. 71.No. 10、2007 年
- ・ 瀬地山角『東アジの家父長制』勁草書房、2000 年
- ・ 末盛慶他「日本の高齢者介護予防に向けた社会疫学的大規模調査」公衆衛生、69 巻 7 号、583—587、2005 年
- ・ 高島昌二『スウェーデンの家族・福祉・国家』ネルヴァ書房、2000 年
- ・ 武井昭「『生活の質』論のフレームワーク—社会秩序と関連して—」（高崎経済大学地域政策学会『地域政策研究』第 2 巻第 3 号、所収、2000 年）
- ・ 竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史・大正編』田畑書店 1996 年
- ・ 谷沢永一『論語』幻冬舎、2007 年
- ・ 津端正子「新潟県松之山町における老人の自殺予防を主眼とした訪問活動」、生活教育へるす出版、2000 年
- ・ 坪井ひろみ『グラミン銀行を知っていますか』東洋経済、2006 年
- ・ 中島恒雄『二十一世紀の高齢者福祉と医療』ミネルヴァ書房、2007 年
- ・ 新野直明「沖縄における高齢者の抑うつ症状有症率」長寿科学総合研究平成 8 年度研究報告、1997 年
- ・ 新野直明「高齢者の精神的健康度をどうみるか」生活教育へるす出版、2000 年
- ・ Nishi, K. & Tochimoto, C :An Approach to Regional Rehabilitation Classes Aimed at Self-Initiated Participation by The Frail Elderly-Exploratory Study on

Determinants for Participation in Rehabilitation Classes- Journal of Medical Wealfare 1、2005

- ・ 野川とも江「介護家族の介護適応プロセスおよびQOLとケアマネジメントのあり方」日本社会事業大学博士論文、1998年
- ・ 野尻雅美「生態的健康観 21世紀の健康観」『日本公衆衛生雑誌』第50巻第2号、2003年
- ・ 早瀬保子『アジアの人口』アジア経済研究所、2004年
- ・ 東アジア地域高齢化問題研究委員会編『台湾の人口高齢化と高齢者福祉平成8年度研究報告書』エイジング総合研究センター
- ・ 東アジア地域高齢化問題研究委員会編『都市の少子高齢化研究平成11年度研究報告書』エイジング総合研究センター
- ・ 東アジア地域高齢化問題研究委員会編『東アジア地域の人口高齢化と社会変化2003』エイジング総合研究センター
- ・ 檜山幸夫『台湾総督府文書の資料学的研究—日本近代公文書学研究序説—』ゆまに書房、2003年
- ・ 平野久美子『トウサンの桜—散りゆく台湾の中の日本』小学館、2007年
- ・ 松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会、2006年
- ・ 三原博光『介護の国際化』学苑社、2004年
- ・ 村岡義明ほか「地域在宅高齢者のうつ状態の身体・心理・社会的背景要因について」老年精神医学7、397—407、1996年
- ・ 守屋洋『老子・莊子』東洋経済、2007年
- ・ 吉田久一『日本の社会福祉思想』勁草書房、1994年
- ・ 吉田久一『日本の貧困』勁草書房、1995年
- ・ 吉田成良「東アジア地域の高齢化社会の研究」（豊川裕之編『東アジア・欧州と日本の高齢者保健福祉ケアの動向』保健の科学、第47巻、第8号、所収、杏林書院、2005年）
- ・ ロバート・シルジェン『賀川豊彦』新教出版社、2007年
- ・ 和氣純子「高齢者を介護する家族—エンパワーメント・アプローチの展開に向けて」東洋大学博士論文、1996年
- ・ 『世界の統計』総務庁統計局編、2000年
- ・ 内閣府大臣官房政府広報室『高齢者介護に関する世論調査、7・8月、2003年
- ・ 『世界国勢図絵』（財）矢野恒太記念会編、2007年
- ・ 介護保険事業報告資料、厚生労働省老健局、2007年4月1日付
- ・ 厚生労働省2001年 国民生活調査
- ・ 厚生労働省2002年 国民生活基礎調査
- ・ 厚生労働省2004年 簡易生命表
- ・ 厚生労働省2005年 人口統計
- ・ 『世界国勢図絵』（財）矢野恒太記念会編、2007年

- ・『女性白書 2007』日本婦人団体連合会編、2007 年
- ・『国民の福祉の動向』（財）厚生統計協会編、2007 年
- ・『国民衛生の動向』（財）厚生統計協会編、2007 年

（台湾他）

- ・黄文雄『日本の植民地の真実—台湾 朝鮮 満州』扶桑社、2005 年
- ・河原田稼吉「社会事業家諸君に望む」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』創刊号、1928 年、所収）
- ・杵淵義房「貧民窮民の意義と貧乏の原因」（台湾社会事業協会編・刊『社会事業の友』創刊号、1928 年、所収）
- ・呉文星他編『認識台湾』国立編訳館、2005 年。蔡易達他訳『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』雄山閣、2005 年
- ・遠流台湾館編著『台湾史小事典』中国書店、2007 年
- ・小林善基紀『台灣論』台灣文史叢書 101、2001 年
- ・洪郁如「近代台湾女性史序説：日本の植民地統治と『新女性』」の誕生」東京大学博士論文、2001 年
- ・洪郁如『近代台湾女性史-日本の植民地統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2002 年
- ・蔡明雲編『台灣百年人物誌 2』財団法人公共電視文化事業基金會、玉山社、2005 年
- ・蔡焜燦編『総合教育讀本 清水公學校 昭和十年八月』先鋒打字印刷有限公司、2006 年
- ・孫曉冬『中国型ワークフェアの形成と展開—福祉資本主義と市場社会主義における福祉レジームの可能性』昭和堂、2006 年
- ・謝雅梅『台湾は今日も日本晴れ』総合法令、2003
- ・謝嫣婷「台湾台北における中・低所得高齢者世帯の居住様態からみた居住環境と生活支援のあり方に関する研究」奈良女子大学博士論文、2003 年
- ・孫得雄「台湾の人口転換と高齢化」、（東アジア地域高齢化研究委員会編『東アジア地域/高齢化問題研究 台湾の人口高齢化と高齢者福祉』平成 8 年度研究報告書、エイジング総合研究センター、1997 年、所収）
- ・孫得雄「台湾・台北高齢化社会事情」（東アジア地域高齢化研究委員会編『東アジア地域/高齢化問題研究 都市の少子高齢化研究（総括編）』平成 11 年度研究報告書、エイジング総合研究センター、2000 年、所収）
- ・孫曉冬『中国型ワークフェアの形成と展開—福祉資本主義と市場社会主義における福祉レジームの可能性』昭和堂、2006 年
- ・許孟蓉「高学歴女性の就業構造と就業経歴—日本と台湾との比較研究」東北大学博士論文、1998 年
- ・許麗津訳「老人福利法」（東アジア地域高齢化研究委員会編『都市の少子高齢化研究』エイジング総合研究センター、2000 年、所収）

- ・ 實踐大學社會工作學系編印『21 世紀老人照護研討會論文集』2001 年
- ・ 徐明仿「台湾における介護サービスの提供体制」高知女子大学博士論文、2006 年
- ・ 曾妙慧「台湾における社会保険の成立と展開—台湾の福祉国家の原点」、東北大学博士論文、1998 年
- ・ 沈永嘉『新世紀老人照護』漢欣文化事業有限公司、1998 年
- ・ 沈潔「植民地台湾における方面委員制度の展開及びその特質」（永岡正己総合監修・解説『植民地社会事業関係資料集 台湾編』別冊（解説）近現代資料刊行会、2001 年、所収）
- ・ 陳肇男『快意銀髮族—台灣老人的生活調查報告』張老師文化事業股份有限公司、2001 年
- ・ 陳振雄「台湾の経済発展と政府の役割」専修大学博士論文、2002 年
- ・ Cheryl A. Krause-Parello, Ph. D., RN “The Mediating Effect of Pet Attachment Support Between Loneliness and General Health in Older Females Living in the Community” AJOURNAL OF COMMUNITY HEALTH NURSING, 25:1-14, P5, 2008
- ・ 徐明仿「『老人福利法』に基づく高齢者福祉の展開」沈潔（沈潔偏『中華圏の高齢者福祉と介護—中国・香港・台湾—』ミネルヴァ書房、2007 年、所収）
- ・ 范光宇「Epidemiological studies of family and family health in Taiwan」、東京大学博士論文、1978 年
- ・ Murray A. Rubinstein “TAIWAN A New History” M. E. Sharpe (1999)
- ・ 頼東進著・納村公子訳『乞食の子』小学館、2001 年
- ・ 林樹枝『台湾事件簿—国民党政権下の弾圧秘史』社会評論社、1995 年
- ・ 林成蔚「台湾の国家再編と新興福祉国家の形成」（宇佐見耕一編『新興福祉国家論』アジア経済研究所刊、2003 年、所収）
- ・ 任耀廷「植民地台湾の経済発展と教育」（国立政治大学国際関係研究センター刊『問題と研究』第 37 巻 3 号、2008 年、所収）
- ・ Leo T. S. Ching, “Becoming”Japanese” Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation, UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS (2001)
- ・ リー、イーシン「日本と台湾における高齢者の地域づくり活動への参画に関する調査・研究・高齢者の生き甲斐づくりと地域の活性化をめぐる」千葉大学博士論文、2004 年
- ・ 李光延「台湾と日本における高齢者の扶養と福祉政策の比較研究：私的扶養と公的扶養の関係をめぐって」桜美林大学博士論文、2006 年
- ・ 台湾内政部統計処 1999 年人力資源調査統計年報
- ・ 台湾内政部統計処 2000 年老人の状況報告
- ・ 我国長期照顧十年計畫—大温暖社會套案之旗艦計畫（核定本）中華民國 96 年 3 月
- ・ 謝雅梅「第 5 章 台湾」<http://www.elder.jeed.or.jp/pdf/syogail4-205.pdf>
- ・ 行政院經濟建設委員會、中華民國台湾 95 (2006) 至 140 年人口推計、95 年 (2006) 6 月

インタビュー（敬称略）・訪問場所

施武靖（愛愛院院長）、聞き手：西尾林太郎・栃本千鶴、2004年9月21日・24日、台北
 施美代（愛愛院院長の姉）、聞き手：西尾林太郎・栃本千鶴、2004年9月21日・24日、台北
 愛愛院入所者2名、聞き手：栃本千鶴、2004年9月21日、台北
 龍 清分・陳 萬益さん（228 記念館のボランティア）、聞き手：栃本千鶴、2004年9月23日、台北
 陳 郭桂（228 記念館のボランティア）、聞き手：栃本千鶴、2004年9月24日、台北
 施美代、2005年3月20日、2005年9月20日、2006年8月15日、2008年8月25日、台北
 施武靖、2005年3月20日、2005年9月20日、2006年8月15日、2008年8月25日、台北
 張溪美（看護師長）、2005年3月20日、台北
 台北市老人福利中心長、2005年3月21日、台北
 王雪蘭（玉蘭荘理事）、2006年8月14日、台北
 林金田（台湾省文献館副館長）、2008年8月19日、台北
 陳文溪（台湾省文献館研究員）、2008年8月19日、20日、台北
 劉澤民（台湾省文献館整理組長）、2008年8月19日、台北
 淡水小学校資料館、2008年8月22日、台北
 淡水県立図書館、2008年8月22日、台北
 国家図書館

新聞・雑誌・インターネット

- ・ 国際通信「台湾のマザー・テレサ」1995年1月5日
- ・ 三宅教子「台北散歩―乞食を收容した愛愛寮」（『自由中国之声』5月号、1993年、所収）
- ・ 台湾福祉事情～台北市立浩然敬老院 介護と医療を複合サービス 追いつかない施設設備」（『シルバー産業新聞ニュース』2001年1月10日号所有）
- ・ 『行政院主計處第三局九十二年社會指標統計目錄』
<http://www.dgbas.gov.tw/dgbas03/bs2/93chy/catalog.htm>、2004.12.24.
- ・ 『日本經濟新聞』2004年10月13日付 夕刊
- ・ 「經濟日報」台湾、2007年1月3日
- ・ 『日經新聞』2007年4月17日付 朝刊
- ・ 『日經新聞』2007年8月14日付 朝刊
- ・ 『週間台湾通信』<http://www.iris.dit.ne.jp/~tuitsu/9007.html>、2007.6.9.
- ・ 「日本の所得格差と高齢者世帯」
<http://www.jil.go.jp.zassi/200203shirahase.html>、2007.6.9.
- ・ 『財団法人台北市私立愛愛院』<http://www.org.tw/aiai/care.htm>、2007.8.10.
- ・ 『内政部社會司老人福利 各項統計資料』<http://sowf.moi.gov.tw/04/07/07.htm>、2007.8.10.
- ・ 『内政部社會司老人福利 老人福利與政策』<http://sowf.moi.gov.tw/04/01.htm>、2007.8.10.

- 『內政部社會司老人福利 老人福利法』 http://sowf.moi.gov.tw/04/02/02_1.htm、
2007. 8. 10.

資料

この資料は、施乾が方面委員制度について、某氏の記事を引用したものである。施乾は、この制度への関心度が高く、愛愛寮の経営を考えるときの判断資料にしたと思われる。そこでここに全文（『乞食社会の生活（附） 乞食救済策』で愛愛寮刊、1925 年 1 月、P147～177）を掲載する。

「方面委員制度の概要」

方面委員制度は本邦に於いては法学博士小河滋次郎の提唱に係り、大正 9 年之を大阪で採用実施され頗る好成績を挙げて居る。由来大阪の社会事業は、其の施設及び実績に於いて他府県に比し一頭地を抜いて居るのであるが、方面委員制度も又其の範を示して居る。本島に於いては漸く昨今に到り方面委員制度が実施された地方もあるやうであるが、此等は他の社会事業に比し、余程適切な施設である。此際該制度の概要を考察しておくことも時務の一つであらう、左は小河博士の講述に基づきその一斑を紹介することにした。

1 制度の創設

近来時運に伴ひ各種の社会事業が勃興しつつあるが、果して此の事業経営が実際の要求を充たす丈の働きを為しつゝあるや否やと云ふことを考えて見ると、遺憾ながら失望すべき点がある。それは社会事業勃興の半面には、救はるべくして救はれざる不幸の者があると同時に救はるべからずして救はれて居ると云ふ不逞の徒が段々おおくなつて行くやうな事実がある。事業経営の為め多額の資金を投じ心労を費やしてその割合に実効が挙がらぬのは少なからず期待を裏切られるのである。

それは社会事業の多くのものは欧米各国に行われてゐる所のものをその儘模倣し、翻訳し、直写した為に日本固有の歴史的社会的経済的、又は道德的に国情とピッタリ当てはまらない結果であらふと思ふ。

只実際の必要を充たす為に事業を起こすのでなければ、漫然事業の為に事業を起こすと云ふのでは名実が伴わない、即ち斯業の通弊とする濫救漏救（生活保護制度において保護基準に満たない者が保護を受け、保護基準に該当する者が保護を受けていないこと：引用者注）なるものを如何に措置すれば可いか。方面委員制度は少なくとも此の問題の解決に付て一の楔子（子は意味がなく、中国語で 1 字の名詞につけられる：引用者注）となるものである。制度創設の動機は救はるべくして救はれずに居た一家 5 人の緊迫した不幸なる露命に付て之を救済して（た：引用者注）小河博士の実感に基いてる。

2 方面委員の任務

方面委員とは何を為すものであるかと云ふに、詰り社会診断の仕事をするものである。個々の民衆生活に就ての況を査察審明する所の社会測量技師と称すべきものが即ち方面委員である。個々の民衆生活に就ての実況を診察調査の結果何れの方面に如何なる人が何いふ状態の下に生活若くは生活不安に苦んでをるかの真相が判明するから、

従つてまたここに之を救済保護するに最も適切な方法を見出すことが出来る。而して其見出した所謂対症療救（医療と救済：引用者注）なるものは、必ずしも診察した所の医者其れ自身即調査の局に当つたものが自ら之を行はねばならぬと云ふ訳でなく、便宜或は処方箋を与えて薬店に投薬を求めしめることもあり、或は専門の病院に紹介することもあり、或は他の医師に委託すると云つたやうに方面委員の手から、それぞれ各専門の社会施設に移して救済を委ねることもある。

又個人とか一定の機関に交付する等機宜の手段を取つて、相当救済の措置を施せば可いのである。

凡て救済なるものは、必ずしも物質的のみに限る訳でなく、精神的に救済を必要とする場合が少なくないのみならず、物質的救済の場合にも、必ず精神的方面の救済が之に伴はなければならぬ。斯業の大家エリザベス・フライが「救済の精神は精神の救済に存す」と云つた如く、また「金錢を恵む^{すべ}の前に先づパンを与へよ。パンを与へる前に職業を授けよ職業を授くる前に先づ勤勉力行の必要を解するに至らしめよ」と云つて、それを救済のの黄金則とするのであるから、最も多くの場合に於て精神的方面の救済により多くの心力を傾注する所がなければならぬ。恐らくは精神的救済に依つて、病的社会現象の半ば以上を救済し得ると云つて可からう。只方面委員に待つ処のものは、社会奉仕の誠意と趣味と理解と熱心をもつことである。必ずしも斯業に関する専門の知識とか格段の経験なくとも、相当に実績を挙げられるのみならず、志ある所、道自ら其の前に開き自然に堂奥に入るものである。

3 誰れを委員に挙げるか

方面委員の任務を囑託する人は、如何なる資格者より之を選択するかと云ふに、当該地方に土著（着：引用者注）の人又は永年居住した準土著の人で、成るべく民衆に接触する機会の多い職業をもつ所の中産階級の隠れたる世話好きの篤志家といふような人を選択するのである。官公史とか多忙なる名誉職を有つ人とか、又は内地で云えば政治的色彩の濃厚なる人とか、余りに筆舌の達者な議論家とか社会事業其他色々な公共事業の職業的に標榜してゐる専門家の如きは、成るべく避ける。最も警察官、市街庄吏員（行政区域の役人：引用者注）、学校教員等は官公史であつて其職務が方面委員の仕事と最も密接を有つた為に、これらの人々を委員にする必要がある。また方面に依つては、都合上名誉職の人や社会事業の専門家に囑託することもある。要は人物本意の上から適任者を得るにある。現に大阪に於ても二三富豪で方面委員として、献身的に斯くの職務に鞅掌（重みを担って奔走の意：引用者注）されてゐるものもある。職業関係としては無産階級の人々に接触する機会の多い職業例えば質屋、家内工業、売薬、米糖、薪炭其他日常品の小売商、家作持（貸家業：引用者注）、差配（不動産業：引用者注）等の職業有る者が詔^{あつら}へ向である。開業医、神宮、僧侶、伝道師等の如きは最も方面委員たる資格に富んでゐる。要するに中産階級者の粋を抜いて之に当たらしむることを方針とせなければならぬ。何故ならば将来は貧富の懸隔（かけ離れている）

引用者注)と云うことから色々な問題が面倒になつて来るものと見なければならぬ。かうしてこの社会的共同生活の上に禍根となるものを削除する為に、能く上下の関係を調節緩和して行くことは、中産階級者の力に待つ外は無いのでわ(あ:引用者注)る。幸ひに我国(日本:引用者注)は上に万世一系の皇室を奉戴し、下に忠実なる臣民を擁して居ることは大に意を強うするものであるが、特に将来の為に考えて置かねばならぬことは、多数中産階級者の堅実な根底を築き上ることである。然るに時代の変化(化:引用者加筆)は此等中産階級が経済的に圧迫されて、其影が薄れゆく傾向のあるのは大に寒心すべきことである。無産階級者が多数の勢力を頼んで徒らに我意を貫かんとするが如きは、非望の甚だしきものである。此等無謀の徒を導き、一国風教の中堅たり大黒柱たる使命を負ふものは実に中産階級にある。其中産階級者の精を絞り更に之を結晶せしめたものが即ち方面委員其者である。左(然:引用者注)れば方面委員は我が皇室の最も有力たる藩屏(はんぺい)(皇室を守護する者:引用者注)であり貧富両階級(富者と貧困者の階級:引用者注)の調節機関であり時代思想の中枢であると云つて差支がない。

4 方面委員制度は何処に設けたか

大阪に於ける方面委員制度は、府下全体を通じて施行されて居る訳ではないので、今日の処では大阪市の一部分即ち市の辺端に属する地域と之れを接触する郡部の市町村と限られて居るのであるが、この地域は貧民、労働者又は各地方より出稼きの為めに出て来た移住者などの比較的多数群居しておる新開地とも云ふべき所であつて、秩序もなければ節制もなく、土地の利害如何といふことに就いて何等の觀念をも持たぬ人達が、唯雑然として集まつて居るために自然都会生活の安寧秩序を破壊し脅威する所のあらゆる禍原の埋伏する訳で、この地域は大阪に取つては恰も危険な火薬庫に対して何等の防備もなくして放置してあつたやうな関係になつて居た。こう云ふ理由にて先づこの地域を先に選んで、民衆生活の气象台又は候測所(測候所:引用者注)とも云ふべき方面委員制度を設置することになつたのである。大阪に於ても行々全体に亘つ委員を設置される訳であるが、そうなれば39個所の方面と750人と云ふ委員が必要であると云ふ。

5 方面区画の標準

一方面の区画は大阪に於ては小学校の通学区域を標準として定むることになつて居る。併し地勢其の他の関係上一律にこの標準に依ることの出来ない場合もあるが、一方面の世帯数は平均5,500、人口25,000で、方面委員は各々其の受持区域を定めて、方面事務を分担することになつて居るが、一受持区域の世帯数は平均270人口約650内外である。就も(すなわちの意:引用者注)この世帯数と人口数が悉く方面委員の調査の対象となり、又方面事務の目的物として取扱はるる訳ではない。主として先づこの内の貧困階級に属する者即生活難の苦境にある細民のみを取扱ふことにし、尚ほ便宜の為に細民をば第1種(極貧者)と第2種(次貧者)に分けて置く。

第1種と云ふのは實際自活の出来兼ねる、悲境にある極貧者を指し、第2種とは、辛ふじて収支相償ふと云ふだけで少しの余裕もなく、若何等かの事故に遭遇すれば忽ち他の救いに頼らなければならぬと云ふやうな心細い生活にあるものである。及、物質的には不自由なきも、精神的に生活不安の境遇にある者例へば多少の財産を有する孤独の老婆の如き者、又は特に隣佑の監督指導を必要とする不良分子、注意人物等の如き者をも出来る丈包含せしめるのである。

これらの種類のものについて絶へず其の生活の実況を調査して其の結果を一定の形式を備へた調査カードに記入するのである。大阪に於ては此第1種と第2種のカードが世帯数に於て約1万、人員に於て約4万余あつて、その生活状態が日に月に時々刻々転々変化する模様を記入せられるのである。詰る所、4万余人の者が750人の方面委員の温かき懷に抱擁せられることになつて居る。従来大火とか洪水とか近くは東京方面の大災害にしても、公私色々の方面から罹災救助の義挙が行はるる場合に、兎角濫救漏救に流るる幣が免かれないのである。實際救助せられねばならぬ者が救助に漏れ、一面には災害の爲めに反つて思はぬ恩恵に満腹する処の災害成金なるものが叢出するので、これは先年の米騒動の時などの実験に徴して明かであると云ふ、平生から細民の個別的生活状態が判明せられて居らぬ爲めに、咄嗟の場合に応急の措置がとられない。この度の東京方面の大天災にしても、一般的救助法としては取るべき方法も自ら定まつて居るけれども、さて個別的救助は如何にあるかと云ふ点になると、拠るべきものがない。

カード（第1種と第2種のカード：引用者注）は個々の現実生活が（が：引用者注）確實になつて居る爲に濫救漏救の幣を防ぎ得るのみならず、敏捷適実な救済の働きが出来ると云ふ外に、細民心理の測候所と云ふ側から人為的の社会事変に対し、或は事前に察知してこれに処する機宜の予防策を施すことも亦決して不可能事ではない。

6 生活状態の調査

如何に制度とは云え、他人の生活状態を調べると云ふことは實際困難なことである。殊に細民には一種の反抗氣質が一負け嫌ひ、瘦我慢ある爲に、何等職枿（専門職でない：引用者注）もない所の第三者が、卒然（突然：引用者注）生計調査に行つた処で余計なお世話だといった風に結局反感を招くだけのことで、とてもその真相を得られるものでない。処がこの方面委員と細民が互に了解し合つて居るとこの調査が極めて円滑に行はれるのである。即ち大阪に於ける方面委員の調査の仕方は、調査の爲の調査でない。社交本位の温かき隣保相扶の誼みを以て家庭訪問を為すと云ふのが主要の目的であつて、その結果自然に生活状態の真相に触れると云ふことになるのである。

要するに家庭訪問の副産物として調査が出来るのである。而して最初の訪問の場合には、藪から棒に、巡査の戸口調のやうに飛込むのではなく、先づ吉凶禍福その他何かの出来事をキツカケに努めて社交的に隣保の友誼を尽くして真心から彼らに接触するのである。この心を以てするから彼もまた心から喜んで我れを迎へ、これまでは唯だお

互に顔を見知つて居たに過ぎなかつた者が一見旧知の如く、世間話から身の上話に移ると云ふのが人情であつて、1 回が 2 回となり度重なるに従つて、お互いに了解し進んで打明け話をしてくれるやうになる。甲の 1 人と近か付きになつたのが縁となつて乙丙とも懇意となり其れと段々他の多くの者にも親密の関係がつき遂には広い範囲に水入らずの社交の手が延びるのである。これは当局其人の機知の働き、時と場合に処しての臨機応変の妙用に待たねばならぬのであるが、実際調査の方面は頗る好成績である。

7 委員の活躍

方面委員の事務所は各方面の小学校内に付設するのが便宜である。尤も方面委員の自宅、寺院又は町村役場の一部を以て之れに充てても差支はない。併し事務所としては成るべくお役所向の建物を避け成るべくは小規模でも独立した建物として昔の自身番（江戸時代、江戸市中警戒のため各町内に設けた番所。家主たちが交代でここに詰め、町内の出来事を処理した：引用者注）と云つた風のを理想として居る。各事務所には有給の書記一人置き、方面のカード其他の必要な帳簿又は書類の管理並に事務所に付ての色々な仕事をするのである。方面委員は毎日交代して一人づつ必ず事務所に、（出勤する所に）〔（）：引用者加筆〕毎月少なくとも 2 回以上、全部の方面委員がその事務所に集会して、各自の取扱いたる事務の報告なり処理の方法に付て打合わせなり其他の協議を凝らすことになつてゐる。

方面委員中の一人を以て委員長即常務委員としてその方面の統一と代表者として責任を負はしむのである。この常務委員は数だけ居る訳で、この人達は更に毎月 1 回集まるので、大阪では府知事の官邸に集つて最近 1 月内に取扱つた重要な事務の報告及一般方面委員制度に関する色々な事項に付ての意見の交換なり又は府当局の方針を聴取することになつて居る。

各方面委員の自宅には、一目して誰にも分り易いやうに方面委員の標札が出してあるので、通りかかりの人でも偶然何か救護を要する出来事に逢へば直ちに最寄りの標札のかかげてある所に駆け込むことが出来る、委員の自宅は恰も事務所の延長したやうなもので、若し主人が不在であれば家族の人が主人に代つて相当応接処理して行くのである。

8 方面委員は名誉職

方面委員は総て純然たる名誉職であつて、之に対して物質的には一文の報酬もない。加之らず（またこれだけでなく：引用者注）委員は貴重な時間と容易ならぬ心力労力を費やした上に更に事務の処理に関連して直接間接の費用を自分の懐から出すのである。勿論物質的救護に要する費用は支出の途があるが、火急（非常にさしせまっていること：引用者注）を要する場合であるとか或いは事柄に依つて支弁の条件に当て括らぬこと云ふやうなものが少なくない。是れは自然委員の負担となることになる。又調査の為に出掛ける旅費から東西に奔走する車賃の如きも多くは委員の自弁となる場合が沢由（沢山：引用者注）あるから、委員となる人は志があり時間があり財産に余

裕あると云ふ三拍子揃った人でなければ理想的でない。唯社会奉仕と云ふ人道的当然の責任を尽くすと云う自覚のある人を要する訳である。勿論無給制度の是非に付ては議論の余地はあるが小河博士は無給主義の必要であることを断言して居る。その名誉職なることが即ち方面委員の価値及び杵威（威力：引用者注）を発揮し得る所以であると云ふ。

9 方面委員の財源

前述の如く方面委員に対しては聊かの物質的報酬を払はないことになつてゐるが方面制度に付ても、別段事業資金と云ふやうな訳でなく、残つて見て金が要るやうであれば要る丈の金を何とか工夫し若し金が出来なければ、金のかからずに済む範囲の仕事をするに止めるので、篤志の人に頼んで奉仕的に民衆の生活状態を調べて貰ふと云ふことが、方面制度本来の使命なるが故にこの使命を果たすに就いては必ずしも金がなければならぬと云ふ筈がない、今の社会事業などを経営する者の内には動もすると（どうかすると：引用者注）事業の実行と云ふよりも、事業資金の造成と云ふことに重きを置き、甚だしきは巨額の事業資金を死蔵して僅かに其の産み出す処のその利子を以て事業を経営すると云ふやうな悠長な不真面目な残り方を金科玉条として居る向もあり、事実上見渡した処で、大きな資金を擁して居るものほど社会事業としての実績を挙げて居ない。当該者は資産の増殖を図るために却つて見当違ひの努力を惜まないのである。社会事業の本質から見ると、この位間違つた考へ方はない、そんなことでは到底切迫せる現実の要求を充たすことは覚束ない。尤も何事をするにしても多少の金を要することは勿論である。

方面委員制度の通常経費として支出を要するものは、書記の給料と事務所の雑費が主なるものである。それから救護に要する経費も相当見積つて置く必要がある。若し本制度が実際適切な事業であると云ふことが世間から認められる以上は、更にまた新たな財源が見出せるものである、今日のことは今日で片付け将来のことは将来をして処置せしむれば良い。

10 方面委員の業績

方面委員の出来た為に、大阪に於ては公営又市営のいろいろな社会施設が大に意義のある又徹底した利用活動を見るやうになった。即折角立派な社会施設救済機関があつても、其の恵に浴し得る者は必ずしも已む得ざるのみでなく、必要の迫れる者反て其の恵みに漏れることになる。同じ貧民にしても比較的力あるものは救われるが、全く力のない苦しい叫び声を出すことも出来ぬと云ふ無告の貧民や、下積みとなつた最弱者は世を呪ふて死を待つ外の無い、多くの社会的救済施設は隅々以て横着者を養成庇護する有害機関になりはしないかと云ふ非難を免かれぬことになつて居たのであるが、この方面制度が出来てから所謂社会診断の働きが徹底して、声なき処に声が聴き色なき処に色を視ることが出来るやうになつたのであるから、訴ふるに道なき無告窮民実際に救済を必要とする者を漏さずに救ひ上げられることになつたそのために救済

の価値なき者を追ひ払ふことになつて社会事業の革新を見ることが出来るのである、従つて^{しんじゅつ}賑恤救護に関する諸法規の運用にしても、兎角百弊の伏在し易いものであるが方面制度の施行と共に多数の委員が自家頭上の利害を感じず如く被保護者のために熱心な注意を払ふから常に周到機敏に徹底した活動を見一般社会事業の機能を誠実に發揮することが出来るのである。

これは又最初から期待せられ居たことであるが方面委員の社会診断に依つて如何なる種類の社会施設が最も切実に要求せられておるか云ふ真相を確め得るために、それに基いて夫々適当な各般の社会施設を計画する方針が確立し、これによつて大阪市に於ては着々新事業を画策実現しつつあるのである。故に方面制度は一般の社会事業に対して恰も司令本部のやうな使命を持つてゐる中心機関であると云つてよいのである。

11 方面制度と社会事業の将来

方面制度実施以来の経験に徴し、現代の各種社会事業なるものは、必ずしも専門的施設の力を待たず、少なくとも或程度までは斯業の門外漢である民間有志の手によつて之を行ふことが出来る。寧ろ専門的施設に於ける、^マよりも一層より善くより徹底的に救済保護の実効を挙げ得るものであると云ふ事実が認められたのである。

総ての社会事業は何れの国に於ても必要に応じて之を創設経営せねばならぬのであるが、併し貧病者なるが為に必ず病院に入れる、不良少年なるが故に感化院に送る、孤独頼るなき頽齡者なるが為にどうあつても養老院に収容せねばならぬと云ふものではない。出来ることなれば成るべく不自然な専門的一定の施設に移すことなしに、自然的社会的環境の内に於て相当保護の道を講ずるの措置に出づべきであつて、これがまた多くの場合に、本人の為の仕合せであり、且つ一般社会に取つての利益になるのであるから、病院とか感化院とか云ふやうな施設は、実は最終手段として他に移すべき道のない己むを得ざる場合に限つて之を利用することにせねばならぬ筈のものである、然るに従来斯業の経営振りを見ると、何でも初めから一つの建物でも設けて、ここに専門的の役人なり又は色々の設備を整へなければ残れないもののやうに考へて居たのでさ（あ：引用者注）るが、近く十数年の傾向を見ると、社会事業の社会化とでも云はふか。この事業が追い追い一定の専門機関また少数の職業的事業者の手から離れて、多数社会民衆の素人の手に、また普通一般の家庭若くは或る社会的自然的環境に於て取扱はるるやうになつて来た。英米に於ても著しくこの傾向が顕れた、元来人間は自然の子で、社会的の者であるが故に如何に人為の最善を尽くすと云つた処で、真自然純社会的であり得ない一定の施設内に於て、社会生活の適応性を養成することは不可能であるのみならず、動もすれば即ち反て悪化の弊を免れることになる。仮にかかる弊害がないにしても無限に発生し来る被救護者をば、限りある一定の施設内に収容することは出来ないのである。理想の上から言つても、亦實際から見ても近代の社会事業が^{とら}囚はれの境遇から解放の生活に移り、少数専門家の手から多数民衆の

素人の手に移り変わることは必然の趨勢であつて、かくの如くにして社会事業なるものは社会の凡ての人が平等に各々其の分に應じて力の及ぶ限りに協同一致して人道的社交的共存奉仕の義務を尽すことが出来るのである。即ち方面制度は、この必然の趨勢に順応して生まれたもので内地に於ても反つて専門的施設に優るより以上の徹底した効果を挙げてゐる。本島に於ても愈々（次第に：引用者注）この制度が実施せられたことは大に機宜を得たものと信じてゐる。その効果如何なるものであるか能く研究し、またこれが一般社会人の理解する処となつて応分の共助をすることになれば制度の面目を発揮することが出来るのである。

台北州告示第 85 号

方面委員規定左記ノ通之ヲ定ム

大正 12 年 7 月 9 日

台北州知事

高田富蔵

方面委員規定

第 1 条 一般社会状態ヲ調査シ其ノ改善向上ヲ図ル為メ特ニ必要ト認ムル地域ニ方面委員ヲ設置ス

第 2 条 方面委員ハ其ノ地域内ニ於ケル篤志者ノ中ヨリ群守市尹ノ推薦ニ依リ知事之ヲ囑託ス

第 3 条 方面委員ヲ設置スベキ^マ地域及其員数ハ別ニ之ヲ定ム

第 4 条 方面委員ハ関係区域内ノ状況ヲ詳ニシ凡ソ左ノ事項ノ調査及実行ニ従事スルモノトス

1 一般社会ノ実情ヲ調査シ之カ改善向上ノ方法ヲ攻究スルコト

2 公私ノ保護ヲ受クル者及保護ヲ必要トスル者其ノ他特ニ必要アリト認ムル者ニ付テハ戸別的ニ其ノ生活状態ヲ調査シ之ニ対スル保護方法ノ適否ヲ攻究シ適當ナル方法ヲ講スルコト

3 各種社会事業トノ脈絡ヲ保チ之カ利用ノ途ヲ講シ其ノ目的ノ達成ニ助力スルコト

4 社会事業ノ施設上必部ナル事項ニ関シ意見ヲ知事ニ提出スルコト

5 其ノ他特ニ調査実行ヲ委嘱シタル事項

第 5 条 各方面毎ニ方面事務所ヲ設ケ書記ヲ置クコトヲ得

書記ハ有給トシ知事之ヲ命免ス

第六条 知事ハ特別ノ須要アル場合ニ於テハ学識技能アルモノニ顧問ヲ囑託スルコトアルベシ

12 制度の生命は人に存す

大阪の方面委員制度が予期以上の好成績を収めて居ると云ふことは何人も異存のない所であつて、已に全国に^{たが}互つて 30 有余の府県に採用され現に台湾にも実施されて居るのであるが、この制度は施行をさへすれば必ず成功する訳のものでなく中には期待

を裏切る処あるものである。然るに大阪の方面委員制度が如何にして、今日に見るが如き円満なる発達を遂げ目覚しき活動と成功をしたかと云ふに、別に大した原因がある訳もなし又面倒な方策があつた訳でもない。只委員その人を得たと云ふ頗る簡単なことが成功の主因となつて居る。即ち方面制度の生命は人に存する「法にあらずして人に存す」とはここに適用される共通の鉄則である。其の人とは如何なる人かと云ふに、「自ら進んで難局に当るを愉快に感ずる底の趣味と熱心の持主」これを理想的の委員とするのである。これが選択に付ては己に述べた通りの標準に依つて、所轄郡区長及警察署長に対し委員候補者の推薦を委託するので、委員其の人の共通的特色としては人物に非ずして人格者にある。

13 月番委員会

各方面の委員は月番委員会を開いて、事務の打合わせや報告等をするのである。左に委員会の実況を掲げて考察としよう。

西野田第2方面 ×月×日午後2時より第2西野田学校の広い新築講堂で開かれた。傍聴例によつて谷常務委員の開会の挨拶に次いで当日招待した同方面内有志者に対し、月番会の意義を紹介して、来会を謝し続いて書記をして先月21日の例会以後の日誌を報告させた後、其日誌中の主なる事項に付て説明し、寄附金及び其の処分の報告あつて、協議及委員の取扱事項を報告した。其の一例を掲げて取扱事項の一般を示すことにしよう。

第1に吹田委員から〇〇伊造(39歳)は洗張職(着物などをほどいて洗濯し、板などに張ってしわを伸ばす職人：引用者注)であつたが酒と賭博が好きで借金殖へ遂には得意先きからの委託品に手を付け訴へられると云ふ有様に妻は愛想をつかし逃出して、行衛不明(行方不明：引用者注)となり、一人の女小供を妹の婚嫁先へ預けて置いたが、不幸にも妹は癲癇の特病の上に腎臓病を患ひ、方面委員より済生会の診療券を交付し、更に本年3月頃癲癇が激しくなり慈恵医院へ入院させたが本月12日遂に死亡した。其の為女の子は伊造の許へ引き取らなければならないが、伊造の身持が修らないので、其家へ奉公さしたけれど、悪癖あつて戻されたのでまた其家へ事情を話して奉公させ、本人も洗張りが出来なくなつて困つて居た処、打出の其家に厄介になり漸く生活が安定したと報告した。(中略)報告が尽きないが時が遷るので之を打切り協議に入る。

谷常務委員は某工場の鮮人使用状態を見るために希望者あらば案内すると述べ、松原委員より先月の初め西野田共同宿泊所の宿泊鮮人中足を針で踏抜き仕事が出来ず、附近の交番へ頼みに行つた処巡査は第1の方面内に居るに拘はらず、第2の方面の而も最も遠き、私の方へ添書を持つて来させた、共同宿泊所の事務員が早速診察の手続をしてやらず、又巡査が近くの方面委員を知らずして迂遠な処置をしたことは遺憾であるとして交番巡査には附近方面委員の住所氏名を通知させる方法如何を諮り、其他2「、」(、：引用者加筆)3事項に付て協議あり午後6時閉会した。当日の出席者は、大

阪府社会課小河博士外 44 名であった。

14 常務委員連合会

7 月の例会は定日（20 日）を堂島田養橋畔知事官邸の例会場で開催、知事内務部長
其他方面幹事委員等 60 余名の出席者あり頗る盛会であった。先づ知事の挨拶に始まり
之に対する謝辞を陳べ次で小河博士議長席に着き、開会を宣しに、直ちに協議に入り、
最初に木炭配給報告の件、カート（カード：引用者注）形式変更の件等に付き説明を
求めた委員の意見を徴し協議した。

次で月番委員より各方面の報告あり、官邸より茶菓の饗^{きやうま}ひを受けて散会した。

15 本島の方面委員制度

前述の趣旨により本年 2 月以来、各州下に於いて創設した方面委員制度は大体に於
て其範を内地の方面委員制度に採つたのであるが、本島特殊の事情に鑑みて異なる所ある
のは素より当然のことである。例へば習俗改善に関する各種の施設並みに指導等に付
て大に調査研究を要するものもあるし、又従来の諸施設の徹底を計らなければならぬ
ものも多々あるのであるが、是等に関して方面委員の努力に待たなければならぬ、其
他本島特殊の事情に依る施設に付ては各州独特の考案研究に依ることになるであらう。

各州に求められた方面委員規程も略略同様であるから並に之を掲載することを避ける
が本島においては従来より保甲制度が実施せられて居るので、方面委員が将来大に
活動する上に於いて是非とも保甲と密接の連絡を保つ必要のあることは言ふまでもな
く、警察官吏との密接なる連絡は勿論のこと、其他の官公吏市街庄の吏員とも密接な
関係を保つて行くことに心がけねばならぬと思はれる。

以下方面委員が処務上参考となるべき数項に付き当局の示す処によれば。

1 一般生活状態の調査は正確に期すること 調査の正確を期するには徹底して調
査しなければならぬ、徹底的に調査をなすには始終下層階級の者に親^{しん}ら（自ずから：
引用者注）接触し言はば此等の者と世間附合を為し冠婚葬祭とか祝儀不祝儀とか臨時
出来事とか云ふものは何処の家庭にもあるからさう云ふ機会に於て其家庭に親しく往
来し、慶弔或は見舞を為すと云ふ様に、下層階級と親密になり其間に於て自然に知り
得た材料にて適当なる判断を下したものが、所謂調査となつて表はれるので決して調
査をなす為めの調査をするのではない様にありたいのである。

2 真心を以て調査を為すこと 下層階級の人々には吾々の想像の出来ぬ心理状態
を持つて居るもので、無論廉恥心もあり敵愾心もあるから、調査の為に調査を為す
と云ふが如き態度に出づれば必ず反感を買ふことは判りきつて居る、其れで心から彼
等に親み真心を以て接し、彼等から進んで当方の要求するものを提供する様に努めた
いものである。

3 貧弱者に対しては成るべく保護を旨とし救興手段を避くこと 貧弱者に対し
ては「エルバヘルド」市の方面委員の採りたる様な手段又は大阪の方面委員が現に採
りつつある手段に依ることが肝要である。貧弱者があるからとて直に救興せずに（急

を要する者は別であるが）其貧弱に陥れる原因を調べて適當なる処置をすとか、収入不足で困る者には収入増加を計つてやるとか、病気で困る者には夫々の救療機関に世話すとか職業なきものには職業を求めてやるとか、内地人で内地からの仕送が絶えたとか云ふ様な人には内地へ照会すとか云ふ如く、種々なる事を心配し世話してやつて成るべく物質的救興を避ける様にありたいのである。

4 精神的救護の徹底を期すること この事は最も重要なことであるが又最も困難な事である。（：引用者加筆）この事が完全に行われたならば物質的救済の如きは其の大部分は無くして済む。この事に付ては特に注意と研究を煩はさねばならぬ。

5 各種救療機関の善用並に活動を期すること 貧弱者にして保護の手段を以てしては其目的を達することの出来ぬ者に対しては、適當なる救療を加へなければならぬ。

（：引用者加筆）かかる場合には現存諸救療機関に依るの外ないのであるから、此等の諸救療機関に対する手續其他規則等を呑込み置きて、応急措置を採るに差支なき様に要意するのは勿論、是等諸機関の活動を期すること必要である。本島に於ける斯種の機関には慈恵院（或は仁濟院又は普濟院とも云ふ）各地に於ける公私の救済団体等あり其他軍事救護法、窮民救助規則、行旅病死人取扱法等の救護に関する各種の制度あり、^{なお}尚は不良少年の救護に関しては成徳学院等あり。

6 他人の秘密は厳に守ること 方面委員が取り扱い中知り得た所の他人の秘密に関しては其職務に関係あると否とを問はず、絶対に之を他に漏洩せざることを心掛けられたいのである。

之を要するに方面委員制度は共存共栄の為に奉仕する相互的義務として、之を職業的専門家にのみ任せて置かないで、各方面の救済は委員の手によつて夫々对症療養を試み適切な措置を取るのであつて、濫救洩救を防ぎ積極的救済を目的とするのである。本島にある保甲制度の如きは方面委員と相呼応してその方面を整済するに最も応はしい（ふさわしい：引用者注）ものである。幸に委員に其人を得るに於ては好成績を挙げる事は疑ひない（完）。